
遊戯王 星の戦士達

幻朧月睨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 星の戦士達

【Nコード】

N9676K

【作者名】

幻朧月暁

【あらすじ】

常盤市に住む高校生、草薙修也はデュエル好きな1年生。だが、ある日突然デュエルモンスターの精霊、『総剣指令ガトムズ』と出会って彼の日常は非日常へと変わっていくこととなる。

自己満足で書いているので、のんびり更新します。

主人公以外にオリカがあるのはおかしいと指摘を受けたので、序章を修正しました。オリカ成分はなしで行きたいと思います。

たびたび変更してすみません。

ミスは極力しない様にしますが、もしカードの効果などが違って
いたらすみません。

序章

「時は満ちた・・・か。」

薄暗い部屋の中で、一人の男がつぶやいた。

部屋の明かりがついていないためか、男の顔はよく見えない。

40畳はあろうかというただ広い部屋を照らすのは、電源のついたパソコンの光だけだった。

男はしばらく立つたままコンピュータの画面を見下ろしていたが、不意に座り心地の良さ気な肘掛椅子に腰かけた。

ディスプレイの光が男の顔を映し出した。

やや長めの髪が優雅に目のあたりにかかった20代後半から30代前半に見えるハンサムな男だ。

惜しむらくは頬が少しこけているのと、目の下に大きなクマを作っていることだろうか。

その疲れたような印象からすると、男は30代後半にも見えた。

男はしばらく座ったまま宙を仰いでいたが、突如聞こえたノックの音で起き上がった。

「どつぞ。」

男は立ち上がりながらそう言うと、コンピュータで実行していた

プログラムを一つ閉じ、多少乱れていた白衣を整えた。

「失礼しますじゃ。」

重そうな引き戸を開けて入ってきたのは、いかにも怪しそうな黒いローブを纏った老婆であった。

フードをかぶっているため顔の大部分が隠れてしまっている。

男は、その老婆を見ると幾分硬めだった表情を和らげた。

「ああ、マリアだったのか。良かった。」

男はそう言つて微笑んだ。

「安心したよ。僕はまた、信二や隼人あたりが文句をつけにきたのかと思つた。」

「ご安心くださいませ、空雅様。」

マリアと呼ばれた女性は、フードの下で笑みを浮かべると空雅に歩み寄つた。

「あの口うるさい二人は昼間の訓練で疲れたのか、ぐっすり眠っております。先刻部屋の前を通つた時に寝息が聞こえました。」

それを聞いた空雅は、頷いてみせると再び肘掛椅子に腰かけた。

そして、その体勢のままコンピュータを操作すると先ほど閉じたプログラムを再び表示し、マリアに手招きして見せた。

「見てごらんよ、マリア。これが僕が4年間かけて完成させた計画の集大成さ。これでやっと一步前進だ。」

そう言われたマリアは、言われるがままにコンピュータの画面を覗き込んだ。

彼女はもう80になるが、視覚や聴覚の良さはいまだ健在だ。

コンピュータの画面に映し出された細かい文字も難なく読み取ることができた。

「お見事です、空雅様。ですが・・・。」

「ん？ああ、この前話した懸案事項のことかい？」

空雅がマリアの考えていることをズバリと当てた。

「左様でござります。空雅様が『精霊界』にて聞き及んだ話によれば、こちらの世界の調査のために『精霊界』の中枢機関は『六星団』なる力の強い精霊たちをこちらに送り込むとのことでしたな。」

「ああ、そして『六星団』の精霊は、普通は見ることでできないこの世界の人間の中から精霊を目視できる人間を探し出し、ともに異変を調査する。」

空雅はそこまでいうと、今度は片頬を邪悪にゆがめて笑った。

「確かに、この前までは驚異だったけどね。何度か『精霊界』にコンタクトしているうちに新たな情報が取れた。まず第一に、精霊の見える人間はその精霊に・・・というよりカードに対して何らか

の思い入れがあること。第二に、もう派遣された精霊はこの世界に
来ていることだ。まあ、種類までではつかめてないけどね。」

空雅はそう得意げに言ってみせると、肘掛け椅子の背にもたれか
かった。

「し……しかし空雅様……。」

得意げに語る空雅を見ながら、マリアは言った。

「これらの精霊を、どうやって探すといつのですか？精霊の種類
がつかめていなくては、『六星団』の覚醒者が誰なのかを知るのが
困難でしょう？」

「おいおい……じっくりしてくれよ。」

空雅はそんなマリアを見て苦笑した。

「そのために、君の占いがあるんじゃないか。それに、星は引き
合う。1人覚醒者を見つければ、その後は探すのがグツと楽になる。」

「あ……。」

それを聞いたマリアははっとして、それから思わずにやりとした。

「申し訳ありません。思わず目先の出来事だけに目がいつてしま
いまして……。うかつでございしました。」

「いや、いいんだ。それに、君は大変な思いをしてると思うからね。少し疲れているんじゃないのかな。今夜はもう休んだほうがいいよ。」

空雅はマリアを気遣うように言った。そう言われたマリアは頭を下げた。

「畏まりました。では最後に一つだけ聞いてよろしいですか？」

「良いよ。なんだい？」

空雅はコンピュータの電源を落としながら聞き返した。

「なぜ・・・今回の計画の拠点に・・・この常盤市を選んだのですか？」

マリアが聞くと、空雅の動きが止まった。

一瞬マリアは悪いことを聞いたのかと思ったが、空雅は何事もなかったかのように微笑み、マリアのほうを振り向いて言った。

「それはもうすぐ分かるさ。さ、明日からは忙しくなる。もう寝たほうが良い。」

空雅はそれだけ言うと、マリアに背を向けた。

マリアもこれ以上の追及をする気はなかったので、大人しく引き下がった。

「分かりました。では、それでは失礼いたします。」

マリアはそういうと、また引き戸を開けて去って行った。部屋には空雅だけが残された。

（さて、僕も眠るか・・・。）

空雅はそんなことを思うと、本格的に肘掛椅子に身を沈めた。

そして、明日からのことを考える間もなく眠りに落ちて行った。

第1話 崩れ去る日常vs『ガトムズ』！！

「一年！！ボール行つたぞ！！」

何人もの生徒が声を上げる野球場に、一際鋭い声が響いた。

声の主は野球のユニフォームに身を包んだいかつい顔の生徒だ。

その声に、球場のあちらこちらに散らばっていた青いジャージを纏っている一年生たちが一斉に反応した。

しかし、ライト方向に高く飛んで行つたフライをとり走るものはいなかった。

それもそうだ。本来仮入部中のこの期間は1年生はたいてい見学が軽くやる程度のはずだ。

だが、この野球部では顧問のいないすきに一年生をこき使つらしく、野球部入部を目指す一年生たちは今日も今日とて厳しい球拾いに耐えていたのだ。

そのため、ボロボロになつた体を進んで動かすものはいないかに思えた。

「うおおおおお！！」

不意に端正な顔立ちをした一人の一年生が、満身の力で駆けだした。

その一年生は、ものすごい速さで球に追いつくとすでに落下直前

になっていた球めがけて滑り込みを敢行した。

その一年生は球をキャッチしたものの、同時に落下して肩を打ち、小さく呻いた。

ほかの一年生があわてて駆け寄ろうとしたが、次の瞬間にはまた新しい声が響いた。

「おい、顧問が来たぞ！！一年は見学に回れ！！」

部長の3年生が叫ぶと、一年生はあわてて泥を払いながら球場の隅に撤退し始めた。

それと同時に、更衣室から中でゲームをしていたり漫画を読んでいたらしいほかの3年生がわらわら出てきて抜けた一年生の代わりに守備につきだした。

その様子を先ほどダイビングキャッチを決めた一年生、草薙修也は苦々しい思いで見っていた。

「何なんだよ・・・。」

修也はそう悪態をつくくと、好き勝手に伸びている髪を掻き、ジャージについてしまった土を手で乱暴に払った。

馬鹿みたいだ、と修也は思った。

中学の延長線に入る部活は野球部に決めようかなと思っていたが、仮入部3日目にして修也の心は冷めきっていた。

部活の準備、球拾い、片付けと仮入部期間のうちからこき使われ、

それでいて強面の顧問が来ればすぐに見学に回す。

こき使われるのは悪くないが、そういうやり方が修也は気に入らなかつた。

今日の昼休みも級友相手にこの不満をぶちまけたばかりだった。

『だから言つたる？高校の野球部は何かいろいろあるって。』

弁当をつつきながらそう言ったのは、小、中を通しての親友であり、乗りがよくて活発な吉良孝雄だ。

孝雄とは小学1年生からの付き合いで、修也にとって最も時間を共有した人物である。

互いの家に泊まりに行ったこともあるし、夏休みは毎日のようにゲームで遊んだり、自由研究と称して1日中山の中を探検したりしたし、取っ組み合いのけんかもして、そのたびに仲直りをしてきた。

そんな付き合いだからこそ、修也は孝雄には何でも話すことができた。

『まあ、1年のころからこき使われるのも社会勉強になるかもしれないけどよ……。』

孝雄がそう言うと、もう一人の友人がフンと鼻を鳴らした。

『社会勉強・・・か。俺はご免こうむるな。あんなところで社会勉強したら廊下の真ん中をマナーを無視して歩くような人間になるからな。』

菓子パン片手に野球部を皮肉るのは、高校に入ってから親しくな

った冷血漢の墨染陸だ。

陸は自他ともに厳しく、はじめは修也たちと会話することもほとんどなかった。

そのうえ、クラスの人間に対しても冷たく当たったため、一人だけクラスの輪に入れないでいたが、そんな陸を修也のグループに引き入れたきっかけがクラス編成2週間目に起こった。

その日も陸は、修也の後ろの席で一人で弁当を食べていた。

偶然、孝雄が教師に呼び出されていなかったためその日は修也も一人だった。

そのため、修也はなんとなく、本当になんとなく後ろを向いて陸に声をかけてみたのだ。

『墨染、弁当一緒に食わないか？』

その言葉で、周りのクラスメイトが修也のほうを見た。

周りにいる全員が陸の反応を見たがったのだ。

『ああ、構わない。』

意外な反応だった。修也にしてもダメもとで頼んでいたため修也自身も驚いていた。

『たらいま〜。おっ、今日は陸の席か。』

修也が弁当を出し始めると、孝雄も戻ってきて陸の席に机を寄せ

て弁当を食べ始めた。

こうして、今のグループが出来上がったのだ。

『まあ、まだ入部届けは出していないんだから好きな部に入ればいい。科学部とかな。』

『ははは、さりげなく俺も科学部に入れる気かよ。』
そう言って修也は笑った。

何でも2人が入る科学部は、唯一の部員であった三年生が今年の5月で活動を止めるため、お気楽部活としてやっていけるらしい。それが二人の狙いなのだ。

(ま、2、3年がないのも悪くないかもな。)

頭を昼休みの回想から仮入部のことに切り替えながら、修也は思った。

そして、顧問が来た瞬間にきびきびと練習した2、3年を見た。

たしかに、こんな奴らみたいな先輩がないほうが・・・

そう修也が思っていると、いきなり後ろから肩を叩かれた。

見ると、仮入部に来ているらしいほかのクラスの一年生が親指を後ろのほうにむけていた。

「先輩が1年生集めてるよ。」

「ああ。分かった。」

修也はそう言い、その一年生の後について行った。

歩いた先には、体つきのいい上級生を中心に1年生が集まっていた。

「全員そろったな。」

修也たちが入っていくと、上級生はそう言って全員を見渡した。

「これから、お前らにやってもらうことがある。」

修也はこの時点で嫌な予感がした。

またしょうもないことをやらされるのか、と見えないように顔をしかめた。

「実は今日の朝練習で、バッティング練習をしていた2年生が誤ってボールを遠くに飛ばしてしまった。」

そう言つて上級生は、野外野球場の裏手にある森を指差した。

1年生の中から僅かに息をのむ声が聞こえた。

あの森は広葉樹が生い茂っていて昼間でも中は薄暗い。学校が所有していて、稀に理科の授業などで使うことはあるらしいが、なるべくは入りたくない場所だった。

「それを諸君らに拾ってきてほしい。そして、6時になったら1回集合すること。顧問の話があるからな。顧問に何をしていったのか

聞かれたら森の中で走っていましたと答える。今日は見つかるまで全員帰さんからな。以上。」

上級生が言うと、1年生は森へ向かって駆けだした。

全員が必死の形相か、怒りの形相だった。

それもそうだろう。2年のしりぬぐいをさせられるうえ、いつも通り『顧問にばれないようにする』の感じなのだ。

修也も怒りで歯を食いしばりながら森へ向かった。

森の中は昼間とは思えないほど薄暗かった。

その上、一昨日降った雨のせいかじめじめした空気が充満し、湿った土のおいが鼻をついた。

そんな中、10数名いる1年生は散り散りに地面を凝視しながら歩き回った。

(たった1個のボールじゃないか……。)

木の根っこに躓きながら、修也は心中で悪態をついた。

理不尽すぎる。常盤高校の野球部はたかがボール1つのために、1年生に何時間も山の中を散策させるのか。

修也は本格的に落胆した。

入学当初、ここの野球部で甲子園大会に出場したいという願望は、とっくに消え去っていた。

そんなことを思いながら、20分あたりは経っただろうか。修也は目線の先に何か動くものを見つけた。

「何だ・・・？」

修也はそう言って顔を近づけたが、すぐに飛びのいた。体長50センチくらいの蛇が蠢いていたのだ。

「蛇かよ・・・、脅かすなよな・・・。」

修也はそう言いながら顔を上げた。

そして、次の瞬間凍りついた

。 視界一面に霧が広がっていたのだ。

「嘘だろ・・・？」

修也はあわててあたりを見渡した。

だが、前後左右が霧で視界が閉ざされ3メートル先ぐらいまでしか見えない。修也は言いようのない恐怖に襲われた。

修也は慌ててきた方向を走った。

といつても、ジグザグに歩きながら、その上地面を凝視しながら歩いてきたため、そんなに出口からは離れていないだろうとひたすら後ろに向けて走った。

しかし、いくら走っても霧は晴れず出口すらも見えてこなかった。

息が切れてきた修也は立ち止まり、もう一度あたりを見渡した。結論は一つしかなかった。

ボール探しに夢中になりすぎて霧の発生に気付かず、そして探すのに夢中になりすぎるあまり森の奥深くまで入り込んでしまったのだ。

「畜生……。」

修也は舌打ちした。ジャージのため、携帯電話も持っていない。これは霧が晴れるのを待つしかなさそうだ。

（ま、見つからなければ誰かしら警察に連絡してくれるだろ。）
修也はそうのんきに考えると、手近にあった木に寄りかかった。そのときだった。

『ふむ、少年が一人迷い込んだか。』

背後からいきなり聞こえてきた低い声に、修也は飛び上った。と同時に胸に安堵の気持ち広がった。

おそらく山菜狩りをしていた人が誰かだろう。これで帰れる、と修也はホッとしながら振り返った。

「ええ。実は道に迷って……。」

修也はそこまでいって振り返り、そして凍りついた。

そこには身長２メートルはあろうかという鎧の男が立っていた。

「うわああああ!!」

修也は驚きのあまり後ずさりし、尻もちをついた。無理もない。鎧の男は全身を銀色の甲冑と兜で覆い、背には赤いマント、さらにそのマントの下には修也と同じくらいの長さの大剣が除いていたのだ。

「あ……あ……」

修也はあまりの恐怖に後退りしながら、その男をまじまじと見た。

(何してる……逃げろ!)

修也はそう言って自分を叱責したが、腰が抜けて立てなかった。それもそつだ。霧の深い森の中で大剣を背負った大男に出会えば、誰でも腰が抜ける。

それでも修也は、必死に後ろへ下がろうともがいた。

『お主……もしや?』

不意に鎧の男がそう言い、1歩前に踏み出した。

その瞬間、修也の腰に力が戻った。

修也は立ち上がり、全速力で駆けだした。

『な、待ってくれ!』

鎧の男はそう言ったが、修也は構わずに走った。

だが、次の瞬間には木の根に躓いて地面に滑り込んでしまった。

「痛っ……。」「

勢いよく顔から突っ込んだ修也は、口についた泥を払ってまた走りだそうとした。が、その目の前に鎧の男が立ちはだかった。「ぎゃあああ！！」

修也はまた叫び、再びしりもちをついた。

『落ちて着け少年！！私はお主に危害を加えたりせん。私の話を聞いてくれ。』

「は？な・・何だって？」

修也は聞き返して、その言葉を飲み込むのに数分かった。

そして、言葉の意味を理解すると、ゆっくりとうなずいた。

『すまないな。』

鎧の男はそう言うと、自分もしりもちをついている修也に向かい合うように腰かけた。

『さて、はじめに問おう。お主は、私の姿が見えるのだな？』

「あ、ああ。見えるよ。」「

修也はそう答えると、改めて鎧の男の姿をしげしげと見た。

そこで修也はあることに気付いた。

「ちよつと待てよ……。この姿どこかで見たことがある……。あ！もしかして『総剣指令ガトムズ』？」

『ふむ、なかなか記憶力のいい少年だ。いかにも、私は『総剣指令ガトムズ』。やんごとなき事情のため、『精霊界』からこの世界へとやってきたのだ。』

「『精霊界』だって？」

修也は口をポカンと開けて聞き返した。

『左様。簡単に説明すると、『精霊界』というのは人間の想像力によって生み出された世界だ。故に私も遊戯王デュエルモンスターズをやっている者の想像力によって生み出された。』

「成程……。良く分からないけどソリッドビジョンじゃないってことは確かなのか。」

『ソリッドビジョン？ああ、最近人間界で開発された立体映像システムか。』

『ガトムズ』の言ったソリッドビジョンシステムとは、デュエルモンスターズの制作会社もっと多くの人々にデュエルモンスターズを楽しんでもらいたいと開発したシステムだ。

原作である漫画と同様にデュエルディスクと呼ばれる装置を開発し、それにカードのナンバーを認識するシステムを搭載させている。

デュエルディスクにカードをセットしたりした時に、まずはデュエルディスクが高速でそのナンバーを読みとる。

そのデータをデュエルディスクに内蔵されているモンスター、または魔法、罫のグラフィックデータと照らし合わせ、そのカードを映像として映し出すハイテクシステムのことだ。

原作さながらのデュエルが楽しめるということもあり、このシステムは相当受けた。

ついにはこのシステムを利用して賞金制でデュエリストたちを競わせる『プロデュエリストリーグ』なるものも設立され、デュエルモンスターの年齢層は一気に広がったのだ。

「そういう感じかな。それはさておき、俺からも質問していいかな？」

『む？何だ。』

修也は、兜の下で疑問の声を上げた『ガトムズ』に言った。

「ここは……。何処なんだ？」

修也が言うと、『ガトムズ』は今しがた気づいたらしく、おお、と言うと拳で手をたたいた。

『そうだ。お主に伝えねばならなかったな。ここは私が精霊力で作り出した特殊空間だ。勝手ながら、お主にはここでデュエルをしてもらう。』

「はあ？」

修也は面食らった。

そんな修也を無視して『ガトムズ』は続けた。

『案ずるな。お主が勝とうと負けようと、この空間からは解放する。このまま空間を開放しないなどということはないぞ。』

「ちょ・・・、ちょっと待ってくれ。」

修也は慌てて制止した。

「何で俺をこの空間に連れ込んだんだ？つーか、何で俺がデュエルやってるって分かったんだよ。」

修也が質問をたたみかけると、『ガトムズ』は静かに言った。
『私が連れ込んだのではない。お主が自身でここに来たのだ。』

「俺が・・・自分で来た？」

修也は信じられないというような顔をした。

「全然気付かなかった・・・。」

『うむ、私も驚いた。』

『ガトムズ』はそう言うと、一呼吸置いてつぶけた。

『そして、お主がデュエリストであることがわかった理由だが・・・、それは簡単だ。何にせよ私の姿が見えるのだからな。』

「へ・・・？」

修也はポカンと口を開けたが、『ガトムズ』は兜の下でくぐもつた笑い声を出しただけで何も言わなかった。

『さて・・・と。そろそろ始めようか？このまま話しているとキリがない。さつさとデュエルを済ませようではないか。』

『ガトムズ』そう言うと、マントの下から盾の形をとったデュエルディスクを取り出した。

それを見た修也は慌てて右手を出した。

「ちょっとタンマ。俺部活中だったからデュエルディスク持ってないんだ。グラウンドまで取りに行かないと。」

『ん？ああ。それなら問題ない。』

『ガトムズ』はそう言って笑った。

『お主のデッキと、そしてデュエルディスクを頭の中に思い浮かべろ。』

「どっいつこと・・・？」

修也は言われるまま、頭の中に自分が普段使っているデッキと、デュエルディスクを思い描いた。

原作で使われていた角ばっているオーソドックスなデュエルディスクと、偶然にも目の前にいる『ガトムズ』も投入されている『Xセイバー』のデッキだ。

「…………ん？」

不意に左腕に重さを感じ、修也は下を向いた。

するとどうしたことが、普段使用しているデュエルディスクがデッキとともに左腕に収まっていた。

「マジかよ……。」

修也はそう呟き、慌ててデッキを外して確認したが中身も自分が普段使っている『X セイバー』そのものだった。

『準備は良いか？』

その様子を見ていた『ガトムズ』が言った。

修也はデッキを戻すと、『ガトムズ』のほうを向いて恐る恐るうなずいた。

それを見た『ガトムズ』はソリットビジョンの場所をとるため、修也と距離をとった。

「もう一度聞いておくけど……。」

修也はデュエルディスクを起動しながら言った。

「本当に負けても無事に帰れるんだよな。」

『ああ、保障しよう。安心したまえ。』

『ガトムズ』は面頬の下で確かにそう言った。

「そうかい、じゃあ・・・。」

修也はデュエルディスクを胸の高さまで上げた。

「遠慮なく行かせてもらっぜー!!」

『望むところだ！来い!!』

『ガトムズ』も同様にディスクを胸まで上げた。

一瞬の間が空き、二人は同時に叫んだ。

『デュエル!!』

お互いのライフカウンターが8000を差し、修也のデュエルディスクのランプが点滅した。

先攻は修也だ。

修也はそれを確認すると、初手となる手札を5枚引いた。

「俺のターン、ドロー！」

修也は勢いよくカードを引き、手札に加えるとすぐにディスクにカードを置いた。

「『X セイバー アナペレラ』を召喚!!」

光がほとばしり、修也の場に鉄製の鞭を装備したモンスターが現れた。

『X セイバー アナペレラ』レベル4 地 1800/1100
戦士族・通常モンスター

「俺はカードを一枚伏せ、ターンを終了するぜ。」

『ふむ、私のターン。』

『ガトムズ』はゆっくりとカードを引き、それを確認するとすぐにデスクに置いた。

『出でよ!』X セイバー ガラハド』!!』

『ガトムズ』の場に仮面を付けたような戦士が現れた。

『X セイバー ガラハド』レベル4 地 1800/800 戦士族・効果

このカードは相手モンスターに攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が300ポイントアップする。このカードは相手モンスターに攻撃された場合、ダメージステップの間攻撃力が500ポイントダウンする。このカードが攻撃対象に選択された時、自分フィールド上に存在するこのカード以外の「X-セイバー」と名のついたモンスター1体をリリースする事で、その攻撃を無効にする。

(攻撃力は同じ。相討ちか・・・? いやちがう!)

修也は少し思案し、『ガラハド』の効果を思い出したとたん悔しげに『ガトムズ』を見た。

『X セイバー ガラハド』は、攻撃を行う時、攻撃力が300ポイントアップする!』

ガトムズはそう言うと、片腕を修也に向けて突き出した。

『バトルだ。』X セイバー ガラハド』で『アナペレラ』に攻撃！』』

『ガトムズ』がそう言うと、『ガラハド』は剣を振り上げて『アナペレラ』に飛びかかった。

「負けるか！！トラップ発動、『身剣一体』！こいつの効果で、『アナペレラ』の攻撃力は攻撃力が800ポイントアップする！」

『身剣一体』 畏カード

自分フィールド上に存在するモンスターが、表側表示の「X-セイバー」と名のついたモンスター1体のみの場合に発動する事ができる。発動後このカードは攻撃力800ポイントアップの装備カードとなり、そのモンスター1体に装備する。装備モンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

勢いよく飛びかかった『ガラハド』の振りおろした剣は、直前で回避された。

その直後、『アナペレラ』の鞭が『ガラハド』を襲い、『ガラハド』は破壊されてしまった。

『ぐう……！』

ガトムズ LP8000 LP7500

「さらに、『身剣一体』の効果で、カードを一枚ドローだ！」

『ふむ、やはり少しはやるようだ。私はカードを二枚伏せ、ターン終了だ。』

「よし、俺のターン！」

修也はカードを引くと、ニヤリと笑った。

「来たぜ！チューナーモンスター、『X セイバー パシウル』を召喚だ！」

修也がカードをディスクに置くと、大剣を持った屈強な戦士が現れた。

『X - セイバー パシウル』 レベル2 地 1000/0 戦士族・効果 チューナー

このカードは戦闘では破壊されない。このカードがフィールド上に表側守備表示で存在する場合、相手のスタンバイフェイズ毎に自分は1000ポイントダメージを受ける。

「行くぜ！レベル4の『アナペレラ』に、レベル2の『パシウル』をチューニング！」

修也がそう叫ぶと、『パシウル』は2個の星になり、『アナペレラ』も半透明になった。

「大地の鼓動集いし時、新たな力が迸る！シンクロ召喚！来い、『大地の騎士 ガイアナイト』！」

修也の場に緑色の光が溢れ、その中から人馬一体となった青い鎧の騎士が姿を現した。

『大地の騎士 ギアナイト』 レベル6 地 2600/800
戦士族・シンクロ

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

『シンクロ召喚か……。ならば!』

『ガトムズ』は『ギアナイト』を見据えると、リバーズカードを発動させた。

『トラップ発動!!』『威嚇する咆哮』!』

「何?!」

『威嚇する咆哮』 罠カード

このターン相手は攻撃宣言をする事ができない。

『残念だな。これでこのターン、攻撃は出来ないぞ。』

「ちつ。カードを2枚伏せ、ターンエンド。」

『私のターン、ドロー!』

『ガトムズ』は力強くカードを引くと、もう一枚のリバーズカードを表にした。

『リバーズカードオープン!』『リビングデッドの呼び声』!』

『リビングデッドの呼び声』 永続罠カード

自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

『こいつの効果で、墓地の『X セイバー ガラハド』を特殊召喚する！』

『ガトムズ』がそう言うと、再び『ガラハド』がフィールドに姿を現した。

『さらに、『X セイバー パロムロ』を通常召喚！』

『ガトムズ』の場に、トカゲの様な顔の新たな『X セイバー』が姿を現した。

『X セイバー パロムロ』レベル1 地 2000/3000 爬

虫類族・効果 チューナー

自分フィールド上に存在する「セイバー」と名のついたモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、500ライフポイントを払う事で、このカードを墓地から特殊召喚する。

「シンクロか？」

修也がそう言うと、『ガトムズ』はくぐもった声で笑った。

『その通りだ。ただし、使うのはお主のモンスターだがな！魔法カード発動！『精神操作』！』

『精神操作』 魔法カード

このターンのエンドフェイズ時まで、相手フィールド上に存在するモンスター1体のコントロールを得る。このモンスターは攻撃宣言をする事ができず、リリースする事もできない。

「くつ、『ガイアナイト』を！」

『ガトムズ』の発動した『精神操作』により『ガイアナイト』は『ガトムズ』のフィールドに移った。

『行くぞ！！』『ガイアナイト』に『パロムロ』をチューニング！
『！』

『パロムロ』が星に変わり、『ガイアナイト』が半透明になった。

『戦士たちの孤高の魂！今ここに集結し、我が刃となれ！！シンクロ召喚！』
X セイバー ウルベルム『！』

場に光がさし、『ガトムズ』の場に屈強な肉体の戦士が現れた。

0 X セイバー ウルベルム『レベル7 地 2200/1300
戦士族・シンクロノ効果

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

相手の手札が4枚以上の場合、このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、相手の手札をランダムに1枚デッキの一番上に置く。

『行くぞ！！まずは『ガラハド』でダイレクトアタックだ！！』

「くつ・・・！！！」

修也 LP8000 6200

『さらに、『ウルベルム』によるダイレクトアタック!!Xスラッ
ッシュ!!』

「うわあああ!!」

修也 LP6200 4000

『さらに、『ウルベルム』の効果発動!!お主の手札が4枚以上のときにダメージを与えた場合、手札をランダムにデッキの一番上に置く!!』

突如、『ウルベルム』の巻き起こした剣圧が、修也の手札を奪い去った。

『私は、これでターン終了だ。』

「ちっ、俺のターン!!」

修也はカードを引いたが、勿論来たのは先ほど戻されたカードだ。

今の手札では逆転はできない。

そう思った修也は賭けに出ることにした。

「俺は魔法カード、『打ち出の小槌』を発動する!!」

『打ち出の小槌』 魔法カード

自分の手札を任意の枚数選択し、デッキに加えてシャッフルする。その後、デッキに加えた枚数分のカードをドローする。

修也はこの効果で、残りの手札3枚を全てデッキに戻し、シャッフルした。

(頼むぜ……。)

修也は祈るような気持ちでカードを引き、一瞥した。

(よし！いける！)

その瞬間、修也の顔色が変わった。

「いくぜ！俺は『レスキューキャット』を召喚だ！」

修也の場に、ヘルメットをかぶった猫のモンスターが現れた。

『レスキューキャット』レベル4 地 300/100 獣族・効果

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地に送る事で、デッキからレベル3以下の獣族モンスター2体をフィールド上に特殊召喚する。この方法で特殊召喚されたモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

「俺はこの効果で、デッキから『X セイバー エアベルン』と『星見獣ガリス』を特殊召喚する……！」

『X セイバー エアベルン』レベル3 地 1600/200
獣族・効果 チューナー

このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、相手の手札をランダムに1枚捨てる。

『星見獣ガリス』レベル3 地 800/800 獣族・効果

手札にあるこのカードを相手に見せて発動する。自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送り、そのカードがモンスターだった場合、そのモンスターのレベル×200ポイントダメージを相手ライフに与えこのカードを特殊召喚する。そのカードがモンスター以外だった場合、このカードを破壊する。

「よし、『星見獣ガリス』に『X セイバー エアベルン』をチューニング！」

修也の声に呼応し、『ガリス』は半透明に、『エアベルン』は星になった。

「大いなる自然の恵み、今龍の姿をとってその力を示せ！シンクロ召喚、『ナチュラル・パルキオン』！！」

修也の場に、日本古来の龍の姿をとったモンスターが現れた。

『ナチュラル・パルキオン』レベル6 地 2500/1800
ドラゴン族・シンクロ/効果

地属性チューナー+チューナー以外の地属性モンスター1体以上このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分の墓地のカード2枚をゲームから除外する事で、畏カードの発動を無効にして破壊する。

『攻撃力2500か。。。』

『ガトムズ』が呟くと、修也は不敵に笑った。

「驚くのはまだだぜ！俺は伏せておいた装備カード、『巨大化』を発動！」

『巨大化』 装備魔法カード

自分のライフポイントが相手より少ない場合、装備モンスター1体の元々の攻撃力を倍にする。自分のライフポイントが相手より多い場合、装備モンスター1体の元々の攻撃力を半分にする。

「こいつで、『ナチュラル・パルキオン』の攻撃力は倍だ！行くぜ！『ガラハド』を攻撃！エナジーブラスト！！」

修也が叫ぶと、『ナチュラル・パルキオン』は口から緑色のプレスを吐き、『ガラハド』を破壊した。

『ぬっつ・・・！』

ガトムズ LP7500 LP4000

「よし！カードを1枚伏せ、ターンエンドだ。」

修也がターンを終了し、再び『ガトムズ』のターンとなった。

『ドロー。』

『ガトムズ』は静かにカードを引くと、手札の一枚に手をかけた。

『手札から魔法カード、『簡易融合』を発動する。』

『簡易融合』 魔法カード

1000ライフポイントを払う。融合デッキからレベル5以下の融合モンスター1体を特殊召喚する。この効果で特殊召喚した融合モンスターは攻撃する事ができず、エンドフェイズ時に破壊する。

「簡易融合」は1ターンにつき1枚しか発動できない。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

『私はこの効果で、エクストラデッキから『カルボナーラ戦士』を特殊召喚だ！』

その言葉とともに、『ガトムズ』のライフが減り、場に紫色の鎧をまとった戦士が姿を現した。

『カルボナーラ戦士』レベル4 地 1500/1200 戦士
族・融合

『マグネッツ1号』 + 『マグネッツ2号』

ガトムズ LP4000 3000

「またシンクロ召喚か？」

修也が呟くと、『ガトムズ』は兜の下で短く笑った。

『残念ながら、私の手札にチューナーはいない。だが、ライフが減ったことにより、お主の『ナチュラル・パルキオン』の攻撃力は半分になる！』

「っ！？しまった！」

『ガトムズ』の言うとおり、『ナチュル・パルキオン』の攻撃力は『巨大化』のもう一つの効果で1250に減少していた。

『さあ、行くぞ！』『ウルベルム』で『ナチュル・パルキオン』を攻撃だ！！Xスラッシュ！！』

『ウルベルム』が剣をつかみ、『ナチュル・パルキオン』に向けて突っ込んだ。と、次の瞬間、修也の仕込んだ伏せカードが表になった。

「くっ！トランプ発動！！『アストラルバリア』！」

『アストラルバリア』 永続罫

相手モンスターが自分フィールド上モンスターを攻撃する場合、その攻撃を自分ライフへの直接攻撃にする事ができる。

この効果により、『ウルベルム』の攻撃は『ナチュル・パルキオン』を通り越し、修也を襲った。

「ぐあっ！」

修也 LP4000 1800

『無駄なことを……。これでお主のライフは僅か1800だ。』

『ガトムズ』が言うと、修也は驚くことにニヤリと笑った。

「ああ。だが、これで『ナチュル・パルキオン』の攻撃力はまた2倍になったぜ！！！」

『何？しまった！』

『ガトムズ』が気付いた時には、もう遅く、『ナチュラル・パルキオン』の攻撃力はまた5000へと上昇した。

『くつ、カードを一枚伏せてターンエンドだ。』

『ガトムズ』がターンを終了すると同時に、『カルボナーラ戦士』は光の粒となって消えてしまった。

「よし、俺のターン！」

修也は勢いよくカードを引いた。そして、その瞬間に『ガトムズ』の仕組んだカードが表になった。

『この瞬間、速攻魔法発動。』サイクロン』！』

『サイクロン』 速攻魔法

フィールド上の魔法または罠カード1枚を破壊する。

『これで破壊するのは、お主の『巨大化』だ。』

『ガトムズ』が呟くと、修也の場に竜巻が現れ、『巨大化』のカードを飲み込んだ。

これにより、『ナチュラル・パルキオン』の攻撃力は2500へと戻った。

「へえ、やるな。でも、このターンで勝負はつくぜ！」

『な、何だと?!』

『ガトムズ』が驚いて声を上げると、修也はニヤリと笑った。
「すぐにわかるさ。俺は『X セイバー ウルズ』を召喚だ!」

そう修也が言うと、場に双剣を持ったモンスターが現れた。

『X セイバー ウルズ』レベル4 地 1600/1000
獣戦士族・効果

このカードが相手モンスターを戦闘によって破壊し墓地へ送った時、このカードをリリースする事で、破壊したカードを持ち主のデッキの一番上に戻す。

『それがどうした? その2体で攻撃しても、私のライフは僅かに残るぞ?』

「いや、ただだぜ! 手札から魔法カード、『セイバー・スラッシュ』を発動だ!」

『セイバー・スラッシュ』 魔法カード

自分フィールド上に表側攻撃表示で存在する「X-セイバー」と名のついたモンスターの数だけ、フィールド上に表側表示で存在するカードを破壊する。

『なっ、まさか。。。』

「そのまさかさ! こいつの効果で、『ウルベルム』を破壊する!」

その言葉とともに、『セイバー・スラッシュ』の効果によって放

たれた『ウルズ』の剣圧が『ウルベルム』を襲った。

「これでフィールドはガラ空きだ！『ウルズ』でダイレクトアタック！」

『ぐあああ……。』

ガトムズ LP4000 2400

「止めだ！『ナチュル・パルキオン』で攻撃！エナジーブラスト！」

再び、『ナチュル・パルキオン』のプレスが『ガトムズ』を襲った。

『ぬおおおお！！！』

ガトムズ LP2400 0 勝者 草薙修也

『ガトムズ』の叫び声が響き、デュエルは終了した。

それと同時に、ソリットビジョンは消え、後には元の霧のかかった森だけが残された。

第2話 託される使命

結局、修也はあの後意識を失い、気が付いたら野球部の顧問に頬を叩かれていた。

他の1年生から一部始終は聞いていたらしく、そのあと顧問は上級生をこっぴどく叱っていた。

そのあとは何事もなく家路につき、電車に乗って今日のことは夢なのかと思い始めた時、又目の前に『ガトムズ』が現れた。

そして今、修也は自室で『ガトムズ』と向かい合って座っていた。

「で、俺とデュエルした理由を教えてくださいるんだよな。」

修也は声をひそめてそう言った。

普段親や弟が部屋に来ることはあまりないが、聞き耳を立ててもらってはかなわない。

『うむ、そうだ。』

『ガトムズ』はそう言うと、重々しく頷いた。

『単刀直入に言おう。草薙修也。お主は『精霊界』の危機を救うための戦士、『六星団』として選ばれた。』

「は・・・？」

修也は耳を疑った。精霊界？六星団？よくわからない単語が出て

きた。

「ちょっと待てよ。何なんだよ？精霊界とか、六星団とか。」

修也が言うと、『ガトムズ』は溜め息をついた。

『そう言うと思った。お主は今まで、そんなものとは無縁だったからな。簡単に言うと、『精霊界』とは人間の想像力で作られた世界だ。それ故、われらデュエルモンスターズのモンスターがいたるところに住んでいる。その世界の住人がこちらの世界に不完全な形で存在する形を精霊と言う。』

「へえ。」

修也が相槌を打つと、『ガトムズ』は続けた。

『本来、二つの世界は互いに無干渉に存在している。よほどの事がなければ、人間が『精霊界』にいる事も、精霊がこちらの世界にいる事もない。』

「無干渉？じゃあ、何で『ガトムズ』がこっちの世界にいるのさ。」

『そこについてなんだがな。ここで『六星団』が出てくる。』

そこまで言うと、『ガトムズ』は一息置いた。

『ある日のことだった。『精霊界』のはずれにある森で巨大な歪が発見された。それを発見したのは森にすむ部族なんだがな。そして、その歪から人間が出てきた。』

「人間だつて？」

修也が驚きの声を上げた

『ああ。その人間はそこで会った森の部族の容姿から、そこがデユエルモンスターズの精霊が住む世界と判断したようだ。その部族が人間を取り押さえようと動いた時には、その人間は消えていた。』

「それで？」

修也は先を促した。

『うむ、とにかく、このまま歪があるままでは何が起こるか分からない。人間の想像力がこちらに漏れ出してしまつては、『精霊界』自体がこちらの世界と同化してしまう恐れもあつた。そこで、部族の知らせを受けた『精霊界』の中枢機関、ユナイテッド・アルカディアは対抗策として6人の精霊をこちらの世界に送り込み、そこで各々の精霊を見ることのできる人間とともに調査をするという策を編み出した。それが、『六星団』だ。』

「じゃあ、こつちの世界に来ている精霊は6人……。『六星団』も6人なのか？」

修也がそう言うと、『ガトムズ』は首を横に振つた。

『否、確かに『六星団』は名前の通り6人だ。だが、精霊はもう一人いる。ユナイテッド・アルカディアが正式に派遣していない精霊がな。』

「ふん。誰？」

『ああ、そいつはユナイテッド・アルカディアの対策の遅さにし

びれを切らし、一人歪へと飛び込んだ。彼女は『精霊界』の中でも特殊な武具を装備している。こちらの世界では・・・『ナノブレイカー』と言ったか・・・？』

「へえ。ほかの精霊の名前は？」

修也が言うと、『ガトムズ』は首を横に振った。

『済まぬ、私には言えないのだ。そこまでの権限がない。派遣された精霊の中でも、全員の名前を人間の前で口にして良いのは二人だけだ。』

「そうなのか。じゃあ、『精霊界』に現れた人間の名前は？」

またしても『ガトムズ』は首を横に振った。

『それも分からぬ。我々も、歪を作ったと思われる人間のところに出ると思ったのだが・・・。実際は違った。我々全員が常盤市内の別々の場所に出た。それでも、この常盤市に歪があるということは薄々分かった。まあ、それにこいつのおかげで互いの場所は感知できたがな。』

『ガトムズ』はそう言うと、懐から煌びやかな赤い宝石を埋め込んだペンダントを取り出した。

『お主に渡しておこう。こいつは、『六星団』であることの証だ。これを持っていれば、お主も微弱ながら『精霊力』を感じ取ることができる。』

「ああ、ありがとう。」

修也はそれを受け取ると、さっそく首にかけた。

「・・・、何にも感じないな。」

修也が言うと、『ガトムズ』はフフツと笑った。

『当たり前だ。我々は昨日こちらに着いたばかり。覚醒しているのはお主くらいだろう。』

「なるほどね。」

修也はそう言って、ペンダントを眺めていたが、ふとあることに気付いて『ガトムズ』の方を向いた。

『ああ、心配はいらない。このペンダントには効果がある。ペンダントを作成したものがこう言ったんだ。星々は引き合っ。ペンダントを持つ者同士は、必ずやどこかで出会うことになる。』

「ふん。」

修也はそう言うと、又ペンダントの観察に戻った。

『もう、質問は良いか？』

『ガトムズ』がそう言うと、修也は頷いた。

「ああ、大丈夫だぜ。」

修也がそう言うと、『ガトムズ』は短く笑った。

『そうか。では、明日から頼むぞ。草薙修也。『精霊界』とこの世界の平穩を守るためにもな。』

『ガトムズ』はそう言って、右手を差し出した。

修也は一瞬キョトンとしたが、すぐに気付いて右手を差し出し、
実体のない『ガトムズ』の手を握った。

「ああ、こちらこそな！『ガトムズ』！」

そう言って二人は、しっかりと握手を交わした。

「なあ、もし他の『六星団』が遠く離れた場所で覚醒したらどうなるんだ？」

修也の問いに、『ガトムズ』は難なく答えた。

第3話 入部試験？ v s 春山翔子 美しき花の舞（前書き）

進路関係で放置してました。

後、手違いで大幅削除してしまったので書き直します。

第3話 入部試験？ vs 春山翔子 美しき花の舞

「修也……。ほんとに良いのかよ？お前入学したときに甲子園行くぜ！！なんて張り切っていたのに。」

修也が『ガトムズ』から『六星団』の使命を聞いた翌日の事。旧校舎の科学室の前まで来た孝雄が、後ろを歩く修也に向かっていきなりそう聞いた。

「え？ああ……。だから今日何回も言っただろ？あんな上級生がいる部活で甲子園なんて無理だよ。ここ数年の出場記録もないし。だったら、科学部で毎日デュエル三昧して他方がマシだぜ。」

修也は今日何度も言った言葉を孝雄に返した。表向きはその理由だが、本当は野球部に入部すると部活に忙しくなり、『六星団』としての指名が果たせないのではないかという修也の判断からそうしたのだ。

それを聞いて納得行かないような顔をしている孝雄を尻目にもう一人の友人、墨染陸は満足そうに笑った。

「そうしつこく言うな孝雄。修也があんな非常識集団に入ることにならなくて良かったじゃないか。」

「非常識集団って言い過ぎじゃ……。。」

陸の辛辣な言葉を聞いた修也は、呆れたように笑いながら軽く諷めたが陸はたいした反応を見せずに旧科学室のドアに手を掛けて言った。

「さて、無駄話は置いておいてそろそろ入ろうか。ま、俺たち以外には二人しかないが兩人とつつき安いからすぐ馴染めるはずだ。」

陸はその言葉を言い終わると同時に、ガラガラと勢い良く音を立てて引き戸を開けて中に入った。それに続いて修也も中に入った。何かの薬品のものなのか何ともいえない臭いが修也の鼻をついた。

「よー二人とも！！連れてきたぜ新入部員！！」

修也のあとから入ってきた孝雄がそう声を上げながら既に4人向けの長テーブルに腰掛けていた二人の生徒に近づいていった。二人の生徒は男女一人ずつで、女子のほうは読書に没頭、男子のほうはカードを広げてデッキ調整をしていた様だったが、孝雄の声で二人とも顔を上げた。

「へえ〜。あなたが草薙君？吉良君からいつも話は聞いているよ。」

女子のほうがそう言って立ち上がり、修也の方に近づいてきた。目がパツチリとしたかわいい子だったので、いきなり見つめられた修也はトギマギしながら頷いて見せた。

「ふふ……。始めまして。科学部の部長を務める春山翔子といいます。よろしくね。」

「あ……。ああ。よろしくな！！」

翔子にニツコリと笑いかけられながらそういわれた修也は、少し詰まりながらもそう返した。それを受けた翔子は頷くと、後ろに控えている男子生徒の方を振り返った。男子生徒は急いで広げてあつ

たカードをデッキケースにしまつと立ち上がった修也の方を向いた。

「そして俺が、副部長の志水光彦……。ま、副部長らしい事はしないんだけどな。よろしく頼むぜ。」

上に跳ね上がった髪が特徴の副部長、光彦はそう言つとチャツと右手を上げて見せた。

「おう。よろしく。」

修也がそう言つと光彦はニヤリと笑い、思いもよらない事を言い出した。

「ま、よろしくつつてもまだ入部を認めたわけじゃないけどな。」

「えっ？どういう事だよ？」

修也が思わず素つ頓狂な声を上げて聞き返すと、今度は陸が一步前に進み出てきた。

「ああ、言い忘れていたな。この科学部には入部試験がある……。と言つても、春山が勝手に作った決まりなんだけどな。試験は簡単。春山とデュエルして……。勝つことだ。」

「おいおい、ちょっと待てよ。」

陸がひとしきり言い切ると、隣で話を黙って聞いていた孝雄が口を挟んだ。

「その入部試験つての？俺も受けてないんだけどそれって俺も受けることになるのか？」

孝雄がそう聞くと、その通りだという風に光彦が頷いた。

「お〜。つっても春山が修也の相手するから担当は俺だけだな。ま、準備が出来てないから明日でも明後日でも構わないぜ？」

「なっ……。準備なんていつでも出来てるに決まってんだろ？今日済ませちまうって！！」

孝雄が反発するように強く光彦に言い放つと、光彦は満足そうに頷いて見せてそれから翔子のほうを向いた。

「だ、そうだ。こっちは今日実施できるぜ。そっちは？」

そう聞かれた翔子は修也の方に向き直って問いかけるように首を傾げて見せた。もちろん、修也も準備は出来ている。デュエルデスクは入っているし、デッキも昨日調整したばかりだ。修也は力強く頷いた。

「ああ、俺も準備万端だ。早速、その入部試験のデュエルを始めよう！！」

修也がそう言うと、翔子は頷いて光彦に向けて親指を立てて見せた。

「よし……。決まりだな。そんじゃ、この部屋だとソリッドビジョンの同時展開はきついから我々は二つ隣の空き教室でやるぜ。じゃ、後は頼んだ。」

光彦はそう言ってデュエルディスクをさっさと腕につけると、旧科学室に一つしかない引き戸を開けて廊下に出て行った。

「じゃ、あとでな。」

孝雄も修也に向かってそういうと、光彦の後に続いて教室を出て行った。その背中を見送った修也は翔子のほうに振り返ると、デュエルディスクを鞆から取り出して装着し、構えた。

「さてと……さっきも言ったけど俺は準備万端。いつでも始められるよ!!」

「フフ……。威勢が良いね。ま、いいか。私もさっさと済ませたいし……。始めよ!」

修也の言葉に含み笑いをしながらそう返すと、翔子もデュエルディスクを装着して構えた。そしてデッキをブレザーのポケットから取り出して軽くシャッフルし、デュエルディスクにつけると修也の方を見据えた。

「さて……。両者準備が整ったな。」

それを見ていた陸はそういうと、距離をとって向かい合っている二人の中間辺りに立ち、修也と翔子を交互に見た。

「よし、それではこれより、科学部入部試験を始める。合格条件は部長に勝利することだ。先攻は入部希望者の修也だ。それでは……デュエル!!」

陸の叫びを皮切りにデュエルは始まった。先攻は修也なので、二人はすぐさま初手となる5枚のカードを引き、修也は続けざまにデッキに手を掛けた。

「俺のターン、ドロー……よし、『XX セイバー フラムナイト』を通常召喚！」

修也がすぐさまデュエルディスクにカードを置くと、フィールドに紅い鎧と纏連接棍のような形状の剣を装備したモンスターが姿を現した。

『XX セイバー フラムナイト』レベル3 地 1300/1000 戦士族・チューナー/効果

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度だけ、相手モンスター1体の攻撃を無効にすることができる。このカードが戦闘によって相手フィールド上に守備表示で存在するモンスターを破壊した場合、自分の墓地に存在するレベル4以下の『X-セイバー』と名のついたモンスター1体を特殊召喚することができる。

「さらに手札から魔法カード、『おろかな埋葬』発動！！俺はこのカードの効果により、デッキから『X セイバー ガラハド』を墓地に送る！！そして、カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

『おろかな埋葬』 魔法カード

自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。

「ふん……。『X セイバー』デッキか……」

修也がターンを終了すると同時に、翔子はそう呟いてフィールドを凝視した。しばらくそうしてから、何か納得したように頷くと

デッキに手を掛けた。

「私のターン、ドロー……。私は『コアキメイル・グラヴィローズ』を通常召喚するよ。」

翔子がカードをディスクに置くと頭に薔薇の花を冠し、茨の鞭を手に携えた植物族モンスターが姿を現した。

『コアキメイル・グラヴィローズ』レベル4 炎 1900/1300 植物族・効果

このカードのコントローラーは自分のエンドフェイズ毎に手札から「コアキメイルの鋼核」1枚を墓地へ送るか、手札の植物族モンスター1体を相手に見せる。または、どちらも行わずにこのカードを破壊する。自分のスタンバイフェイズ時に1度だけ、自分のデッキからレベル3以下のモンスター1体を墓地へ送る事ができる。

「そして、カードを二枚セット。ターン終了。そして、『グラヴィローズ』の維持コストに手札の『ギガプラント』を見せるよ。」

「あれ？攻撃しないのか？」

修也が『ギガプラント』のカードを見てからおどけたようにそう言っただけだと、翔子はまたフツツと含み笑いをした。

「だって見え見えの罠だもの。わざわざ攻撃表示で召喚してるし、伏せカードがブラフでも私から攻撃したら『フラムナイト』の効果で止められちゃうから。」

「へえ〜。さすが科学部部长！この短時間でそこまで計算するとはな……。ま、良いや。俺のターン、ドロー！！！」

修也は勢い良くカードを引くと、それを手札に加えてから翔子の伏せた2枚の伏せカードをじっくりと見た。

（春山の読み通り、俺の伏せカードは『心剣一体』。使えば『グレイローズ』を戦闘破壊できるけどそれは読まれてる……。どうするか……。）

修也は手にした4枚の手札を見据えながらしばらく考えると、スツと手札を1枚手にとった。

「俺はモンスターを1枚セット。ターン、エンドだ。」

「フフ……。守ってばかりじゃ勝てないよ？私のターン、ドロ！！スタンバイフェイズ、『コアキメイル・グレイローズ』の効果発動。デッキからレベル3モンスター『ダンディライオン』を墓地に送るわ。そして同時に、『ダンディライオン』の効果発動。墓地に送られたとき、フィールドに『綿毛トークン』を特殊召喚できる。」

翔子がカードをディスクの墓地部分に送ると同時に、フィールドが二箇所光ってモフモフしたかわいらしい綿毛が姿を現した。

『綿毛トークン』レベル1 風 0/0 植物族・トークン

このトークンは『ダンディライオン』の効果によって特殊召喚される。

「そして、永続トラップ発動。『アイヴィ・シャックル』！！このカードがフィールドにある限り、私のターンに限りあなたのモン

スターは植物族になる！」

『アイヴィ・シャツクル』 永続罨

このカードがフィールド上に存在する限り、相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターは自分のターンのみ植物族になる。フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手の効果によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

「来たか……。春山の常等コンボ。そして、ここから来るのは……」

観戦に徹している陸が呟くと、翔子はすぐさまもう一枚の手札に手を掛けた。

「マジック発動！！『フレグランス・ストーム』！！」

『フレグランス・ストーム』 魔法カード

フィールド上に表側表示で存在する植物族モンスター1体を破壊し、自分のデッキからカードを1枚ドローする。さらに、この効果でドローしたカードが植物族モンスターだった場合、そのカードをお互いに確認し自分はカードをもう1枚ドローする事ができる。

「このカードは、フィールド上の植物族モンスターを1体破壊してデッキからカードを1枚ドローするカード……。」

「なっ……。？じゃあ、俺のモンスターをわざわざ植物族にしたのは……。」

修也がそう呟くと、翔子はニヤリと笑った。

「そ。あなたのモンスターも破壊対象に入れるため！！私は『X
セイバー フラムナイト』を破壊し、デッキから1枚ドロ―！
！」

翔子がそういうのと同時に、修也のフィールドの『フラムナイト』
は花の嵐に巻き込まれて破壊されてしまった。これで、戦闘無効効
果は使えなくなってしまった。

「まだ終わらないよ……。手札からチューナーモンスター、『
スポーア』を通常召喚！！！」

翔子の言葉と共に、綿玉のようなファンシーなモンスターがかわい
らしい泣き声と共にフィールドに姿をあらわした。

『スポーア』レベル1 風 400/800 植物族・チューナ
ー/効果

このカードが墓地に存在する場合、このカード以外の自分の墓地
に存在する植物族モンスター1体をゲームから除外して発動する。
このカードを墓地から特殊召喚し、この効果を発動するために除外
したモンスターのレベル分だけこのカードのレベルを上げる。『ス
ポーア』の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

「チューナー……。シンクロ召喚！？」

「そういうこと……。さ、いくよ！！レベル1の『綿毛トーク
ン』とレベル4の『コアキメイル・グラヴィローズ』に、レベル1
の『スポーア』をチューニング！！！」

翔子がそう言うと、『スポーア』の体は眩く輝く一つの星へと変化

した、そしてそれがさらに緑色の輪へと変化し、残りの2体を包み込んだ。

「命を吸う魔界の華よ、今日の光の下に咲き乱れよ！！シンクロ召喚！来て、『ヘル・ブランブル』！！」

口上が終わると共に緑色に光が旧科学室にあふれた。そしてその光の中から、美しい女性の形を取った植物族モンスターが姿を現した。

『ヘル・ブランブル』レベル6 光 2200 / 1800 植物族・シンクロ/効果

チューナー+チューナー以外の植物族モンスター1体以上

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、お互いに手札から植物族モンスター以外のモンスターを召喚・特殊召喚するためには、1体につき1000ライフポイントを払わなければならない。

「ちつ……。手札からの召喚に制限がつくのか。厄介だな……」

修也がそう呟くと、翔子は含み笑いをした。

「フフ……。どうかしら？『Xセイバー』なら『ガトムズの緊急指令』という便利なカードがあるんじゃないの？さあ、バトルフェイズ。私は『ヘル・ブランブル』で裏守備モンスターに攻撃！ブロッサム・シャワー！！」

翔子がそう言うと『ヘル・ブランブル』は右手から大量の花びらを風に乗せて飛ばし、修也のフィールドの裏守備モンスターを狙っ

た。その瞬間、裏守備モンスターが表になった。

「よし、『素早いビッグハムスター』のモンスター効果発動!!!」

『素早いビッグハムスター』レベル3 地 1100/1800
獣族・効果

リバーズ：自分のデッキからレベル3以下の獣族モンスター1体を裏側守備表示で特殊召喚する事ができる。

「俺はデッキから『X セイバー エアベルン』を裏守備でセツト!!!これで次のターンにモンスターを残せる!!!」

「へえ、やるじゃない。私はこのままターン終了。」

翔子がターンを終了すると同時に、修也はデッキの一番上に手を掛けた。

「俺のターン、ドロー!!!メインフェイズ、『ヘル・ブランブル』の効果でライフを1000払い、手札から『XX セイバー エマーズブレイド』を通常召喚する!!!」

修也 LP8000 7000

修也は自ら自分のライフを削り、手札から新たに昆虫族の『X セイバー』を召喚した。

『XX セイバー エマーズブレイド』レベル3 地 1300
/800 昆虫族・効果

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからレベル4以下の『X-セイバー』と名のついたモンスター

1体を特殊召喚する事ができる。

「さらに裏守備表示の『X セイバー エアベルン』を反転召喚
!」

新たにライオンのような顔をし、両手の爪を武器とする『X セイバー』が修也のフィールドに姿を現した。

『X セイバー エアベルン』レベル3 地 1600/200
獣戦士族・チューナー/効果

「よし……。俺はレベル3の『XX セイバー エマーズブレイド』に同じくレベル3、『X セイバー エアベルン』をチューニング!」

修也がそう叫ぶと、『エアベルン』は緑色の星の輪となってもう片方のシンクロ素材、『エマーズブレイド』を包み込んだ。

「大地の鼓動集いし時、新たな力が迸る!シンクロ召喚!来い、大地の騎士 ガイアナイト!」
修也の口上が終わると同時に緑色の光がフィールドを埋め尽くし、その光の中から人馬一体の騎士が姿を現した。

『大地の騎士ガイアナイト』レベル6 地 2600/800
戦士族・シンクロ
チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

「攻撃力2600……。『ヘル・ブランブル』を上回った?」

「そうだ!!これなら『ヘル・ブランブル』を倒せる!!行け、

『ガイアナイト』！！ガイアシエイパー！！』

翔子の驚く声をよそに、修也の攻撃宣言を受けた『ガイアナイト』は両手の槍を前に突き出し、『ヘル・ブランブル』に向けて勢い良く突進攻撃を仕掛けた。

「いい攻撃！！でも、やらせないよ！！トラップ発動、『棘の壁』！！」

翔子がカードを発動させると『ヘル・ブランブル』を守るかのように、幾つもの有刺植物からなる壁が現れた。

『棘の壁』畏カード

自分フィールド上に表側表示で存在する植物族モンスターが攻撃対象に選択された時に発動する事ができる。相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「あれは植物族限定の『ミラーフォース』。。。つまり修也の『ガイアナイト』は破壊されるか。。。」

陸がそう呟くと、その言葉通りに『ガイアナイト』はいきなり現れた『棘の壁』に勢い良く突っ込み、そのまま破壊されてしまった。

「しまった！！『ガイアナイト』が。。。くそ。。。俺はこのままターンエンド！！」

せっかくシンクロ召喚した『ガイアナイト』をあっさりと破壊された修也は、悔しげな顔をしたが打つ手が無いらしく、そのままターンを終了した。

そんな修也を尻目に、翔子は余裕の表情を浮かべつつデッキに手を掛けた。

「あらあら草薙君。そんなんじゃ入部できないよ？私のターン、ドロー！！私は『綿毛トークン』をリリース！！『ギガプラント』をアドバンス召喚！！」

翔子がそう言うのと先ほどまでフィールドにいた『綿毛トークン』はモヤモヤした光の玉になったあと、肥大化して鎌のある巨大な植物族に変貌した。

『ギガプラント』 レベル6 地 2400/1200 植物族・デュアル

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。 自分の手札または墓地に存在する昆虫族または植物族モンスター1体を特殊召喚する。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「くそ……。上級モンスターが2体……。」

新たに攻撃力2400の『ギガプラント』の召喚を許してしまった修也はそう呟いて後ずさりした。

「フフ……。驚いている暇は無いでしょ？今はこの2体をどうするか考えるべきじゃない？さあ、バトル！！『ギガプラント』でプレイヤーにダイレクトアタック！！」

翔子が叫ぶと、『ギガプラント』は鎌のついた触手を修也のこ

るまで伸ばし、そのままそれを修也にたたきつけた。

「うわっ!!」

修也 LP7000 4600

「まだ終わらないよ!! 続けて『ヘル・ブランブル』のダイレクタアタック!!」『ブロッサム・シャワー』!!」

翔子が続けて叫ぶと『ヘル・ブランブル』は再び花びらの嵐を作り出し、修也を攻撃した。

「くそっ……。うわああ!!」

修也 LP4600 2400

叫び声と共に修也のライフは再び大きく削られ、翔子のライフ8000に対して大きく差をつけられてしまった。

「あらあら、墨染君からはかなりの実力者って聞いてたんだけど、その程度なのかな? 私はこれでターン終了。」

相変わらず余裕の表情を浮かべてターンを終了する翔子を見て、デュエルを傍らで見ていた陸は目を細めた。

(それは違うぞ春山……。確かに修也はプレイングやデッキ構築の面では俺や光彦、そしてお前には大きく劣る。だが……。)

「くっ……。俺のターン!!」

修也が焦った表情を浮かべながらデッキに手を置くのを、陸は静かに見た。

(それでも俺が修也を実力者と呼ぶ理由は・・・その引きの強さにある!!)

「ドロー!!」

修也は勢い良くデッキからカードをドローし、それをゆっくりと確認すると微かに笑った。

「俺は・・・ライフを1000払い、手札の『XX セイバー ガルドストライク』を自身の効果で特殊召喚!!」

修也 LP2400 1400

又も修也のライフが削られると同時に、新たに狼のような顔をした『X セイバー』がその姿を現した。

『XX セイバー ガルドストライク』レベル5 地 2100
/1400 獣戦士族・効果

自分の墓地に『X・セイバー』と名のついたモンスターが2体以上存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

「それがさっき引いたカード・・・。でも、僅かなライフを削ってどうするつもり?」

「こうするのさ！！魔法発動、『セイバー・スラッシュ』！！このカードは、自分フィールドの『X セイバー』の数だけ相手フィールドのカードを破壊する。俺は、『ヘル・ブランプル』を破壊だあ！！！！」

『セイバー・スラッシュ』魔法カード

翔子が驚く暇も無く、修也の発動した『セイバー・スラッシュ』から放たれた剣撃が『ヘル・ブランプル』を真っ二つにしていた。

「まだまだ！！手札から速効魔法、『グリード・グランド』発動！！」

『グリード・グランド』速効魔法

自分が相手フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスターを戦闘またはカードの効果によって破壊したターンに発動することができる。自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「俺はこのターン、『ヘル・ブランプル』を破壊した。よって2枚ドロー！！そしてバトルフェイズに入る！！！！」

特に『ガルドストライク』に戦闘補助も施すことなくバトルフェイズに突入した修也を見て、翔子は眉をひそめた。

「どういうこと？『ガルドストライク』じゃ『ギガプラント』を超えられないけど？」

「おいおい春山、おまえ自身警戒していたこのカードを忘れたのか？『ガルドストライク』、『ギガプラント』に攻撃！！そして、

攻撃宣言時にトラップカード『心剣一体』発動!!」

『心剣一体』畏カード

修也の発動した『心剣一体』のカードを見て、翔子はしまったという顔をした。

「そうだった……。草薙君が最初のターンから伏せていたカード……。これで『ガルドストライク』の攻撃力は2900……。」

「
翔子がそう呟くと同時に、『ガルドストライク』の攻撃によって『ギガプラント』は破壊され、翔子をダメージが襲った。

「つつ……。」

翔子 LP8000 7500

「よし!!俺は『心剣一体』の効果でカードを1枚ドロー!!そして、リバーズカードを1枚伏せてターン終了だ!!」

「フフ……。流石ね草薙君。1ターンで私の上級モンスター2体を倒すなんて……。私のターン、ドロー!!」

翔子は先ほどの余裕の表情を顔から消し、真剣な表情でカードを引くと手札を一瞥してその中の2枚を手にとった。

「私はカードを2枚伏せて……。ターンエンド。」

「……。なら俺のターン、ドロー!!」

修也はカードを引いて手札に加えると、先ほどと同じようにじつくりと見据えた。

（春山の場にモンスターはいない。だけど問題はあの2枚の伏せカード。ブラフの可能性も歩けど、春山の性格を考えると1枚は確実に攻撃反応型のトラップ……。でもライフ差もかなりまずい……。ここは……。）

修也はしばし考えると、決心したように頷いて手札を1枚手に取った。

「ここは臆さずに攻める！！手札から『XX セイバー ガルゼム』を通常召喚！！」

修也がフィールドに勢い良くカードを置くと、ガゼルをモチーフにした『X セイバー』の1体が姿を現した。と、同時に『心剣一体』は自身のカード効果により効力を失い、『ガルドストライク』の攻撃力が2100に戻った。

『XX セイバー	ガルゼム』	レベル4	地	1400/400
----------	-------	------	---	----------

獣族・効果

フィールド上に存在するこのカードがカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから『X-セイバー』と名のついたモンスター1体を手札に加える。このカードの攻撃力は、自分フィールド上に表側表示で存在する『X-セイバー』と名のついたモンスターの数×200ポイントアップする。

「『ガルゼム』はフィールドの『X セイバー』の数だけ攻撃力を200上げる。よって、自身も含めたその攻撃力は1800！！

行くぜバトル！！『ガルゼム』でプレイヤーにダイレクトアタック
！！」

修也は畏に突っ込む覚悟で『ガルゼム』に攻撃を仕掛けた。攻撃
宣言を受けた『ガルゼム』は自身の武器を振り上げて翔子に迫った。

「くっ……。」

翔子 LP7500 5700

意外にも『ガルゼム』の攻撃は防がれること無く翔子を捕らえ、
そのライフを削った。

「よし！！『ガルドストライク』！！続けてダイレクトアタック
だ！！」

それを見て翔子の場に攻撃反応型のカードが無いと判断した修也
は続けて攻撃宣言した。だが、その瞬間翔子は伏せカードをオープ
ンした。

「その攻撃は通さない！トラップ発動、『次元幽閉』！！」

『次元幽閉』畏カード

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。その攻撃モ
ンスター1体をゲームから除外する。

「悪いけど、『ガルドストライク』はゲームから除外させてもら
うよ。」

翔子のその言葉と同時に、『ガルドストライク』は突然現れた異

次元へと続く裂け目に飲み込まれてしまった。

「く……。『ガルゼム』の攻撃に反応しなかったのは攻撃力の高い『ガードストライク』を狙ったからか……。俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだぜ!!」

「フフ……。そういうこと。さ、私のターン。ドロー!!メインフェイス、『ガード・ヘッジ』を攻撃表示で召喚!!」

翔子がそう言ってフィールドにカードを置くと、竹のような植物で形成されたモンスターが姿を現した。

『ガード・ヘッジ』レベル3 地 0/2100 植物族・効果戦闘ダメージ計算時、このカードを手札から墓地へ送って発動する。自分フィールド上に存在するモンスターはその戦闘では破壊されず、攻撃力はこのターンのエンドフェイス時まで半分になる。

「攻撃力0のモンスターを通常召喚？」

修也が素っ頓狂な声を上げると、翔子はニコリと微笑んで言った。

「焦らないですよ。まだこんなので終わりじゃない。墓地の『スポーア』の効果発動。墓地の植物族を除外することで特殊召喚できる。私は『ダンディライオン』を除外して特殊召喚!!」

翔子が説明すると共にカードをディスクに置くと、再びモフモフの妖精のようなモンスター、『スポーア』が姿を見せた。

「この効果で特殊召喚した『スポーア』のレベルは、除外した植物族モンスターのレベル分上がる。除外した『ダンディライオン』」

のレベルは3……。よって、『スポーア』のレベルは4！」

「合計レベルが7……。シンクロ召喚か！」

翔子の場にそろうた2体のモンスターを見ながら修也が言うと、翔子は含み笑いをしながら頷いて口を開いた。

「そう。私のデッキのエースを紹介するよ。レベル3の『ガード・ヘッジ』にレベル4の『スポーア』をチューニング！！」

翔子がそう叫ぶと、『スポーア』は4つの星の輪になって『ガード・ヘッジ』を包み込んだ。

「孤独なる黒き薔薇よ、今こそ強き意志をもち鮮やかに咲き誇れ！！シンクロ召喚！！現れよ、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！！」

その口上と共に翔子が右腕を上を翳すと、緑色の眩い光の中からその名の通り、黒薔薇をモチーフとした赤黒いドラゴンがゆっくりと翔子のフィールドに舞い降りた。

『ブラック・ローズ・ドラゴン』レベル7 炎 2400/18

00 ドラゴン族・シンクロノ効果

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在するカードを全て破壊する事ができる。1ターンに1度、自分の墓地に存在する植物族モンスター1体をゲームから除外する事で、相手フィールド上に存在する守備表示モンスター1体を攻撃表示にし、このターンのエンドフェイズ時までその攻撃力を0にする。

「これが春山のエースモンスターか……。でも、早々に退場してもらおう!! カウンタートラップ発動!! 『セイバー・ホール』!! このカードは『X セイバー』がフィールドに存在するとき、相手モンスターの召喚、反転召喚、特殊召喚を無効にて破壊できる!! 行けっ!!」

『セイバー・ホール』カウンター罠

自分フィールド上に『X-セイバー』と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合に発動することができる。モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚を無効にし破壊する。

カードが発動すると、突然『ブラック・ローズ・ドラゴン』の足元に大きな裂け目が出来上がり、『ブラック・ローズ・ドラゴン』を飲み込み始めた。だが、それを黙ってみている翔子ではなかった。

「させない!! こちらもカウンタートラップ発動!! 『神の宣告』!!」

『神の宣告』カウンター罠

ライフポイントを半分払う。魔法・罠の発動、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚のどれか1つを無効にし、それを破壊する。

翔子 LP5700 2850

「これで『セイバー・ホール』の効果は無効。よって、『ブラック・ローズ・ドラゴン』の召喚は無効にされない。さあ、このままバトルフェイズに入るわ。『ブラック・ローズ・ドラゴン』、『X セイバー ガルゼム』を攻撃!! ブラック・ローズ・フレア!!」

翔子がそう叫ぶと『ブラック・ローズ・ドラゴン』は主の命に従い、口から黒っぽい炎を敵に向けて勢い良く放射した。『ガルゼム』は両手に持った武器をクロスさせて防御の姿勢を取ったが、勢いに負けて破壊されて修也のライフが削られた。

「くっ……。流石だな!!」

修也 LP1400 600

『ブラック・ローズ・ドラゴン』の攻撃によって削られたライフを見ながら翔子に対してそういった。それを受けた翔子は微笑んで修也を見返した。

「フフ……。そういうことを言っている暇はあるの？貴方のライフは僅か600……。私のライフは2850。それに貴方の場には伏せカードが1枚あるだけ……。私はこのままターンを終了。」

「何言ってるんだ！こんな絶体絶命の状況だからワクワクするんだろ？俺のターンだ！ドロー!!」

修也はそう言い返ししながらデッキに手を掛け、勢い良くカードを引いた。

「来たぜ……。こいつが逆転の一手だ!!」
『XX セイバー レイジグラ』を通常召喚!!」

修也が勢い良くそう言いながらカードをディスクに叩きつけると、カメレオンをモチーフにしたような『X セイバー』が姿を現した。

『XX セイバー レイジグラ』レベル1 地 200/100

0 獣戦士族・効果

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する『X・セイバー』と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

「『X X セイバー レイジグラ』は召喚成功時、墓地の『X セイバー』を手札に加える事が出来る。だが、任意効果だから今は発動しない!!」

「それは良いけど……。それが逆転のカードなの？お世辞にもそのカードで『ブラック・ローズ・ドラゴン』を倒せるとは思えないけど。」

翔子が腕組みをしながら言うと、修也はニヤリと笑った。

「いや……。そうじゃない。通常召喚可能な『X セイバー』

が手札に来るのが重要だったのさ!!リバースカードオープン!!

『ガトムズの緊急指令』!!」

『ガトムズの緊急指令』畏カード

フィールド上に『X・セイバー』と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、自分または相手の墓地に存在する『X・セイバー』と名のついたモンスター2体を選択して発動する。選択したモンスター2体を墓地から自分フィールド上に特殊召喚する。

「『ガトムズの緊急指令』?そのための……。」

「そうだ……。!!このカードの効果により、2体の『X セイバー』を蘇生できる。来い!!」『X X セイバー フラムナイト』、
『X X セイバー エマーズブレイド』!!」

修也が翔子に言い返すと共にそう叫ぶと、2体の『X セイバー』が再びフィールドにその姿を現した。

「さらに……。フィールドに『X セイバー』が2体以上存在するとき、このカードは手札から特殊召喚出来る。『XX セイバー フォルトローラー』を特殊召喚！！」

修也がそう言いとともに、自分の身の丈ほどの巨大な大剣を持った『X セイバー』が姿を現した。

『XX セイバー フォルトローラー』レベル6 地 2400 / 1800 獣戦士族 / 効果

このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に『X - セイバー』と名のついたモンスターが表側表示で2体以上存在する場合のみ特殊召喚する事ができる。1ターンに1度、自分の墓地に存在するレベル4以下の『X - セイバー』と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

「そして『フォルトローラー』の効果！！1ターンに1度、墓地の『X セイバー』を特殊召喚できる！！『ガラハド』を特殊召喚！！」

修也がそういうと『フォルトローラー』は剣で地面を叩き、そこから墓地にいた仮面の『X セイバー』、『ガラハド』を蘇生させた。

『X セイバー ガラハド』レベル4 地 1800 / 800
戦士族・効果

「1ターンに一気に5体のモンスターをそろえるとは、流石だ修

也……。」

陸が修也の場に並んだ『X セイバー』を見ながら呟いた。

「まだ終わらないぜ！！レベル3の『エマーズブレイド』に、同じくレベル3の『フラムナイト』をチューニング！！」

修也が叫ぶと『フラムナイト』は緑色の3つの星の輪になり、『エマーズブレイド』を包み込んだ。

「大いなる自然の恵みよ、今龍の姿をとってその力を示せ！シンクク召喚、『ナチュラル・パルキオン』！！」

修也の口上が終わると共に緑色の光が辺りを強く照らし、その中から日本古来の龍の姿をしたドラゴンが姿を現した。

『ナチュラル・パルキオン』レベル6 地 2500/1800

ドラゴン族・シンククノ効果

「まさか……。モンスター0の状態からここまで展開してくるなんて……。」

「へへっ、まあ油断するなっ事だな！！これで『ブラック・ローズ・ドラゴン』を戦闘破壊できるぜ！！バトルフェイズ、『ナチュラル・パルキオン』で『ブラック・ローズ・ドラゴン』を攻撃！！エナジーブラスト！！」

修也が命令すると、『ナチュラル・パルキオン』は口から白いエネルギー弾を『ブラック・ローズ・ドラゴン』に向けて発射した。『ブラック・ローズ・ドラゴン』はそれによって破壊され、翔子は超過

ダメージを受けた。

「そんな……。」

翔子 LP 2850 2750

「よつしゃあ！！これで伏せカードも無い……。『ガラハド』と『フォルトロール』で連続でダイレクトアタックだ！！」

修也がそう命令して翔子を指差すと、2体のモンスターは各々の武器を構えなおして翔子に切りかかった。翔子には防ぐ術は無いらしく、ライフは連続して削られ、一気に0になった。

「く……。流石ね！！」

翔子 LP 2750 950 0

翔子のライフポイントゲージが0を指すと同時に、ソリッドビジュンで形成されていたモンスターたちが姿を消した。それを確認した修也は、思い切りガッツポーズをした。

「よつし！！やったぜ！！これで俺も科学部員だ！！」

「ああ、そうだな。少し危ないところもあつたが見事だつたぞ。」

陸は子供のように喜ぶ修也を見ながらそう言って、デュエルディスクを格納した翔子のほうに近づいた。

「どうだ春山？俺の伝えた通り、修也は質力者だろう？」

「ええ……。本当にすごい運の強さ。まさかあそこから大逆転を食らうとは思わなかったよ。」

翔子がため息をつきながらそう言つと、修也はニカツと笑って見せた。

「へへっ……。昔から運だけは強いんだ。それにしても楽しいデユエルだったぜ!!」

「うん。私も楽しかった。それと、改めてこれからよろしくね。草薙君。」

修也が照れながらそう言つと、翔子はニッコリと笑い返してそう返した。と、その時突然科学部室の扉が開いた。

「ういゝつす。終わったど。そっちもすんだみたいだな。」

間延びした声と共に、光彦が科学部室の入り口に立っていた。どうやら孝雄のほうも試験が終わつたらしい。光彦の後ろに孝雄の姿を確認した修也はすぐさま孝雄に駆け寄った。

「おっ、孝雄!! どうだった?」

修也が口頭一番そう聞くと、孝雄はニヤツとして親指を上突き上げた。

「ああ!! 何とか勝ったぜ!! 少し危なかったけどな……。お前も勝つたみたいだな!! これで二人とも晴れて科学部員だ!!」

孝雄はそう言つてうれしそうに修也と肩をがっしりと組んだ。そ

のうれしそうな様子を見ていた翔子はクスリと笑って口を開いた。

「これで志願者全員合格ね。じゃあ、今日はもう解散ね。本格的な活動は明日から。と、言っても基本は遊びで科学の勉強したりするのは一週間に2、3日だけど。」

「そ〜そ〜。基本は遊びさね。ま、一応毎日科学の教科書は持つてきといてくれ。じゃ、鍵は我々が閉めておくから安心して大丈夫だぜ。」

翔子と光彦がそれぞれそういうのを聞いた修也、陸、孝雄は各々鞆を持つと立ち上がった。

「そうか・・・なら任せよう。俺たちは先に上がる。では、また明日な。」

陸がそう言ってドアのほうに向かうと、修也と孝雄もその後続いた。

「じゃあ、先にかかるぜ。また明日な！！二人とも！！」

「光彦！！今日はギリギリだったけど、明日からは圧勝してやるからな！！ま、お前ももう負けないように頑張れよ！！じゃ、また明日な！！」

修也と孝雄の言葉を最後に、旧科学室の扉はピシリと閉められた。3人の背中を見送った翔子と光彦は、互いに顔を見合わせた。

「・・・だよ。調子良いよな全く。」

光彦はそう口を開き、呆れたように肩をすくめると机に寄りかかった。それを見た翔子はポケットから旧科学室の鍵を取り出すと、鞆にデュエルディスクをしまつと光彦の顔を見た。

「実際どうだったの？孝雄君の強さは？」

「あゝ・・・がっかりするなよ？」

光彦はそう前置きすると、自分の鞆を引っ張ってきてその中にデュエルディスクを突っ込み、後を続けた。

「正直相当危ないレベルだな。俺はかなり手加減したが、それでも結構追い込めたぜ。そっちは？」

光彦が聞き返すと、翔子は薄っすらと微笑んで言った。

「フフ・・・少し驚かされたかな。草薙君の運の強さに。でも安心して？ちゃんど手加減したから。最後は手札に『トラゴエディア』を持ってたし、『聖なるバリア』もあつたけど伏せなかったよ。」

「ふうん。そうか？ま・・・お前の目標が達成できればそれで良いんだけど。そっいや、そっちのほうの報告を最近受けていないが、大丈夫か？」

光彦が神妙な顔で言うと、翔子も同じようにフツと暗い顔をした。

「そっちはね・・・まだ分からない。なんせ、姉さんは強いから。今のままだと、まずいかも。でも・・・諦めない。」

「いい答えだぜ……。ま、俺は大歓迎だけどな。異様に権限持ちすぎてる風紀委員ぶつ潰せるだけでもワクワクテカテカしてるぜ。」

光彦はそう返してフツと笑って見せると、翔子のほうを見た。

「さ、我々も帰るか。明日もあるしさ。俺は帰ってからゆっくりとデッキを調整するわ。」

「フフ……。そうね。今日は私達も早めに帰りましょう。でも、私はもう少しここにいます。じゃあね。」

「おう、んじゃ。鍵は任せませ。」

短い会話を交わした後、光彦は旧科学室を出て扉を閉めた。そうして、本日の科学部の謎に包まれた活動は終了した。

夕刻、激しく扉をたたく音で空雅は目を覚ました。あたりを見渡すですすで日は翳っており、部屋を照らするくな明かりといえは目の前のパソコンのディスプレイの明かりだけだった。

「ん……、しまった。研究資料をまとめているうちに眠ってしまったか……。」

空雅はそう呟きながらパソコンのディスプレイの左下に小さく表示された18:36という時刻に目をやりながら、訪問者を迎え入れるためにドアへと向かった。

「はい。どうぞ。」

「空雅様……。失礼いたします。」

空雅がそう呟きながらドアのほうを向くと同時に、空雅に仕えている古い師の老婆、マリア・アルフォートが慌てた様子で部屋に入ってきた。

「やあ、マリアか。どうしたんだい？そんなに慌てて。」

空雅が椅子にもたれかかりながらやんわりと言つと、マリアは急いで空雅の前に跪いて切羽詰った様子で口を開いた。

「空雅様……!!早急にお伝えしたいことが……。!!遂に見つけたのです!先ほど我が水晶玉に写りし最初の『六星団』の姿を!」

「っ……!!なんだって……。。」

空雅はマリアの言葉を聞くと、衝撃を受けたような表情をして椅子から立ち上がった。

「ククク……。クハハハ……。そうか、見つけたか……。」

。『六星団』を！！」

「はつ……。左様にございます。その者は常盤高校に通っている一年生で、草薙修也という名だそうですね……。」

マリアがそう空雅に返すと、空雅はいきなり顔を抑えて堪えきれないように笑い出した。

「ハハハハハハ！！そうか！！見つけたか！！ついに一人目を！！それも僕の母校、常盤高校に！！クハハハハハ！！何たる偶然だ！！僕はつい先週、常盤高校から特別講演の講師を依頼されたばかりだというのに……。！！素晴らしい！！天は……。神は我々に味方している！！マリア！！そうは思わないかい！？」

「はつ……。全く持ってその通り。常盤高校にて最初の一人が発見されたという事実は、我々にとってもはや偶然ではないことだと存じます。」

マリアが従順にそう返すと、空雅は笑うのをやめてさも満足げに微笑んだ。

「そうだろうマリア……。もはや偶然では無い！！講演の最後には生徒一人とデュエルして欲しいと依頼されている。ククク……。神は言っている！！明日の講演で、最初の『六星団』、草薙修也と戦えと！！！」

空雅が得意げにそういうと、マリアは身に纏っているフードの下で眉をひそめた。

「お言葉ですが……。デュエルを依頼されたとは？もしかとは

思いますが、強引に事を運ばれたのでは無いでしょうか？」

「フフ……。違うよマリア。向こうから依頼してきたんだから。常盤高校は、プロデュエリストの育成にも力を入れているからね。元プロデュエリスト志望者だった僕にデュエルして欲しいと依頼があったのさ。」

空雅がそういうと、マリアは納得したように頷いた。

「そうでございますか……。失礼な質問をして申し訳ありませんでした。では、私は少し休ませていただきます。占いに力を使いすぎて少々疲れました……。」

マリアが軽く頭を下げながらそういうと、対する空雅は優しく微笑んだ。

「ああ、そうしてくれて構わないよ。僕は研究資料を纏めるよ……。ああ、体力が回復したら僕に一度その『六星団』の顔を見せてくれないかな？デュエルの相手は僕が指名することになっているからね……。。」

「承知いたしました……。では、私はそろそろ失礼いたします。」

マリアはそういうと、空雅にもう一度深く頭を下げた後、部屋を出て行った。その後姿を確認すると、空雅は椅子に坐りなおしてパソコンのほうに向かい直った。

「ククク……。さあ、今日から忙しくなりそうだな。我々『六星』の活動も……。本格的になるのだから……。!!！」

空雅は一人でパソコンのほうにそう眩き、整った顔に邪悪な笑みを貼り付けた。

第4話 動き出す影！！vs時戸空雅 前編（前書き）

長いので前編、後編に分けます。

第4話 動き出す影！！vs時戸空雅 前編

「うつっしゃー！！昼飯だぜ！」

4時限目が終わり、昼休みを告げるチャイムが鳴り響く中、そのチャイムに混じって無駄に大きい声が教室に響き渡った。

大半の生徒は弁当を広げたり、各々の友人と談笑するのに夢中でその声に反応しなかったが、ただ一人長髪的美男子だけが反応し、教科書で声の主を叩いた。

「うるさいぞ。少し静かにしろ。」

呆れたようにそう言い長い髪の生徒、墨染陸が声の主を叩くために使ったらしい教科書を自分の机に放り投げた。絶妙な力加減で飛ばされた教科書は陸の机に着地し、床に落ちることなくその場に止まった。

「痛てえな……。コンニャロ……。そんなにうるさいか？」

陸を睨みながら頭をさすり、そう弁解したのは先ほどの大声の主であり、陸の友人でもある吉良孝雄だ。

「ああ、結構響いてたな。」

そんな二人の親友の様子を和やかな目で見ながら、先ほど弁当を持って孝雄のところに行って来たらしい草薙修也がそう返すと、孝雄はバツが悪そうに顔を伏せた。

「だってよ……。苦手な数学の授業が終わった喜びと昼休みが始まった喜びが一緒くたにやってきたんだ……。叫ばずにはいられなかったんだよ。」

「ハハハ……。まあ、その気持ちも分からなくは無いけどさ。」

孝雄が弁解するように言うのに対し、修也はそう返して近くの空いている席から適当に椅子を引つ張り出してくると孝雄の右手に坐った。

「フ……。まあ、それがお前らしいんだけどな。」

陸もそう言って孝雄の席の左手、窓際に寄りかかると窓の棧にコンビニの袋を置き、その中から菓子パンを取り出して封を切った。

「はははっ。そうか。さあ、じゃあ昼飯と行こうぜ！！」

孝雄がそう言って、鞆から弁当箱を取り出して広げた時だった。

「のうのうと飯を食べる……。と思っていたのかー！！」

すさまじい大声とともに、孝雄の弁当箱に雷が落ちた。突然の出来事に、修也と孝雄は驚いて飛びずさり、陸は少し目を細めた。

「ハハハハハ！！驚いたか！！これが科学部流昼食会の余興だぜ！！」

孝雄の背後から突然聞こえてきた声に三人が振り向くと、そこにはデュエルディスクを構えた科学部副部長、志水光彦が立っていた。

どうやら先ほどの雷撃は光彦がソリッドビジョンで出したものらしい。派手な登場の仕方に修也が啞然としていると、光彦の背後から新たに科学部部长、春山翔子が姿を見せた。

「あのね志水君、そんな余興作った覚えは無いんだけど。悪ふざけは自重したら？」

翔子がそうたしなめると、光彦はハイハイと適当に頷いてデュエルディスクを格納した。格納しただけで、食事中もしまうつもりは無いらしい。その様子を見て、会話中も黙々と菓子パンを頬張っていた陸がパンを飲み込んで口を開いた。

「光彦と春山か……。光彦は4組、春山は3組だろ？何か用か？光彦はともかく、春山は同じクラスに昼飯を食う友人がいないとは考えられないんだが。」

「あんだってー？俺だっていつも飯食ってる友達くらいいるっての。今日は特別さ。春山が、科学部も正式に発足したことから今日だけ二人で6組に来ようって提案したのさ。」

陸の冷たい言葉にそう返し、光彦はためらうことなく孝雄の正面の席を陣取って弁当箱を置いた。

「そういうこと。ま、こついうのも悪くないでしょ？」

翔子もそう言い、陸の隣にスペースを作ってもらってそこに適当な椅子を押し込むとそこに坐って弁当を置いて開き始めた。孝雄の席はたちまち五人の科学部員達でぎゅうぎゅう積みになった。

「ま……。確かにな。でも、それなら科学部室で食っても良い

んじゃないかな？ここだと少し狭いしさ。」

修也が厚焼き卵を口に運びながら言うと、孝雄もパックのコーヒ―牛乳を飲みながら同意するように頷いた。

「ああ。そうだな。光彦が坐っている席だつて昨日は他の奴が使っていたしさ。」

「そーなのかー？ま、今日は俺のほうが速かったから大丈夫だろ？」

光彦はそう返しながらデュエルディスクからデッキを、ブレザーのポケットからカードの束を取り出すとデッキの調整を始めた。

「あれ・・・？光彦飯食わないのか？」

その様子を見て不思議そうな顔を浮かべた孝雄が光彦にそういうと、光彦は親指をグツと上に突き上げてニカツと笑った。

「聞いて驚くなよ？実は3時間目終わった後に腹減ったから食ったんだぜ。建前上弁当箱だけ持ってきたけどな。」

「は？それじゃあ科学部みんなで飯食うとか言ってたのは？」

修也が呆れたような声を上げると、光彦は申し訳ないような様子で肩をすくめた。

「だって・・・。春山が来たのはさっきなんだぜ？だから、せめてデッキの調整をここでしようと思つてな。ほら、次の時間に向けて。」

光彦はそう言うと、得意げな様子でデュエルディスクを構えて見せた。それを見た陸は、納得したようにああと声を上げた。

「ん？ああ。5時限目の講演会で行われるデュエルか？」

陸がそう言うと、光彦はその通りというふうに頷いて見せた。すると翔子がいきなり口に手を当てて笑い始めた。

「何だよ春山？俺なんかおかしい事言ったか？」

「あはははは！！だって特別デュエルは何回もやるわけじゃないんだよ？選ばれるのは一人だけ。なのに次の時間に向けての調整っておかしくない？」

「なっ……。別にいいだろ？あくまで調整だけなんだし。」

光彦が翔子にそう返すと、陸が食べ終わった菓子パンの袋をビニール袋にしまいながら頷いた。

「まあ、光彦の言うことにも一理あるな。講師は時戸空雅とか言っただな……。出来ることなら俺も戦ってみたい。」

「へえ。珍しいな。陸が乗り気なんて。」

修也が箸で鮭の切り身をつまみながらからかう様に言うと、陸は至ってまじめな顔をして頷いて見せた。

「

といつても別の意味でだけだな。数年前、奴が帰国したときの記事がたまたま家……。というか部屋にあったから少し目を通したが・

。。どうにも何かが怪しいんだよな。。。」

陸はそう言うと、袋の中からパックのミルクティーを取り出し、付属のストローを慎重に差し込むとゆっくりと一口飲んだ。

「簡単に言うと、時戸空雅はこの常盤高校でプロデュエリストとしての知識を叩きこまれたんだ、そのあと本格的にデュエルを学ぶため、18歳で単身アメリカに渡った。ここまでは別に良い。」

陸はそう言うと、一回言葉を切った。

「だが・・・その6年後、奴はプロデュエリストとしてではなく、脳科学者として日本に戻ってきた。」

「ほお。で、それが？」

陸の言葉に孝雄がそう適当に相槌を打つと、陸は話を一度中断して孝雄を冷たい目で見つめた。孝雄は陸の冷たい視線を受け、慌てて弁解した。

「いやだってさ、人間は人生に1回や2回転機が訪れるもんじゃないの？アメリカに渡った後に、脳化学者に憧れたとかさ。」

孝雄がそう言うと、傍らでその話を聞いていた光彦が顎に手を当てて首をひねった。

「たとえそうでも、方向性が違いすぎるんだぜ。しかも、高校時代プロデュエリストを目指して必死こいて勉強してたのに、積み重ねてきたその努力を全てブツパするほど脳化学者ってのは魅力的だったかよ？」

「ああ、こいつが正論だ。」

光彦の意見を聞いた陸はにわかにつれしそうにそう言って、もう1口ミルクティーを飲んだ。

「地元でもかなり有名になったらしい。何せ、常盤市で初のプロデュエリスト誕生になるかもしれないんだからな。奴が常盤市に帰ってきて、研究所を作った時は誰もがキツネにつままれた気分だったそうだ。」

「驚いたわね。彼は確かまだ30歳にもなっていないでしょう？」

翔子が言うと、陸は頷いてその後を続けた。

「ああ、確かアメリカから帰国した時は24歳。今は27歳だったはずだ。」

陸はそこまで言うと、ミルクティーを一気に飲み干して綺麗にたむと足元に置いてあった鞆からデュエルディスクを取り出した。

「さてと、腹も膨れた。もし対戦相手に選ばれたときのために、そろそろ本格的に奴を潰すための調整と行こう。講堂に行くか？光彦？」

陸がそう言うと、光彦は頷いて勢いよく立ちあがった。

「あ、ちよっとタンマ。」

二人が教室の出口に向かおうとしたとき、ふとあることが気にな

った修也はあわてて二人を呼び止めた。二人は振り返ると、問いかけるような目で修也を見た。

「1つ聞くけどさ。何処でそんな情報仕入れてきたんだ？」

そう言われた陸はしばらく言うか否か考えているようだったが、僅かな間の後溜め息をつくところ答えた。

「姫香さんだ。」

「ああ、なるほど。」

その一言で修也は納得した。彼の言う姫香さんと言うのは、陸の家に居候している女性で、とある雑誌社でルポライターをしているらしい。書く記事の分野は事件記事から観光地のレポートまでと広いらしく、陸は修也達と交流を持って以来いろんな情報を持ってきては話してくれた。

「では、俺たちは先に行くからな。」

陸はそう言い残すと、光彦を伴って去って行った。

「うーん、あいつがああ言うんじゃ本当だろうな。てか……、陸の練習相手なら俺のほうが適任なんじゃないか？俺は光彦より強いんだし……。」

二人が行ってしまつと、孝雄が修也と翔子にだけ聞こえる声で呟いた。すると、それを聞いていた翔子は僅かに眉をひそめた。

「そうね……。時戸さんはいろいろ分からない人だし。墨染君

の練習相手については私は志水君で良いと思うけど。」

翔子はそういうと、孝雄が何か言い返したそうにしているのを無視して修也のほうに向き直った。

「それでも・・・草薙君は手を上げるんでしょう？もちろん吉良君も。」

翔子の問いに対して、2人は同時に頷いた。

「当たり前さ、何にしても元はプロデュエリストを目指してたんだろ？一度は戦ってみたいさ。」

修也が言つと、孝雄も賛同するように頷いた。

「だな。俺の実力が何処まで通じるか試したいし！！」

孝雄はそう言つと、空になった弁当箱を布に包みなおし、鞆の中にしまうと代わりにデュエルディスクを取り出した。

「さ、俺たちも行くぞ。」

孝雄が言つと、もう一切れのサンドウィッチに手を伸ばしていた翔子がやれやれという顔をした。

「何言ってるの？まだ草薙君も私も食べているのよ？」

「ははっ・・・そうだったな。悪い悪い。」

そう言つて孝雄は笑ったが、修也はそれをほとんど聞いていなか

った。さきほどから、陸の言っていた事が気にかかったのだ。それは、時戸空雅が科学者ということであった。

自分の杞憂だと思いたかったが、どうしても『ガトムズ』から聞いた話が引つかかってしまい、時戸空雅が精霊界との歪を作った科学者では無いかと思っていたのだ。

(歪を作った人間……。もしあいつが普通でない科学者なら……。)

修也はそんな事を心配していたが、そんな不安要素をよそに時間はどんどん過ぎて行くのであった。

その15分後、講演の開始10分前に修也達三人は講堂に来ていた。すでに全校生徒はほとんど集まっているらしく、講堂には人があふれていた。全校生徒のほとんどがやはり空雅と戦いたいらしく、何組かが練習としてデュエルをしており、残りの生徒は見物に回っていた。

修也達は、その中から陸と光彦がデュエルしているところを苦勞

して見つけ出すとその方向に歩いていった。近くまで来ると、野次馬の向こう側から陸と光彦の声が聞こえてきた。

「『アーマード・ウィング』の効果発動!! 楔カウンターを取り除き、貴様の『ロード・ウォリアー』の攻守を0にする!! そしてそのままバトルフェイズ!! 『アーマード・ウィング』で『ロード・ウォリアー』を攻撃!! ブラック・ハリケーン!!」

「馬鹿な……。この俺が……。この俺がああああ!!!」

陸と光彦のデュエルは今丁度勝負がついた頃らしく、光彦の絶叫する声が響くと同時にバトルを見物していた野次馬の群れから歓声や口笛の声が上がりはじめた。そんな野次馬を書き分け、陸と光彦は野次馬の群れの外へと抜け出してきた。そして修也達を見つけるとこちらに向かつて歩いてきた。

「よお、来たな。」

陸はそう言つて修也達三人を見渡し、後ろの光彦はチャッと右腕を上に向けて見せた。

「ああ。調子はどうだ？」

孝雄がからかう様に言うと、陸は腕組みをして得意げに鼻を鳴らした。

「ああ、快調なことこの上ない。さつきも光彦相手に快勝だ。」

「なにおう？俺がぼろ負けしたみたいに言いやがって……。俺だって惜しかったんだぜ？『カルート』アタックでマイエースが潰

されなければ・・・。」

光彦が悔しげに握りこぶしを作りながら言うと、それを見た陸は光彦のほうを向いてうすら笑いを浮かべた。

「無駄だ光彦、敗者が何を言っても負け犬の遠吠えにしか聞こえないぞ。」

「なぬっ？！何ならワンモアデュエツ！！してみるか？」

光彦はそう言ってデュエルディスクを構えなおしたが、タイミン
グが悪くその瞬間に昼休み終了のチャイムが講堂に鳴り響いた。そ
して続けて、講堂のスピーカーから校長先生の声が響いてきた。

「全校生徒に連絡します。後5分で講演会が開始となりますので、
全校生徒は講堂に集まり、整列してください。」

その放送が終わると、デュエルをしていた生徒はしびしびとデュ
エルを中断し、野次馬もそれぞれのクラス場所に集まり始めた。
その様子を見ていた光彦も、周りの生徒の様子を見て残念そうにデ
ュエルディスクを収めた。

「さ、私たちも並びましょう？」

それを見た翔子を取り繕うようにそう言うと、修也達4人は頷い
て各々のクラス場所に散っていった。別に並ぶ順番などは決めら
れていなかったたので、修也、陸、孝雄の3人は既に集まっていた6
組の生徒達の裏に固まって坐った。

「さあ、いよいよだな！！！」

床に腰を下ろすと、修也が落ち着かない様子で二人にそう言った。それを聞いた陸は呆れたような声で呟いた。

「全く……落ち着きが無いな。そんなに楽しみなのか？時戸の講演が……」

「いや……。講演は正直どうでもいいんだ……。俺は、時戸さんとデュエルしてみたいんだ!!」

修也が自信満々にそう言うのを聞いて、陸はため息をついてやれやれというように首を振った。

「やれやれ……。まあそれでこそお前らしいんだけどな……」

陸は修也に向かってそう言うと、ブレザーのポケットから小ぶりの文庫本を取り出した。修也にああ言ったものの、陸も講演のほうを聞くつもりは毛頭ないらしい。それを見た孝雄は呆れたような仕事をした。

「人の事いえないじゃねえかお前も……」

「フン。何とでも言え。」

陸は淡々と返すと早速栞の挟んであるページを選び出し、その文章を読むのに集中し始めた。

「ったく……。こっちもこっちでお前らしいな……」

孝雄は先ほどの陸と同じようにため息をつくど、

そうこうして談笑していると、あっという間に5分はすぎ、前の方に出ていた教職員の1人がマイクを握った。

「静粛に。これより講演会を開始する。全校生徒、しっかりと聞くように。では、講師の時戸空雅先生。よろしくお願いします。」

教師はそう言って拍手をした。それにつられて生徒も拍手をした。そして、それと同時に1段高くなったステージの横から、ダークグレーのスーツを着た男が出てきた。

「あいつが時戸空雅か……。」

本に集中していたはずの陸は教職員の声を聴くと、ふと文庫本から目を上げると空雅を見て呟いた。

その陸の声を聞いた修也は、目を細めて男を見た。

遠目で見て、その男はハンサムだと思った。脳科学者と聞いたので、もっと固そうなイメージを持っていたが、それを覆すかのようだった。

整った顔立ちに、目のあたりに優雅にかかる前髪。先ほどから聞こえてくる女生徒達のささやきの理由も分かった。

空雅はマイクのところまで来ると、生徒に向かって軽く会釈した。

それから生徒全員を見渡した。一瞬修也に目をとめたような気もしたが、修也の気のせいだろう。

「みなさん。こんにちは。」

落ち着いた声が、マイクで拡張されて講堂に響いた。その挨拶に對して女子はしっかりと、男子はまばらに返事を返した。

「ち……。イケメンにはつか媚を売りやがって……。。」

挨拶の声に混じって、孝雄が隣でそう呟くのが聞こえた。どうやら孝雄も遠目で空雅がハンサムだと思っただろう。修也は孝雄のほうを向いて軽く笑って見せ、まだ続いている空雅の講演に耳を傾けた。

「先ほどご紹介させていただいた時戸空雅です。私は皆さんと同じ年のころ、今ここに坐っている皆さんのようにこの常盤高校で勉学に励んでいました。今は、この市内に研究所を立て、日夜研究に励んでいるのですがこの高校に居たころはプロデュエリストを志して勉強していました。」

こんな感じで話は始まった。陸が仕入れてきた情報通り、昔はプロデュエリストを目指していたらしかった。

話の内容は、空雅が高校を卒業してからの生い立ちみたいな感じだった。どうやら、卒業後はアメリカの大学でプロデュエリストになるための勉強を続けたらしいが、個人的な勉強の一環でアメリカの脳科学研究所を訪れた際、脳の神秘に衝撃を受けてから、彼の人生は変わったらしい。

それ以降は周囲に多少無理を言って大学を変え、脳科学の分野を専攻してきたらしい。そして驚いたことに入学して初めてのテストで学年トップを取り、そのときに故郷に研究所を立てようと決意し

たらしい。

そして話の内容から察すると、アメリカでプロデュエリストの勉強をしていたのは半年足らずらしい。つまり、残りは全て脳科学の勉強に精を出したということになるが、それでも入学して初めてのテストで学年トップを取り、帰国直後に自身が所長を勤める研究所を設立できるほどの設備と人材が集まるという事は、やはり空雅は天才であり、なおかつ高いカリスマの持ち主らしい。

講演会に予定されていた1時間半のうち、講演は1時間ほど続いた。そして話の最後に空雅は最後にこう言って締めた。

「大切なのは、夢を持つ事です。皆さんも将来、自分の進路に悩む事があるでしょう。そう言う時は夢を見つけてください。私にも、いまだ実現したいと思う夢があります。その夢があるからこそ、今の自分があるのですから。では、これで講演を終了させていただきます。御清聴、ありがとうございました。」

空雅がそう言って一礼すると、主に教職員と女子生徒から割れんばかりの拍手が空雅に送られた。空雅はこんなことになれていないのか、盛大な拍手を受けて照れたように笑っていた。

「ん〜……。まあ、全体的にいい講演だったんじゃないか？」

自身もゆっくりとした動作で空雅に拍手をしながら、孝雄が修也と陸に向かっていった。それを受けた陸は文庫本に頬を挟み、元通りポケットにしまうとフンと鼻を鳴らした。

「どうだか……。口からなら何でもいえるさ。」

陸は冷たくそう言うのと、講演が始まるときに外して傍らに置いてあったデュエルディスクを取り上げ、腕に装着した。

「なににせよ……。俺はデュエルできればそれで良い。元プロデュエリスト志望者、当時は常盤市初のプロデュエリストになると噂された奴の実力を知っておきたいのでな……。」

「ああ……。俺も楽しみだ!!」

陸が呟くのを聞き、修也もそう返しながらデュエルディスクを左腕に装着して空雅のほうを見た。すると、教師が待ちわびていた台詞を発した。

「時戸先生、ありがとうございます。では、今よりかねてより予定していた時戸先生と生徒による特別デュエルを行います。希望者は手を上げてください。」

教師がそう言い放つと同時に修也、孝雄、陸の三人は周りの生徒に混じって素早く手を上げた。それと同時に修也があたりを見渡すと、予測通り全生徒の8割は手を挙げていた。辺りを良く見ると、やはりというべきか翔子と光彦もそれぞれの組の場所で高々と手を掲げていた。

「うわ……。結構いるな……。これじゃきついかな?」

「ふん、分からないだろ。」

孝雄が不安げにあたりを見渡しながらそういうのを聞いて、陸がぶつきらばうにそう言って返した。そんな二人を尻目に修也がふと空雅を見ると、空雅はマイクを持って講堂を見渡しているところだ

った。

修也が目線を追っていると、空雅は3年生のところから2年生の場所へと目を移し、それから修也達1年生のところに視線を向けた。そしてその瞬間、空雅と修也は完全に目があった。

「えーと、じゃあその……。後ろのほうの子で。」

突然空雅はそう言って、右手で生徒の1人を指差した。空雅がそういった直後に、

その指の指す方向を見ようと全校生徒がその方向に目を向けた。

「え？」

他の生徒と同じように空雅の指差す方向を確認した孝雄が素っ頓狂な声を上げた。空雅が指名したのは、他でもない修也であった。

「え？俺？」

空雅に指差された本人である修也は、事実を確認するように自分の顔を指差しながら信じられないという表情をした。

「はい。君ですよ。」

その声が聞こえたのか、空雅が修也の方に一歩踏み出しながらマイクで拡張された声で言った。

「な、なんだってー！」

一年四組が坐っている方で、光彦の驚愕した声が修也にも聞こえ

てきた。修也も驚愕で目を見開き、この大勢の中から選ばれたという事実には思わずポカンとした。

「選ばれた生徒は、前に出てきてください。」

マイクを握る教師が落ち着いた声で言うと、未だボーっとしている修也の肩を孝雄がポンとたたいた。

「何ぼさつとしてんだよ！ほら、選ばれたんだから行って来いって！！頑張れよ！！」

「ふむ、選ばれなかったのは残念だが……。仕方ないな。まあ良かったじゃないか。己の全力を出してぶつかって来い。修也。」

孝雄と陸からそう言葉をかけられた修也はハツとして立ち上がると、そのまま急ぎ足で講堂を歩き、全校生徒の視線やひそひそ話に耐えながら壇上へと上がった。

「さて……。こんにちは。」

修也が壇上になると、時戸空雅が微笑んで挨拶した。近くで見ると、よりいっそうハンサムだが、少し疲れたような表情をしていた。そんな事を思いながら、修也も挨拶を返した。

「ええと……。それじゃあまず学年と名前を教えてくださいかな？」

空雅は修也にマイクを向け、そう聞いた。いきなりマイクを向けられ修也は、慌てながらも

「修也です。草薙修也。1年生です。」

と答えて見せた。いきなりの事に緊張して口の中がカラカラだ。修也の自己紹介を聞いた空雅はマイクを離すと頷いて見せた。

「そうか・・・君が・・・」

そして空雅は目を細めてうれしそうに言った。何故嬉しそうなのかは、修也にはまったくと言って良いほど分からなかった。数十分前までの修也なら気付いていたかもしれないが、余りの緊張で昼休みの杞憂がとつくに消えている修也に気付けるはずが無かった。

「対戦する生徒は決まりましたね。それでは、両者準備を始めてください。」

不意に教師の声が聞こえた。その声で空雅は持参したカバンからデュエルディスクを取り出すと、慣れた動作で腕に装着した。

修也も、教師の何人かが講演に使った大きな机を片付けるのを横目で見ながらソリッドビジョンを展開させるための距離をとるために、空雅に背を向けて歩き出した。その時だった。

『修也・・・。』

突然修也の耳に声が響いた。もう何回か話しかけられていたため、さすがに飛び上がりはしなかったものの、少しびくりとした。

「何だよ・・・。学校では出てこないって約束だろ？」

修也は準備をしている教師達や対戦相手の空雅に聞こえないように、極力小さな声で言った。

今、修也に話しかけたのは言うまでも無くデュエルモンスターの精霊で、昨日から修也の元に来ている『総剣指令ガトムズ』だ。

『ああ、済まない。だが、1つだけ気付いた事が……。いや、警告がある。』

「え？」

修也は『ガトムズ』に対してそう言うてから、昼休みの杞憂の事を思い出して思わずゾクツとした。

『ああ、大したことではないのだが……。奴から若干精霊の気配が感じられるのだ。』

淡々と言う、『ガトムズ』に対し、修也は思わず声が大きくなるのを抑えながら言った。

「それって、あの人がやっぱり『精霊界』に現れた人間だったのか？」

修也は不安げにそう言った。若干の精霊力と言ったが、『六星団』のペンダントを付けているはずの修也には感じ取ることができなかった。

『否、そうとは限らない。もしかしたら、我々と同じ『六星団』の1員かもしれん。だが、そうでなかった場合のために、一応用心するのだ。デュエルが終わるまで、自分が『六星団』だとばれないようにしてくれ。』

「どうすればいいんだ？」

修也は歩みをとめた、もう距離は十分取れていた。

『何、難しい事ではない。精霊として認識されているカード。つまり、私のカード奴の目に入らないようにすれば良い。私のカードは若干ながら『精霊』の力を纏っている。奴が黒幕だとすれば・・・私のカードを見られただけで見破られてしまうからな。』

「そうか。分かった。」

修也がそう言うと、『ガトムズ』は、気配を消した。おそらくカードに戻ったのであろう。修也はそれを確認すると、空雅のほうに向き直ってデュエルディスクを起動した。

「準備は良いですか？」

それを見た空雅がそう言った。空雅の方はもう既にデュエルディスクを起動し、デッキをシャッフルしていた。

「はい、大丈夫です。」

修也はそう言うと、デッキを軽くシャッフルしてデュエルディスクに取り付けた。それを見た空雅も、デッキをデュエルディスクに取り付けた。

「では、お互いの準備が整ったようなので、デュエルを開始したいと思います。」

審判を勤めるらしい、修也と空雅が距離をとっている真ん中辺り

に立った教師が落ち着きはらって言った。生徒たちのざわざわが少し大きくなった。

「始まるな。」

その教師の声を聴いた陸が、壇上で互いに向き合っている修也と空雅を見ながら呟いた。

「ああ。」

孝雄も二人の姿に目をやりながらそう返した。そして間もなく、審判の教師が右手を突き上げてお決まりの台詞を叫んだ。

「デュエル開始!!」

その声と同時に生徒のヒートアップする声が講堂に響き渡り、それを開戦のゴングとするかのように修也のデュエルディスクのランプが点灯を始めた。先攻は修也だ。

「俺の先攻みたいですね……!ドロー!!俺は、『X セイバー ガラハド』を通常召喚!!」

修也が勢い良くカードをデュエルディスクに叩きつけると同時に、仮面を被った『X セイバー』の一体がフィールドに颯爽と現れて手にした剣を構えなおした。

『X セイバー ガラハド』レベル4 地 1800/900
戦士族・効果

「さらにカードを1枚セット!!ターンエンドです!!」

「へえ。１ターン目から攻撃力１８００のモンスターか……。悪くないね。僕のターン、ドロー！手札の『ライトロード・ウォリアー ガロス』を墓地に捨て、通常魔法『ソーラー・エクステンジ』発動！」

『ソーラー・エクステンジ』 通常魔法

手札から『ライトロード』と名のついたモンスターカード１枚を捨てて発動する。自分のデッキからカードを２枚ドローし、その後デッキの上からカードを２枚墓地に送る。

「『ソーラー・エクステンジ』？アイツのデッキ『ライトロード』なのか？」

下で観戦していた孝雄が素っ頓狂な声を上げると、陸が顎に手を当てて、難しい表情をして返した。

「だな……。捨てたカードから見ても間違いない。これは苦しい戦いになりそうだな。」

陸がそう呟いて壇上を見ている間に、空雅は平然とデッキからカードを２枚ドローし、さらにデッキトップを２枚墓地に送った。

「ドロー補助のカードですか……。いいカードがこなかった。なっ？」

空雅に向かって何か言おうとした修也だったが、その言葉は途中で途切れた。なぜならばいきなり空雅の場に逞しい肉体と狼の様な顔を持つモンスターが姿を現したからだ。驚く修也を見て、空雅はニヤリと笑って口を開いた。

「ああ……、『ソーラー・エクステンジ』の効果で墓地送りにしたカードの中にこのカードがあったのか……。『ライトロード・ビースト ウォルフ』は、デッキから墓地に送られたときに特殊召喚される。つまり、『ソーラー・エクステンジ』の効果で墓地に送られたから特殊召喚されたのさ！」

『ライトロード・ビースト ウォルフ』レベル4 光 2100
/300 獣戦士族・効果

このカードは通常召喚できない。このカードがデッキから墓地に送られた時、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

「さらに僕は、『ライトロード・マジシャン ライラ』を手札から通常召喚。」

空雅がゆっくりとした動作でカードをディスクに置くと、白い口ブを身に纏った魔術師が姿を現した。

『ライトロード・マジシャン ライラ』レベル4 光 1700
/200 魔法使い族・効果

自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するこのカードを表側守備表示に変更し、相手フィールド上の魔法または罫カード1枚を破壊する。この効果を発動した場合、次の自分のターン終了時までこのカードは表示形式を変更できない。このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分のエンドフェイズ毎に、自分のデッキの上からカードを3枚墓地に送る。

「くっ……。マジック、トラップ破壊系のモンスターか……。」

「フフ……。その反応、その伏せカードは僕のモンスターを破壊するためのカードかな？『ライラ』の効果発動。守備表示にすることで、相手フィールドのマジック、トラップカードを破壊することが出来る。僕はその伏せカードを破壊する！」

空雅がそう言うって修也の伏せカードを指差すと、『ライラ』は守備体勢を取ると同時に手にしている杖から白い光の束を出し、修也の伏せカードを破壊した。

「『心剣一体』か……。いやあ、うかつに攻撃していたら危なかったな……。さあ、バトル！！『ライトロード・ビースト ウォルフ』で『ガラハド』を攻撃！！」

空雅の叫びと共に『ウォルフ』はすさまじい脚力で一気に『ガラハド』との間合いを詰め、その巨大な腕で『ガラハド』を叩き潰した。『ガラハド』は破壊され、ダメージが修也を襲った。

「うわっ……。」

修也 LP8000 7200

「フフフ……。さて、フィールドがから空きになったね……。僕はカードを1枚伏せて、ターンを終了。そして、『ライラ』の効果発動。デッキトップからカードを3枚墓地に送るよ……。」

「く……。俺のターン、ドロー！！このままじゃ終わりませんよ……。俺は、『XXセイバー フラムナイト』を召喚！！」

修也がそう言いながらカードをディスクに置くと、赤い鎧を纏い、連接昆の様な形状の剣を装備したモンスターが姿を現した。

『XX セイバー フラムナイト』レベル3 地 1300/1
000 戦士族/・チューナー/効果

「カードを2枚伏せ、ターン終了!!」

「フフ……。防戦一方だな。僕のターン、ドロォ!!スタンバイ、メインフェイズ。『ライラ』を攻撃表示に変更した後、再び守備表示にして効果発動!!僕は右側の伏せカードを破壊する!!」

空雅がすごい勢いで叫ぶと共に、『ライラ』は再び杖から光の束を放出して修也の伏せたカードを狙った。

「よし……。このときを待っていたんですよ!!チェーンして、その伏せカードを発動!!『手札断札』!!」

「なっ……。しまったフリーチェーンのカードだったか……」

『手札断札』速効魔法

お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送り、デッキからカードを2枚ドロォする。

修也によって発動された『手札断札』の効果により、空雅は5枚の手札のうち2枚を、修也は手に持っていたカードが2枚だったためその2枚を墓地に送って新たにカードを引いた。

「フフ……。いい手だったけど、それで僕の攻撃を防げたつもりかな?バトルだ!!『ウォルフ』で『フラムナイト』を攻撃!!」

空雅が気を取り直してそういうと、『ウォルフ』は筋骨隆々の腕

を振り上げて『フラムナイト』に襲い掛かった。

「『フラムナイト』の効果発動!!!このカードがフィールドに表側表示で存在する限り、1ターンに1度相手の攻撃を無効に出来る!!!フラムナイトライフエンス!!!」

修也が叫ぶと、『フラムナイト』は見事な剣さばきで連接昆の様な剣を鞭のように『ウォルフ』の腕に巻きつけ、その攻撃を封じた。

「おおつと……。確か、『フラムナイト』にはそんな効果があったね……。忘れていたよ。僕はこれでターンエンド。」

「待つてください。俺はエンドフェイズにトラップカード『ガトムズの緊急指令』を発動します!!!このカードは、『X セイバー』がフィールドにいるとき、墓地の『X セイバー』2体をフィールドに特殊召喚するカード。俺は墓地の『ガラハド』と『エアベルン』を特殊召喚!!!」

『ガトムズの緊急指令』畏カード

『X セイバー エアベルン』レベル3 地 1600/300
獣戦士族・チューナー/効果

修也が発動したカードの効果により、フィールドには一気に合計3体の『X セイバー』が並んだ。

「フフ……。成る程。そのための『手札断札』か……。全く見事な手だよ。」

「ほめても何も出ませんよ……。さあ、俺のターンです!!!」

ドロー！！メインフェイズ……。俺はシンクロ召喚させていただきます！！レベル4の『ガラハド』にレベル3の『エアベルン』をチューニング！！」

修也が力強く叫ぶと、『エアベルン』は力強い跳躍をすると共に3つの星の輪になり、『ガラハド』を包み込んだ。

「天をかける白光よ、今戦士の姿をとりて地上に降り立ち、正義の拳を振りかざせ！！シンクロ召喚！！轟け、『ライトニング・ウオリアー』！！」

修也がそう言っつて右腕を天に翳すとフィールドに緑色の光があふれ、その中から白い鎧を纏った戦士族モンスターが姿を現した。

『ライトニング・ウオリアー』 レベル7 光 2400 / 1200

0 戦士族・シンクロ/効果

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、相手の手札の枚数×300ポイントダメージを相手ライフに与える。

「出たか……。修也のシンクロモンスターが……。」

「ああ！！こっからが本番だな！！」

デュエルの行く末を見守っていた陸がそう呟き、それを聞いた孝雄も、興奮して握り拳を作った。

「へへ……。フィールド上の攻撃力は逆転しましたね……。ここから逆転して見せますよ！！」

シンクロモンスターをフィールド上に召喚した修也は、得意げに
そういつと空雅の方を見てニヤリと笑って見せた。

第5話 浮き彫りになる野望 vs 時戸空雅後編

「修也が『ライトニング・ウォリアー』を召喚……。ここから逆転出来るかってところか？」

講堂と校舎を結んでいる通路で、缶コーヒーを片手に試合を観戦している光彦が呟いた。それを受けて、その反対側に立っている翔子もコクリと頷いた。

「そうね……。まあ、相手が『ライトロード』だから少しきつそうだけど。」

翔子はそう言つと、講堂の方を見ながらクスリと笑つて見せた。

「ああ、そうだな。せめて陸が当たればよかったのによ。」

光彦はそう返すと、缶コーヒーを一気に飲み干して近くのゴミ箱に放り込んだ。

「さあて、そろそろ戻るか。いつまでもここにいと、風紀委員が五月蠅いぜ？」

「うん……。ここで無駄な争いをするわけにもいかないし……。戻りましょう。」

二人はそう言つて頷き会つと、未だ熱い声援が飛び交っている講堂の中へと戻つていった。

「へえ……。シンクロ召喚か。」

空雅は修也の場に現れた『ライトニング・ウォリアー』を見つめながらニコリと笑った。

「驚いたよ。伏せカードは自分の身を守るためのものだと思っていたけど、このためのものだったとはね。」

「へへっ……。そういうことですよ。バトルフェイズに入ります！』『ライトニング・ウォリアー』で『ライトロード・ビーストウォルフ』を攻撃！！ライトニング・パニッシャー！！」

修也が叫ぶと、『ライトニング・ウォリアー』は自らの拳に電気を帯電させ、その拳を『ウォルフ』に叩き込んだ。攻撃を受けた『ウォルフ』はあっけなく破壊され、ダメージを空雅を襲った。

「つつ……。」

空雅 LP8000 7700

空雅がソリッドビジョンの土煙から顔をかばうと同時に、修也は声高に叫んだ。

「この瞬間、『ライトニング・ウォリアー』の効果発動！！相手モンスター戦闘破壊して墓地に送ったとき、相手の手札×300ポイントのダメージを与える！！ライトニング・レイ！！」

修也が叫ぶと同時に、空雅が手札として持っている5枚のカードが眩く光り出した。

「へえ……。そんな効果が……！！」

空雅 LP7700 6200

空雅が目を見開いて驚いたような顔をすると同時に、空雅のライフからさらに1500ポイントが削られ、修也と空雅のライフは逆転した。

「よし！！続けて、『XX セイバー フラムナイト』で『ライラ』を攻撃！！」

続けて修也が言うと、『フラムナイト』は手にした接続昆虫の剣を勢い良く振り回し、守備体制をとっている『ライラ』を攻撃し、破壊した。

「『フラムナイト』の効果発動！！このカードが戦闘によって相手守備モンスターを破壊したとき、墓地の『X セイバー』1体を特殊召喚する！！来い！！『X セイバー ガラハド』！！ダイレクトアタックだ！！」

修也の命令により、『フラムナイト』の効果で墓地から呼び出された『ガラハド』はすぐさま空雅に切りかかった。ソリッドビジョンとはいえ、余りにリアルな迫力に空雅は思わず両手で顔をかばった。

空雅 LP6200 4400

「おお！！修也の奴、一気に空雅を追い詰めたぞ！！」

めまぐるしく変化する空雅のライフカウンターを目にして、孝雄が興奮した口調で叫んだ。

「ああ、いいペースだ。あのまま攻めることが出来れば・・・な。」

陸は孝雄のほうを向いてそう呟き、それから孝雄が怪訝そうなまなざしをするのを無視して試合の方に顔を戻した。すると修也はバトルフェイズを終了し、メインフェイズ2に移行しようとしていた。

「メインフェイズ2、俺はレベル4の『X セイバー ガラハド』に、レベル3の『X フラムナイト』をチューニング！！」

修也が右手を翳しながら叫ぶと、『フラムナイト』は剣を振り回しながら3つの星の輪になって『ガラハド』を包み込んだ。

「煌く魂が、今新たな刃となり戦士に力を与える！！シンク口召喚！来い！『X セイバー ウルベルム』！」

口上が終わると同時に、背中に多数の剣を装備した『X セイバー』が姿を現した。

『X セイバー ウルベルム』レベル7 地 2200 / 1300
戦士族・シンクロ / 効果

「シンクロモンスターを2体も並べられたら、きついでしょう？
俺はターンエンドです！！」

修也はそう言いながら余裕の表情でターンを終了した。モンスター10の状態でターンを回された空雅は、さほどきつそうな表情を見せずにカードを引いた。

「僕のターン、ドロ。リバーカード、『リビングゲットの呼び声』を発動！！」

『リビングゲットの呼び声』 永続罫

自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「僕はこの蘇生効果で、『ライトロード・ウォリアー ガロス』を特殊召喚するよ。」

『リビングゲットの呼び声』の効果により、空雅は最初のターンに墓地に送った『ガロス』のカードをディスクに置いた。それと同時に、歪みない肉体を持つ筋骨隆々のモンスターが姿を現した。

『ライトロード・ウォリアー ガロス』レベル4 光 1850
/ 1300 戦士族・効果

自分フィールド上に表側表示で存在する『ライトロード・ウォリ

アー ガロス』以外の『ライトロード』と名のついたモンスターの効果によって自分のデッキからカードが墓地に送られる度に、自分のデッキの上からカードを2枚墓地に送る。このカードの効果で墓地に送られた『ライトロード』と名のついたモンスター1体につき、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

「攻撃力1850・・・。それじゃあ、俺の『ライティング・ウオリアー』と『ウルベルム』を倒せませんよ!!」

修也が得意げに言ってみせると、驚いたことに空雅はニヤリと笑った。

「ああ、分かっているよ。僕は『ガロス』をリリース!!現れよ『ライトロード・エンジェル ケルビム』!!」

空雅がそういうと共に『ガロス』は光の玉になり、その光の玉から神々しい天使モンスターが姿を現した。

『ライトロード・エンジェル ケルビム』レベル5 光 2300/200 天使族・効果

このカードが『ライトロード』と名のついたモンスターを生け贄にして生け贄召喚に成功した時、デッキの上からカードを4枚墓地に送る事で相手フィールド上のカードを2枚まで破壊する。

「『ケルビム』の効果!!『ライトロード』モンスターを生贄にした場合、デッキトップからカードを4枚墓地に送ることで、相手のカードを2枚まで破壊する。僕は2対のシンクロモンスター、『ライティング・ウオリアー』と『X セイバー ウルベルム』を破壊する!!ジャッジライト!!」

「なっ……？せっかく展開したのに……。」

修也が思わずその声を上げると同時に、『ケルビム』の翼から放たれた二本の閃光によって修也の2体のモンスターは破壊されてしまった。

「フフ……。油断大敵ということさ。バトル!! 『ライトロード・エンジェル ケルビム』でプレイヤーにダイレクトアタック!!」

「うわあああ!!!!」

空雅が命令すると共に『ケルビム』は左手から眩いほどの閃光を放ち、修也を攻撃した。修也はもろに攻撃を受けて2300のダメージを受けた。

修也 LP7200 4900

「フフ……。僕はカードを1枚セットして、ターンエンド。さあ、君のターンだよ。」

「く……。俺のターン、ドロー!!」

たった1ターンで追い詰められてしまった修也は、自らの手札を凝視した。

(くそ……。優勢だったのにたった1ターンで逆転された……。今は耐え忍ぶしかない……。)

「モンスターを1体セット。ターンエンド!!」

「へえ……。どうやらもう手が無いようだね。僕のターン、ドロ。」

空雅はゆつくりとした動作でカードを引いた。そして引いたカードを見ると僅かに目を細め、修也にだけ聞こえるような声で呟いた。

「さて……。そろそろ蹴りを付けたいところだけど、その前に一つ確かめたいことがある……。」

「確かめたいこと……?」

意外な言葉に修也が思わず聞き返すと、空雅はニコリと笑って今しがた引いたばかりのカードに手を掛けた。

「フッフ……。すぐ分かる。手札からマジックカード、『闇の指名者』発動!」

『闇の指名者』魔法カード

モンスターカード名を1つ宣言する。宣言したカードが相手のデッキにある場合、そのカード1枚を相手の手札に加える。

「『闇の指名者』だと?」

空雅の発動したカードを見て、下で観戦していた陸は首をかしげた。

「おかしい……。何故普通に使えばディスプレイアドバンテージになるカードをあの手でデッキに投入しているんだ……?」

陸がそう言いながら再び壇上に目を戻すと、修也が驚愕の表情でフィールドに現れた『闇の指名者』のカードを見つめているところだった。

「どうしたんだ．．？アイツ。あんな顔して．．．。」

陸は怪訝そうに呟き、再びデュエルの行く末を見守った。

（くつ．．．．。『闇の指名者』は、カード名を一つ宣言してそのカードが相手のデッキにあった場合に手札に加えさせるカード．．．）

修也は『闇の指名者』のカードを見ながら、空雅とのデュエル前に交わした『ガトムズ』との会話を思い出していた。

（『何、難しい事ではない。精霊として認識されているカード。つまり、私のカード奴の目に入らないようにすれば良い。私のカードは若干ながら『精霊』の力を纏っている。奴が黒幕だとすれば．．．。私のカードを見られただけで見破られてしまうからな。』）

（やっぱり．．．。空雅さん．．．。いや、空雅が『精霊界』との歪を作った黒幕．．！！）

修也がそう思うと同時に、空雅はゆっくりと手を上げて修也をビシリと指差し、高らかにカード名を宣言した。

「僕が宣言するカードは、『総剣指令ガトムズ』！！さあ、君のデッキに『総剣指令ガトムズ』は投入されているかな．．．．？」

空雅はニコリと微笑みながら修也に向かってそう言った。どの道、

嘘をついてもルール上デッキを確認されてしまう。修也は覚悟して、デッキから『総剣指令ガトムズ』のカードを抜き出して空雅の目に入るように見せ付けた。

その瞬間だった。空雅は審判の教師やギャラリーの生徒達に見えない様に口を手で覆うと、今まで見せてきたやさしそうな微笑とは違う邪悪な笑みを浮かべ、小さな声で呟いた。

「見つけた……。」

「?!」

修也がそれに驚愕している間に、空雅はバトルフェイズに入った。

「バトル……。」
「ライトロード・エンジェル ケルビム」でセ
ットモンスターを攻撃!!」

空雅の叫びと共に『ケルビム』は再び左手から閃光を放ち、修也がセットした『XX セイバー エマーズブレイド』を破壊した。

「くっ……。『エマーズ・ブレイド』の効果発動!! 戦闘破壊されたとき、デッキからレベル4以下の『X セイバー』を特殊召喚できる!! 俺はデッキから『XX セイバー レイジグラ』を守備表示で特殊召喚!!」

修也がデッキから選び出したカードをディスクに置くと、カメラオンの様な容姿の『X セイバー』が姿を現した。

『XX セイバー レイジグラ』レベル1 地 200/100
0 獣戦士族・効果

「そして、『レイジグラ』の効果発動！！召喚、特殊召喚に成功したときに墓地の『X セイバー』を1体手札に加えることが出来る。俺は『X セイバー パシウル』を手札に加える！！」

「フフ……。ご自由にどうぞ！！僕はこれでターンエンド！！」

空雅はそのままターンを終了し、修也のターンが回ってきた。

（アイツの場には『ケルビム』と伏せカードが1枚。俺の場には『レイジグラ』だけ……。少しきついけど、あいつに負けるわけには行かない！！）

「俺のターン、ドロー！！・・・よしっ！！『X セイバー パシウル』を通常召喚！！」

『X セイバー パシウル』レベル2 地 1000/0 戦士族・
チューナー/効果

「そしてこのカードは、フィールドに2体の『X セイバー』がいるときに特殊召喚できる。来い！！『XX セイバー フォルトロール』！！」

『パシウル』に続けて、巨大な大剣を背負った『X セイバー』が修也のフィールドに姿を現した。

『XX セイバー フォルトロール』レベル6 2400/18
00 獣戦士族・効果

「『フォルトロール』の効果！！特殊召喚に成功したとき、墓地

のレベル4以下の『X セイバー』を特殊召喚できる。来い!!!
ガラハド』!!!」

修也がそう説明すると、『フォルトロール』は大剣で地面を叩き、そこから再び『ガラハド』を蘇生させた。

「ククク……。流石は『六星団』。一気にモンスターを展開してきたか……。」

修也が一気に4体のモンスターを展開すると、空雅がまた修也にだけ聞こえる声で言った。それを聞いた修也は、空雅を睨み返しなから口を開いた。

「黙れ……。空雅！やはりあんたが『精霊界』との歪を開いた人間だったんだな？」

修也が小さいながらも鋭い声でそう返すと、空雅はニタリと笑った。

「クク……。ああ、そうさ。僕こそが『精霊界』との歪を発見した人間だ……。」

「何で……。何でそんなことするんだよ？このままじゃ、二つの世界にどんな影響が起きるか……。」

「そんな事分かっているさ……。この状態が続き、『精霊界』との境界が完全に取り除かれれば、この世界と『精霊界』は融合を果たす。『精霊界』は人の想像力から作られた世界だ。境界がなくなれば、人の想像したことが即座に現実となる恐ろしい世界になる……。」

「だったら……。なおさらあんたのやりたい事がわからない。・
・!!!そんな世界になったら、世界中目茶苦茶だ。・・・!!!」

修也が怒りで震える声を必死に小さくしながら言うと、空雅は一度呆れるように息をついてからまた口を開いた。

「何を言っているんだ。僕に言わせれば今の世界だって目茶苦茶さ……。貧しい国はつまらない紛争をして自らの首を絞め、大国は大同土でつまらない問題を起こし、くだらない言い争いを繰り返している。そうだ。・・・!!!この世界は腐っている。誰かが、世界を変えなければならぬ!!!」

空雅はそう言い、修也の目をキツと見据えると両腕をバツと広げて後を続けた。

「だから……。僕がやるんだ!!!この腐りきった世界に鉄槌を下す!!!精霊の力でくだらない紛争やいい争いを止めさせ、僕が世界の主導権を握り、秩序を作る!!!そのためには草薙修也、お前等『六星団』が持つ『六星団』の証が必要なのだ!!!このデュエルに勝利し、お前の証をいただくぞ!!!」

空雅が修也を指差しながらそういうのを聞いて、修也は握りこぶしを作りながらすぐさま言い返した。

「そんな事許さない……。精霊の力をそんな事に使うなんて。・
!!!空雅、お前の野望は俺が止める!!!行くぞ。・・・!!!俺はレベル6の『XX セイバー フォルトロール』に『X セイバー パシウル』をチューニング!!!」

修也がそう叫んで右腕を鋭く横に振ると、『パシウル』は2つの

星の輪になつて『フォルトロール』を包み込んだ。

「集いし孤高の魂が、今新たな決意を生み出す！！決意を拳にこめて全てを砕け！！シンクロ召喚！来い、『ギガンテック・ファイター』！！」

修也の口上が終わると共にフィールドに緑色の光があふれ、その中から全身が白いアーマーで包まれた筋骨隆々の戦士が姿を現した。

『ギガンテック・ファイター』レベル8 闇 2800/100

0 戦士族・シンクロ/効果

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードの攻撃力は墓地に存在する戦士族モンスターの数×100ポイントアップする。このカードが戦闘によつて破壊され墓地に送られた時、墓地に存在する戦士族モンスター1体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「『ギガンテック・ファイター』……。優秀な戦闘破壊耐性を持つシンクロモンスターか……。」

「そうだ……。これが俺の切り札！！『ギガンテック・ファイター』は墓地の戦士族1体につき攻撃力を100上げる！！俺の墓地には『フラムナイト』、『ライトニング・ウォリアー』、『ウルベルム』、『パシウル』がいる！！よつて攻撃力は3200だ！！バトル！！『ギガンテック・ファイター』！！『ケルビム』を攻撃！！ソウルクラッシュ・ナツクル！！」

修也が叫ぶと、『ギガンテック・ファイター』はものすごい勢いで『ケルビム』の元まで駆けて行き、その拳を叩き込んだ。『ケルビム』はあっけなく破壊されてしまい、ダメージが空雅を襲った。

空雅 LP4400 3500

「まだだ……!!まだ『ガラハド』の攻撃が残っている!!」「ガラハド』、ダイレクトアタックだ!!」

修也の命令により、『ガラハド』は剣を大きく振り上げて再び空雅を切りつけた。

「ぐううああつ!!クツ……。やはり堪えるな……。」

空雅 LP3500 1700

空雅は腕を交差させて衝撃から顔をかばいながら言った。修也はその言葉を流しながら、大幅に減った空雅のライフカウンターを見た。

(よし……。これでライフ差は大きくなった……。返しの特攻に直接攻撃できれば……。勝てる!!)

「俺はこのまま、ターン終了!!」

修也は特に伏せカードを伏せることなくターンを終了した。その様子を下で見ていた孝雄は興奮した口調で陸の方を向き、叫んだ。

「おいおい見てるか陸!!修也の奴、空雅さんに勝っちまいそうだぞ!!」

「そうだな……。だが……。」

対する陸はそう呟き、壇上の空雅をじろりと見つめた。

「まだ奴は『ライトロード』の切り札、『裁きの龍』を出していない。手札に持っていないのかもしれないが……。『裁きの龍』が出てくれば、この状況は一変するぞ。」

「え……。？って、そんなのまだ分からないだろ？きっと修也なら勝ってくれるって!!」

孝雄がそう返すのを聞きながら、陸は先ほどから感じている疑問に首をひねった。

(しかし……。先ほどの修也のターン、あの二人が会話していたように見えたが……。俺の気のせいか……。?)

陸がそんな事を気にしている間に壇上の空雅はドローフェイズに入り、デッキからカードをドローした。

「フフ……。僕のターン、ドロー!!ククク……。修也。君にも味合わせてあげるよ。精霊の力を使ったデュエルの痛みを!!」

「なっ……。精霊の力を使った……。デュエル?」

空雅が発した不気味な言葉に修也がそう返すと、空雅はまたニヤリと笑って手札のカードを1枚手に取った。

「ククク……。すぐに分かる!!さて……。君は切り札を紹介してくれた。なら僕も、切り札を紹介しようじゃないか!!このカードは、墓地に4種類以上の『ライトロード』がいるとき、手札から特殊召喚できる!!十分に肥えた僕の墓地は、条件を満たして

いる……。出でよ……。『裁きの龍』!!」

空雅がそう言ってカードをデュエルディスクに置くと、突然空雅のフィールドに雷鳴が落ちた。

「うわっ……。!!」

「っ……。?来るか……。」

余りにも激しい閃光に修也はもちろん、下で試合を観戦している陸をはじめとしたギャラリーの生徒達や教員達は思わず顔を腕でかばった。その閃光が収まると、空だった空雅のフィールド上に神々しい光を放つ純白の龍が姿を現しているのが確認できた。

『裁きの龍』レベル8 光 3000/2500 ドラゴン族・効果

このカードは通常召喚できない。自分の墓地に「ライトロード」と名のついたモンスターカードが4種類以上存在する場合のみ特殊召喚する事ができる。1000ライフポイントを払う事で、このカードを除くフィールド上のカードを全て破壊する。このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する場合、自分のエンドフェイズ毎に、自分のデッキの上からカードを4枚墓地に送る。

「く……。しまった……。攻撃力3000の『ライトロード』の切り札……。!!」

勝利を目前にして最も警戒すべきだった『ライトロード』の切り札の召喚を忘れていた修也は、自らのふがいなさに腹が立ち、思い切り歯を食いしばった。その表情が読めたのか、空雅は反対にニヤリと笑うとゆっくりと口を開いた。

「フフ．．．．．」裁きの籠』、効果発動！！1000のライフを払うことで、フィールド上のこのカード以外のカードを破壊する！！さあ、天からの裁きを受けるが良い！！！ホーリー・ジャッジライト！！！」

空雅 LP1700 700

空雅のライフが削られると同時に、『裁きの籠』は一声大きく吼えて巨大な光の柱を何本も天から降らせた。その光の柱により、修也の展開したモンスターは片っ端から破壊されてしまった。

「クク．．．．．場ががら空きになったね．．．．．僕はさらに手札から魔法カード、『おろかな埋葬』発動！！！」

『おろかな埋葬』魔法カード

空雅が発動したカードを見て、修也は首をひねった。

「いまさら『おろかな埋葬』で墓地肥やし．．．？一体何を？」

「フフ．．．．．分からないなら教えてあげるよ。僕が墓地に送るカードは．．．．．」ライトロード・ビースト ウォルフ』！！『ウォルフ』はデッキから墓地に送られたときに特殊召喚できる．．．．．つまり、『おろかな埋葬』の効果で墓地からそのまま特殊召喚できるのさ！！！」

空雅がそういうと同時に、墓地に送られた『ウォルフ』はそのまま空雅のフィールドに特殊召喚された。

「くそっ……。」

1ターンで場を一掃され、相手の場に並んだ攻撃力3000と2500のモンスターを見ながら修也は呟いた。修也の現在のライフは4900……。墓地と手札に攻撃を防ぐカードは無い。修也は負けを確認した。

「クク……。顔色が変わったね……。！さあ、バトルフェイズ！『ウォルフ』よ……。奴に『精霊石』の力を思い知らせてやるんだ！！」

「なっ……。？『精霊石』……。？」

修也がそう聞き返すと同時に『ウォルフ』は修也の所まで駆けて来ると、太い腕を振り上げてそれを修也に勢い良く振り下ろした。そしてその瞬間、修也の体に信じられないことが起きた。

「っ……。？ぐあああああ！！！」

修也 LP4900 2800

『ウォルフ』の攻撃が修也に直撃した瞬間、まるで太い木の枝で思い切り叩かれたような衝撃が修也の全身を貫いた。修也は思わず叫び声を上げて膝をつき、空雅を睨みつけた。

「く……。何だこれは……。？本当の衝撃が……。俺の全身を……。」

「フフ……。驚いたかい？これこそが、『精霊石』の成せる業。デュエルの痛みを現実にする。その様子だと、連れの精霊から聞い

ていなかったようだね……。さあ、そろそろ終焉だ!! 『裁きの龍』よ。プレイヤーにダイレクトアタックだ!! ジャッジメント・プレス!!」

空雅が叫ぶと、『裁きの龍』は口に白い雷のようなエネルギーを収束させ、それを一気に修也に向けて吐き出した。迫り来る衝撃に備えて腕で顔をかばった。

「くそつ……。うわああああ!!」

修也 LP28000

ダメージを受けた修也は、体中に来る衝撃に耐え切れず後ろに吹っ飛び、後ろの壁に勢い良くぶつかってしまった。それと同時にソリッドビジョンは消滅し、空雅の『ウォルフ』と『裁きの龍』は消えてしまった。それを確認した空雅は、生徒達の歓声に右手を上げてこたえながら修也の方に近づいてきた。

「クク……。流石は精霊の力を持つ『六星団』……。本当の力を出していないとはいえこの僕が残りライフ僅かまで追い詰められるとは……。」

空雅は小さい声でそう言い、未だ全身を駆け巡っている痛みで立ち上がれない修也を見下ろしてニヤリと笑った。

「さあ、勝ったのは僕だ。君の『六星団』の証……。僕がいただく!! 『ポルターガイスト』発動!!」

空雅がそう呟いて観客から見えないようにカードをディスクに置くと、修也が首にかけていた『六星団』の証は勝手に首を離れ、空

雅の手に収まった。

「なっ……。ワイシャツの下に隠していたのに……。」

修也が空雅を睨みつけながら呟くと、それを聞いた空雅は『六星団』の証をポケットにしまいながら返した。

「悪いね……。君が『ガトムズ』を手札に加えた瞬間からそこにあるのは見えていたよ。それにこれは、僕が持っていた方が有効活用できる。君はもう、この証に関わらない方がいいかもね……。」

空雅はそういうと、ゆっくりと修也に背を向けて教職員が元に戻した教壇の近くにたった。その姿を見ながら修也が黙り込んでいると、審判を勤めていた教師が修也のところに来て来た？

「どうした……。大丈夫か？」

教師の問いに修也はゆっくりと頷くと、ぐったりとしていた手足に力を込めて立ち上がった。それから教師の制止も聞かずに下へと降りる階段へと足をかけると、空雅の方を向いた。

（『六星団』の証……。取られたままじゃ駄目だ！！終わったから、すぐに追って取り返さないと！！）

修也はそう思いながら空雅のほうに形式的に頭を下げ、急いで陸と孝雄が待っている所に向かった。

第6話 舞う黒羽!! 『BF』使いの墨染陸

空雅とのデュエルが終了し、役目を終えた修也が他の生徒たちの好奇の視線を受けながら自分のクラスの場所に帰ると、孝雄がニツと笑って片手を上げて見せた。

「よお。修也!!惜しかったじゃねえか!!後一步のところまで追い詰めるなんてよ。」

修也は孝雄の声に片手を上げて返すと、黙って陸と孝雄の後ろに坐った。するとその態度を不審に思ったのか、孝雄が修也の顔を覗き込みながら口を開いた。

「どうした・・・?元氣ないな。そんなにショックだったのか?」

「えっ・・・?な・・・、何言ってるんだよ!!負けることなんて、最初から分かってたさ。あそこまで攻め込めただけでもラッキーだと思わなきゃ。」

修也が無理やり顔に笑いを貼り付けて言うと、孝雄は納得したように頷いた。

「そうだよな・・・。プロデュエリスト目指していた人とあそこまでの勝負が出来たんだから十分だよな!!」

孝雄の言葉を聞いて、修也は笑ったまま頷いて見せた。

「修也・・・。一つ聞いても良いか?」

修也と孝雄がそんなやり取りをしていると、修也が来たときから難しい顔で壇上を見上げていた陸がふと呟いた。

「何だよ？どうかしたのか？」

修也が陸の方をむいて言うと、陸は目を空雅から修也のほうに移してゆつくりと口を開いた。

「最後のターン、何があったんだ？あんな派手に吹き飛ばなんて、お前らしくないぞ。」

陸の発した言葉を聞いて、修也の笑いは一瞬にして引いた。そして、真実を追究されるのを恐れて修也は無意識のうちに目を背けた。だが陸はその表情の変化を見逃さず、さらに追求した。

「笑いが引いたな……。何があったか話してくれないか？」

「な……。なんでもないって……。ちょっとビックリして転んだだけだよ。」

修也はそう言うでごまかそうとしたが、陸は納得するようなそぶりを見せなかった。

「いや……。あれは明らかに前方からの衝撃を受けたような吹き飛び方だった。正直に話せ修也。アイツは……。時戸空雅は何をした？」

「おいおい止せよ陸。いくらあの人が胡散臭いからってこんな公衆の面前で怪しいことするわけ無いだろ？」

孝雄が陸を諭すように言ったが、陸は無視して修也の方をじつと見つめていた。もはや陸には嘘が通じないと判断した修也は、ため息をつくと思いい口を開いた。

「はあ……。じゃあ話すけど……。嘘じゃないからな？実は、アイツに最後ダイレクトアタックされたとき、ソリッドビジョンのはずなのに実際の衝撃を感じたんだ。『精霊石』の力がどうとか・・。」

「『精霊石』？何じゃそりゃ？」

修也の話を聞いていた孝雄は、そう言って首をかしげた。無理も無い。孝雄にとっては聞いた事も無い単語なのだから。

「。後で話すよ。それと、俺アイツに大事なものを取られたんだ。それも取り返さないと。」

修也がそう言って話を終えると、黙って話を聞いていた陸はゆっくりと口を開いた。

「そうか……。取られたものも知りたいが、今はそれどころでは無いな。講演はもうじき終わる。その後、光彦と春山も連れて奴を追うぞ・・。」

「はあ？この後掃除あるんだぞ？さばる気かよ!？」

陸の提案した意見を聞いていた孝雄が、いきなり素っ頓狂な声を上げた。それを聞いた陸は孝雄のほうを軽く睨んだ。

「阿呆か貴様……。奴がデュエル中に引き起こした事で、修也

は危害を喰らっているんだぞ？掃除なんぞ放棄してでも調べる価値はある。それに、2、3人いない所で何の支障も無いだろう？」

「うう……。確かにいつも掃除のとき二人くらいさぼってるな……。」

孝雄がしぶしぶ納得したように呟くと同時に、突然回りから割れんばかりの拍手が起こった。どうやら三人が話し合っている間に講演が終了したらしい。それを確認した陸はあたりを見渡すと、修也と孝雄のほうを向いて口を開いた。

「終わったか……。よし、奴は職員室で挨拶を交わした後、職員玄関がある裏口から出るはずだ。先回りして待ち伏せするぞ。」

「ああ……。」

「うっしゃ！！行くうぜー！！」

陸の言葉を聞いて、修也と孝雄はしっかりと頷き合った。

「ゼエ……。ゼエ……。陸……。説明してもらおうか……。」

「!!」

「何をだ……?」

「何で我々は講演終わった後、教室に行かずに走っているのかを
だぜ!!」

生徒用の玄関から勢い良く走り出る陸に向かって、事情も聞かされずに走らされている光彦が息を切らしながら叫んだ。それを聞いた陸は、振り向きもせず光彦に言い返した。

「今は黙って走れ……!!理由は後々説明してやる……。」

「……走られるこっちの身にもなってほしいんだけど。」

その叫びに対して、今度は翔子も不服な声を上げた。この二人は講演が終わった後にいきなり修也達三人に連れ出されて事情も説明されているため、二人からすればただ目標も無く走っているだけなのだ。

「もう少し辛抱してくれ!!裏口まで……、あと少しだから!!」

先頭を切る修也が後ろを走っている4人にそう叫び返すと同時に、5人は裏口が見える曲がり角へとたどり着いた。

「居た……!!あそこだ!!」

裏口からそう遠くないところに空雅とその部下らしい白衣の研究員の姿を見つけた修也は、後ろの四人に聞こえるようにそう言った。

その声を聴いた陸は修也に向けて頷くと、空雅のほうに向かって思い切り声を発した。

「おい！！待て！！」

陸が叫ぶと低い声で話し合っていた空雅と白衣の研究員は、話を中断してこちらの方を向いた。そして、空雅は走ってくる修也を確認するとニコリと笑った。

「やあ……。どうかしたのかい？」

修也達が空雅の目の前で立ち止まると、空雅はそう言って微笑んで見せた。どうやら修也以外の4人が居るので温和な人物を装っているらしい。その言葉を聞いた陸が代表して一歩前に進み出た。

「どうかしたのか……。ですか。なら、単刀直入に聞かせてもらいましょうか。最後のターンの直接攻撃について……。」

「へえ……。」

陸がそう言葉を発すると、空雅の顔からさっと笑みが消えた。

「成る程……。草薙修也。お友達を引き連れて『六星団』の証を取り戻しに来たというわけか……。」

空雅は楽しむようにそう言い、修也、陸、孝雄、光彦、翔子を順番に見渡してニヤリと笑って見せた。

「『六星団』の証……。？なんだそりゃ。説明していただけると非常に有難いぜ。」

全く聞き覚えが無い単語を聞いた光彦が、空雅のほうを見てそう言った。それを聞いた空雅は質問に答えず、黙ったまま喉の奥でクツクツと笑った。

「貴様・・・何がおかしい？へらへら笑っている暇があったら答えてもらおうか！！」

続けて陸が鋭い声を発すと、空雅は笑いを堪えながらポケットに手をつ突っ込んで煌びやかな赤い宝石が埋め込まれているペンダントを取り出した。修也以外の4人は、始めてみるそのペンダントを不思議そうな表情でじつくりと見つめた。

「それが・・・『六星団』の証という物なのですか？」

ペンダントを見た翔子がそう言うのを聞き、空雅はゆっくりと頷いた。

「ああ、そうさ。君達にとっては価値の無いもの。だけど。僕や草薙修也にとつては重要なもの。まあ、これが何かは知らない方が得なんじゃないかな？」

「修也にとつても重要だつて？どつということだ？」

空雅の話聞いた孝雄は、修也の方を向かって問いかけた。それを聞いた修也は空雅の方から目を離さずに口を開いた。

「詳しくは説明できないけど・・・簡単に言つと空雅はあれを使つて世界を支配しようとしているんだ。そして・・・あれは俺が守るべきもの。俺の手元においておかなきゃいけないんだ。」

修也がそう説明すると、他の4人は大きく目を見開いて修也を見た。

「世界を征服って……。何だよその超展開。アニメじゃないんだぜ？」

光彦が信じられないというような口調で言うと、その言葉を聞いた陸が空雅を睨みながら口を開いた。

「ああ……。全くばかげた話だ。だが、ありえない話じゃない……。俺の推測が正しければな!!」

陸はそういつと空雅のほうにもう一步踏み出し、脅すような口調で言った。

「さあ……。!!そろそろ最初の質問に答えてもらおうか!!時戸空雅!!あんたは修也に直接攻撃したとき、何をした?俺には、修也が何かの衝撃を受けて吹き飛んだようにしか見えなかったぞ!!」

今まで見たことも無かった陸の本当の怒りの形相に修也は思わずたじろいだ。他の三人も三者三様で驚いた様子を見せていた。だがそんな中、空雅は動じずにニタリと笑って見せた。

「なら……。確かめてみなよ……。自分の身でねえ!!!発動!!!『ファイヤー・ボール』!!!」

空雅はそう叫ぶと腕につけたままだったデュエルディスクに、いつの間にかポケットから取り出していたカードをたたきつけた。す

ると、驚いたことにソリッドビジョンではない本物の火炎弾が空雅の背後から勢い良く飛んできた。

「皆危ない!!!」

五人は修也の叫び声を合図に、勢い良くその場から離れた。火炎弾はつい先ほどまで修也達が居た地面に命中してその場に黒い焦げを残した。

「何これ・・・？カードの効果が現実に・・・？」

黒くこげた地面を見て、素早く横に退避した翔子が信じられないという目で呟いた。

「くそ・・・嫌な予感的中しやがった!!」

孝雄もそう言っつて悪態をつき、空雅のほうを睨みつけた。そんな五人を、空雅は観察するようにじつくりと見た。

「フフ・・・。さあ、さっきまでの威勢はどうしたんだい？掛かってきなよ・・・。黒焦げになるけどね。」

「阿呆が・・・。そんな挑発に乗ると思っつなよ・・・。」

余裕たっぷりになんか言う空雅に対し、陸は冷めた口調でそう返した。それを聞いた空雅は、ニヤリと笑って『六星団』の証を見せびらかすように振った。

「ふうん・・・。やっぱりそう簡単に出てきてはくれないのか、じゃあ・・・。こうしよう。道下、これを持って先に研究所に戻

るんだ。僕はもう少しこの子達と遊んでいくよ。」

空雅は後方で黙りこくって控えていた研究員に『六星団』の証を渡した。研究員は無言で頷き、高校の敷地外に出る道を走り出した。

「あつ……!!あいつ……!!」

その様子を見ていた修也は、そう呟いて空雅をにらみつけたが動くことが出来なかった。下手をすれば先ほどのように『ファイヤー・ボール』を発動されてしまう。一発だけなら避けられそうだが、背中を向けると避けるのは難しい。そのリスクの大きさから行動をためらう修也達を見渡しながら、空雅は楽しそうに言った。

「さあ……速く研究員を追いかけないと、『六星団』の証は研究所に持ち去られてしまうよ……。あの研究員は、僕のように力を使えない。僕を突破すれば取り返せるかもね……。最も、通すつもりは無いけどね……。フッフッフ……。」

余裕の表情を浮かべながら言った空雅の声を聴いた陸は、舌打ちをしながら後ろにいる光彦の方を向くと、空雅に聞こえない小さな声で呟いた。

「おい……。光彦。一発くらいなら避けられるだろ？奴が二発目の『ファイヤー・ボール』を放つ前に俺が気を引く。行ってくれないか……?」

「構わないが……。下手すると俺は黒こげだ。しっかり頼むぜ?」

陸が立てた作戦を光彦は特に嫌がることなく承諾したが、その作

戦を傍らで聞いていた孝雄がいきなり口を挟んだ。

「ちょっと待てよ……。研究員とデュエルするんだろ？なら、その役は俺の方が適任じゃないか？俺の方が光彦より強いんだし……。」

「いや……。お前じゃ駄目だ。」

「何でだよ？」

冷たい反応をされた孝雄は陸に向かってそう食って掛かると、陸はため息をついて孝雄のほうに向き直った。

「理由は後で説明してやる……。今はあのペンダントを取り返すのが先決だ。どんなものかは良く分からないが、奴の手元にあると危険なのは確かだ。光彦……。行け！！」

「はあ……。分かったぜ。」

陸の命令を受けた光彦は、いかにも気だるげに空雅の正面に移動すると空雅の顔をジッと見つめた。その姿を見た空雅は、ちょっと驚いたように目を見開いた。

「へえ……。友情つてのは素晴らしいね……。君は友のために危険を犯すわけだ。」

「へへあ。危険？上等なんだぜ。どうもこの世は平凡すぎるんでね。」

空雅のからかうような口調に対し、光彦も楽しんでいるような口

調でそう返して見せた。

「?!!・・・おい、光彦!!何やってんだよ!!危険だ!!戻れ!!」

光彦が空雅の前に立っていることに気付いた修也は、慌ててそう言っただけで光彦を止めようとしたが光彦は振り向かずに親指をグッと上に突き上げて空雅に突進した。

「行くぜっ!!!ぬおおおおおおああああああ!!!」

「フン……。臆せずに来たか!!!『ファイヤー・ボール』!!!」

勢い良く突進していく光彦に向かって、空雅は容赦なく『ファイヤー・ボール』を発射した。その瞬間、再び高熱の火球がカードから発射され、光彦を狙った。

「うおおお!!!今こそマール様の力を!!!」

光彦は迫り来る火球を見据えながら意味不明の叫び声を上げた。そして、間髪容れず火球を回避するとそのまま空雅の背後に走り抜けた。

「後ろが……。がら空きだっ!!!」

それを確認した空雅はそう言い、再びカードを手を取った。だがそのカードが再び発動されることは無かった。

「痛っ……。!!何だ……?」

突然空雅の手にしたカードが小石にはじかれたのだ。空雅はカー

ドを取り落とし、光彦はその隙に視界から姿を消してしまった。光彦を取り逃がした空雅は、右手を押さえながら後ろを振り向いた。

「残念だったな……。あんたには、俺とデュエルをしてもらうぞ。」

小石を投げたらしい陸は、ニヤリと笑いながら振り返った空雅を見つめた。その言葉を聞いた空雅は、完全に陸の方に体を向けながら口を開いた。

「へえ……。すごいコントロールだ。まさかこんな方法を取るなんてね。驚いたよ。でも……。」

空雅はそこまで言って一度言葉を切ると、デュエルディスクを構えなおしながら陸を見つめた。

「僕の聞き違いかな？さっきの言葉は僕にデュエルを挑んだように聞こえたけど……。僕の経歴を知っているのなら、デュエルを挑む事は無謀じゃないかな？」

「フン……。見くびるな……。俺は修也と格が違うぞ……。少しでも貴様が手を抜こうものなら、全力で叩き潰す!!」

陸が自信満々に言うと、空雅はまた喉の奥でクツクツと笑って既に戦闘態勢に入っている陸を見つめた。

「大した自信だ……。面白い。やってあげるよ……。手加減なしだね。そしてもちろん、君にも味合わせてあげる。『精霊石』の力をね!!」

空雅はそういうと遂にやる気になったらしく、デュエルディスクにセットされていたデッキを一度取り出してシャッフルすると、再びディスクに戻して構えなおした。

「フン……。今のうちにせいぜい吼えている!!」

陸もそう言ってデッキを軽くシャッフルし、デュエルディスクにセットした。そしてお互いの準備が整ったのを確認すると、二人は同時に叫んだ。

「デュエル!!」

二人はその叫びと同時に初手となる5枚のカードをデッキからドロし、デュエルディスクをにらみつけた。点灯したのは陸のデュエルディスクのランプ。先攻は陸だ。

「俺の先攻か……。ドロ。俺はフィールドにモンスターをセツト。そしてカードを2枚伏せ、ターンを終了させてもらう。」

「へえ……。攻撃的な言動の割にはずいぶんと守備的な戦術を取るんだね……。」

合計3枚のカードが伏せられた陸のフィールドを見て、空雅は面白そうにニヤリと笑った。そしてすぐに自らのデッキに手を掛けた。

「僕のターン、ドロ!! 僕は、『ライトロード・パラディン ジェイン』を通常召喚!!」

そう言って空雅がカードをゆっくりとデュエルディスクに置くと、白い甲冑を身に纏った騎士モンスターが姿を現した。

『ライトロード・パラディン ジェイン』レベル4 光 180
0/1200 戦士族・効果

このカードは相手モンスターに攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が300ポイントアップする。このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分のエンドフェイズ毎に、自分のデッキの上からカードを2枚墓地に送る。

「フン……。『ライトロード』のアタッカーか……。悪いが、早々に消えてもらうぞ。リバーズカード発動!!! 『奈落の落とし穴』!!!」

陸がそう宣言すると、先刻陸が伏せたカードが表になって効果を発動した。

『奈落の落とし穴』罨カード

相手が攻撃力1500以上のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚した時に発動する事ができる。そのモンスターを破壊しゲームから除外する。

「『奈落の落とし穴』か……。陸の奴、相手のアタッカーを速攻除去するとは容赦ないな。」

「いや……。墨染君も相手の切り札が『裁きの籠』と分かっている以上、墓地にモンスターを溜めさせる事はしたくないはず。だからこそ、除外効果のあるカードを発動したはず……。」

修也と翔子がその言葉を交わしているうちに、既に通常召喚を行ってしまった空雅は手札からカードを2枚選び出すとデュエルディスクにセットした。

「僕はカードを2枚伏せ、ターンエンド。」

「そのエンドフェイズ、トラップ発動!!」ゴッドバード・アタック!!裏側表示の『大旗のヴァーユ』をリリースし、お前の伏せカードを2枚破壊する!!」

『ゴッドバード・アタック』罨カード

自分フィールド上の鳥獣族モンスター1体を生け贄に捧げる。フィールド上のカード2枚を破壊する。

「く……。そんなカードも伏せていたとはね……。君の言うとおり、草薙との格は格段に違うな……。」

「フン……。そう余裕ぶつた言葉を吐けるのも今のうちだ。俺のターン、ドロー!!」BF 蒼炎のシユラ』を通常召喚!!」

そう言つて陸がドローしたカードをすぐさまディスクに叩きつけると、黒い翼を大きく広げた『BF』の一体が姿を現した。

『BF 蒼炎のシユラ』レベル4 闇 1800/1200 鳥獣族・効果

このカードが戦闘によつて相手モンスターを破壊し墓地へ送つた時、自分のデッキから攻撃力1500以下の『BF』と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

「さ……。このままバトルフェイズに入らせてもらう!!」蒼炎のシユラ』でダイレクトアタック!!」

陸がそう叫んで空雅を指差すと、『シユラ』は主の命令に従って高く飛び上がり、上空からものすごい突風を空雅に向けて放った。

「ぐあああつ……!!」

空雅 LP8000 6200

『シユラ』の攻撃を受ける瞬間、空雅は頭を両腕で庇った。常時冷静な振舞いをしていた空雅に似合わぬその仕草を見て、陸は少し目を細めて口を開いた。

「その大げさなりアクション……、どうやら貴様の言う『精霊石』とやらの力は持ち主にも及ぶようだな。」

陸が相変わらず冷たい口調で言うと、その言葉を聞いていた空雅は困ったように微笑んで口を開いた。

「へえ……。流石の洞察力だ。君の言うとおり、それが欠点なんだよね。現実の衝撃を持ち主にも与えてしまう。精神の弱いものに持たせると相手より先に倒れちゃうときがあるんだ。ほんと、この仕様には参ったよ……。まあ、僕はフェアだから良いと思うけど。それより、君の攻撃は終了したよ。ターン集了かい？」

空雅が最後にそう言って陸を促すと、陸は黙ったまま空雅を睨みつけたままカードを1枚伏せてターンを終了した。それを確認した空雅は、ゆっくりとデッキの上に手を掛けた。

「フフ……。僕のターン、ドロ……。魔法カード、『おろかな埋葬』発動!!このカードの効果で、デッキから『ライトロード・ビースト ウォルフ』を墓地に送る、そして『ウォルフ』を自身の

効果で特殊召喚！！」

空雅が魔法カードを発動すると、屈強な肉体を持つ『ライトロード』のモンスターがフィールドに姿を現した。

『おろかな埋葬』魔法カード

『ライトロード・ビースト ウォルフ』レベル4 光 2100
/200

「くっ……。修也と戦ったときにも披露したコンボか……。」

「フフ……。まだ終わらないよ。『ウォルフ』をリリース！！
『ライトロード・エンジェル ケルビム』をアドバンス召喚！！」

陸が呟くのをよそに、空雅は先ほど特殊召喚されたばかりの『ウォルフ』をリリースし、新たに白い装束を纏った『ライトロード』が姿を現した。

『ライトロード・エンジェル ケルビム』レベル5 光 230
0/200 天使族・効果

「『ケルビム』の効果発動！！『ライトロード』をリリースして召喚した場合、デッキトップからカードを4枚墓地に送ることで相手フィールドのカードを2枚破壊する。4枚墓地に送り、お前の『シユラ』と伏せカードを破壊する！！」

「フン……。なら貴様のモンスターも道連れだ！！トラップ発動！！『激流葬』！！」

『激流葬』罨カード

モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時に発動する事ができる。フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

「なっ……『激流葬』だと……？」

空雅が驚いた様子でそういつと同時に、陸の発動したトラップカードから大量の水が勢い良く噴出し、自軍の『シユラ』もろとも空雅の『ケルビム』を飲み込んでしまった。

「へえ……。上手く『ケルビム』の効果を回避したか。さすがだと言うべきか……。君は面白いよ。墨染陸。僕はカードを1枚伏せてターンエンド。」

「誉めたつもりか？おだてても何もでないぞ……。俺のターン、ドロー！！『BF 極北のブリザード』を召喚！！」

陸がそう言いながら勢い良くカードをディスクに叩きつけると、全身が水色の羽毛に包まれた鳥獣族モンスターが姿を現した。

『BF 極北のブリザード』レベル2 闇 1300/0 鳥獣族・チューナー/効果

このカードは特殊召喚できない。このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル4以下の『BF』と名のついたモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

「『ブリザード』の効果発動！！召喚時に墓地のレベル4以下の『BF』を特殊召喚できる。俺はレベル4の『シユラ』を特殊召喚！！」

陸の言葉と共に『ブリザード』は陸のデュエルディスクに降り立ち、墓地の部分を嘴でコッコツと叩いた。すると、『激流葬』の効果で破壊された『シユラ』が再びフィールドに姿を現した。

「チユーターとモンスターが揃った……。シンクロか!」

「ああ……。一気に潰す!!行くぞ!!レベル4の『蒼炎のシユラ』に、レベル2の『極北のブリザード』をチユーニング!!」

修也の叫びに陸がそう返すと、『ブリザード』は2つの緑色の星の輪になって『シユラ』を包み込んだ。

「失われし結界の中に潜む絶対零度の波動よ、今こそその力を解放し世界を凍てつかせよ!!シンクロ召喚!!我が元に招来せよ、『氷結界の龍ブリユーター』!!」

陸の口上が終わると、全身が氷のように透き通っている龍がフィールドに姿を現し一声鳴いた。ソリッドビジョンが映し出すその美しい姿に、修也は思わず息を呑んだ。

『氷結界の龍 ブリユーター』レベル6 2300/1400

海竜族・シンクロ/効果

チユーター+チユーター以外のモンスター1体以上

自分の手札を任意の枚数墓地に捨てて発動する。その後、フィールド上に存在するカードを、墓地に送った枚数分だけ持ち主の手札に戻す。

「さあ、早速『ブリユーター』の効果を発動させてもらおう!!手札を捨てることで、捨てた枚数分まで相手フィールドのカードを手

札に戻す！！俺は手札の『BF 漆黒のエルフェン』を墓地に捨て、お前の伏せカードを手札に戻す！！バウンス・ブリザード！！」

陸がそう命令すると、『ブリューナク』は再び咆哮した。そしてその咆哮と同時に空雅の伏せカードは凍りつき、無数の氷の欠片となって手札に戻ってしまった。

「へえ……。伏せを警戒してきたか。でも……。僕の伏せカードがブラフだったら？という考え方はしなかったのかい？」

「阿呆が！！俺が何も考えずに手札を捨てたと思うなよ！！墓地の『大旆のヴァーユ』の効果発動！！」

『BF 大旆のヴァーユ』レベル1 闇 800/0 鳥獣族・
チューナー/効果

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードをシンクロ素材とする事はできない。このカードが墓地に存在する場合、このカードと墓地に存在するチューナー以外の『BF』と名のついたモンスター1体をゲームから除外し、そのレベルの合計と同じレベルの『BF』と名のついたシンクロモンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

「『ヴァーユ』は墓地に存在するこのカードとチューナー意外の『BF』を除外することで、そのレベル合計と等しいレベルの『BF』シンクロモンスターをエクストラデッキから特殊召喚できる。俺は、『エルフェン』と『ヴァーユ』を除外！！」

陸がそう説明しながら『エルフェン』と『ヴァーユ』を墓地から取り除くと、フィールドに半透明の2匹が現れ、突然浮かび上がった。

た『ヴァーユ』の旗模様と共に合計7つの星になった。

「吹き荒れる黒き風よ、今勇猛なる翼となりて戦場を駆けろ！！
シンクロ召喚！！羽ばたけ、『BF アーマード・ウイング』！！」

陸の口上が終わると共に7つの星は眩く輝き、その光の中から全身に黒い装甲を纏った人型に近い『BF』がすさまじい風と共に姿を現した。

『BF アーマード・ウイング』レベル7 闇 2500/15

00 鳥獣族・シンクロ/効果

『BF』と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードは戦闘では破壊されず、このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。このカードが攻撃したモンスターに楔カウンターを1つ置く事ができる（最大1つまで）。相手モンスターに乗っている楔カウンターを全て取り除く事で、楔カウンターが乗っていたモンスターの攻撃力・守備力をこのターンのエンドフェイズ時まで0にする。

「よし！！一気に2体のシンクロモンスター……。2体で攻撃できれば空雅のライフを大きく削れる！！」

「そうだね……。でも、油断は出来ない。時戸さんにはどんな劣勢も1000のライフでひっくり返す『裁きの龍』がいる。最後まで気は抜けないよ。」

1ターンで場に並んだ攻撃力2500と2300のシンクロモンスターを見て、すでに陸の勝利をほとんど確信している修也と、慎重な考えの翔子がそう会話を交わしているのを耳で拾いながら、陸

はフンと鼻を鳴らした。

(フン……。相変わらず春山は心配性だな。だが、俺のこの最後の手札は『BF』の攻撃力を1400アップさせる『カルート』。攻撃が通れば合計ダメージは6200……。奴のライフを削りきれぬ!!!)

頭に浮かんだ計算式を2度確認し、このターンで空雅のライフを0に出来ると確信した陸はそのままバトルフェイズに入った。

「最後のバトルフェイズだ……!!! 『氷結界の龍 ブリユーナク』でプレイヤーにダイレクトアタック!!! ヘイルストーム!!!」

陸がそう命令すると『ブリユーナク』はまた高い泣き声を上げて泣き、口からものすごい吹雪を空雅に向けて発射した。迫り来る吹雪を見た空雅は、そっと手札のカードを手に取った。

「ダイレクトアタックが宣言されたとき……。このモンスターは手札から特殊召喚できる!!! 来い、『バトルフェーダー』!!!」

空雅がそう言いながらカードをディスクに叩きつけると、振り子のよつなものをモチーフにしたモンスターがフィールドに姿を現した。

『バトルフェーダー』 レベル1 闇 0/0 悪魔族・効果

相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動する事ができる。このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する。この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

「なっ……！！」バトルフェーダー』だと？」

フィールドにいきなり現れたモンスターを見て、陸は驚愕の声を上げた。

「フフフ……。そうさ。『バトルフェーダー』はこの効果で特殊召喚したとき、バトルフェイズの終了を告げる鐘を鳴らす。つまり、君のモンスターは攻撃できない！！」

空雅が得意げに説明すると、『ブリューナク』は攻撃を中断し、吐いた吹雪のブレスも空雅に直撃する直前で四散してしまった。

(ちっ……。迂闊だった！！目の前の勝利に目がくらんだか……。くそっ！！)

陸は自分のふがいなさに思わず歯噛みした。メインフェイズ2に移行しても、今の手札ではブラフとなるカードを伏せる事は出来ない。それを確認した陸はエンドフェイズに移行した。

「くそっ……。ターンエンドだ！！」

「フフフ……。成す術無しか……。僕のターン、ドロー！！」

空雅はデッキから引いたカードを確認すると、少し目を細めてそのカードを見つめた。そして陸の方を見ると空雅はニヤリと笑った。

「フフ……。中々楽しませてもらったよ。墨染陸。でも、そろそろ終わりにしないとね……。さて、僕の墓地には既に『ライトロード』は4種類以上。『裁きの龍』を特殊召喚！！」

空雅がそう言ってニヤリと笑い、カードをディスクに置くと修也のときと同じように、空雅のフィールドに雷が落ちた。そして再び眩いばかりの閃光が辺りを覆い、体中から神々しい光を放つ龍が姿を現した。

『裁きの龍』レベル8 光 3000/2600 ドラゴン族・効果

「ちっ……。来やがったか……。」

空雅のフィールドに堂々と佇んでいる純白の龍を見つめて、陸は舌打ちしてからそう呟いた。『裁きの龍』の効果を防ぐカードが陸には無い。このターンで一気に劣勢に立たされる事は目に見えていた。

「フフ……。顔色が変わったな。『裁きの龍』の効果発動！！1000のライフを代償に、フィールドのこのカード以外のカードを全て破壊する！！ホーリー・ジャツジライト！！」

空雅がそう叫ぶと『裁きの龍』は天に向かって一声吼え、断罪の光を幾つも天から呼び出した。その光を浴びた陸の『アーマード・ウィング』と『ブリューナク』、そして空雅の『バトルフェーダー』はあっけなく破壊されてしまった。

「さあて、邪魔者はいなくなつた。これで君に思い切り攻撃することが出来る……。でもその前に、君がさつき戻した伏せカードを見せてあげるよ。魔法発動！！『死者蘇生』！！」

「『死者蘇生』！？くそっ……。ブラフだったか！！」

『死者蘇生』魔法カード

自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

「フフ……。驚くことは無いじゃないか。ブラフで伏せるなんてよくあることだ。さあ、僕が蘇生するのは『氷結界の龍 ブリユーナク』だ!!」

空雅がそういうと同時に、先ほどまで陸のフィールドに存在していた『ブリユーナク』は空雅のフィールドに特殊召喚され、主である陸を見据えると氷同士が擦り合っているような泣き声を上げた。

「くそ……。『ブリユーナク』が……。」

「フフ……。どうだい？自分のモンスターを盗られた気分は？さあ、バトルフェイズ!!まずは『ブリユーナク』による攻撃だ!!」

空雅がそう命令すると『ブリユーナク』は高い泣き声を上げ、かつての主である陸にためらいもなく猛吹雪を吹きつけた。

「ぐあああああ!!!!!!」

陸 LP8000 5700

陸は『ブリユーナク』が発した吹雪をもろに受け、予想外の衝撃に思わず方膝をついた。

(くそ……。これが修也の受けた衝撃か……。凍てつくような氷の冷たさ……。痛いほどに肌を刺す強風……。まるで本当の吹雪だ……。)

陸はそう思案すると、荒い息をつきながら立ち上がって空雅を睨みつけた。対する空雅はニヤリと笑って口を開いた。

「フフ……。どうだい？これが『精霊石』の力さ。デュエルにおいて、その力は最大限に発揮される。それ以外の場面では短時間の発動しか出来ない……。まあ、いずれは自由にこの力を使えるようにするんだけどね……。」

「ふざけるな！！そんな事絶対にさせない……。俺が……。いや、俺たちがやらせない！！」

空雅が静かに言い放った言葉に対して、激昂した修也がそう叫び返した。するとその声を聴いた空雅は顔から笑いを消してゆっくりと修也の方を向いた。

「分からない子だな……。僕に一度敗北し、あまつさえその友人さえも巻き込んでいるのに。変わり行く世界に身を任せていた方が楽だということにまだ気付かないのかい？なら、教えてあげよう！！君の友人がもたえ苦しむ姿をもって！！さあ……。『裁きの龍』よ！！愚かなる反逆者に裁きを下せ！！ジャッジメント……。」

「そこまでだぜ！！！！」

空雅が勢い良く攻撃を宣言した瞬間、何者かの叫び声がそれを遮った。修也は勢い良く声の主の方を見て、喚起の声を上げた。

「光彦！！戻ってきたのか？」

八八八八八八八八！！！！！！」

空雅は光彦の言葉を聞くと、突然狂ったように笑い始めた。その様子を見ていた5人は驚きと気色悪さで思わず後ずさりした。

「おい……。何がおかしいんだよ？」

孝雄が若干引きつった声で言うと、空雅は笑いを必死に堪えながら口を開いた。

「ククク……。ああ……。すまない。クククク……。どうやら君達を買い被り過ぎていた様だね。墨染陸は僕に本気を出させるし、志水光彦は相当の実力を持つ研究員を破った。そして草薙修也は、一度敗北しても闘志の炎を消してはいない！！」

空雅はそこまで言うと、顔に狂気染みた笑いを貼り付けて腕を大きく広げて見せた。

「これほど面白い事は無いじゃないか！！簡単だと思っていた計画に、これほどまでの邪魔が入るんだ！！素晴らしいよ！！君達をどう排除しようかと考えるだけで背筋がゾクゾクする！！」

「理解不能だぜ……。邪魔も入らずにその計画とやらがホイホイ進んだ方がうれしいんじゃないか？」

光彦が信じられないという表情をしながら空雅に言うと、それを聞いた空雅はふと目を落として先ほどとは違う静かな声で言った。

「フ……。僕の感性は君達には理解できないだろう。いや……。理解して欲しいとも思わないかな……。さて、そろそろ時間だ。

「空雅はそう言うのと左腕に付けていたデュエルディスクに手を伸ばし、その電源を切った。それと同時に、展開されていたソリッドビジョンは消滅してしまった。それを確認した陸は、いきなり空雅を睨みつけて怒鳴った。」

「貴様どういうつもりだ？デュエルはまだ終了していないぞ！！」
「……………どういうつもりだって？」

陸に噛み付かれた空雅は、陸に冷たい視線を向けるとニヤリと笑った。

「何を言っているんだ……。勝負はもうついたようなものじゃないか。手札は1枚。恐らく発動条件があっていない魔法かモンスター。僕のフィールドには『裁きの龍』と『ブリューナク』……。手札は0だけど、ほとんどの場合に対して対処できる。何を引けば勝てたんだい？」

「ぐっ……………」

空雅に冷たく言われた陸は、短く唸って押し黙った。確かに陸の最後の手札の『カルート』では『BF』を引いていても1体戦闘破壊できるだけ。返しのターンでどちらかに除去されて終了だ。除去系の魔法、罠を引いていても陸のデッキに入っているのは『地砕き』、『次元幽閉』等の単体除去系カードが多い。2体一気に倒せるのは使用済みの『激流葬』位だった。

「フフ……………まあ、僕に本気を出させた事は誉めてあげるよ。」

一応ね。さて、草薙修也とその友人諸君。君達にプレゼントだ……」

黙りこくった陸から目を離れた空雅はそう言って、スーツの内ポケットから真っ白な封筒を取り出して自分の足元に置くと、修也の方を向いて口を開いた。

「さて……説明しよう。これは見ての通り封筒。この中には、今週末に開催される時戸研究所主催のデュエル大会の招待状が入っている。」

「招待状？」

空雅の口から出てきた意外な言葉に、修也がキョトンとしながら聞き返すと空雅はそうだと言う風に頷いた。

「ああ、そうだ。本当は『六星団』の覚醒者を探すためのものなのだけど仕方ない。それを君達に上げよう。最も、参加するかしないかは君たち次第だ。これから先、僕の計画を阻止したいと思うのなら日曜日、その中に入っている招待状を持って常盤ビッグスタジアムに来るといい。だけど、もしその気が無いのなら開封しないでそのままポストに投函してくれ。良いね？では……。さらばだ！」

空雅はそういうと、スーツからカードを一枚取り出した。チラリと見たところそのカードは『緊急テレポート』だと分かった。

「つつ……!!おい!!」

取り出したカードに気付いた修也はそう叫んだが既に遅く、空雅

はヴンという何とも言いがたい音と共に消えてしまった。

「……逃げたの？」

「いや、いったん退却してとこだろっぜ。」

沈黙を破った翔子の呟きに対して、光彦はそう返すと空雅が残していった白い封筒をヒョイと拾い上げた。

「さて……こいつはどうする？ 貰っておくか？」

「いや、その前にやることがある。」

光彦が封筒を見せびらかすように振りながら言つと、長らく沈黙を守っていた陸がいきなり口を開いた。

「修也。説明してくれないか。お前の持っているそのペンダントや、アイツの言っていた『精霊石』の事についてな……。」

陸が静かにそういうと、孝雄、光彦、翔子そして陸の視線が修也のほうへと集まった。その視線を受けた修也は、慌てて口を開いた。

「ちよつと待ってくれよ……。正直、これは俺の問題なんだ。さっきのデュエル見たる？ アイツの力は、デュエルを現実のものに変える。みんなを巻き込みたくない！」

修也が4人に向かってそう言つて見せると、その言葉を聞いた孝雄は眉をひそめて口を開いた。

「おいおい……。何水臭い事言つてんだよ！！俺とは幼稚園か

らの付き合いじゃないか！！修也の問題は俺の問題でもあるんだって！！」

「でも……………」

修也が口ごもると、今度は陸が口を開いた。

「気にするな修也。俺はついさっき、必ず時戸を倒して見せるとこの胸に誓った。もう後戻りする気は……無い！！」

「孝雄……………陸……………」

修也がそう呟いて2人を見ていると、後ろから光彦と翔子も口を挟んできた。

「良いんだぜ？遠慮なく言っちゃまって。俺はアイツの計画なんかに興味は無い。つーか興味を持ちたくも無いが、仲間が困っているのを放つては置けないからな！！」

「そうだね……………。私も志水君と同じ考え。出来ることなら草薙君を助きたい。」

「光彦……………春山……………」

修也はそう呟くと、思わず涙ぐみそうになって下の方を向いた。

（こんな仲間がいるなんて……………。俺は、なんて幸せなんだろう……………）

修也はそう思い、仲間に全てを打ち明ける決意を固めるとキッと

正面を向いて口を開いた。

「分かった。じゃあ、皆に全部話す！！皆、光彦の持つてるペンダントに触れてみてくれないか？」

修也がそういうと、光彦は不思議そうな顔をしてペンダントを前に突き出し、孝雄、陸、翔子の3人はそのペンダントに触れた。そして4人の視線が修也の方に集まるのを確認すると、修也はデッキの中からカードを1枚取り出して呟いた。

「出てこい……。『総剣指令ガトムズ』！！」

『御意！！』

くぐもった声と共に、『総剣指令ガトムズ』は修也の声に答えてその姿を現した。その姿を目にした4人は驚いて目を大きく見開いたり、後ずさりしたり、小さく声を上げたりしたが、決してペンダントから手を離す事はしなかった。

「これ……。ソリッドビジョンじゃない……。よな？」

孝雄が驚いた表情のまま恐る恐る『ガトムズ』にそういうと、『ガトムズ』は重々しく頷いて見せた。

『いかにも……。私はこの世界と『精霊界』の危機を救うため、修也の元に現れし精霊、『総剣指令ガトムズ』だ……。』

「ひえ……。本当かよ。アニメの世界みたいだ……。」

光彦が肩をすくめながらそういうのを聞いて、修也は目を伏せな

がら口を開いた。

「残念だけど、今から話す事はアニメじゃなくて現実で起きてることなんだ。だから、真剣に聞いてくれないか。」

修也はそう前置きして、つい二日前に『ガトムズ』から聞いたばかりの事を一から話し始めた。

この世界とは別に存在している『精霊界』の事、そして『精霊界』に突然現れた人間の事と二つの世界の間に変が出来たこと、そしてその歪を修正するために選ばれた6人の戦士の中に修也が選ばれたことと、時戸空雅がどんな事を企んでいるかを、修也はなるべく分かりやすいように話した。

4人は修也の話が終わるまでじっと黙って聞いてくれていた。そして、修也の話が終わると陸がゆっくりと口を開いた。

「成る程……。簡単に言うと世界征服が奴の目的か……。」

「ああ……。紛争をなくすとか綺麗な言葉で着飾ってはいるけどな!!！」

陸の言葉を聞いた孝雄も、怒りに満ちた顔でギュツと握り拳を作った。

「そして、それを止めるのが草薙君の使命って訳ね……。」

翔子の言った一言に、修也は頷いて見せた。

「ああ……。そうなんだ……。俺は、アイツの計画を阻止し

なくちゃならないんだ。それでも、俺と一緒に戦ってくれる覚悟があるのか・・・？」

「覚悟・・・ね・・・。ん、いい事思いついた。こうしようぜ？」

修也の問いかけに答えた光彦は、空雅が残っていた5枚の封筒を拾い上げて広げて見せた。

「こいつはアイツの残して言った招待状だ・・・。どうだ？我々の中で本当に奴と戦う気がある奴だけこの封筒を持っていくというのは・・・。とりあえず、俺は1枚取ろう。いい暇つぶしになりそうだぜ。」

光彦はそう言って1枚封筒を取ってブレザーのポケットに押し込み、残りの4枚を修也達の前に広げた。

「・・・分かった。とりあえず俺は貰う・・・。」

光彦が差し出した封筒を見て、修也は真っ先に封筒を取った。そして修也は封筒を取っていない3人の方に眼を向けた。

「面白いな・・・。もちろん俺は乗るぜ。」

「俺もだ・・・。俺は修也を助ける!!」

それを見ていた陸と孝雄も、一斉に封筒を取った。

「・・・この空気。私も貰わなきゃかな。」

翔子もそう言って困ったように微笑んで見せると、最後の封筒を取った。

「決まりだな……。」

5人がそれぞれ手に取った封筒を見ながら、陸がそう呟いた。

「ああ……。でも、本当に良いのかよ？」

陸の言葉に頷いてから、修也がもう一度4人にそう聞いた。だが、4人の意思は変わらない様だった。

「何度も言わせんな。俺はお前を助ける！！どんな強い敵が来ても、お前と一緒に戦う！！」

「俺もだ……。俺は必ず時戸を倒す！！このままなんて、俺のプライドが許さん！！」

「へへあ……。気にすることは無い。いい暇つぶしになりそうだ。」

「フフ……。面白いじゃない。それに、空雅さんの自分勝手な計画は少し気に入らないしね……。」

4人はそれぞれにそう言って、修也の方を向いた。それを受けた修也は、ニコリと微笑んで見せた。

「ありがとうみんな……。それじゃ、そろそろ戻ろう！！もうホームルームが始まっちゃうしさ……。科学部室に行かなきゃ！！」

修也はそう言って背中を向けて、急いで歩き出した。目にあふれ出てきていた涙をみんなに見られなくなかったからだ。

「フフ……。せっかちな。まあ、良いや……。私達も行きましよう。」

「だな……。ああ、俺は真つ先にホームルームに行くぜ。担任がアホ丸出しだよ。全員揃わないと始めないんだぜ。つたく……。あの柔道部の顧問は……。」

翔子と光彦もそう言いあいながら、修也の後に続いた。

「やれやれ。これから忙しくなるな。」

陸もそう呟いて3人の後に続こうとした。だが、立ち去ろうとする陸の前にいきなり孝雄が立ちふさがった。

「ん？どうした。」

「どうした……。じゃ無いだろ？」

陸が少し目を細めて孝雄を睨むように見たのに対し、孝雄も負けじと険しい表情をして陸の顔を見返した。

「教えてくれよ。さっき研究員の所に俺じゃなくて、俺より弱い光彦を向かわせた理由をよ。」

「ん？ああ、そのことか。」

陸は孝雄の顔から目をそらさずにそういつと、困ったような表情をして頭をかいた。どうやら話すのをためらっているようだ。その表情を読み取った孝雄は、すかさず口を開いた。

「その表情じゃ、特に理由もなく光彦を向かわせたみたいだな。全く、どうしてくれんだよ。もし光彦が負けてたら、あのペンダントは戻ってこなかったんだぞ？俺が行っていれば、確実に倒せたのに……!」

「孝雄……それは違うぞ。」

余りにも孝雄が不平を述べるので、陸は表情を再び険しくして孝雄のほうを見た。

「全く……。そんなに理由を知りたいのなら教えてやろう。余り言いたくなかったんだけどな。春山と光彦は、入部試験のときに手加減していたんだ。」

「えっ……?」

陸の口から発せられた言葉を聞いて、孝雄はいきなり強い衝撃を体に喰らったような顔をした。そして、先ほどとは違う覇気のコモっていない声で口を開いた。

「は……ハハツ……。おいおい陸。冗談は止めてくれよ。良い言い訳が思いつかないからってそれは無いだろ?」

「いや……。本当だ。嘘だと思っなら、今日デツキを調整して明日光彦と戦ってみたらどうだ？俺はもう行かせて貰うぞ。」

衝撃を受けている孝雄に向かって陸はそう言い放つと、孝雄の隣を通ってさっさと立ち去ってしまった。一人残された孝雄は、頭の中で陸の言葉を反芻していた。

（手加減していただって？あいつ・・・・・・・・。なめたマネをしやがって・・・・・・・・。）

「くそっ・・・・・・・・。やってやるよ！！証明してやる！！俺の方が強いってな！！」

孝雄はそう決意を固めると、陸のあとを追って勢い良く駆け出して行った。

第7話 不屈の闘志!!!『スクラップ』デッキ

常盤高校に講演に行った日の翌日、いつも午前8時ごろまで自室で眠っている空雅は珍しく研究室に居た。その理由は、週末に行われる常盤市デュエル大会の準備のためであった。会場の間取やデュエルフィールドの設置準備のための打ち合わせのため、会場となる常盤市ビッグスタジアムに向かわなければならなかったのだ。

「ふう……。これでよし。」

昨日と同じ黒いスーツに身を包み、鞆に必要な書類を入れ終わった空雅はそう呟いて息をついた。後は連れの研究員の迎えを待つだけだ。そう認識した空雅は、鞆をパソコンの隣に置くと肘掛け椅子にどつと腰掛けた。

(それにしても……。『六星団』をあぶりだすためにわざわざこれほどの舞台を用意して良かったのか……?)

空雅はそう思案すると、顎に手を当てた。確かにそうだ。この大会の計画は、『六星団』が1人も発見されていなかったところに発案し、採用したものだ。だが、つい二日前にマリアが最初の『六星団』をいとも簡単に見つけ出した。このまま行けば、マリアが2人目、3人目の『六星団』をも簡単に見つけてくれるのでは無いかと思っていたのだ。だが空雅は、そこまで考えて首を振った。

(いや……。考えるのは止そう。マリアばかりを頼りにするのは申し訳ない、それに……)

空雅はそこまで考えると、無意識のうちに方頬を歪めて笑った。

（いい機会か……。草薙修也と、危険因子の墨染陸、志水光彦、そして残り2人の友人の実力を見るには……。それに何より、あの男が墨染と戦いたがるからいまさら中止というわけには行かないだろうな……。）

空雅はそう思いながらふと壁に掛けてある高級そうな時計を見た。そろそろ研究員が迎えに来る時刻だ。それを確認した空雅が立ち上がると、不意に研究室の扉がノックされた。

「ああ。分かってる。今行くよ。」

空雅は研究員の迎えが来たと思い、靴を取り上げると早足にドアへと向かった。だが、空雅が扉にたどり着く前に扉は乱暴に開かれた。そうして入り口に姿を現した人間を確認した空雅は、思わずびたりと足を止めた。

「朝早く失礼します……。」

戸口に立っていたのは空雅の迎えに来るはずの白衣の研究員ではなく、眠たそうな目をしたパーカー姿の青年だった。青年の口調は丁寧だったが、表情は硬く何か不満げな様子だった。

「ああ……。構わないよ。どうせ、これから出かける予定だったしね。ええと……。君は確か……。」

「蒼汰です。岡崎蒼汰。松岡信二さんの配下として働いています。」

空雅が口ごもっていると、蒼汰と言うらしい青年はニコリとませ

ずに自己紹介した。青年の言葉を聞いた空雅は、ニコリと微笑んで口を開いた。

「ああ、そうだ。信二の手下にそんな子がいたな。で、僕に何か用かい？」

空雅が青年に向かってそういうと、青年はもちろんだという風に頷いた。

「ええ。俺がここに来たのは、昨日の貴方の『六星団』への対応に不満があるからですよ。」

「不満？」

蒼汰の口から出た意外な言葉に空雅が思わず聞き返すと、蒼汰は大きく頷いて後を続けた。

「ええ、そうです。空雅さん……。なぜ、草薙修也のような雑魚デューリストに『六星団』の証を返したのですか？貴方の部下の연구원から話は聞きましたよ。あの状況なら、力づくで『六星団』の証を奪って帰ってこれたのに……。なぜ、奴らを試すような真似をしたんですか？」

蒼汰は自分の意見を述べるといふよりは、空雅を避難するような口調でそう言った。それを聞いた空雅は、表情を崩さずに返した。

「フフ・・・悪いね。僕は、彼らの实力を知りたかったのさ。1回戦ただけでは分からないからね。だからこそ、彼らにチャンスを上げた。ご丁寧に招待状まで渡して。まあ、これで僕等に楯突こうとする輩も分かるしね。『六星団』の証なんていつでも奪い取れ

るし。何もあそこで無理に奪う必要な無かったんじゃないかな？」

「なっ……。試す……。ですって？」

空雅の言葉を聴いて、蒼汰は信じられないというような表情をすると少し語調を強めて後を続けた。

「そんな必要ない！！失礼ですが、講演のデュエルは見物させてもらいました。あいつの実力はたいしたものじゃない！！我々の足元にも及ばない！！あんな奴等、俺一人で壊滅できる！！」

蒼汰がそう強く言うのを見て、空雅の微笑は苦笑に変わった。

「困ったな……。そんな事言われても、もう彼らにそう話を通してしまったんだよね。」

「だったら……。！！！」

空雅がそういうと、蒼汰はいったんそう言っ言葉を切り、一度呼吸を整えて続きを話し出した。

「俺が証明してやりますよ！！あいつ等が取るに足らないデュエリストだということを！！今日はそのために来たんですから！！そしてもし、俺が『六星団』の証を持って帰ってきたら、俺を『六亡星』の一員に昇格させてください！！！」

「フフ……。大した威勢だね。分かったよ。」

蒼汰がすごい剣幕で放った条件を、空雅はあっさりと飲んだ。そして空雅はもう一度部屋の時計に目をやってから、蒼汰に向かって

言った。

「お望みどおり、君の力で証明してくるといい。草薙修也が弱者だと思ふのならね。そしてもし、君が『六星団』の証をその手に持って帰ってきたら約束どおり君を『六亡星』に引き上げてあげよう。さて、そろそろ僕は出かけなければならぬ。君の健闘を祈るよ。蒼汰。」

「はい。ありがとうございます。草薙修也など瞬殺し、必ずここに戻ってきます。」

蒼汰がそう言って軽く頭を下げるのを見届けて、空雅は鞆を持って研究室から出て行き、廊下に出るとすぐ近くのエレベーターの中に姿を消した。暗い廊下には、蒼汰1人が取り残された。

「フン……。敬語は堅苦しくてやってられないぜ。」

空雅の姿が消えたのを確認した蒼汰は、そう呟くと何かを探すようにきよろきよろとあたりを見渡した。そして、空雅の研究室の向かい側の倉庫と書かれた扉に目を留めると、そこに向かって声を発した。

「おい、熊谷！！久遠寺！！終わった。もう出てきて良いぞ。」

蒼汰がその声を掛けると、扉が突然ガチャリと開いた。そしてその中から、2メートルはあるつかという巨漢でピチピチのボクサーパンツと熊の着ぐるみの頭部分だけを被った明らかに変態ルックな男と、腰まで伸びた黒髪が特徴の中性的な顔立ちの少年？が姿を現した。

「貴様……。気安く私の名を呼ばないでくれるか？女性はともかく、男に呼ばれるのは虫唾が走る。せめて、熊谷さんが熊谷様にしろ……。」

扉から出てきた巨漢の男は、出てきて早々不満そうな口調でそう言った。それを聞いた蒼汰は熊谷というらしいその男を睨んだ。

「ああ？おまえ、俺より実力が無いくせに言ってくるじゃねえか。つーかお前、空雅の野郎に学校とかそういうところ行くの禁止されているんだろ？内緒で連れて行ってやるだけ、有難いと思え！」

「ちつ……。フン！何が有難いと思えだ……。私が公共の場への出入りを禁止されていなければ、貴様なんぞに頭を下げなくても済んだものを……。」

熊谷が悔しげにそういうのを聞いて、もう一人倉庫に隠れていた長髪の久遠寺が呆れた様に言った。

「はあ……。熊谷。お前は日ごろの行いが悪いからつまらない規制を掛けられるのだ。ボクを見習え！！お前もボクのように騎士道精神を大事にすれば、空雅様に足枷を掛けられる事も無くなるのだ！！！」

「何だと？私も常に紳士的な振る舞いをしているではないか！！」

熊谷がすごい剣幕でそういうと、久遠寺も熊谷をキツと睨み返して口を開いた。

「私“も”だと？ボクをお前と一緒にするな！！大体、お前の紳

士には「へんたい」というルビが振られるじゃないか!」

「おい……。うるせえ2人も!!それくらいにしる!!」

言い争う2人を見かねた蒼汰が、そう鋭い声を発した。怒鳴られた二人は、その場でぴたりと口論を止めた。

「ったく……。お前等2人、そんなんじゃ勝てる奴にも勝てなくなるぞ!!とりあえず、今日は4時を過ぎたら常盤高校に向かう。俺は、草薙修也を速攻でぶっ倒して『六星団』の証をいただく。お前等2人は、好きにして良いぞ。」

蒼汰がリーダーシップを取ってそう言ったのを聞くと、熊谷は先ほどの事も忘れて着ぐるみの下で怪しげな笑みを漏らした。

「ソフソフソフ……。私は『六星団』や他のデュエリストなどに興味は無い……。ただ、私の楽園への突入を拒むものを、全て叩きのめすだけだ!!」

「ボクは誰でも構わない。対峙した敵と正々堂々戦うぞっ!!」

熊谷の声を聴いて、久遠寺もそう言ってニヤリと笑った。そんな2人を見た蒼汰は満足そうに頷いた。

「ハン……。2人もやる気満々か。よろしい、じゃあ4時までには各々デッキ調整でもしている。くれぐれも、『六亡星』の上司にばれないようにな……。じゃあ、解散だ!!」

「フン……。そんな事分かっている。隼人様に迷惑は掛けられないからな。」

「むっ……。熊谷、お前がいるせいでわざわざ隠すんだからなっ
。。。」

蒼汰の言葉を聞いて、熊谷と久遠寺はそう言い残してエレベータ
ーの方向に向かった。蒼汰はそれを見ながら握りこぶしを作った。

（待つてる……。『六亡星』の奴等に見せ付けてやる……。こ
の俺の強さを！！）

蒼汰はそう決意を固めると、熊谷と久遠寺が向かった方向とは反
対側の方向に歩いていった。

「はあ〜。おっす。」

午後4時、いつもどおり科学部の部室に来た修也は浮かない声で
ため息と共に部室のドアを開けた。

その声を聴き、既に部室に来て読書にいそしんでいた陸は顔を上げ
て修也の方を見た。

「どうした修也。朝から思っていたが、今日はやけに元気がない
な。」

陸が文庫本を閉じながら修也にそういうと、修也はうんざりとした様子で言った。

「どうしたも何も・・・昨日の講演会の事さ。」

修也はそういうと、鞆を手近な机において木の椅子にドサリと腰掛けた。

「空雅に負けたのが夜になって気になってさ・・・ほとんど寝れなかったんだよ。それで学校に来たら質問攻め。クラスメイトの奴はもちろん、他のクラスの調子者までドンドン質問して来るんだ・・・それが2時間目終わりまで続いてて本当、参ったよ。っていうか、陸だって今日ずっと上の空だったろ？」

修也がそう説明してから陸に聞き返すと、陸はちよっと目を見開いてから頷いて見せた。

「ああ、まあな。お前と似たようなことを考えていた。今の俺に足りない強さというものをな。気付かれているとは思っていなかったがな。」

陸はそういうと窓際まで言って、雲ひとつない青空を見上げてため息をついた。

「まあ・・・そこまで悩んでも結論は出なかった。だから途中から気にしないことにした。強さなんてものは、戦っているうちに身につくものだと考えたいんでな・・・。」

「ああ。そうだよな！！強さっていうのはデュエルの中で身に付

けていくものだ、俺は思う！！今は空雅に勝てなくても、俺はいつか必ず倒してみせるぜ！！」

修也が握りこぶしを作りながらさういうと、陸は修也の方に視線を戻してフツと笑った。

「修也。悪いが最初に空雅をリベンジするのは俺だ。それを忘れてもらっては困るぞ。」

陸が修也に向かってさういうのとはほぼ同時に、部室のドアがガラガラと勢いよく開かれた。2人が話を中断して戸口の方を見ると、副部長の光彦が歌を口ずさみながら部室に入ってくるのが確認できた。

「強く、なるのだ。勝利を手にするためは」

光彦は歌いながら2人の前まで来ると、チャツと右手を上げて挨拶した。

「やあ。お二方。シリアツースな様子だったが調子はどうだい？」

「よお、光彦。お前は元気そうだな。」

修也がニコリと笑いながらさういうのを傍らで聞いた陸は、フツと軽く笑って口を開いた。

「ああ、元気だろうな。こいつは俺たちと違って余裕で研究員に勝ったんだからな。何も悩むことがないんだろう。」

「ああん？そんな事は無いぜ。」

陸がとげのある言葉を吐くと、光彦は若干眉をひそめて反論した。

「俺だっているいろいろ考えたさ。お前の言うとおり、俺は勝つたけどアイツが下つ端だつて事くらいは俺にも分かる。だから、俺も昨日自分のデッキを見直したりしたんだぜ？」

光彦はいきなりまじめな顔をしてそういったが、余裕で勝つたというところは否定しなかった。修也がそのことを突っ込む前に、陸が口を開いた。

「ほあ……。そうか。それよりも光彦、孝雄に呼び出されているようだが部活に来て良いのか？」

陸が面白そうに笑いながら言うと、光彦はちょっと驚いたように目を見開いた。

「おいおい……。何で知ってんだ？あいつ単独で俺のところに来ただけど……。まあ、良いか。とりあえず、俺がここに来たのは修也。お前への挑戦者を連れてくるためだぜ。」

「挑戦者？」

修也がそう聞き返すと、光彦は頷いて扉の方を向いた。

「よし、入ってきて良いぜ。」

光彦がその声を掛けると、扉の向こうから黒縁の眼鏡をかけた長身の男子生徒が科学部室に入ってくるのが見えた。生徒は修也の前まで歩いてくると口を開いた。

「始めまして。1年2組の高井圭一だ。昨日のお前のデュエルを見て、感動したぜ！！なんせ、プロデュエリストとして期待されていた時戸空雅をあそこまで追い詰めたんだからな！！そこで頼みがあるんだが、お前さえよければ俺とデュエルしてくれないか？」

高井圭一はそこまで一息で言うと、修也の目をじっと見た。デュエルを断る理由の無い修也はもちろんすぐに頷いた。

「ああ、もちろんさ！！質問はもううんざりしたけど、デュエルなら大歓迎だ！！」

修也はそう言うと鞆の中からデュエルディスクを取り出し、左腕に装着した。それを見た光彦はニヤリと微笑んで口を開いた。

「両者合意と見て良いな？じゃあ、俺はそろそろ行くぜ。孝雄の奴に、校舎裏に呼び出されてるんな。」

光彦はそう言い残すと鞆の中からデュエルディスクを取り出して腕につけ、鞆をその場において廊下に出て行った。その背中を見届けてから、修也は圭一のほうに向き直った。

「よし、準備は出来てるな！！じゃあ始めよう！！陸、審判頼む！！」

「ああ、負けないからな！！」

2人はそう言いあって距離を取ると、ほぼ同時にデュエルディスクを起動した。

「さて……。お互い準備は良いな？」

デュエルディスクを胸の前で構えている2人を交互に見て、陸はそう言うのと2人が向かい合っているスペースのほぼ中間に立った。

「よし、それでは始めるぞ……。デュエル、開始だ!!」

陸がそう宣言すると同時に、互いのライフカウンターに8000の文字が表示された。そして、点滅したのは修也のディスクのランプ。先攻は修也だ。

「行くぞ……。俺のターン、ドロー!!」
『X セイバー エマーズブレイド』を攻撃表示で召喚!!」

修也がカードを勢い良くディスクに置くと、昆虫の姿をした『X セイバー』がフィールドに姿を現した。

『X セイバー エマーズブレイド』レベル3 地 1300/
800 昆虫族・効果

「そして俺はカードを2枚セット。ターン終了だ!!」

「よし、俺のターンか。ドロー!!」

圭一は修也がターンを終了するのを見て、すぐさまデッキからカードをドローした。そして手札を見つめて少し考えるようなそぶりを見せると、ゆっくりと手札のカードを手に取った。

「行くぜ。俺は魔法カード『スクラップ・エリア』発動!!」

『スクラップ・エリア』魔法カード
自分のデッキから『スクラップ』と名のついたチューナー1体を
手札に加える。

「俺はこの効果で、『スクラップ・ビースト』を手札に加える！
！そして、そのまま通常召喚！！」

圭一がデッキから手札に加えたモンスターをすぐさまディスクに
置くと、使い古された機械製品で作られたような四足歩行の獣族モ
ンスターが現れた。

『スクラップ・ビースト』レベル4 地 1600/1300
獣族・チューナー/効果

フィールド上に表側守備表示で存在するこのカードが攻撃対象に
選択された場合、バトルフェイズ終了時にこのカードを破壊する。
このカードが『スクラップ』と名のついたカードの効果によって破
壊され墓地へ送られた場合、『スクラップ・ビースト』以外の自分
の墓地に存在する『スクラップ』と名のついたモンスター1体を選
択して手札に加える事ができる。

「『エマーズブレイド』はリクルート効果を持つモンスター。攻
撃したら厄介だ。俺はカードを2枚伏せて、ターンを終了する。」

『エマーズブレイド』の効果と伏せカードを警戒したのか、圭一
は攻撃せずにターンを終了した。

「よし、俺のターンか。ドロー！！行くぜ！！魔法カード、『増
援』発動！！」

『増援』魔法カード

デッキからレベル4以下の戦士族モンスター1体を手札に加え、デッキをシャッフルする。

「俺はこの効果で、『X セイバー ガラハド』を手札に加える！！そして、そのまま通常召喚！！」

修也は『ガラハド』をデッキから手札に加えると、すぐさまデッキに置いた。すると、修也のデッキのアタッカー、仮面を被った戦士『ガラハド』が姿を現した。

『X セイバー ガラハド』レベル4 地 1800/900
戦士族・効果

2体のモンスターを展開した修也は、すぐさまバトルフェイズに突入した。

「行くぜバトルだ！！俺は『X セイバー ガラハド』で、『スクラップ・ビースト』に攻撃！！」

修也がそう命令すると、『ガラハド』は手にした剣を振り上げて『スクラップ・ビースト』に切りかかった。だが、その瞬間圭一の伏せたカードが発動した。

「させねえ！！俺はトラップカード、『強制脱出装置』発動！」

『強制脱出装置』罨カード
フィールド上のモンスター1体を持ち主の手札に戻す。

「悪いが……。『ガラハド』には手札に戻ってもらおう！！」

圭一の発動したトラップカードにより、修也が召喚した『ガラハド』は再び手札に戻されてしまった。

「くそっ……。『エマーズブレイド』じゃ『スクラップ・ビースト』の攻撃力は超えられない……。俺はこのままターンエンド！」

「エンドフェイズだな？なら俺は、『スクラップ・ビースト』を指定して、エンドフェイズに速攻魔法発動！『スクラップ・スコール』！」

『スクラップ・スコール』速攻魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する『スクラップ』と名のついたモンスター1体を選択して発動する。自分のデッキから『スクラップ』と名のついたモンスター1体を墓地へ送り、カードを1枚ドロウする。その後、選択したモンスターを破壊する。

「俺はこの効果で、デッキから『スクラップ・キマイラ』を墓地に送って1枚ドロウ！！そして、その後『スクラップ・ビースト』を破壊する！！」

圭一がデッキからカードをドロウすると同時に、『スクラップ・ビースト』は様々な廃棄物の雨に打たれて破壊されてしまった。

「ドロウするただけにモンスターを破壊した……。？」

修也が驚いた表情でそういうと、対する圭一はニヤリと笑って説明して見せた。

「甘いな。『スクラップ・ビースト』には、『スクラップ』と名

のついたカードの効果で破壊されたとき、墓地の『ビースト』以外の『スクラップ』を手札に加える効果がある。俺は、『スクラップ・キマイラ』を手札に加える!!」

「へえ。そうか……。わざわざ『キマイラ』を墓地に落としたのは、『ビースト』の効果で回収するためか……。」

修也がそう呟くのと同時に圭一はドローフェイズに入り、デッキからカードをドローした。

「ふっ……。行くぜ!!スタンバイ、メインフェイズ。俺は『スクラップ・キマイラ』を召喚!!」

圭一がそう言いながら勢い良くカードをディスクに置くと、廃棄物で形成されたライオンの頭と体、そして翼と蠍の尻尾を持ったモンスターがフィールドに姿を現した。

『スクラップ・キマイラ』レベル4 地 1700/500 獣族・効果

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する『スクラップ』と名のついたチューナー1体を選択して特殊召喚する事ができる。このカードをシンクロ素材とする場合、『スクラップ』と名のついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用できず、他のシンクロ素材モンスターは全て『スクラップ』と名のついたモンスターでなければならない。

「『スクラップ・キマイラ』の効果!!召喚したとき、墓地の『スクラップ』を1体蘇生できる!!俺は、『ビースト』を蘇生!!」

圭一がそう説明すると、先ほど破壊された『スクラップ・ビースト』

ト」が再びフィールドに姿を現した。それを傍らで見ていた陸は、その2体を見て静かに口を開いた。

「来たか……。『スクラップ』専用の速攻展開。この2体から出てくるのは恐らく……。」

陸の呟きをよそに、圭一は高らかに叫び始めた。

「行くぜ！！俺はレベル4の『スクラップ・キマイラ』に、レベル4の『スクラップ・ビースト』をチューニング！！」

圭一が叫ぶと、『ビースト』は4つの星の輪になって空中に舞い上がり、『キマイラ』を包み込んだ。

「くっ……。シンクロか……。」

「ああ、そうだ！！見せてやるぜ。俺のデッキのシンクロモンスターを！！打ち捨てられし無数の思いよ、新たな肉体と力を得て今ここに姿を現せ！！シンクロ召喚、来い！！『スクラップ・ドラゴン』！！」

圭一の口上が終わると共にフィールドに眩い緑色の光が走った。そして、その光と共に『スクラップ』の名に違わず、全身廃棄物で構成された巨大な龍が姿を現した。

『スクラップ・ドラゴン』レベル8 地 2800/2000

ドラゴン族・シンクロノ効果

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを1枚ずつ選択して発動する事ができる。選択したカードを破壊する。

このカードが相手によって破壊され墓地へ送られた時、シンクロモンスター以外の自分の墓地に存在する『スクラップ』と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する。

「くっ……。これが『スクラップ』のシンクロモンスターか……！！」

「ああ、そうだ。優先権は放棄する。そして俺は手札から魔法カード、『おろかな埋葬』を発動だ！！この効果でデッキから墓地に送るのは、『レベル・ステイラー』！！」

シンクロモンスターをフィールドに出した圭一は、修也に追い討ちを掛けるように魔法カードを発動した。

『おろかな埋葬』魔法カード

「そして、墓地の『レベル・ステイラー』の効果発動！！俺は、『スクラップ・ドラゴン』のレベルを1つ下げ、こいつを特殊召喚する！！」

圭一がそう説明すると、『スクラップ・ドラゴン』の体を通り抜けるようにしてテントウムシのようなモンスターが姿を現した。

『レベル・ステイラー』レベル1 闇 600/0 昆虫族・効果

このカードが墓地に存在する場合、自分フィールド上に表側表示で存在するレベル5以上のモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターのレベルを1つ下げ、このカードを墓地から特殊召喚する。このカードはアドバンス召喚以外のためにはリリースできない。

「墓地からレベルを下げて特殊召喚……。成る程。これによって、『スクラップ・ドラゴン』の効果発動のためのコストが容易に確保できるというわけか……。」

陸が圭一に言うと、それを聞いた圭一は得意げに頷いて見せた。

「ああ!!レベルが残っている限り、ノーコストだからな!!行くぞ修也!!『スクラップ・ドラゴン』の効果発動!!1ターンに1度、お互いのフィールドのカードを1枚ずつ選択して破壊する。俺は、『レベル・ステイラー』と『XX セイバー エマーズブレイド』を指定して破壊する!!スクラップ・スチーム!!」

圭一がそう叫ぶと共に、『スクラップ・ドラゴン』は体についている2本のパイプのようなものからものすごい勢いの蒸気を噴出した。その蒸気を受けた2体のモンスターは成す術もなく破壊されてしまった。

「くっ……。『エマーズブレイド』が……。」

「ふっ……。これで厄介なリクルーターが始末できたな。さあ、バトルフェイズだ!!『スクラップ・ドラゴン』でプレイヤーにダイレクトアタック!!スクラップ・テール!!」

圭一がそう命令すると、『スクラップ・ドラゴン』は一声吼えて自身のしなやかで長い尻尾を大きく振った。その直撃を受けた修也は、大きくライフを削られてしまった。

「うわっ……。」

修也 LP8000 5200

「どうやらその伏せカード、攻撃反応型のトラップじゃなかったみたいだな。俺はこのままターン終了!!」

「くっ……。俺のターン、ドロー!!」

一気にライフに差をつけられた修也は、焦った表情でカードをドロ―した。

「俺は再び『ガラハド』を召喚!!」

修也は先ほどのターンにバウンスされた『ガラハド』を、再び手札から通常召喚した。

(コンバットトリックに使いたかった『心剣一体』だけど……。この状況じゃそんな事言ってもらえない。『ガラハド』の効果と合わせれば攻撃力は2900になる。『スクラップ・ドラゴン』を……。倒せる!!)

修也はそう思案すると、そのままバトルフェイズに突入した。

「バトルだ!!」X セイバー ガラハド、スクラップ・ドラゴン』を攻撃!!」

「おいおい、血迷ったか?『ガラハド』の効果が発動しても、攻撃力の差は700もあるんだぞ?」

圭一が発した言葉を聞いた修也は、強気にニヤリと笑って見せた。

「ああ、そうだな。でも、攻撃宣言時にこのカードを発動させてもらう！トランプカード、『心剣一体』！！このカードは発動後『ガラハド』の装備カードとなり、攻撃力を800ポイントアップさせる！！」

『心剣一体』畏カード

「なにっ？『心剣一体』だと……。くそっ。警戒すべきカードを忘れてたぜ！！」

修也の計算どおり、自身の効果も合わせて攻撃力2900になった『ガラハド』は『スクラップ・ドラゴン』を剣で真っ二つに切り裂いた。

「ち……。」

圭一 LP8000 7900

「よっしゃあ！！これで、『スクラップ・ドラゴン』を倒したぜ！！そして、『心剣一体』の効果発動！！相手モンスターを破壊したとき、デッキからカードを1枚ドロウする！！」

「くっ……。だが、『スクラップ・ドラゴン』の効果も発動する！！相手に破壊されたとき、墓地のシンクロモンスター以外の『スクラップ』を1体蘇生する。蘇れ！！『スクラップ・ビースト』！！」

修也がデッキからカードを引くと同時に、『スクラップ・ドラゴン』の残骸の中から再び『スクラップ・ビースト』が姿を現した。

「破壊されたときに墓地の『スクラップ』を蘇生するのか……。まあいいや。メイン2に俺は速攻魔法、『手札断札』を発動!!互いのプレイヤーは手札を2枚墓地に送り、デッキからカードを2枚ドローする!!」

『手札断札』速攻魔法

修也の発動した『手札断札』の効果で、修也は『XX セイバー フラムナイト』と『カードガンナー』を、圭一は『スクラップ・ゴブリン』と『ライトニング・ボルテックス』を墓地に送って2枚ドローした。

「よし……。俺は新たにカードを1枚伏せる!!ターンエンドだ。」

「俺のターンか、ドロー!!俺は『スクラップ・ビースト』をリリース!!『スクラップ・ゴーレム』をアドバンス召喚!!」

圭一がカードをドローしてすぐさまカードをディスクに置くと、『スクラップ・ビースト』は光の粒子となって消え、代わりに廃棄物の巨人が姿を現した。

『スクラップ・ゴーレム』レベル5 地 2300/1400

岩石族・効果

1ターンに1度、自分の墓地に存在するレベル4以下の『スクラップ』と名のついたモンスター1体を選択し、自分または相手フィールド上に特殊召喚することができる。

「フフ……。『スクラップ・ゴーレム』の効果発動!!1ターンに1度、俺の墓地のレベル4以下の『スクラップ』を特殊召喚で

きる！！俺は俺のフィールドに、『スクラップ・ゴブリン』を特殊召喚！！」

圭一がそう説明すると、『ゴーレム』の冷蔵庫のような体の中から、小さな子鬼の『スクラップ』が姿を現した。

『スクラップ・ゴブリン』レベル3 地 0 / 500 獣戦士族・チューナー / 効果

フィールド上に表側守備表示で存在するこのカードが攻撃対象に選択された場合、バトルフェイズ終了時にこのカードを破壊する。このカードが『スクラップ』と名のついたカードの効果によって破壊され墓地へ送られた場合、『スクラップ・ゴブリン』以外の自分の墓地に存在する『スクラップ』と名のついたモンスター1体を選択して手札に加える事ができる。また、このカードは戦闘では破壊されない。

「レベル3チューナーとレベル5のモンスター……。まさか？」

「ああ、そのまさかさ！！お前が『手札断札』を使ってくれたおかげで、再びこいつを出せるぜ！！レベル5の『スクラップ・ゴーレム』に、レベル3の『スクラップ・ゴブリン』をチューニング！打ち捨てられし無数の思いよ、今新たな肉体と力を得てその姿を現せ！！シンクロ召喚！！来い、『スクラップ・ドラゴン』！！」

圭一の口上が終わると共に、再び廃棄物の巨大な龍がフィールド上に姿を現した。それを見た修也は、一歩後ずさった。

「くそっ……。せっかく倒したのに、また出てくるのかよ！！」

「はっはっはっは！！これが俺のスクラップの真髄だ！！たとえ

倒されても、何度も敵の前に立ちはだかる！！さあ、墓地の『レベル・ステイラー』の効果！！『スクラップ・ドラゴン』のレベルを一つ下げて特殊召喚するぜ！！」

圭一がそういうと、再び『スクラップ・ドラゴン』の体を通り抜けて『レベル・ステイラー』が姿を現した。

「そして、『スクラップ・ドラゴン』の効果発動！！俺は、『レベル・ステイラー』と『X セイバー ガラハド』を破壊する！！スクラップ・スチーム！！」

圭一の命令で、『スクラップ・ドラゴン』は再び体についている二本の管からものすごい蒸気を噴出した。だが、今回は蒸気がモンスターに直撃する寸前に修也の伏せカードが発動した。

「その効果にチェインさせてもらう！！トラップ発動！！『ガトムズの緊急指令』！！フィールドに『X セイバー』がいるとき、墓地から2体の『X セイバー』を蘇生させることが出来る！！蘇れ！！『フラムナイト』、『エマーズブレイド』！！」

修也がそう叫ぶと、修也のモンスターゾーンが光り輝き墓地の2体の『X セイバー』がフィールドに姿を現した。

『X X セイバー フラムナイト』レベル3 地 1300/1000 戦士族・チューナー/効果

「くそ……。だが、『ガラハド』と、装備されている『心剣一体』は破壊させてもらう！！」

圭一がそういうと、修也の『ガラハド』と圭一の『レベル・ステ

「イーラー」は成す術もなく破壊されてしまった。

「そして・・・、バトルフェイズ!!!俺は『スクラップ・ドラゴン』で、『フラムナイト』を攻撃だ!!!スクラップ・テール!!!」

「させない!!!『フラムナイト』の効果発動!!!こいつが表側表示で存在する限り1度だけ、相手からの攻撃を無効にする!!!フラムナイト・ディフェンス!!!」

圭一の命令を受けた『スクラップ・ドラゴン』は再びしなやかな尾を大きく振ったが、『フラムナイト』の連接昆のような剣がそれを防いだ。

「くそ・・・。通らなかったか。俺はカードを1枚伏せて、ターンを終了する。」

「よし・・・。俺のターンだ、ドロー!!!」

修也は勢い良くカードをドローすると、引いたカードをじつと見た。

(この状況じゃ、『スクラップ・ドラゴン』を倒せない・・・。ここは・・・。)

「俺は伏せカードを2枚セット。ターンエンドだ。」

「何もせずにターン終了か・・・。俺のターン、ドロー!!!まずは墓地の『レベル・スティーラー』を、『スクラップ・ドラゴン』のレベルを7から6に下げて特殊召喚!!!」

圭一はさらに『スクラップ・ドラゴン』のレベルを下げると、再び『レベル・ステイラー』を特殊召喚した。

(さて、『エマーズブレイド』を破壊したいところだが。あの伏せカードが気になるな。今度こそ攻撃反応型のトラップか……。それとも俺を惑わせるためのブラフか……。まあ、『エマーズブレイド』は後でも対処できる。今は伏せカードを破壊する!!)

「行くぞ!! 『スクラップ・ドラゴン』の効果発動!! 俺は、『レベル・ステイラー』と、お前の右側の伏せカードを指定して破壊する!! スクラップ・スチーム!!」

圭一の命令で『スクラップ・ドラゴン』の効果が発動し、『レベル・ステイラー』と修也の伏せカード、『奈落の落とし穴』は破壊されてしまった。

「召喚時反応系のトラップか……。もう一枚は……。いや、ここは臆さず攻める!! 『スクラップ・ドラゴン』!! 『フラムナイト』に攻撃だ!!」

圭一の命令で、『スクラップ・ドラゴン』の尾が『フラムナイト』を襲った。『フラムナイト』は防御姿勢を取ったが、あっけなく破壊されてしまった。

「くっ……。だけど、その攻撃時にこのトラップを発動させてもらうぜ!! 『デイメンジョン・ウォール』!! このカードの効果で、この戦闘によって発生するダメージは圭一!! お前が受ける!!」

「何っ……。!!」

『デイメンジョン・ウォール』畏カード

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。この戦闘によって自分が受ける戦闘ダメージは、かわりに相手が受ける。

「うわああっ!!」

圭一 7900 6400

圭一は『スクラップ・ドラゴン』と『フラムナイト』の戦闘で発生したダメージ、1500ポイントをライフから引かれた。

「くそ……。だが、まだ俺の方が若干優勢だぜ!!ターンエンド……」

「そんな差、すぐに逆転してやるぜ!!俺のターン、ドロー!!」
修也は勢い良くドローしたカードを一瞥すると、いきなりニヤリと笑った。

「へへっ……。来たぜ。お前の『スクラップ・ドラゴン』を破壊せずに除去できるカードが!!魔法発動、『強制転移』!!互いのプレイヤーはモンスターを1体ずつ選択して、そのモンスターのコントロールを相手に移す!!俺は『エマーズブレイド』を選択!!」

「何だど?くっ……。俺のフィールドには『スクラップ・ドラゴン』しかない……。」

『強制転移』魔法カード

お互いが自分フィールド上モンスターを1体ずつ選択し、そのモ

ンスターのコントロールを入れ替える。選択されたモンスターは、このターン表示形式の変更はできない。

修也の発動した『強制転移』の効果により、『エマーズブレイド』は圭一のフィールドに、『スクラップ・ドラゴン』は修也のフィールドに移った。

「ふっ……。『エマーズブレイド』とは、厄介なモンスターを押し付けてくれたじゃないか。」

圭一が不適に笑いながら修也に言うと、それを受けた修也は二カッと笑って見せた。

「へへっ。これも戦術の一つさ。『強制転移』と『エマーズブレイド』は相性が良いからな……。さ、続けていくぜ！！手札から、『X セイバー パシウル』を通常召喚！！」

修也が勢い良くカードをディスクに置くと、自分の身の丈ほどの大剣を持ったモンスターがフィールドに姿を現した。

『X セイバー パシウル』 レベル2 地 1000/0 戦士族・チューナー/効果

「『スクラップ・ドラゴン』は今、『レベル・ステイラー』の召喚に使用したおかげでレベルが6になってる……。行くぞ！！レベル6の『スクラップ・ドラゴン』に、レベル2の『X セイバー パシウル』をチューニング！！」

修也がそう叫ぶと『パシウル』は2つの星の輪になり、『スクラップ・ドラゴン』を包み込んだ。

「集いし孤高の魂が、今新たな決意を生み出す！！決意を拳にこめて全てを砕け！！シンクロ召喚！来い、『ギガンテック・ファイター』！！！」

修也の口上が終わると共にフィールド上に緑色の光があふれ、その光の中から全身が白い屈強な肉体の戦士族モンスターが姿を現した。

『ギガンテック・ファイター』レベル8 闇 2800/1000
戦士族・シンクロ/効果

「『ギガンテック・ファイター』は、墓地にいる戦士の数だけ攻撃力が上がる！！俺の墓地に戦士は3体！！よって攻撃力は3100だ！！バトルフェイズ、『ギガンテック・ファイター』でお前の場の『エマーズブレイド』を攻撃！！ソウルクラッシュ・ナックル！！！」

修也が命令すると、『ギガンテック・ファイター』はその拳をためらうことなく『エマーズブレイド』に叩き込んだ。

「うおっ……。」

圭一 LP6400 4600

「よし……ここに来てようやく、修也のライフが高井のライフを上回ったか……。」

4600まで減った圭一のライフを見た陸は、ふとそう呟くと修也の方を見た。

(フツ……。修也。やはりお前のドローの運には目を見張るものがあるな……。)

陸がそんな事を思いながら修也を見ているうちに、修也は自身の墓地に送られた『エマーズブレイド』の効果を発動した。

「『エマーズブレイド』の効果発動！！戦闘破壊で墓地に送られたとき、デッキからレベル4以下の『X セイバー』を特殊召喚できる！！来い、『X X セイバー ガルゼム』！！」

修也がそう言いながらカードをディスクに置くと、ガゼルのような『X セイバー』姿を現した。

『X X セイバー ガルゼム』レベル4 地 1400/400
獣族・効果

「『ガルゼム』の攻撃力は、自身を含めた『X セイバー』の数攻撃力を200上げる！！このままダイレクトアタックだ！！『ガルゼム』！！」

修也が命令すると、『ガルゼム』は手にした獣の角のような剣で圭一を直接攻撃した。

「くつ……。」

圭一 LP4600 3000

「よし。宣言どおり逆転したぜ！！俺はこのままターンエンドだ

！！」

「くっ……。なんて引きの良さだ。俺のターン、ドロー!!」

圭一は苦しげな表情でカードを引くと、フィールドに伏せてあった伏せカードに手を掛けた。

「リバーストラップ発動!!」リビングデットの呼び声……。俺はこの効果で「スクラップ・ドラゴン」を蘇生する!!」

圭一がそういうと同時に、墓地からまたもや「スクラップ・ドラゴン」が姿を現した。

「くっ……。また「スクラップ・ドラゴン」かよ!!」

「そう言うなって……。俺は「レベル・ステイラー」の効果発動。「スクラップ・ドラゴン」のレベルを1つ下げて特殊召喚。そしてさらに、「スクラップ・ドラゴン」の効果発動!!「レベル・ステイラー」と「ギガンテック・ファイター」を破壊!!」

圭一がそう宣言すると同時に、「スクラップ・ドラゴン」の効果で「ギガンテック・ファイター」は破壊されてしまった。

「くそ……。何回も出てきやがって……。」「ギガンテック・ファイター」が……。」

修也が悔しげに呟くのを見て、対する圭一はニヤリと笑った。

「ふっ……。これこそが俺の「スクラップ」だ!!さあ、このままバトルフェイズに入るぜ!!」「スクラップ・ドラゴン」!!」「XX セイバー ガルゼム」に攻撃!!スクラップ・テール!!」

圭一がそう命令すると、『スクラップ・ドラゴン』はしなやかな尾を大きく振り、一気に『ガルゼム』を破壊した。『ガルゼム』はあっけなく破壊され、ダメージを修也が襲った。

「ぐっ……。」

修也 LP5200 4000

ソリッドビジョンの爆風から顔を庇う修也を見て、圭一はニヤリと笑いながら口を開いた。

「へっ……。フィールドがから空きだな！！俺はカードを1枚セツト！！ターンを終了するぜ！！」

「ターンエンドか……。面白くなってきたな！！俺のターン、ドロー！！行け、墓地に『X セイバー』が2体以上存在し、俺のフィールドにモンスターがいないとき、『XX セイバー ガルドストライク』は特殊召喚できる！！」

修也がフィールドにカードを置くと、もはやおなじみになった修也のデッキの反撃の狼炎、『ガルドストライク』が姿を現した。

『XX セイバー ガルドストライク』レベル5 地 2100
/1400 獣戦士族・効果

「そしてさらに、『XX セイバー レイジグラ』を通常召喚！効果により、墓地の『X セイバー』を1体回収できる。俺は、『フラムナイト』を回収だ……！！」

『XX セイバー レイジグラ』レベル1 地 200/100

0 爬虫類族・効果

「モンスターを展開したか。だが、その攻撃力じゃ『スクラップ・ドラゴン』を倒すことは出来ないぜ!!」

「ああ、そうだな。だからこのカードを発動する!!魔法カード、『セイバー・スラッシュ』!!このカードは、フィールドに存在する『X セイバー』の数だけお前のフィールドのカードを破壊する。お前の『スクラップ・ドラゴン』と伏せカードを破壊だ!!」

「何だとっ・・・?」

『セイバー・スラッシュ』 通常魔法

修也が手札から魔法を発動すると、2体の『X セイバー』はそれぞれ武器を振るい、鋭い剣の波動を圭一のカードめがけて飛ばした。圭一の2枚のカードは、その波動によってあっけなく破壊されてしまった。

「ち・・・。『スクラップ・ドラゴン』効果発動!!お前の『セイバー・スラッシュ』で破壊されたから、墓地の『スクラップ・ゴレム』を特殊召喚するぜ!!」

圭一のその声と共に、再び廃棄物の巨人がその姿をフィールドに現した。

「くそ・・・。攻撃力が足りない、カードを1枚伏せてターン終了だ。」

「フ・・・。何もしないか。俺のターンだ。ドロー!!行くぜ、

『スクラップ・ゴーレム』効果発動！！墓地から『スクラップ・ビースト』を蘇生！！』

圭一が高らかにさういうと、『ゴーレム』の力によって再び『スクラップ・ビースト』がフィールド上に姿を現した。それを見た修也は、大きく目を見開いた。

「レベル合計・・・9だと？」

「ああ、そうだ！！俺の切り札を見せてやる！！行くぜ・・・。レベル4の『スクラップ・キマイラ』にレベル5の『スクラップ・ソルジャー』をチューニング！！積み積みし無念の魂よ！！今再び廃棄物の体に身を沈め、歯向かう物に牙を向けよ！！シンクロ召喚！！現れよ、『スクラップ・ツイン・ドラゴン』！！」

圭一の叫びと共に、巨大な双頭の廃棄物龍『スクラップ・ツイン・ドラゴン』がその姿を現した。自らのフィールドに現れたその龍を見て、圭一はニヤリと笑った。

『スクラップ・ツイン・ドラゴン』レベル9 地 3000/2

200 ドラゴン族・シンクロ/効果

『スクラップ』と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、自分フィールド上に存在するカード1枚と、相手フィールド上に存在するカード2枚を選択して発動する事ができる。選択した自分のカードを破壊し、選択した相手のカードを手札に戻す。このカードが相手によって破壊され墓地へ送られた時、シンクロモンスター以外の自分の墓地に存在する『スクラップ』と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する。

「見たか！！これが俺の切り札、『スクラップ・ツイン・ドラゴン』だ！！」

圭一は得意げにそう言っただけで、修也の方を見てニヤリと笑った。強力なバウンス効果を持つ『スクラップ・ツイン・ドラゴン』これを用いれば、一気に修也のライフを削ることが可能。修也はそんな圭一の切り札をまじまじと見た。

「くっ……。すごい迫力だぜでも……。！！」

圭一のその言葉を聞いた修也は、ニヤリと笑って圭一の方を見返した。

「俺はこのときを待っていたんだ！！カウンタートラップ発動！！『セイバー・ホール』！！フィールドに『Xセイバー』がいるとき、相手モンスター1体の召喚、反転召喚、特殊召喚を無効にして破壊する！！」

「なっ……。何だと！？そんな馬鹿な……。！！！！」

『セイバー・ホール』カウンター罠

修也が『セイバー・ホール』を発動すると、圭一が召喚した『スクラップ・ツイン・ドラゴン』の足元に巨大な歪が現れ、『スクラップ・ツイン・ドラゴン』を飲み込み始めた。

「そんな……。俺の『スクラップ・ツイン』が……。出落ちだどー！！」

圭一が半分放心状態でそう呟くと同時に、『スクラップ・ツイン』

は完全に歪に飲み込まれ、フィールドから姿を消してしまった。

「くそっ……。通常召喚できるモンスターはいない。もう手が無いぜ。ターンエンドだ。」

手が尽きたらしい圭一は、フィールドをがら空きにしたままターンを終了した。

「よし、俺のターンだ！ドロー！行くぜ、XX セイバー
フラムナイト』を通常召喚！そしてそのままバトルフェイズだ
！！」

修也は再び紅い鎧を纏った剣士、『フラムナイト』を召喚すると
すぐさまバトルフェイズに入った。

「まずは、『フラムナイト』でプレイヤーにダイレクトアタック
だ！！」

修也の叫びと共に、『フラムナイト』は連接昆状になっている剣
を振るい、圭一に直接攻撃を仕掛けた。攻撃は防がれること無く圭
一に直撃し、ライフを1300削った。

「ぬお。。。。」

圭一 LP3000 1700

「よし。。。。これで終わりだ！！『ガルドストライク』！！プ
レイヤーにダイレクトアタックだ！！」

修也の叫びと共に、『ガルドストライク』はメリケンのような剣

を構えて一気に圭一に飛び掛った。防ぐ術が無いらしい圭一は、顔の前で腕をクロスさせて防御の姿勢を取ったが、そのライフが0になる事は明確だった。

「うわあああああ！！！」

圭一 LP17000

『ガルドストライク』の直接攻撃が圭一に入ると同時に、圭一のライフカウンターは0を指した。すると展開されていたソリッドビジョンがゆっくりと消え、デュエルが終了したことを告げた。

「へへへっ……流石だな。やっぱり、あの時戸さんをあそこまで追い詰めただけの事はあるぜ……」

ソリッドビジョンが消えると、圭一はデュエルディスクを格納して修也にそう言い放った。それを聞いた修也は、頭を掻いてニヤリと笑って圭一に歩み寄った。

「そんなこと無いさ……。俺だって危なかった！！あそこで『強制転移』を引かなかつたら、きつと負けていただろうな……。とにかく、楽しいデュエルだったぜ！！」

修也がそういうと、圭一はニヤリと笑って右手を差し出した。

「ああ、俺も楽しかった。また機会があつたら、お前とデュエルしたい！！」

「へへっ。望むところだぜ！！」

修也はそう言って、圭一の差し出した右手をしっかりと握り、硬い握手を交わした。数秒間の握手が終わると圭一は鞆を持ち、時計に目をやりながら呟いた。

「さて……。そろそろ五月蠅い顧問が来るな。だからもう行かないきゃ。ああ、俺はパソコン部なんだ。顧問がいないときに部室に来れば、いつでもデュエルできるぜ。じゃあな。」

「ああ！！またな。」

圭一はそう言い残すと、急ぎ足で科学部の部室を去っていった。

「いいデュエルだったぞ、修也。」

圭一が部室を去っていくと、ずっとデュエルを観戦していた陸が唐突に唖声を掛けてきた。

「え？そっかな？俺としては少し危なかったんだけどな。」

陸の言葉を聞いた修也は、頭を掻きながら陸の方を向いてそういった。修也の言葉を聞いた陸は、そんな事は無いぞと言う風に首を振って見せた。

「謙遜することは無い。お前は『セイバー・ホール』を使うことで、『スクラップ』の間接的な破壊耐性を潰したのだからな。」

「え？まあ……。『スクラップ』は似たような効果持ってるかなと思ったんだけどさ。そういえば……。他のみんなは部活に来ないのか？」

余りに陸が意外なことを言うので、少し照れくさくなった修也は話題を変えるべく他の部員の話題を出した。修也の狙い通り、陸は少し首をひねって考えるような動作をした。

「ん・・・？春山の奴は今日用事があるとかいつていたが、光彦と孝雄は何をしているんだ・・・？そろそろ戻ってきてもいいころだが、ちよつと待て・・・。」

陸はいったん言葉を切ると、ポケットから携帯電話を取り出してボタンを操作し始めた。

「ええと・・・。おっと、新着メールが一件か・・・。ん？これは・・・？」

陸がいきなりそうだったので、修也は思わず陸の携帯電話の画面を覗き込むように顔を寄せた。

「どうした？」

修也がそう言って画面の文字を読み取るうとして目を細めた瞬間、陸は大きく目を見開いた。

「なつ・・・！！修也、ちよつとこれを見てみる！！」

陸はいきなりそういうと、携帯の画面を修也に向けて突き出した。いきなり目の前に画面を突き出された修也は驚きながらそこに映っている文字を読み取った。そこには、僅かな時間で必死に打ったと思われる簡潔な文字が写っていた。

From 志水光彦
Sub 無題

敵襲撃

孝雄が危険

昨日空雅と戦ったところ

「5分くらい前だ。これ、どういうことだよ・・・!?」

光彦からのメールを読み終わった修也は、陸の方を向いてそう言った。問われた陸も、目を閉じて分からないという風に首を振った。

「さあな・・・。だが、孝雄が危ないということは確かだ。あいつの言っている敵とは、恐らく時戸研究所の奴の事だろう。こうしてはおれん!!修也、今すぐ裏口に向かうぞ!!」

「分かった!!」

修也と陸はそう言って頷き会つと、デュエルディスクを腕に装着して一目散に科学部部室を出て廊下を全力疾走した。

(孝雄・・・。頼む、無事でいてくれ!!)

修也はそう思いながら、両手で作っている握りこぶしにギュッと力を込めた。

第8話 真紅の誇り！！（前書き）

更新不定期ですみません

第8話 真紅の誇り！！

(くそ……。何で、何でだよ……。手札事故も起こしてない。手加減だっしてない！！プレイングミスも無かったはずだ……。なのに……。)

孝雄は、目の前に広がっている絶望的な状況に目をやりながらそう思った。だが、そう思ったところでその状況が良くなる訳でもなかった。

(ちくしょう、ちくしょう！！こんな……。こんなはずじゃ……。)

孝雄がそう思って俯くと同時に、孝雄と対峙している人物は静かに口を開いた。

「おいおい……。そんな顔しても結果は変わらないぜ？バトルフェイズ。『ジャンク・デストロイヤー』でダイレクトアタック！デストロイ・ナツクル！！」

その光彦の言葉と共に、ほぼ空のフィールド上に唯一存在していた四本腕の戦士族モンスターは主の命令に従い、孝雄に拳の形をした衝撃波を4発はなつた。

「くそおおおおおおお！！！！」

孝雄の悲痛な叫びと共に、衝撃波は孝雄に命中して残り僅かだったライフポイントを削りきつた。孝雄のライフが0になると同時にソリッドビジョンは消滅し、人気ほとんど無い裏口は沈黙に包まれた。

「はあ……はあ……。くそ！！もう一回だ！！もう一回戦え！！！」

敗北した孝雄は即座に墓地と手札のカードをデッキに戻すと、デッキをシャッフルして光彦を睨み、強い口調でそういった。

「……もう2戦したぜ。まだ、気がすまないのかよ。」

「当たり前だろうが！！お前に勝たなきゃ、気がすまないんだよ！！！」

孝雄のその叫びを聞いた光彦は、表情を暗くした。そしてゆっくりと構えていた腕を下ろすと先ほどとは違う静かな口調で言った。

「手加減したのは謝る。仕方なかったんだ。お前達の実力を図る必要があったし、それに入部試験に落とすということもしたくなかったんだ。本当に、すまなかった。」

「謝る暇があったら……。戦えよ！！確かに最初は腹が立ったが、俺は今手加減したお前に怒りをぶつけてるんじゃない！！手加減されなきゃお前が倒せなかった俺自身に怒ってるんだ！！俺に謝りたいという気持ちがあるなら……。戦ってくれ！！」

孝雄はそう言って、再びデュエルディスクを起動させた。孝雄の言葉を聞いた光彦も、頷くとゆっくりデュエルディスクを構えた。

「そういうことか……。分かったよ。なら、お前の気が済むまで何回でも戦ってやる！！来いよ孝雄！！意地なんて捨てて掛かって来い！！！」

「ああ、行くぞ光彦!!」

2人がそう叫び合い、デュエル開始の声を上げようとしたそのときだった。

「そこまでだ!! 科学部の雑魚共!!」

いきなり鋭い叫び声が2人の耳に飛び込んできた。驚いた2人は、一斉に肥えの方向を見た。

2人が視線を向けた先には、見たことの無い3人の人物が立っていた。叫んだのは、その3人のうち一歩前に立っているパーカー姿の眠そうな目をした少年らしかった。

「お前等・・・誰だ？」

その3人を順番に見た孝雄は、リーダー格らしいパーカーの少年にそう言った。それを聞いたパーカーの少年は少し眉をひそめた。

「うるせえな・・・。お前の質問に答える権利はねえよ。さて、草薙修也が何処にいるのかこの俺に教えてもらおうか。」

高圧的に言ったパーカーの言葉を聞いて、3人が登場してから黙っていた光彦は不快そうな顔をして一歩前に出た。

「ずいぶん言い草だな。てか、質問してるのはこっちだ。何者が答えてもらおう。と言っても、空雅は我々に招待状を渡したんだから、奴が直々に派遣したとは思えないな。空雅の計画に反対な奴か、それとも時戸研究所とは違う第3勢力か・・・。どっちなんだ？」

光彦が長々とそういうと、パーカー少年はあからさまに顔をしかめた。だが、意外にその言葉に反論することはなく素直に口を開いた。

「ちつ……。大層な洞察力じゃないか。その通りさ。俺は時戸研究所のデュエリストだが、空雅のやり方に不満があるんだ。名前は岡崎蒼汰。」

そう言っつてパーカーの少年、蒼汰は自己紹介したが後ろに控えている筋骨隆々の長身の男と長髪の中性的な人物は何もいわなかった。

「修也の居場所を教えろとか言っつてたな……。修也を探し出してどうするつもりだ？」

「フン……。知れたこと！！あいつを倒し、『六星団』の証を手に入れる！！さあ、分かっつたら奴の居場所を言え！！」

孝雄がそういうと、蒼汰はより強い口調で再びそう命令した。それを聞いた孝雄はカツとなっつて言い返した！！

「ふざけんな！！お前等なんかに、修也の居場所を……」

「オーケーオーケー。分かっつた落ち着け。教えてやんよ。」

けんか腰になる孝雄を制して、光彦が蒼汰に向けてそういった。その発言を聞いた孝雄は、怒りの矛先を光彦に向けた。

「何考えてるんだお前は！！修也を危険にさらす気かよ！！」

「だから落ち着け……。良いか？」

対する光彦はそう言うのと孝雄の肩をポンとたたき、蒼汰たちに聞こえないような声で呟いた。

「相手は我々と同じ位の年代だ。だとしたら、ある程度の発言力があるわけじゃなくて、空雅に内緒で来たんだろう。恐らく実力も我々と同程度のはずだぜ？なら、異様に引きが良い修也が負けるわけ無い。万が一負けても陸がボコボコにするだろ。それに、あの2人の取り巻きも相手にしなきゃなんないんだぜ？」

「くっ……。今日はいつに無く良くしゃべるじゃないか。分かったよ。」

孝雄は光彦の言葉に頷くと蒼汰の方を向いてニツと笑って、いつもの陽気な声で言った。

「こいつに説得されたぜ……。修也は科学部室だ。行けよ！！後ろの2人は、俺等が相手してやるからよ。」

「ほお……。いい答えじゃないか。」

それを聞いた蒼汰はそう言ってニヤリと笑うと、背後に控えている2人の人物のほうを向いて口を開いた。

「おい。聞いたろ！！熊谷、久遠寺！！お前等はいいつ等に遊んでもらいな！！俺は、科学部室に草薙修也を倒しに行く。まあ、5分掛からないうちに戻ってくるだろうけどな！！」

蒼汰はそう言い残すと同時に走り出し、孝雄と光彦の間を通り抜

けて裏口から常盤高校の校舎の中へと入っていった。残された2人の取り巻きは、視線を孝雄と光彦の方に向けた。

「さて……。ようやくブンブン五月蠅いハエがいなくなった。」

最初にそうくぐもった声で言ったのは、頭に熊の着ぐるみの頭の部分を被り、そして下半身に身に着けているピチピチのボクサーパンツ以外は地肌を露出させている巨漢の男だった。

「私は熊谷。あんな男の部下ではない。もつと高貴な方にお仕えしている。所で……。どっちだ？私の夢、女生徒に囲まれてキャッキャウフフするという夢を邪魔するのは？」

熊谷というらしい巨漢の男がそう問いかけると、その言葉を聞いた孝雄が真っ先に熊谷の前に躍り出た。

「へっ。なら俺が相手してやる！！お前みたいな変態をここから先に行かせるわけには行かないからな！！」

「ふうん……。面白い。だが、私が男に情けを掛けると思うなよ。じっくりいたぶった後、私の邪魔をした罰として腕の骨を2、3本へし折ってやる！！」

対戦前から激しい火花を散らしている孝雄と熊谷を見た光彦は、はあとため息をつくともう1人の取り巻きである長髪の人物に声を掛けた。

「やれやれ。過激だなおい。ま、我々は穏便にやろうぜ。ま、あんたは見たところ女性だからそんな事言う必要ないか……。」

光彦がそういうと、長髪は光彦をキツと睨んで不満そうな声を発した。

「何を勘違いしている……。ボクは男だぞっ！！勘違いしないでくれないか？」

「え？おおっと、失礼。長髪だし、女みtainな顔だからつい……。下の方の名前は？」

光彦が軽く頭を下げながら言うと、長髪は腕を組んで光彦を睨み、それから口を尖らせて言った。

「ふん……。まあいい。寛大さは、騎士道を重んずるものとして必要だからな。ボクは琥珀。久遠寺琥珀だ。志水光彦、こいつ等の隣だとなるか分からない。場所を変えるぞっ。ついてこいっ！！！」

「はいはい……。久遠寺さんね。了解しましたよっ。」

そう言つて、琥珀も裏口に向かってズンズンと歩き始めた。その後続く光彦は、孝雄の隣で一瞬足を止めると、短く呟いた。

「孝雄……。外見があれだからって油断するなよ。人は見かけによらないからな……。」

「ああ、お前もな。女みtainな奴だけど、油断するなよ！」

孝雄がニヤリと笑つてそう返すと、光彦は腕を軽く上げて親指をグツと突き上げ、裏口の方に歩いていった。その背中を見送った孝雄は、熊谷の方に向き直った。

「フフフ……。仲間との別れは済んだか？私が勝ったら、お前は骨折で病院行きだ。元気なうちに顔を良く見ておいたほうが良いんじゃないのか？」

熊谷が脅すようにそういったが、孝雄は臆さずにニヤリと笑って言い返した。

「へへっ。言ってくれるじゃないか。でも、あんた自分の心配した方が良いぜ。何せ、『六星団』でもない奴にやられちゃあ、あんなの上司がお怒りになるだろうからな。」

孝雄はそう言ってデュエルディスクを構えると、熊谷の無表情なくまの着ぐるみをじつと見据えた。

「ふうん。減らず口を……。 “男の” 貴様なんぞ速攻で排除してくれる！！女生徒達の樂園に突入するためにな！！」

「上等だ変態野郎！！掛かってきやがれ！！」

その叫びと同時に2人はデュエルディスクを起動し、そしてありったけの声で叫んだ。

「デュエル！！」

修也の親友 吉良孝雄 vs 歪みない肉体 熊谷

その叫びとほぼ同時に、熊谷のデュエルディスクのランプが点滅した。先攻は熊谷だ。それを確認した2人は初手となるカードを5枚手に持った。

「私のターン！！ドロー！！・・・私が引いたカードはこいつだ！！」『ハイドロゲドン』！！」

熊谷がそう言って勢い良くカードをデュエルディスクに叩きつけると、フィールドに水柱が上がり、そこから泥水のような体を持った四足歩行のモンスターが姿を現した。

『ハイドロゲドン』レベル4 水 1600/1000 恐竜族・

効果

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキから『ハイドロゲドン』1体を特殊召喚する事ができる。

「私はさらにカードを1枚セット！！ターンエンドだ。」

(へえ・・・『ハイドロゲドン』か。アイツのデッキは『水属性』デッキか・・・。それとも展開力に重点を置いた『恐竜族』か・・・。でも・・・。)

孝雄は熊谷の召喚したモンスターを見てからそう思案し、自分の手札を見つめた。

(この手札なら、十分アイツを圧倒できる！！)

「行くぜ！！俺のターン、ドロー！！」

孝雄は勢い良くカードをドローすると、早速1枚のカードを手にとった。

「俺は『黒竜の雛』を手札から通常召喚するぜ！！」

孝雄がそう言いながらデュエルディスクにカードを置くと、上の部分が割れている卵に入ったかわいらしい黒い竜が姿を現した。

『黒竜の雛』レベル1 闇 800/500 ドラゴン族・効果
自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地に送る
事で、自分の手札から『真紅眼の黒竜』1体を特殊召喚する。

「ほおう……。貴様のデッキ、『真紅眼の黒竜』デッキか……」

「ああ、そうだ！！早々に俺のフェイバリットモンスターを見せ
てやる……。『黒竜の雛』の効果発動！！こいつを墓地に送り、
手札からこのカードを特殊召喚できる。現れる！！俺の相棒、『真
紅眼の黒竜』！！」

孝雄がそう叫ぶと、『黒竜の雛』は突然炎に包まれた。そして、
その炎の中から先ほどの姿とは見違えるほどの立派な翼と漆黒の甲
殻を持った鋭いフォルムの竜が姿を現した。

『真紅眼の黒竜』レベル7 闇 2400/2000 ドラゴン
族・通常モンスター

「ほほう……。序盤から攻撃力2400のモンスターか。中々
やるようだな……。」

「へっ……。そんな事言ってる暇なんて無いだろ？バトルだ！
！『真紅眼の黒竜』、『ハイドロゲドン』を攻撃！！ダーク・メガ・
フレア！！」

孝雄がそう叫ぶと共に、『真紅眼の黒竜』が吐き出した黒炎が『ハイドロゲドン』を襲い、超過ダメージが熊谷を襲った。

「ぬおおおおお！！」

熊谷 LP8000 7200

「はん！！でかい口叩いてた割には大したこと無いな。俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！！」

「待てい！！貴様のターンのエンドフェイズに、トラップカード『希望の残照』を発動する。蘇れ！！『ハイドロゲドン』！！」

『希望の残照』罫カード

このターン戦闘によって破壊された自分の墓地へ送られたモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。

熊谷は発動した『希望の残照』の効果で再び『ハイドロゲドン』を場に呼び戻すと、そのまま自分のドローフェイズに入った。

「フフフ……。私のターン！！私が召喚するのはこいつだ。

『オキシゲドン』！！」

熊谷がそういうと同時に勢い良くカードを置くと、今度は太古の翼竜、プテラノドンのようなモンスターがその姿を現した。

『オキシゲドン』レベル4 風 1800/800 恐竜族・効果

このカードが炎族モンスターとの戦闘によって破壊され墓地へ送

られた時、お互いのライフに800ポイントダメージを与える。

(今度は『オキシゲドン』……。奴が狙っているのは、『ウォーター・ドラゴン』の召喚か?でも……。『レッドアイズ』が場に
いる限り、通常召喚だけで3体並べるのは難しい。『二重召喚』を
使うという手もあるけど、それじゃありスクがでかい……。)

孝雄が熊谷の召喚したカードを見ながらいろいろ思案していると、
熊谷はいきなり着ぐるみの下で怪しげに笑いながら手札のカードを
1枚手に取った。

「ふうん。何を考えあぐねているのだ。私は手札から魔法カード、
『トレード・イン』を発動!!手札から『ウォーター・ドラゴン』
を墓地に捨て、カードを2枚ドロー!!」

『トレード・イン』魔法カード

手札からレベル8のモンスターカードを1枚捨てる。自分のデッ
キからカードを2枚ドローする。

熊谷は勢い良くデッキからカードをドローして確認すると、着ぐ
るみの顔をゆっくりと孝雄のほうに向けた。

「んフフフフ……。貴様を葬る手立てが整ったぞ。バトルだ!!
『ハイドロゲドン』、『真紅眼の黒竜』を攻撃!!ハイドロ・ブレ
ス!!」

「何?『レッドアイズ』の方が攻撃力が高いのに……。返り討
ちだ!!行け!!ダーク・メガ・フレア!!」

孝雄の叫びを聞いた『真紅眼の黒竜』は、その命令どおり口に黒

い炎を溜めて迎撃の体制に入った。だが、その瞬間熊谷は手札から新たなカードを発動した。

「ふうん。この私が！！自爆特攻するとも思っているのか？ダメージステップ、速攻魔法『収縮』発動！！この効果により、貴様の『真紅眼の黒竜』は攻撃力が半分になる！！」

「な・・・何だって！！」

『収縮』速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択する。そのモンスターの元々の攻撃力はエンドフェイズまで半分になる。

孝雄が驚く間もなく、『真紅眼の黒竜』は見る見るうちに小さくなり攻撃力が1200に下がってしまった。その状態で『ハイドロゲドン』を倒せるわけが無く、孝雄の『真紅眼の黒竜』は破壊され、超過ダメージが孝雄を襲った。

「ぐあっ・・・！！」

孝雄 LP8000 7600

ダメージを受けた孝雄は、その時通常のデュエルとは明らかに違う感触を味わった。ダメージを受けた瞬間、ソリッドビジョンでは発生するはずの無い本物の衝撃が孝雄を襲ったのだ。

「ちっ・・・。お前まさか・・・。」

孝雄が熊谷に向かってそういうと、熊谷は得意げに腕を組んでからフンと鼻を鳴らした。

「ンフフフフ……。気付いたか。その通り、私のデュエルデッキには空雅様が開発した精霊石が埋め込まれている。分かっているな。精霊石が発動している限り、このデュエルの衝撃は本物になるのだ。」

熊谷はそういうと、また着ぐるみの下でくぐもった笑い声を上げて、自らのデッキを手に取った。

「さて……。『ハイドロゲドン』の効果発動！ 戦闘によって相手モンスターを破壊し、墓地に送ったときにデッキからさらに『ハイドロゲドン』を特殊召喚することが出来る！！現れよ、『ハイドロゲドン』！！」

熊谷がそう言うって大きく手を上に翳すと、空いている熊谷のフィールドに再び水柱が上がり、そこから2体目の『ハイドロゲドン』が姿を現した。

「ンフフフ……。貴様の場にモンスターはいない！！行くぞ！！『ハイドロゲドン』、ハイドロ・プレス！！」

「させるか！！永続トラップ発動、『正当なる血統』！！このカードの効果で、墓地に存在する通常モンスター1体を蘇生することができる。蘇れ、『真紅眼の黒竜』！！」

『正当なる血統』 永続罫

自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターがフィールド上に存在しなくなった時、このカードを破壊する。

『正当なる血統』が発動されると、孝雄のフィールドに黒い炎が上がり、そこから再び『真紅眼の黒竜』が雄たけびと共に現れた。

「フン……。『ハイドロゲドン』、攻撃を中断しろ。バトルフェイズ終了、メイン2に入る。手札から魔法カード、『ボンディング H2O』を発動する！！」

『ボンディング H2O』魔法カード

自分フィールド上に存在する『ハイドロゲドン』2体と『オキシゲドン』1体を生け贄に捧げる。自分の手札・デッキ・墓地から『ウォーター・ドラゴン』1体を特殊召喚する。

熊谷の発動したカードを見た孝雄は、顔をしかめて舌打ちした。

「くそ……。『オキシゲドン』を出したときにまさかと思ったが、早送りやがったか。」

「ソフソフ……。言っただろ。貴様を葬る手立てが整った。『トレード・イン』で無駄なく『ウォーター・ドラゴン』も墓地に送った。さあ、紳士の化学方程式によって墓地より現れよ！『ウォーター・ドラゴン』！！」

熊谷がそう叫ぶと、フィールド上に居た2体の『ハイドロゲドン』と1体の『オキシゲドン』は互いに混ざり合い、巨大な体を持つ水の竜へと姿を変えた。

『ウォーター・ドラゴン』レベル8 水 2800/2600

海竜族・効果

このカードは通常召喚できない。『ボンディング・H2O』の効果

果でのみ特殊召喚する事ができる。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、炎属性と炎族モンスターの攻撃力は0になる。このカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在する『ハイドロゲドン』2体と『オキシゲドン』1体を特殊召喚する事ができる。

「ンフフフフ……。私はこれでターンエンド。さあ、貴様のターンだぞー!!」

「くっ!!俺のターン、ドロー!!」

攻撃力2800の『ウォーター・ドラゴン』を前にして、多少焦りながら孝雄はカードをドローした。

「くそっ……。『真紅眼の黒竜』を守備表示に変更!!」

「ふうん!!」私” 『ウォーター・ドラゴン』を前にして、手も足も出ないか……。戦闘ダメージを防ぐ道を選んだようだな!!」

守備的な体制をとる孝雄に対し、熊谷がそうあおると孝雄はニヤリと笑って手札のカードを手にとった。

「ふん……。じゃあ手足以外のものを出してやるよ。手札の魔法カード発動!『黒炎弾』!!フィールドの『真紅眼の黒竜』を指定し、そのもとの攻撃力分のダメージ、つまり2400ポイントのダメージを相手に与える!!」

「な……。何だとおおお!!!!」

『黒炎弾』魔法カード

自分フィールド上に表側表示で存在する『真紅眼の黒竜』1体を選択して発動する。選択した『真紅眼の黒竜』の元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。このカードを使用したターン、『真紅眼の黒竜』は攻撃できない。

孝雄がカードを発動すると、『黒炎弾』のカードから黒い火球が発射され、熊谷を襲った。

「ぬおおあああああああ!!!」

熊谷 LP7200 4800

灼熱の火球に包まれて、熊谷はすごい叫びを上げて方膝をついた。

「へっ……。ざまあみやがれ。ターンエンドだ。」

打つ手が無いのか、孝雄は熊谷がのた打ち回っている姿を冷たい目で見つめながらターンを終了した。

「んぐう……。許さん……。許さんぞ!!!」

熊谷は地面に手を突きながら低い声でそう言い、くまの着ぐるみの顔をグイともたげた。愛くるしくも無表情なその顔は、熊谷の低音と合わさってかなり不気味に見えた。

「麗しき女性からダメージを受けるならともかく……。穢れきつた男からこのようなダメージを受けるとは……。許さん……。許さんぞおおおおお!!!」

「何言っただお前！！ダメージを現実に行っているのもお前等の所為だし、俺からダメージを受けるのが嫌なら、来なければ良かっただろ！！」

孝雄は熊谷に対して正論を述べたが、怒り狂う熊谷にその言葉が通じるはず無かった。

「私のタアアアアン！！！」

熊谷は勢い良くカードをドロースると、そのままバトルフェイズに突入した。

「バトウルだあ！！！！」ウオーター・ドラゴン』！！その糞ドラゴンを蹴散らせえ！！アクア・パニツシャー！！」

熊谷の命令で『ウオーター・ドラゴン』はその頭をもたげ、高水圧の水のプレスを『真紅眼の黒竜』めがけて吐き出した。その水圧に耐え切れず、『真紅眼の黒竜』はあっけなく破壊されてしまった。

「ふうん！！このまま成す術も無く私にやられるが良い！！カードを2枚伏せて、ターンエンド！！」

「ちくしょう……。俺のターン、ドロー！！」

モンスターを失った孝雄は、焦りの表情でカードをドロースした。

（よっしゃあ！！『未来融合 フューチャー・フュージョン』！！こいつを使って墓地に『真紅眼の飛竜』と『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を落とせば……。）

孝雄はそう思案すると今先ほど手札に加えたばかりのカードを手
に取った。

「俺はこいつを発動するぜ！！」未来融合　フューチャー・フュ
ージョン』！！こいつは、融合モンスター1体を指定して・・・」

「させるかあああああああ！！！！チエーンする！！リバ
ースカード、オープン！！」砂塵の大竜巻』！！そのカードには、
何もせずに破壊されてもらうぞ！！」

『未来融合　フューチャー・フュージョン』永続魔法

自分のデッキから融合モンスターカードによって決められたモン
スターを墓地へ送り、融合デッキから融合モンスター1体を選択す
る。発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時に選択した融合モ
ンスターを自分フィールド上に特殊召喚する（この特殊召喚は融合
召喚扱いとする）。このカードがフィールド上に存在しなくなった
時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時こ
のカードを破壊する。

『砂塵の大竜巻』畏カード

相手フィールド上の魔法または畏カード1枚を破壊する。破壊し
た後、自分の手札から魔法か畏カード1枚をセットする事ができる。

「うわっ！！くそっ・・・。」

『フューチャー・フュージョン』の発動にチエーンして、熊谷が
『砂塵の大竜巻』でカードを破壊したため、永続魔法の『フューチ
ャー・フュージョン』の効果は不発となってしまった。

「ちくしょう・・・。何なんだよ！！俺は『バイス・ドラゴン』

を手札から守備表示で特殊召喚！！そのままターンエンドだ！！」

逆転の手が破壊され、窮地に立たされてしまった孝雄は紫色の体色をしたドラゴンをフィールドに残してターンを終了した。

『バイス・ドラゴン』レベル5 闇 2000/2400 ドラゴン族・効果

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。この方法で特殊召喚したこのカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる。

「ふうん……。貧弱貧弱ウ！！実に頼りない守備モンスターだ……。私のターン！！バトウル！！『ウォーター・ドラゴン』！！アクア・パニッシャー！！！！」

熊谷の叫びと共に、再び高水圧の水のプレスが孝雄のモンスターを襲った。もちろん、守備表示なのでダメージは0だ。だが、このターンの熊谷の攻撃はこれだけでは終わらなかった。

「まだまだ……。このターンは責様に苦痛を味合わせてやる！！リバーストラップ発動！！『破壊指輪』！！私のフィールドのモンスター1体を破壊し、互いに1000のダメージを受ける！！私は、『ウォーター・ドラゴン』を破壊！！」

『破壊指輪』畏カード

自分フィールド上の表側表示モンスター1体を破壊し、お互いに1000ポイントダメージを受ける。

「なっ……。『ウォーター・ドラゴン』を破壊だと！？」

孝雄が驚いている暇もなく、小さな指輪が『ウォーター・ドラゴン』の尻尾の先に装着され、それが激しい爆発を起こしたと思うとその爆風が二人を襲った。

「ぬううう!!」

熊谷 LP4800 3800

「うわああっ!!」

孝雄 LP7600 6600

爆風から2人が顔を庇った後、熊谷はくぐもった声で笑った。

「ンフフ……。これで良い。『ウォーター・ドラゴン』の効果発動!!破壊されたとき、このカードの素材モンスターを特殊召喚する。出でよ!!!2体の『ハイドロドン』、そして『オキシゲドン』!!!」

熊谷の掛け声と共に、フィールドに2本の水柱と1本の竜巻が巻き起こり、そこから『オキシゲドン』と『ハイドロゲドン』が姿を現した。

「吉良孝雄オ……。お前のフィールドはから空きだな!!痛みを味わえ!!ダイレクトアタック!!ツイン・ハイドロプレス&オキシストリーム!!」

熊谷がそう叫ぶと共に、フィールドにいる合計3体のモンスターはいっせいに孝雄を集中攻撃した。攻撃が命中すると共に、ものす

ごい激痛が孝雄を襲った。

「うわあああああ！！！！ぐ……あああああああ！！！！」

孝雄 LP 6600 5000 3400 1600

熊谷のモンスターの総攻撃を受けた孝雄は、衝撃に耐え切れずにドツと地面に倒れ付した。

「ふうん……。私はターンエンドだ。さあ、立つのだ吉良孝雄。私を止めたいのだろうか？ならば立って戦うのだ！！」

熊谷は地面に倒れてしまった孝雄を見下ろし、からかうように言った。だが孝雄は虚しく地面に手を突くだけで立ち上がれなかった。

（くそ……。立ち上がりたいが、体中が痛い……。くそつ！！動けよ！！俺の体！！）

孝雄はそう思いながら体を起こそうとしたが、その願いはかなわず孝雄は何度も体を起こそうとしてまた地面に倒れる、というのを何回も繰り返した。

「ん……ンフフ……。ンフハハハハハハハハ！！立てないか！！ならば、サレンダーするしかないようだな！！今サレンダーすれば、貴様は無傷でここに放置して言うてやろう！！さあ、どうする？サレンダーするのか？しないのか？」

「ぐ……。くそつ……。」

熊谷の言葉を聞いた孝雄が、そう呻いて熊谷の方を睨み返したときだった。

「孝雄ー！！」

少し遠くから、孝雄が聞きなれた声が聞こえてきた。孝雄が首を声のしたほうに傾けると、修也と陸が孝雄のほうに走ってくるのが見えた。

「修也・・・陸・・・！！」

「ふうん・・・。科学部員達のお出ましか・・・。岡崎の奴、やはり草薙に負けたのか・・・。それとも、入れ違いになったのか・・・。」

熊谷がそう呟くと同時に修也と陸は孝雄の近くまでやってきて、倒れている孝雄を見、それから熊谷を見た。

「貴様何者だ・・・。まともな人間では無いな？」

熊谷を一目見た陸が冷たい声でそういうと、熊谷は腕を組んで低い声で返した。

「ふうん・・・。墨染陸。報告どおり生意気な口を利くな。まあ、良いだろう。貴様はこれから目の前で友人がいたぶられる場面を目にするのだからな。」

「何だと？」

その熊谷の声を聴いて、孝雄に駆け寄っていた修也がキッと熊谷

を睨んだ。

「ンフフフ……。そうだ。こいつは私とのデュエルに敗北した場合、右腕を折られる運命にあるのだ!!!」

「つつ……。お前!!!」

それを聞いた修也は思わず立ち上がった。それを見た陸は慌てて修也の肩を掴んだ。

「落ち着け修也!!!曲がりも何も、今はデュエル中だ。決着するまで干渉するわけには行かない!!!」

「そうだ修也……。下がってくれ……。」

陸に続いて孝雄はそう言い、やっとこさ立ち上がった。

「でも孝雄……。!!!ボロボロじゃないか!!!」

「大丈夫だ……。これくらい!!!こんなところで倒れてちゃ、格好悪いだろ!!!お前を助けるって決めたのに……。こんなところでくじけるわけには……。行かないんだ!!!」

強いまなざしでそういう孝雄を見て、熊谷はフンと鼻を鳴らした。

「ふうん。立ったか。ならば、とつとどローしろ!!!貴様の夕インだぞ!!!」

熊谷の言葉を聞いて、孝雄は頷いてデッキに手を掛けた。そんな孝雄の姿を見て、修也は静かに呟いた。

「孝雄……絶対に勝てよ……!!」

「ああ、任せろ!! あんな変態に負ける俺じゃねえ!! 俺のターン!!」

修也の言葉に孝雄はそう返すと、勢い良くカードをドローした。そして、引いたカードを一瞥してニヤリと笑った。

「来たぜ……。魔法カード発動『死者蘇生』!!」

『死者蘇生』魔法カード

自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

「ぬわああああああああああああにいいいいいいいいいい!!? 『死者蘇生』だとおおおおおお!!! 馬鹿なあああああああ!!!!……なんてな。貴様の『フューチャー・フュージョン』の発動は封じた!! ろくなカードは落ちていないはずだ!!」

「何言つてやがる!! 蘇生するのはこいつだ!! 蘇れ相棒!! 真紅眼の黒竜!!」

孝雄がそう声を発すると同時にフィールドに黒い炎が上がり、全身を漆黒の甲殻に覆われたドラゴンが姿を現した。

「フン……。また『真紅眼の黒竜』か。しつこいというよりみっともないな!!」

「へっ。今のうちに好きなだけ言っとけ!!こいつはただの『レッドアイズ』じゃない!!初期からずっと愛用している『レッドアイズ』だ!!俺は、『真紅眼の黒竜』をリリース!!そして、手札の『真紅眼の闇竜』を特殊召喚するぜ!!」

孝雄の声と共に、『真紅眼の黒竜』は光に包まれてその姿を変えた。さらに攻撃的な鋭いフォルムになり、手は退化して鋭い翼になった。

『真紅眼の闇竜』レベル9 闇 2400/2000 ドラゴン族・効果

このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在する『真紅眼の黒竜』1体をリリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。このカードの攻撃力は、自分の墓地のドラゴン族モンスター1体につき300ポイントアップする。

「ふうん。『真紅眼の黒竜』の進化系か……。だが!!攻撃力は変わらないようだな!!」

「何勘違いしてやがる!!『真紅眼の闇竜』は、墓地の竜の数だけ攻撃力を上げるんだ!!今、俺の墓地には4体のドラゴン!!よって『真紅眼の闇竜』の攻撃力はその数×300ポイント上昇し、3600だぜ!!」

「な……。なんだと?そんな効果が!!」

熊谷が驚くと同時に、孝雄のフィールドに降り立った『真紅眼の闇竜』は鋭い声で大きく吼えた。

「さあ、バトルだぜ!!『真紅眼の闇竜』、『ハイドロゲドン』」

を攻撃！！ダークネス・ギガ・フレイム！！」

孝雄がそう叫ぶと同時に、『真紅眼の闇竜』が吐き出した巨大な火球が熊谷の『ハイドロゲドン』を包み込み、超過ダメージが熊谷を襲った。

「ぬおおおおお！！！」

熊谷 LP3800 1800

熊谷は大きなダメージを受け、大きくのけぞった。

「へっ……。俺はカードを1枚伏せる！！ターンエンドだ！！」

孝雄は最後の手札を魔法・罨ゾーンに伏せるとそのままターンを終了した。

「よし……。ライフをほぼ互角に戻した！！これならいける！！」

「ああ、このままいければ……。な。」

修也と陸がそう呟くと同時に、熊谷は静かにデッキに手を掛けた。

「貴様……。男の分際で一度ならず二度までも……。許さん！！私のタアアアアン！！ドロー！！私の切り札を見せてやる！！『霞の谷の戦士』を……。召喚！！！！」

熊谷が勢い良くカードをディスクに叩きつけると同時に、背中に羽の生えた屈強な肉体を持つモンスターが姿を現した。

『霞の谷の戦士』レベル4 風 1700/300 鳥獣族・チ
ューナー/効果

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、この
カードとの戦闘で破壊されなかった相手モンスターはダメージステ
ップ終了時に持ち主の手札に戻る。

「なっ・・・？シンクロ召喚か・・・でも、攻撃力3600を超
えるモンスターなんて・・・」

「攻撃力など関係ないいいいい！！このまま貴様を蹴り殺す！！
レベル4、『ハイドロゲドン』に同じくレベル4、『霞の谷の戦士』
を・・・チユウウウウウニング！！！！」

熊谷が声高らかに叫ぶと、『霞の谷の戦士』は4つの星になり、
『ハイドロゲドン』を包み込んだ。

「私の気高き紳士の誇りよ！！今心の闇と交じり合い、無限の力
を生みだせい！！シンクロ召喚！！現れよ！！漆黒の紳士、『ブラ
ッド・メフィスト』！！」

熊谷の口上が終わると共に緑色の光がフィールドにあふれ、先端
に罫線の装飾がついている杖を持った黒装束のモンスターが姿を現
した。

『ブラッド・メフィスト』レベル8 闇 2800/1300
悪魔族・シンクロ/効果

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

相手のスタンバイフェイズ時、相手フィールド上に存在するカー
ド1枚につき相手ライフに300ポイントダメージを与える事がで

きる。また、相手が魔法・畏カードをセットした時、相手ライフに300ポイントダメージを与える。

「『ブラッド・メフィスト』。あのバーン効果を持つシンクロモンスターが奴の切り札か。」

修也がそう呟くのを聞いて、陸は顔をしかめて頷いた。

「そのようだな。しかし厄介だな。残り僅かな孝雄のライフでは、容易にカードをセットする事はできない。さらに、孝雄のフィールドのカードは2枚。このまま放置すれば孝雄は3回ダメージを食らっただけで負けてしまうぞ……。」

陸の言葉が聞こえたのか、その言葉が終わると同時に手札のカードを1枚手に取った。

「フフフフ……。そうだ。このまま放置していれば私の勝利。そしてさらに、ダメ押しにこのカードを発動しておこう。『光の御封剣』!!!このカードがある限り、貴様は3ターンの間攻撃ができない!!!」

熊谷がそう言いながらカードを発動すると、天空から無数の光の剣が降り注ぎ、孝雄のモンスターの前に突き刺さった。

『光の御封剣』魔法カード

相手フィールド上に存在する全てのモンスターを表側表示にする。このカードは発動後（相手ターンで数えて）3ターンの間フィールド上に残り続ける。このカードがフィールド上に存在する限り、相手フィールド上モンスターは攻撃宣言を行う事ができない。

「ンフハハハハ！さあ、この布陣をどう突破する？ターンエンドだ！！」

「ちっ・・・俺のターン、ドロー！！」

攻撃が封じられてしまった孝雄は、舌打ちしてからカードをドロした。

「ふうん。この瞬間、『ブラッド・メフィスト』の効果発動！！相手スタンバイフェイズ時、お前のフィールドの1枚につき300のダメージを与える！！喰らい！！カース・オブ・カード！！」

いきなり熊谷がそう叫ぶと、いきなり孝雄のフィールドのカードから黒い影が出現し、孝雄に襲い掛かった。

「ぐわあああ！！」

孝雄 LP 1600 1000

ダメージを受けた孝雄は、足から力が抜けそうになるのを必死で堪えながら引いたカードを一瞥した。

（『黒炎弾』か・・・でも、今『真紅眼の黒竜』を召喚する手立てが無い。伏せカードは攻撃反応型の『炸裂装甲』だし・・・。攻撃も封じられてる！！）

孝雄は冷静にそう思案しながらフィールドを見渡した。結論は一つしか見つからなかった。

（悔しいが・・・。次のドローに掛けるしかない！！それで魔法・

畏破壊系、それがモンスター蘇生のカードが来るのを願うしかない
！！）

「俺はこのまま・・・ターンエンドだ！！」

次の自分のターンのドローに全てを託した孝雄は、そのままター
ンを終了した。

「ふうん。もはや成す術がないようだな。私のターン、ドロー！
！」

熊谷は引いたカードを一瞥すると、着ぐるみの下でフンと鼻を鳴
らした。

「ダメ押しにモンスターを召喚したいところだが、既に貴様のラ
イフは残り1000。次が最後のターンだな。無駄な事はしない。
このままターンエンド！！」

熊谷のターン終了宣告を受けた孝雄は、ゆっくりとデッキに手を
掛けた。

（あいつの言うとおり、次が俺のラストターン。このターンで俺
はさらに『ブラッド・メフィスト』の効果でライフが400になる。
このドローに・・・全てをかける！！）

孝雄はそう思いながら、手汗にまみれた右手を見た。やはり緊張
する。このドローで逆転のカードを引けなければ、孝雄は負けるの
だ。

「孝雄・・・！！」

カードをドローする体制のまま動きが止まっている孝雄を見て、修也は心配そうにその声を掛けた。その声を聴いた孝雄は、静かに眼を閉じた。

(何ビビッてんだ……。修也のためにも、ここで負けるわけにはいかないだろ……。しっかりしろ!!俺!!)

孝雄はそう思って、キッと目を開いた。

「行くぞ……。答えてくれ!!俺のデッキ!!」

孝雄がそう言ってデッキトップのカードを3本の指でつまんだとき、修也の『六星団』の証に異変が起こった。

「つつ……。!?修也!!お前それ……。」

その異変にいち早く気付いた陸は、そう呟いて修也の胸元を見た。それを聞いた修也も自分の胸を見た。

「なっ……。!!」『六星団』の証が光り輝いてる!!

修也はそう叫んでから、孝雄のほうを見た。

「まさか……。孝雄が……?」

「ドローだあっ!!!!」

修也が信じられないという風に言つとほぼ同時に、孝雄はカードを持った腕を勢い良く右に振りぬいた。そして、一呼吸ついでから

そのカードを確認し、ニヤリと笑った。

「貴様何がおかしい!!!」『ブラッド・メフィスト』の効果喰らえ!!!カース・オブ・カード!!!」

その笑い顔を見咎めた熊谷は、野太い声でそう命令した。それと同時に、孝雄を再びカードから出た黒い影が襲った。

孝雄 LP1000 400

「これで俺のライフはあとわずかか……。だがな熊谷。俺は引いたぜ……。逆転の一枚を!!!」

対する孝雄はダメージに怯まず、熊谷にそう言い放つと今しがた引いたばかりのカードをディスクに叩きつけた。

「これが……。俺の引いたカード!!!」『黙する死者』!!!蘇れ誇り!!!『真紅眼の黒竜』!!!」

孝雄のその声と共に、デュエルディスクの墓地ゾーンが赤く光り輝き、またも『真紅眼の黒竜』がその姿を現した。

『黙する死者』魔法カード

自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを表側守備表示で特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターはフィールド上に表側表示で存在する限り攻撃する事ができない。

「『真紅眼の黒竜』が逆転のカードだと……。まさか貴様手札にあのカードが……。ぐ……。まさか……。まさか私が負けるかもだっつ!!!こんな偶然だ!!!」

「偶然なんかじゃねえ!!」

自分に言い聞かせるようにそういう熊谷に対して、孝雄はそう怒鳴った。

「ドローするとき感じたんだ。墓地にいる『レッドアイズ』の燃えるような闘志を!!だから俺は恐れずにドローしたカードを見ることができた!!」

孝雄がそう呟くのに答えるように、『真紅眼の黒竜』は大きく吼えた。それと同時に、孝雄の胸が赤い光に包まれ始めた。

「なっ……何だこれは？」

その光を見た孝雄は、驚いて自分から出ている紅い光を見つめた。その光は次第に強くなり、やがて竜の翼を模したようなペンダントになった。

「これは……。修也と同じ？」

孝雄はいつのまにか自分の首から下げられていたそのペンダントを見て、そう呟き、それからフィールドの『真紅眼の黒竜』を見た。ソリッドビジョンのはずの『真紅眼の黒竜』はそんな孝雄を真紅の瞳で見つめ返した。

「そういうことか……。行くぜ『レッドアイズ』!!俺たちの最高の力を、アイツにぶつけてやるんだ!!手札から魔法カード発動!!魂の一撃を喰らいな!!『黒炎弾』!!」

孝雄がそう叫ぶと、『黒炎弾』のカードからではなくフィールドの『真紅眼の黒竜』の口から黒い火球が放たれた。火球は『ブラッド・メフィスト』と『オキシゲドン』の間を潜り抜け、まっすぐ熊谷を狙った。

「ぬおおおおあああああああああ!!!!!!」

熊谷 LP18000

Win 吉良孝雄

火球をもろに受けた熊谷はばたりと倒れ、ライフが0となった。それと同時にデュエルは終了し、ソリッドビジョンシステムはシャットダウンした。それを確認した修也は思わずガッツポーズをした。

「よっしゃあ!!!孝雄が勝ったぜ!!!」

「フン……。全く冷や冷やさせおつて……。」

そう言いながら、修也と陸はデュエルを制した孝雄の下に駆け寄った。

「修也!!!俺……。」

駆け寄ってきた修也に、孝雄はそう言いながら先ほど現れたペンダントを見せた。それを見た修也はうれしそうに頷いた。

「ああ……!!!孝雄、お前も『六星団』だったんだな!!!」

「みたいだな!!!しかも……最高の精霊だぜ!!!」

孝雄はそう言って、ソリッドビジョンが消えた今も孝雄のすぐそばに残っている『真紅眼の黒竜』を見た。『真紅眼の黒竜』は孝雄の声に答えるように小さく唸った。

『2人目の『六星団』が覚醒したか……。』

突然その声と共に、修也の精霊である『総剣指令ガトムズ』が姿を現し、孝雄の『真紅眼の黒竜』を見上げた。

『竜族は成長すると我々の言葉を話さなくなる。しかし、心は通じ合っているようだ。恐らく、孝雄殿が幼少期から大切にしていたおかげだろう。』

「ああ、デュエルモンスターズを始めたところからの相棒だからな！！これからもよろしく頼むぜ！！『レッドアイス』！！」

『ガトムズ』言葉を受けた孝雄はそう言って、『真紅眼の黒竜』の方を見た。『真紅眼の黒竜』は『ガトムズ』の言つとおり言葉を発しなかったが、孝雄の言葉に対してしっかりと頷いた。

「……さて、挨拶が済んだところで俺も仲間に入れてもらおうか。」

やり取りがひと段落するのを見て、この場で唯一精霊が見えていない陸がそう声を発した。それを聞いた修也と孝雄は、同時に陸の方を見た。

「勝利の余韻に浸っているとそろそろすまないが……。奴はどうする？このまま放置していても、後々面倒なだけだぞ……。」

陸はそう言って、地面に倒れている熊谷を指差した。

「警察に突き出すか？この容姿なら、不審者として事情聴取してくれそうだけど？」

修也が熊谷のほぼ全裸という出で立ちを見て、冗談交じりにそういったときだった。

「警察に突き出す・・・？この私を・・・？」

「つつ・・・！！おい、こいつ！！！」

警察という言葉に反応したのか、気絶したと思われていた熊谷はムクリと起き上がった。それを見た3人はいつせいに身構えた。

「ふうん・・・。そういうわけにはいかない。私にはまだやるべき事がある・・・。ここでつかまるわけにはいかんだよ・・・！！」

全身ボロボロになっている熊谷は、そう言って着ぐるみの中に手をつ込んで1枚のカードを取り出した。そのカードを確認した修也は、大きく目を見開いた。

「『盗人の煙玉』！？お前・・・逃げるつもりか！！！」

「当たり前だ・・・！！ここはひとまず退散！！！」

熊谷はそう叫ぶと、カードをディスクに差し込んで精霊石の力で発動した。それと同時に、辺りに白い煙が勢い良く噴出し始めた。

「ゲホツ・・・待たんか貴様!!!」

陸が咳き込みながらそういうのに対し、熊谷は高らかに笑いながらくぐもつた声で言った。

「フハハハハハハ!!私を追うより、科学部室に向かった奴を追ったらどうだ?どうやら貴様等とは入れ違いになったようだからな!!フハハハハハハ!!」

その言葉を最後に熊谷は完全に姿を消した。煙がなくなった後は、修也、陸、孝雄の3人だけが取り残されていた。

「どういうことだ?科学部室に向かった奴って・・・」

修也がそう呟くと、孝雄はアツと声をあげて修也の方に向き直った。

「そうだ!!あいつ等の仲間の1人が、修也を追って科学部室に向かったんだ!!会わなかったのか?」

「ちい・・・厄介な!!何故それを速く言わん!!」

孝雄の言葉を聞いた陸も、舌打ちしてから修也の方を向いた。2人の視線を受けた修也は頷いてから2人に言った。

「こつしちやいられない。無関係な人が巻き込まれる前に、科学部室に戻らなきゃ。行こう!!」

修也の声を合図に、3人は休む間もなく一斉に校内に向かって走

り出した。

第9話 燃え盛る意地の炎！！

「へっ。やっと来るか・・・？」

そう遠くないところから響いてくる足音を聞きつけて、人っ子一人いない科学部室の机に胡坐をかいて坐っていた岡崎蒼汰はヒョイと床に飛び降りた。

（やれやれ……。やっとか。この瞬間、どれだけ待ちわびた事か！！）

蒼汰がそう思いながら扉の方を見ていると、数人分と思われる足音は扉の前でぴたりと止まった。

蒼汰はニヤリと笑うと、扉の向こうにいる人物に向かって声を掛けた。

「よお！！入って来い！！俺はここにいるぞ！！」

その声が聞こえたのか、その直後に扉は開かれた。扉が開いた瞬間、その向こうに立っていた3人の中で一番背の高い長髪の少年が敵意をむき出しにして言った。

「入って来い・・・か。ずいぶんとえらそうな口を利くな。ここは俺たちの部室だ。我が物顔でいてもらっては困るな。」

「へっ。入ってきた瞬間説教するつもりか？」

冷たい声でそう言ってきた陸に対して、蒼汰も負けじとそう言い

返した。言い返された陸はまた口を開こうとしたが、それを最前列に居た修也が押しとどめた。

「待てよ陸……。」

「しかしだな……。」

陸は何か言いかけたが、修也はそれを無視して数歩前に進み出た。そして、部屋の中央に仁王立ちしている蒼汰をじつと見つめた。

「孝雄から聞いた。お前が俺と戦いたがっている岡崎蒼汰だな？」

「へっ……。そうだ。俺が岡崎蒼汰。てめえの『六星団』の証を奪い取りに来た。」

蒼汰が威圧的な口調でそういうと、修也の後ろにいた陸が首をひねった。

「『六星団』の証を奪いに来ただと？それはおかしい。俺たちは昨日、時戸の奴に大会の招待状を渡された。我々に歯向かう気があるなら大会に出るとな。時戸研究所の傘下の者なら、こんなことをするはずがないだろう？」

「ちつ……。うるせえな。俺はあんな奴の計画には賛同してないんだよ。手っ取り早く証を奪った方が楽なのに、何故こんな回りくどいやり方をするのか分からんね。」

蒼汰は陸に対して喧嘩腰でそう言い、修也のほうに視線を戻すと早速左腕に付けていたデュエルディスクを起動させた。どうやら、すぐに戦うつもりらしい。それを見た修也もディスクを起動させた

が、それを孝雄が押しとどめた。

「待て!!むやみに戦うのは危険だ!!あいつ等、デュエルの衝撃を現実にする力があるんだぜ?それに、昨日時戸と戦ったお前は、相手に手の内がばれてるんじゃないのか?」

「そんな事言っただって……。戦うしかないだろ!!」

修也は孝雄の言葉にそう返して、怯まずにデュエルディスクを構えた。それを見た蒼汰はニヤリと笑って腰のデッキホルダーから取り出したデッキをディスクに取り付けた。

「フン……。戦うしかない……。か。俺好みの答えだ!!そいつの言うとおり、お前のデッキ内容は大体把握している!!それでもやるってのかよ!!」

「当たり前だ!!。受けてたってやる!!」

2人はそう言ってにらみ合うと、一瞬の沈黙の後に同時に叫んだ。

「デュエル!!」

『六星団』草薙修也 vs 強気な侵入者 岡崎蒼汰

2人のその叫びで、常盤高校への侵入者との2戦目のデュエルが始まった。転倒したのは修也のランプ。先攻は修也だ。

「俺のターンか。ドロォ!!」

修也はデッキからカードを1枚ドロォすると、合計6枚の手札を

凝視した。手の内がばれているかも知れないと孝雄が言っていたが、時戸とのデュエルで見せたカードは1一部のみ、さらに昨日多少の改良を加えたので、手の内が分かっているとしても大して不利になる事は無いと修也は判断した。

(でもここは一応慎重に……)

「俺はモンスターを1体セット。さらにカードを1枚セットして、ターン終了だ。」

「へっ。ずいぶんと慎重だな。俺のターン、ドロー!!」

ターンが回ってきた蒼汰は勢い良くデッキからカードを引き、その中の1枚をディスクに叩きつけた。

「その壁モンスターがどんな奴だろうと、こいつで瞬殺だ!!来いよ、『フレムベル・ヘルドッグ』!!」

蒼汰のその声と共に、全身を細い溶岩が流れているような姿の犬型のモンスターが姿を現した。

『フレムベル・ヘルドッグ』レベル4 炎 1900/2000
獣族・効果

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキから『フレムベル・ヘルドッグ』以外の守備力200以下の炎属性モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「なっ……攻撃力1900?しかも展開能力持ち?」

孝雄が蒼汰のモンスターを見て驚いたような声でそういうと、隣で見ていた陸も舌打ちした。

「ちつ。『フレムベル』か。『ヘルドッグ』の展開力と切り札である『真炎の爆発』の爆発力に頼るデッキ……。この2枚を対策できれば大したこと無いが……。対処できなければ恐ろしい相手になるな。」

陸と孝雄がそう言うのを尻目に、蒼汰はバトルフェイズに入った。

「さあ、バトルだあ!!!『フレムベル・ヘルドッグ』で裏守備モンスターに攻撃!!!フレーム・ファンク!!!」

蒼汰がそう命令すると、大型犬並みの体躯を持つ『ヘルドッグ』は一瞬で修也の伏せモンスターに飛び掛った。伏せモンスターは『XX セイバー エマーズブレイド』。『エマーズブレイド』はあつけなく破壊されてしまった。

「フン……。リクルーターか。『ヘルドッグ』の格好の餌だな!『ヘルドッグ』の効果!!!お前のモンスターを戦闘破壊して墓地に送ったため、デッキから『ヘルドッグ』以外の守備力200モンスター、『ネオフレムベル・オリジン』を特殊召喚!!!」

蒼汰がデッキからカードをディスクに置くと、小さな火の玉のモンスターが姿を現した。

『ネオフレムベル・オリジン』 レベル2 炎 500/200
炎族・チューナー/効果

自分フィールド上に『ネオフレムベル・オリジン』以外の『フレムベル』と名のついたモンスターが表側表示で存在し、相手の墓地

に存在するカードが3枚以下の場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

「だけど・・・『エマーズブレイド』の効果も発動させてもらう。戦闘破壊されたとき、デッキからレベル4以下の『X セイバー』を特殊召喚できる!!デッキから、『XX フラムナイト』を特殊召喚!!」

修也も同じくデッキからカードをディスクにおき、接続昆状の剣を持った『X セイバー』の一体を特殊召喚した。

『XX セイバー フラムナイト』レベル3 地 1300/1000 戦士族・チューナー/効果

「ハン!!出やがったな。お前のお気に入り、攻撃を防ぐ効果があるチューナーがよ。メイン2、俺はレベル4の『ヘルドッグ』にレベル2の『ネオフレムベル・オリジン』をチューニング!!」

蒼汰がそう叫ぶと、『オリジン』は2つの星になって『ヘルドッグ』を包み込んだ。

「シンクロ召喚か・・・」

「へっ・・・。そのとおりだ。熱き心を持つ戦士よ、今こそ真紅の炎を滾らせ立ちふさがるものを焼き尽くせ!!シンクロ召喚!!燃え上がれ、『フレムベル・ウルキサス』!!」

蒼汰の口上が終わると同時に、蒼汰のフィールドから炎が勢い良く飛び出て、その中から灼熱の炎を体に纏った人型のモンスターが姿を現した。

『フレムベル・ウルキサス』レベル6 炎 2100/400
炎族・シンクロ/効果

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていけば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与える度に、このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

「さらに、カードを2枚セット。ターンを終了する!!」

「よし……。俺のターン、ドロー!! 『クリッター』を召喚!!」

修也がディスクにカードを置くと、三つの目を持った悪魔族モンスターがフィールドに現れた。

『クリッター』レベル3 闇 1000/600 悪魔族・効果

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下のモンスター1体を手札に加える。

「俺もシンクロさせてもらおう……。レベル3の『クリッター』に、同じくレベル3の『フラムナイト』をチューニング!!」

修也の声と共に、『フラムナイト』は剣で3つの星を描き出し、3つの星の輪になって『クリッター』を包み込んだ。

「大地の鼓動集いし時、新たな力が迸る!! シンクロ召喚!! 来い、『大地の騎士ガイアナイト』!!」

修也の口上が終わると共に、両手に槍を持った人馬一体のモンスターがフィールドに姿を現した。

『大地の騎士ガイアナイト』レベル6 地 2600/800
戦士族・シンクロ

「ほお……。そんな効果なしモンスターでどうするつもりだ？」

「うるさい……。攻撃力はお前のより高いだろ！！まずは『クリッター』の効果発動！！デッキから攻撃力1500以下のモンスターを1体手札に加える。俺は『カードガンナー』を手札に！！そしてバトルフェイズ！！『ガイアナイト』で『ウルキサス』を攻撃！！ガイアシエパー！！」

修也が命令すると、『ガイアナイト』は両手に持った槍を突き出して勢い良く『ウルキサス』に突進した。だが、攻撃が命中する前に蒼汰の伏せたカードが表になった。

「焦るなよ！！速攻魔法、『月の書』発動！！これでお前の『ガイアナイト』には裏側守備表示になっていて貰う！！」

『月の書』速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、裏側守備表示にする。

「くそつ……。攻撃を封じられたか。ターンエンドだ！！」

打つ手が無い修也は、そのままターンを終了。それを見た蒼汰はニヤリと笑ってカードを引いた。

「俺のターン！！モンスターをセット。そしてバトルだ！！」フレムベル・ウルキサス』、裏側の『ガイアナイト』を攻撃しろ！！フレムベルドライブ！！」

蒼汰が命令すると『ウルキサス』は両腕に炎を溜め、そのまま裏守備状態の『ガイアナイト』のところまで駆けて来るとその両腕を一気にたたきつけた。『ガイアナイト』はあっけなく破壊され、『ウルキサス』の貫通効果によって修也はダメージを受けた。

「あぐっ……！！」

修也 LP8000 6700

ダメージと共に本物の衝撃を喰らい、修也は思わず2歩後ずさったが怯まずに蒼汰を睨み返した。

「ほお……。それほど動じないか。まあ良い。『ウルキサス』の効果！！相手に戦闘ダメージを与えたとき、こいつの攻撃力を300上げる！！これにより、『ウルキサス』の攻撃力は2400に上昇するぜ！！」

蒼汰がそう説明すると、『ウルキサス』の体で燃えている炎が一段と強さを増した。それと同時に『ウルキサス』の攻撃力は300上昇して2400を指した。

「俺はこれでターンエンド。さあ、お前のターンだぜ！！」

「くっ……。俺のターン、ドロー！！」

修也は勢い良くカードをドロし、そのカードを確認した。そして、いいカードを引いたのか微かに笑った。

「俺は手札からフィールド魔法、『ガイアパワー』を発動！！このカードの効果でフィールド上の全ての地属性モンスターの攻撃力は500ポイント上昇し、守備力は400ポイント下がる！！」

修也がそう言いながらフィールド魔法を発動すると、ソリッドビジョンは科学部部室全体に大きな木と草木が茂る豊かな大地を映し出した。

『ガイアパワー』フィールド魔法

全ての地属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップし、守備力は400ポイントダウンする。

「よっしゃあ！！修也のデッキのほぼ全てのモンスターは地属性！！対する相手は炎属性！！これで、火力がアップだぜ！！」

孝雄はそう言って手放しに喜んだが、陸は浮かない顔で辺りのソリッドビジョンを見渡しながら

「ああ。だが、フィールド魔法は強力な効果を持つものもあるが『サイクロン』、『ツイスター』、『砂塵の大竜巻』など永続魔法、畏対策カードの格好の的だ。あまり安心しない方が良いだろうな。」

と、警戒しながら言った。だが、蒼汰の場にある伏せカードはそうでは無い様で修也がカードを発動しても反応する事は無かった。

「さらに、手札から『カードガンナー』を通常召喚！！」

修也がカードをディスクに置くと、下部にキヤタピラを装着した赤色主体のロボットモンスターが姿を現した。

『カードガンナー』レベル3 地 400/400 機械族・効果
自分のデッキのカードを上から3枚まで墓地へ送る事ができる。
墓地へ送ったカード1枚につき、このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで500ポイントアップする。この効果は1ターンに1度しか使用できない。自分フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

「ほう……。ドロウ効果を持つモンスターか。あまり出されてうれしいものではないが、そんなものでどうするつもりだ？」

「黙れ!! 『カードガンナー』の効果発動!! デッキトップからカードを3枚墓地に送り、送ったカード1枚につき攻撃力を500上げる!! これで……。『カードガンナー』の攻撃力は1500アップ!! 『ガイアパワー』の効果と合わさって2400だ!!」

修也がカードを墓地に送ると、『カードガンナー』のギアの回転が速くなり攻撃力の数値は一気に上がって2400になった。

「ハン……。『ウルキサス』と同じ攻撃力が……。だがそれどうする気だ……。？」

「こうするのさ!! バトルフェイズ、『カードガンナー』で『ウルキサス』を攻撃!!」

修也が命令すると、カードガンナーはキヤタピラを回転させて勢い良く『ウルキサス』に向けて突進した。『ウルキサス』も両手に炎をため突進してきた『カードガンナー』をその両手で受け止めた。

その瞬間『カードガンナー』は爆発を起こし、2体のモンスターはその爆発で同時に破壊されてしまった。

「くっ……。『カードガンナー』の効果！破壊されたとき、デッキからカードを1枚ドローする！！そしてメイン2、カードを2枚セットして、ターンエンドだ！！」

「フン！！何がしたかったかと思えば1枚ドローだけか？俺のターン、ドロー！！リバースカードオープン！！『リビングデットの呼び声』！！俺が蘇生するのは、『フレムベル・ウルキサス』！！」

『リビングデットの呼び声』 永続罫

蒼汰はカードをドローしてすぐに伏せカードを発動した。そして、『リビングデットの呼び声』の効果により、先ほど相打ちに持ち込んだ『フレムベル・ウルキサス』が墓地より蘇った。

「くそ……。せっかく倒したのに……。」

「ハーツハツハ！！所詮お前の抵抗なんて無意味だということだ！！そして手札より、再び『フレムベル・ヘルドッグ』を通常召喚！！」

蒼汰が高笑いしながらカードをディスクに叩きつけると、再び灼熱の温度を持つ犬が姿を現した。

「そしてお前の3枚の伏せカード。最初から伏せていた1枚はともかく、先ほど伏せた2枚は確実に攻撃反応型のトラップカードだな……。」

「へっ……!! そんなの分からないだろ?」

伏せカードを警戒する蒼汰に対して、修也はそう言ってはぐらかした。修也はこの一言で蒼汰が警戒して攻撃を中断すると踏んだが、そんな事は無かった。

「ハハハハハ!! この俺がそんなのでびびると思っているのかよ!! バトルフェイズだ!!」『フレムベル・ヘルドッグ』でプレイヤーにダイレクトアタック!! 『フレーム・ファンゲ!!』

蒼汰は臆せずに攻撃宣言し、その命令を受けた『フレムベル・ヘルドッグ』は修也に飛び掛った。3枚もある伏せカードは発動することなく、『ヘルドッグ』の攻撃は修也に直撃した。

「うわあああっ!!!!」

修也 LP6700 4800

ダメージと同時に現実の衝撃を受けた修也は叫び声と共に後ろに吹き飛ばされてしまった。

「修也!!!!」

孝雄が倒れた修也に向かってそう叫んだが、蒼汰の追撃は止まらなかった。

「ハーツハツハツハ!!!! どうやらそのカードはただのブラフのようだな!!」『ウルキサス』、ダイレクトアタックだあ!! 『フレムベルドライブ!!』

蒼汰の命令により、続いて『フレムベル・ウルキサス』が両腕に炎をためて修也の元に突進してきた。修也は急いで体系を立て直し伏せカードのスイッチに手を掛けた。

「く……。なめるな……。トラップ発動、『デイメンジョン・ウォール』!!この戦闘によって発生するダメージは、お前が受ける!!!」

「なんだと?くそつ……。『ヘルドッグ』より攻撃力の高い『ウルキサス』に対して発動したか……。!!」

蒼汰が舌打ちすると同時に修也の目の前と蒼汰の背後に時限の歪ができ、『ウルキサス』の攻撃はそこに放たれた。そして攻撃は修也に当たらず、背後から蒼汰を襲った。

「ぬおおおお!!!」

蒼汰 LP8000 5900

蒼汰はダメージを受けて前に勢い良く倒れこんだ。だが、修也とは違い痛みを怖むことなくすぐに立ち上がると修也を睨んだ。

「ちつ……。小癩なマネをしやがって……。俺はこのままターンエンドだ!!!」

「エンドフェイズに、もう1枚のトラップを発動させてもらおう。

俺の伏せカードもこいつだ。『リビングゲットの呼び声』!!俺は

『X セイバー パシウル』を蘇生!!!」

『X セイバー パシウル』レベル2 地 100/0 戦士族・

チューナー/効果

修也が『リビングデットの呼び声』で『パシウル』を蘇生すると、傍らで見ていた孝雄が首をかしげた。

「ん？あんなカード、いつ落ちたんだ？」

「恐らく、『カードガンナー』の効果の時さ。」

そんな孝雄に対して、注意深くデュエルを見ていた陸はニヤリと笑ってそう言っただけを見た。

「修也の狙いは『ウルキサス』を相打ちに持ち込むことではなく、カードを1枚ドローすることでもない。墓地にカードを送ることだったんだ。恐らく、もう1枚の伏せカードは……。」

「おお！！修也お得意のあれか！！！」

2人がそう言いあうと同時に、修也はドローフェイズに入ってデッキからカードをドローした。

「俺のターンだ、ドロー！！よし……。リバーズカード発動！！『ガトムズの緊急指令』！！フィールドに『Xセイバー』がいる時、墓地から2体の『Xセイバー』を特殊召喚することができる！！出る！！『XXセイバー ガルドストライク』、『XXセイバー フラムナイト』！！」

修也がそう言いながら墓地からカードを2枚取り出し、デュエルディスクに置くと『フラムナイト』ともう1枚、『カードガンナー』の効果で落ちたのであろう狼の様な顔をした『ガルドストライク』

が姿を現した。

『ガトムズの緊急指令』畏カード

『X X セイバー ガルドストライク』レベル5 地 2100
/1400 獣戦士族・効果

「ちつ……。運の良いやつめ、『カードガンナー』の効果で『パシウル』と『ガルドストライク』。2体のモンスターを落としていたとはな。一気に展開してきやがったか……。」

「へへっ。まだ終わらないぜ！！俺はレベル5の『ガルドストライク』にレベル2の『パシウル』をチューニング！！」

修也がそう叫ぶと『パシウル』は2つの星になり、『ガルドストライク』を包み込んだ。

「二つの刃交わりし時、新たな決意の刃が生まれる。全ての闇を切り裂け！！シンクロ召喚！！現れる、『X セイバー ソウザ』！！」

修也の口上が終わると同時にフィールドに緑色の光があふれ、修也のフィールドに逞しい肉体の二刀流剣士が姿を現した。

『X セイバー ソウザ』レベル7 地 2500/1600
戦士族・シンクロ/効果

チューナー+チューナー以外の『X-セイバー』と名のついたモンスター1体以上

自分のメインフェイズ時に、自分フィールド上に存在する『X-セイバー』と名のついたモンスター1体をリリースする事で、以下の

効果から1つを選択してエンドフェイズ時まで得る。このカードがモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する。このカードは畏カードの効果では破壊されない。

「ちつ……。シンクロモンスターか。しかも、『ガイアパワー』の効果で攻撃力は500上昇して3000か……。」

「へっ!!ここからが俺の反撃だぜ!!バトルフェイズ、『Xセイバー ソウザ』で『ウルベルム』を攻撃!!ダブルソードスラッシュ!!」

修也が命令すると、『ソウザ』は両手に持った剣を振り上げて『ウルベルム』に切りかかった。『ウルベルム』は炎を手に溜めて迎撃しようとしたが、その前に『ソウザ』に破壊されてしまった。

「ぐああっ!!」

蒼汰 LP5900 5000

蒼汰はダメージを受けた衝撃で少し後ろに下がった。それを見た修也は一瞬ためらったが、続けて攻撃を仕掛けた。

「続けてバトル!!」
「XX セイバー フラムナイト」で裏守備モンスターを攻撃!!」

修也が命令すると、『フラムナイト』は手にしている剣を鞭のようには振りぬいた。その攻撃によって蒼汰の伏せモンスター、『きつね火』は破壊されてしまった。

『きつね火』レベル2 炎 300/200 炎族・効果

表側表示で存在するこのカードが戦闘で破壊されたターンのエンドフェイズ時、このカードを墓地から自分フィールド上に特殊召喚する。このカードは生け贄召喚のための生け贄にはできない。

「ちい！！裏側表示の時に攻撃宣言を受けたため、効果は発動しない！！」

「なら、『フラムナイト』の効果が発動させてもらう！！こいつが戦闘によって守備表示モンスターを破壊したとき、墓地のレベル4以下の『Xセイバー』を特殊召喚できる。俺は墓地の『XXセイバー エマーズブレイド』を特殊召喚！！」

修也の命令で『エマーズブレイド』が手を翳すと、墓地に送られた『エマーズブレイド』が再びその姿を現した。

「メイン2、カードを1枚セット。ターンを終了するぜ。」

「ちっ……。俺のターン、ドロー！！」

場の状況が逆転したため、蒼汰は若干焦りながらカードをドローした。

「フン！！クソが……。カードを2枚セット！！そしてバトルフェイズ、『フレムベル・ヘルドッグ』で『フラムナイト』を攻撃！！フレイルム・ファング！！」

「そんなもの、『フラムナイト』の効果で無効にする！！フラムナイト・ディフェンス！！」

蒼汰は『ヘルドッグ』に攻撃命令をしたが、修也の『フラムナイ

ト』がその攻撃を防ぎ、不発となってしまった。

「ちい！！俺はこのままターンエンドだ！！」

「俺のターン、ドロー！！」

蒼汰のターン終了を確認した修也は勢い良くカードをドローした。そしてフィールドにいる『フラムナイト』と『エマーズブレイド』をキツと見つめた。

「そんな伏せカード俺の前では無意味だ！！レベル3の『エマーズブレイド』同じくレベル3の『フラムナイト』をチューニング！！」

修也がそういうと、『フラムナイト』は3つの星になって『エマーズブレイド』を包み込んだ。

「全てを切り裂く正義の刃よ！！今勇猛なる戦士に導かれ、新たな未来を切り開け！！シンクロ召喚！来い、『XX セイバー ヒュンレイ』！！」

修也がそう叫んで手を翳すと、『フラムナイト』と『エマーズブレイド』から生まれた光から新たな『X セイバー』が姿を現した。

『XX セイバー ヒュンレイ』レベル6 地 2300/13

00 戦士族・効果/シンクロ

チューナー+チューナー以外の『X-セイバー』と名のついたモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在する魔法・罠カードを3枚まで選択して破壊する事ができる。

「『ヒュンレイ』の効果発動！！シンクロ召喚されたとき、フィールドの魔法・罠カードを3枚まで破壊する。俺は、お前の2枚の伏せカードを選択して破壊する！！」

修也が叫ぶと、『ヒュンレイ』は自身が手にしている剣を勢い良く振り、エネルギー波のようなものを出して蒼汰の伏せカードを狙った。

「よし！！これでアイツの場には『ヘルドッグ』のみ！！2体のモンスターで攻撃すれば大ダメージだぜ！！」

それを見た孝雄はガッツポーズをしてそういった。だが、そう上手くはいかず蒼汰はニヤリと笑って伏せカードを発動させた。

「ヒヤツハア！！複数枚伏せれば『パルキオン』でなく『ヒュンレイ』を出してくると思っただぜえ！！チェーンさせてもらう！！リバースカード、『手札断札』発動！！このカードの効果で、互いのプレイヤーは手札からカードを2枚墓地に送り、2枚ドロウする！！」

「く……。だが効果は発動する！！」

蒼汰の発動した『手札断札』の効果により、修也は4枚の手札のうち2枚を、蒼汰は残っていた手札2枚を墓地に送って新たにカードをドロウした。

「ハツハア！！そして、お前が破壊した伏せカードを見せてやるう。『荒野の大竜巻』だあ！！こいつはセットされた状態で破壊されたとき、フィールドの表側カードを1枚破壊する。俺は『ソウザ』

を選択して破壊するぜえ！！」

『荒野の大竜巻』 罨カード

魔法&罨カードゾーンに表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊する。破壊されたカードのコントローラーは、手札から魔法または罨カード1枚をセットする事ができる。また、セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊する。

「そんな！！『ソウザ』が……。」

修也が愕然として声を上げると共に、『ソウザ』は突如現れた巨大な竜巻に飲まれて破壊されてしまった。

「ち……。一気に伏せカードを除去しようとして、『ヒュンレイ』を出したのが裏目に出たか……。あの男、それを読んでカードを2枚伏せ、あえて『ガイアパワー』を破壊せずに『荒野の大竜巻』をセット状態で場に残した。成る程、大口を叩くほどの実力は持ち合わせているというわけか……。」

試合を観戦している陸は蒼汰を見てそう呟き、ここに来る途中で孝雄から聞いた光彦の事を考えた。

（光彦の奴も似たような奴と戦っているのか……。？アイツ、実力はあるが引きが極端に悪いときがあるからな……。負けることが無ければ良いが……。）

陸がそう思案している間に、伏せカードを除去した修也はバトルフェイズに入った。

「くそ……。でも『ヘルドッグ』は倒せる！！バトルだ！！」
「ヒュンレイ」で『ヘルドッグ』を攻撃！！クロスソード・ハリケーン！！」

修也がそう叫ぶと『ヒュンレイ』は一気に『ヘルドッグ』の元へと飛び、回転斬りを喰らわせた。『ヘルドッグ』は耐え切れず破壊され、超過ダメージが蒼汰を襲った。

「ちつ……。この程度！！」

蒼汰 LP5000 4100

「バトルフェイズ終了……。俺はこのままターンエンドだ！！」

修也がターン終了を宣告すると、蒼汰はすぐさまデッキからカードをドローして、引いたカードを修也に見せた。

「へつ……。こいつを引いたぜ。これでお前の鬱陶しいフィールド魔法を排除する。ドローフェイズに速攻魔法発動、『サイクロン』！！」

『サイクロン』速攻魔法

フィールド上の魔法または罫カード1枚を破壊する。

蒼汰がカードを発動すると、フィールドを包み込むように巨大な竜巻が発生した。その竜巻に飲まれた『ガイアパワー』は破壊され、周りの風景はいつもの科学部室へと戻った。それと同時に、フィールド魔法の恩恵を受けていた『ヒュンレイ』の攻撃力も2800から元の2300へと戻った。

「くそ……。攻撃力が戻った……。」

「へっ……。そんな顔するなよ。お前は今からもっと深い絶望を味わうんだからな……。スタンバイ、メインフェイズ。手札から魔法カード発動!!! 『真炎の爆発』!!! 墓地の守備力200の炎属性モンスターを可能な限り特殊召喚する!!! これ俺の切り札だあ!!!」

『真炎の爆発』魔法カード

自分の墓地に存在する守備力200の炎属性モンスターを可能な限り特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターはこのターンのエンドフェイズ時にゲームから除外される。

「やべえぞ!!! アイツの切り札が来ちまった!!!」

孝雄が表情を変えて叫ぶのを聞いて、陸も忌々しそうに舌打ちをした。

「ちつ……。まずいな。このターンを凌ぎ切れるかどうか……」

2人がそう言い会っている間に、蒼汰は墓地に存在していた守備力200のモンスター、2体の『ヘルドッグ』、『ネオフレムベル・オリジン』、『きつね火』、『ネオフレムベル・シャーマン』を特殊召喚した。

『ネオフレムベル・シャーマン』レベル3 炎 1700/20

0 炎族・効果

自分の墓地に『フレムベル』と名のついたモンスターが3体以上存在し、このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、

相手の墓地に存在するカード1枚を選択してゲームから除外する。
この効果の発動時に相手の墓地に魔法カードが存在しない場合、さらに相手ライフに500ポイントダメージを与える。

「く……。『ネオフレムベル・シャーマン』。『手札断札』で墓地に送っていたのか。」

「そういうことさ！！さあ、このデュエルもファイナーレを迎えようとしているぜ！！いくぞ！！まずはレベル2、『きつね火』とレベル3の『ネオフレムベル・シャーマン』にレベル2の『ネオフレムベル・オリジン』をチューニング！！」

蒼汰が叫ぶと同時に、『ネオフレムベル・オリジン』は炎の輪に姿を変えて他の2体のモンスターを包み込んだ。

「太古に封印されし灼熱の炎の精よ、今こそ封印を開放するとき！！神聖なる炎よ、全てを焼き尽くせ！！シンクロ召喚！！聖なる紅炎と共に現れよ、『エンシエント・ゴッド・フレムベル』！！」

蒼汰の口上が終わるとフィールドに勢い良く炎が上がり、その中から体の所々が燃え盛っている炎族モンスターが姿を現した。

『エンシエント・ゴッド・フレムベル』レベル7 炎 2500
/200 炎族・シンクロ/効果

炎属性チューナー+チューナー以外の炎族モンスター1体以上このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手の手札の枚数分まで相手の墓地に存在するカードを選択してゲームから除外する。このカードの攻撃力は、この効果で除外したカードの枚数×200ポイントアップする。

「『エンシエント・ゴッド・フレムベル』の効果発動！！シンク口召喚したとき、相手の手札の枚数分だけ相手の墓地のカードを選択して除外し、その数×200ポイント攻撃力を上げる。貴様の手札は4枚！！さあ、墓地を確認させてもらうぜ！！」

蒼汰がそう言っただユエルディスクを操作すると、修也の墓地のカードリストが小さな立体映像となって蒼汰の目の前に現れた。

(く……。まずい！！墓地から蘇生する手段が多い俺のデッキで、墓地のカードを除外されたら……。)

修也が冷や汗をたらしながらそう思案している間に、蒼汰は合計4枚のカードを選択して修也の方を見た。

「ほおう……。いつの間にか『X セイバー パロムロ』も落としていたのか。ククク、俺が選択したのは、『フラムナイト』、『パロムロ』、『パシウル』、『エマーズブレイド』だ！！さあ、除外しな！！」

カード名を宣言された修也は、言われたとおりの4枚を墓地から取り出して腰についているデッキケースにしまった。

「ヒヤッハア！！それで仮に『フォルトロール』を召喚しても、特殊召喚できる下級は消えたなあ！！俺はさらに、レベル4の『ヘルドッグ』にレベル2の『ネオフレムベル・オリジン』をチューニング！！熱き心を持つ戦士よ、今こそ真紅の炎を滾らせ立ちふさがるものを焼き尽くせ！！シンク口召喚！！燃え上がれ、『フレムベル・ウルキサス』！！」

蒼汰がそう叫ぶと同時に、2体目の『ウルキサス』がフィールド

に姿を現し、蒼汰のフィールドに2体のシンクロモンスターと『ヘルドッグ』が並んだ。

「これだけいけば十分だ……。バトルフェイズ！まずは攻撃力が3300になった『エンシエント・ゴッド・フレムベル』で『ヒュンレイ』を攻撃！！エンシエント・ブレイズバースト！！」

蒼汰がそう命令すると、『エンシエント・ゴッド・フレムベル』は両腕からものすごい量の炎を出現させ、それを『ヒュンレイ』に放った。『ヒュンレイ』は破壊され、炎は修也にも迫った。

「うわああああ！！」

修也 LP4800 3800

自身を包む本物のような炎の熱を肌で感じながら、修也はダメージを受けた。

「フィールドがから空きだな！！これで『ヘルドッグ』と『ウルキサス』の攻撃が通れば俺の勝利だ！！散れ！！雑魚！！まずは『ウルキサス』で攻撃だ！！フレムベルドライブ！！」

勝利を確信した蒼汰は、得意げな顔をしながら『ウルキサス』に攻撃命令をした。攻撃命令を受けた『ウルキサス』は両手に炎を溜め、修也の元へと駆け出した。

「修也！！」

孝雄が修也の方を見てそう叫んだ。目前に迫ってくる敵を確認し、修也は1枚の手札に手を掛けた。

「ここで負けてたまるか……。昨日までの俺とは違うんだ!! 直接攻撃が宣言されたこの瞬間、手札の『バトルフェーダー』の効果発動!! このカードを特殊召喚し、バトルフェイズを終了する!!

「な……。なんだと!!!!」

『バトルフェーダー』 レベル1 闇 0/0 悪魔族・効果

修也がそう説明しながらカードをディスクに置くと、『バトルフェーダー』は振り子を揺らして鐘を鳴らした。その音を聞いた『ウルキサス』は攻撃を中断して蒼汰のフィールドに戻った。

「貴様……。!! 小ざかしいマネを!!」

「へへ……。空雅の『裁きの龍』対策に、あいつ自身も使っていたこのカードを入れてみたんだけど、こんなところで役に立つとは思わなかった。それに、このカードはお前が『手札断札』で引かせてくれたんだぜ!!」

修也がそう言うと蒼汰は修也をすごい目でにらみつけて、自身の手札を確認して言った。

「ちつ……。まあいい!! 僅かな命が1ターン延びただけなんだからな!! カードは伏せない。俺はこのままターンエンド!! そしてこのとき、『真炎の爆発』の効果で特殊召喚された『ヘルドッグ』はゲームから除外される。」

蒼汰がそう言ってターンを終了すると同時に、『ヘルドッグ』は薄くなってフィールドから姿を消してしまった。

「俺のターンか……。」

もう後に引けない状況の修也は、デッキからカードをドロウする前に自分の手札を見た。

(『活路への希望』、『簡易融合』、そして『総剣指令ガトムズ』……『簡易融合』を使えばシンクロ召喚につなげられそうだけど、チューナーが無い!!！)

修也はそう思案して自分のデッキの一番上を見た。

(次のドロウに賭けるしかない。次でチューナーを引けなければ俺は負ける……。でも、信じるしかない!!俺のデッキを!!！)

修也はそう思いながらデッキトップのカードに手を掛けた。

「いくぞ……。ドロウ!!！」

修也は勢い良くカードを引くと、カードを引いた右腕をそのまま振りぬいた。そして数秒の沈黙の後、ゆっくりと引いたカードを確認した。

「よし……。来てくれた!!俺は手札より、2枚目の『XXセイバー フラムナイト』を通常召喚!!！」

修也がそう叫びながらカードをディスクに置くと、再び紅い鎧の戦士、『フラムナイト』がその姿を現した。

「ハン……。運よく2枚目の『フラムナイト』を引いたか。だ

ががかし！！この俺の最強布陣を突破することはできない！！悪あがきは止める……。お前は俺に負けるんだよお！！草薙！！」

「まだ終わると思うなよ……。俺は手札からこのカードを発動する！！『簡易融合』！！ライフを1000払い、エクストラデッキからレベル5以下の融合モンスターを融合召喚扱いで特殊召喚できる！！俺は『カルボナーラ戦士』を特殊召喚！！」

修也のその言葉と共に、『簡易融合』のカードに描かれているカップラーメンの容器のようなものがフィールドに出現し、その中から紫の甲冑を纏った戦士族モンスターが姿を現した。

修也 LP3800 2800

『カルボナーラ戦士』レベル4 地 1400/1200 戦士族・融合

「フツ……。修也の奴、シンクロ召喚効率化のために『簡易融合』をデッキに組み込んだか……。」

場に颯爽と現れた『カルボナーラ戦士』を見て、陸は感慨深げに呟いた。

（アイツもアイツで強くなろうと必死にあがいているのが分かる俺も、負けてられないな。）

陸はしみじみとそんな事を思いながら、場に現れた3体のモンスターをじっと見つめる修也を見ていた。

「行くぞ……。レベル4、『カルボナーラ戦士』とレベル1、『バトルフェーダー』にレベル3の『フラムナイト』をチューニン

グー!!」

突如上がった修也のその叫びと共に、3体のモンスターは空中へと舞い上がった。そしてその直後、『フラムナイト』は3つの星になって他の2体を包み込んだ。

「集いし孤高の魂が、今新たな決意を生み出す。決意を拳にこめて全てを砕け!!シンクロ召喚!来い、『ギガンテック・ファイター』!!」

修也が叫び終わると同時に、フィールドに緑色の閃光があふれた。そこにいる全員がそのあまりの眩さに目を細めると同時に、修也のフィールドに白い甲冑を纏った逞しい肉体の戦士が姿を現した。

『ギガンテック・ファイター』レベル8 閻 2800/1000
戦士族・シンクロ/効果

「ち……。きやがったか。『ギガンテック・ファイター』!!」

「知っているはずだ!!これが俺の切り札。効果も当然把握してよな!!」『ギガンテック・ファイター』は墓地に眠る同胞の数だけ攻撃力を100ポイント上げる!!墓地の戦士族は『ガイアナイト』、『ヒュンレイ』、『ソウザ』、そして先ほどシンクロ素材にした『フラムナイト』と『カルボナーラ戦士』の合計5体!!攻撃力は……。500ポイント上昇して3300!!」

修也がそういうと『ギガンテック・ファイター』はその逞しい体でポーリングし、攻撃力を3300まで上昇させた。

「よし!!これで『エンシエント・ゴッド・フレムベル』の攻撃

力に並んだぜ！！行け修也！！」

飛んできた孝雄の声援に修也は頷き、バトルフェイズに入った。

「バトル！！『ギガンテック・ファイター』！！『エンシエント・ゴッド・フレムベル』に攻撃だ！！ソウルクラッシュ・ナックル！！」

「ぐ……。くそがあ！！！！『エンシエント・ゴッド・フレムベル』！！エンシエント・ブレイズバースト！！」

2人はほぼ同時に、自身のモンスターにそう命令した。各々のモンスターはその命令に従って攻撃を繰り出したが、攻撃力は互角。2体のモンスターは激しい打ち合いの末に共倒れになってしまった。

「ぐおお！！！！」

「うつ……。でもこの瞬間、『ギガンテック・ファイター』の効果発動！！戦闘破壊されたときに墓地の戦士族モンスター1体を蘇生する！！そして、その対象には自身も含まれる！！再び現れよ！！『ギガンテック・ファイター』！！『フレムベル・ウルキサス』に攻撃だ！！」

修也がそういうと、『ギガンテック・ファイター』はディスクの墓地部分から飛び出すと同時に拳を振り上げ、そしてそれを『ウルキサス』に勢いよく叩き付けた。

「ぐわああああ！！！！俺のモンスターが……全滅だと！！！！」

蒼汰はがら空きになった自身のフィールドを見て、何かの間違いだという顔をした。だが、現実是非情。1ターンにしてフィールドの優劣は逆転してしまった。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド!! さあ……お前のターンだ!!」

「ぐぐ……ぐううう!!!」

修也にそういわれた蒼汰は歯を食いしばりながらデッキトップに手を掛けた。

「くそ……。こんな奴に……。こんなゆるい奴に負けるなんて……。俺のターン!!!」

蒼汰がドローする瞬間、修也はゴクリと生唾を飲み込んだ。再び逆転されるか、勝利するか。今の言動からして蒼汰の最後の手札では『ギガンテック・ファイター』を倒すことはできない事はほぼ確実だ。勝敗を左右する最後のドロー。そのカード確認する蒼汰の姿を、修也、孝雄、陸の3人は静かに見ていた。

「く……。ちくしょおお!!!」

ドローカードを確認した瞬間、蒼汰は勢い良く最後の手札とドローしたカードを床にたたきつけた。確認したそのカードは、仮に発動しても攻撃宣言できないため意味が無い『精神操作』と、今引いたらしい『神の宣告』。それを確認した修也は、全身の緊張がフツと解けるのを感じながら口を開いた。

「その手札とドロークカードじゃ、俺を倒す事はできない!!俺のターン!!バトルだ!!」ギガンテック・ファイター』でプレイヤ―にダイレクトアタック!!ソウルクラッシュ・ナックル!!」

修也のその命令を受け、『ギガンテック・ファイター』は最後の―撃を蒼汰に叩き込むべく、その拳を振り上げて一気に駆け出した。

「馬鹿な……この俺が……!!ぬおおおおお!!」

蒼汰 LP29000

ダメージと共に衝撃を受けた蒼汰はすごい勢いで後ろに吹っ飛び、後ろにあった6人がけの椅子に激突した。

「よし……何とか勝った……」

蒼汰のライフポイントが0になり、ソリッドビジョンが消滅すると修也は床にへたり込んで呟いた。それを見た陸と孝雄は急いで修也に駆け寄った。

「修也!!!大丈夫か?」

「ああ……。なんとか……。それよりアイツの方が……」

孝雄の声に修也はそう頷いて見せ、それから床に倒れて唸り声を上げている蒼汰の方を見た。

「修也。奴に情けは無用だ。」

蒼汰の身を気遣う修也とは対照的に、陸は容赦なく言うと蒼汰の

方に近づいていった。

「おい・・・お前。」

陸はかがみ込み、倒れている蒼汰にそう声をかけたが、反応は無かった。それを確認した陸は立ち上がって首を振った。

「駄目だな・・・。気絶している。何か聞き出せば良いとおもったんだが・・・。まあ、良いか。目が冷めるまで待とう。それから・・・。」

陸が途中まで言って、言葉を切った瞬間だった。修也でも孝雄でも無く、第3者の声が陸の言葉に反応した。

「おいおい。何言ってんだ？そいつはすぐに眼を覚ますことになるぞ！！」

「なっ！？」

「お？」

突然聞こえてきた声を聴き、修也と孝雄、そして陸は勢い良く声の聞こえた科学部室の戸口の方へと顔を向けた。すると、そこにはこの季節だというのに赤いジャンパーを着た男が腕組みをして壁に寄りかかっているのが見えた。

「誰だ貴様！！この学校の教師では無いな！？」

その姿を見て、陸が一瞬で身構えながら鋭い声でそういった。それに続いて、修也も立ち上がって距離をとり、孝雄もその男を睨む

ように見た。男はその反応を楽しむような顔で見ると、壁から離れて修也達3人を見渡した。

「そう敵意をむき出しにするな。俺は、お前等に危害を与えるために来たんじゃない。そいつを回収しに来たんだ。」

「・・・という事は、時戸研究所の奴か!!」

修也が男に向かって言うと、蒼汰を指差した男はいかにもという風に頷いて見せた。

「ああ。俺は松岡信二。お前等の言うとおり、空雅の仲間だ。そしてそいつ・・・。岡崎蒼汰の上司に当たる男でもある。さ、そこをどいてくれ。長居をする気は無いからな。」

自己紹介した信二はそう言って修也達を促したが、3人はピクリとも動かなかつた。

「どいてくれて・・・。岡崎をどうする気だよ?」

修也がそう言うと、信二は少し表情をこわばらせた。そして、ジャンパーのポケットからカードを1枚取り出して口を開いた。

「どうするって・・・。罰を与えるんだよ。こんなことしたくないんだけどな。『ファイヤー・ソウル』発動!!もつと・・・。熱くなれよおおお!!!!」

信二が先ほどの落ち着き払った声とは違った、大音量の声でそう叫んだそのときだった。気絶している蒼汰の体に異変が起こった。

「!？」

その様子を目の当たりにした陸は、思わず蒼汰の近くから飛びのいた。驚くのも無理は無い。蒼汰の体をいきなり激しい炎が包み込み始めたのだ。蒼汰は一瞬で目を覚まし、自分の置かれている状況を理解すると鋭い叫び声を上げ始めた。

「ぐああああああ!!!!ぐ……信二さん……どうしてっ!!!!!!」

「どうしてって……。お前が熊谷を連れ出すからだろうが!!!!知っているだろう!!熊谷は、その容姿のせいでむやみに外に出歩くことを禁止されている!!お前は空雅の決めた決まりを破った……。さあ、もつと熱くなれよ!!熱い血燃やしていけよ!!そして、反省しろ!!!!自分と向き合え!!!!分かったか!!!!」

「ぐ……。!!!!!!ぐああ!!!!信二さん……。申し訳ありません……。もう二度と……。熊谷なんかを……。!!!!」

蒼汰が途切れ途切れにそういうと、灼熱の炎はあつという間にパツと消えた。その瞬間、蒼汰は再びドサツと床に倒れた。その様子を見ていた修也は、シヨックを隠しきれない顔で信二の方を見た。

「おい……。お前……。お前何してるんだよ!!!!」

「あ?何って……。罰を与えたんだよ。決まりだからな。」

信二はそう淡々と返したが、修也は納得せずにズイと信二の方に一歩向けて踏み出すと思いきり叫んだ。

「何が決まりだよ!! 適当なこじ付けをして、人を痛みつけてるだけじゃないか!! お前……。そんなことして楽しいのかよ!!」

「ああ!? 俺が楽しくてこんなことしてると思ってたのか? やらなきゃ、俺が空雅に罰を受けるんだよ!! 何も知らないくせに、俺たちにやり方に口を出すな!!」

信二が怒鳴り返すと、修也は怒ってデュエルディスクを起動させた。信二と戦う気なのだ。そう直感した孝雄は慌てて修也を止めに入った。

「やめる修也!! 連戦はさすがにまずい!! それにこいつ、恐らく岡崎よりよっぽど強いぞ!!」

「構うもんか!! それにここで1人空雅の仲間を倒しておけば後々手間が省けるだろ!!」

孝雄の制止を振り切る修也の言葉を聞いた信二は、ちよつと眉を吊り上げるとデュエルディスクを構えた修也をまじまじと見た。

「ほお……。面白いじゃねえか。俺と戦う気かよ!!」

「当たり前だ!! ここで今すぐ俺と……」

「止める草薙!!!」

一瞬触発のこの状況で、蒼汰が突然声を上げた。言葉を遮られた修也は、口をつむいで蒼汰の方を見つめた。

「思い上がるんじゃないかねえ……！！信二さんは、お前なんかかなう相手じゃねえ！！」

「でも……！」

修也がそう言い返すと、蒼汰は震える腕で体を起こして修也を思い切りにらみつけた。

「口答えすんな……！！良いか草薙修也！！今回は負けたが……。お前は俺が必ずぶつ倒す！！そのときまで……。他の誰にも負けるなつて事だよ！！」

「蒼汰……お前……。」

蒼汰の口から発せられた意外な言葉に修也が驚き、口を閉ざすと蒼汰はそれ以上何も言わずに信二の方を向いた。

「信二さん。迷惑かけて申し訳ありません。もう研究所に帰りましょう。」

「ほおう。今日はずいぶんと素直だな。だが、分かればいいぞ……。」

信二は蒼汰の言葉にそう返すと、ポケットに手をつ込みながら再び修也、陸、孝雄のほうを向いた。

「では……。『六星団』とその仲間達。俺たちは退散する。次に会うのは……日曜日の大会の日か。あばよ……！！」

信二がそう言い残すと同時に、2人は『緊急レポート』のカー

ドを使ってその場から姿を消した。

残された3人はしばらくの間言葉を交わすこともせず、顔を見合
わせることもせず、ただ黙って信一と蒼汰が消えていった空間を虚
しく見つめていた。

第10話 副部長出陣！！変幻自在の『シンクロン』

「おお……。すげえ！！」

琥珀が何処から持ってきた鍵で開けた屋上の扉から外に出た光彦は、思わずその声を上げた。初めて入った屋上からの眺めは絶景だった。常盤市のほとんどの部分が見渡すことができ、はるか遠くには緑色に色づいた山々も望める。さらに、さわやかな風も吹き抜けていた。

「こりゃ絶景だ……。ここで月でも眺めたら最高だろうな。」

「おい、そんな暢気なことを言って……。ボクと戦う気があるのか？」

敵をそっちのけて周りをキョロキョロと見渡している光彦に対して、琥珀は呆れたように言いながら腰まで伸びている髪を五月蠅そうに払いのけた。琥珀の言葉を聞いた光彦は振り向くと、口を開いた。

「おお、済まない。あまりのも景色が素晴らしかったものでね……。ああ、俺の方は準備おｋだ。あんたが戦いたいつてのなら、いつでも戦えるぜ。」

「なっ……。何か勘違いしてないか？お前の方が、ボクに戦いを挑んだんじゃないか？」

「え……。？そうなの？」

琥珀が慌てて言うと、光彦はとぼけてそう返した。

「むっ……。お前っ!! 真実を捻じ曲げるな!! 戦いを挑んできたのはお前だろっ。騎士道精神を重んずるものとして、真実を捻じ曲げるのは許せないっ。」

「アハハ―。勝手に言ってるって。俺には騎士道精神もクソも知ったこっちゃあ無いんですよ。」

「むむっ……。!! 騎士道精神を貶したな……。!! 良いだろう。お前がとぼけるなら、ボクの方からお前に戦いを挑む!! 勝負だ!! 志水光彦!!」

痺れを切らしたのか、琥珀はそう言っただけで光彦をビシリと指差してデュエルディスクを構えて見せた。だが、対する光彦は気だるそうに腕を組んで琥珀を観察しているだけで闘志を全く見せなかった。

「へへあ。まだ慌てるような時間じゃないさ。今すぐに戦わなくても良いだろうっ?」

「何だっ? 僕が怖いのか?」

琥珀があおるように言ったその言葉は光彦の耳には届かないらしく、光彦は琥珀から視線をそらして空を見た。

「果たして……。戦う理由なんてあるのかねえ。俺は『六星団』でもないし、まだあいつ等に宣戦布告していない。お前だって、あの威勢の良い奴のお供だろ?」

「いまさら何を言っているんだ……。ボクとお前は敵同士!! 所

れだけで戦う理由は十分だろっ！」

「いいや……。俺にとっては十分じゃないね。俺はな、意味も無く戦う戦闘狂みたいな奴は嫌いなんだよ。」

光彦は先ほどのふざけた口調ではなく、どこか暗い口調でそういうと、琥珀の方に視線を戻した。

「だからはっきりさせておいてくれ。お前に戦う理由があるのか、無いのか。あるなら俺は相手をしよう。無いなら俺はここを去るぜ。」

「ボクは……。いや……。駄目だ……。お前なんかにつて、分かる訳ない！」

琥珀は何か意味があげげに一瞬俯いたが、すぐに首を振って顔を上げると光彦をキッと睨んだ。

「戦う理由くらいある！！お前には言えない理由が……。だから戦えっ！！光彦！！」

「言えないか。ま、あまり詮索しないけどな！！さあ、楽しいデュエルをしようぜ！！」

2人はそう叫びあつてデュエルディスクを構えると、一瞬の間を空けて同時に叫んだ。

「デュエル！！！！」

暢気な副部長 志水光彦 VS 騎士道精神 久遠寺琥珀

デュエルの開始が宣言されると同時にお互いのライフカウンターに8000の文字が表示され、琥珀のデュエルディスクのランプが点滅した。先攻は琥珀だ。それを確認した2人は初手となる5枚のカードを手に持った。

「いくぞつ。ボクのターン、ドロー！！ボクは『サイレント・ソードマンLV3』を通常召喚！！」

琥珀がその言葉と共にカードをディスクに置くと、身の丈ほどの剣を持った少年剣士がフィールドに姿を現した。

『サイレント・ソードマンLV3』 レベル3 光 1000/1000 戦士族・効果

このカードを対象とする相手の魔法カードの効果は無効にする。また、自分のスタンバイフェイズ時、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送る事で『サイレント・ソードマン LV5』1体を手札またはデッキから特殊召喚する。この効果はこのカードが召喚・特殊召喚・リバーシしたターンに発動する事はできない。

「ほお……。レベルアップモンスターか……」

「フフン……。まだまだ終わらないぞつ。手札から魔法カード、フィールド上の『LV』モンスターを墓地に送り、『レベルアップ』発動。そのカードに記されている『LV』と名のついたモンスター1体を召喚条件を無視し、手札かデッキから特殊召喚するっ！ボクはデッキから『サイレント・ソードマンLV5』を特殊召喚！！」

琥珀がそう説明すると、フィールドに少年剣士は光に包まれてみるみるうちに姿を変え、凛々しい青年の姿へと変化した。

『レベルアップ！』魔法カード

フィールド上に表側表示で存在する『LV』を持つモンスター1体を墓地に送り発動する。そのカードに記されているモンスターを、召喚条件を無視して手札またはデッキから特殊召喚する。

『サイレント・ソードマンLV5』レベル5 光 2300/1

000 戦士族・効果

このカードは相手の魔法カードの効果を受けない。このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた場合、次の自分のターンのスタンバイフェイズ時、フィールド上に表側表示で存在する存在するこのカードを墓地に送ることで、自分の手札またはデッキから『サイレント・ソードマンLV7』1体を特殊召喚する。

「フフ……。ボクはこれでターン終了するぞっ！！」

「ちえ……。1ターン目から魔法耐性持ちの攻撃力2300のモンスター……。少スキつすぎやしないか……。？」

光彦はデッキトップに手をかけつつ、『サイレント・ソードマンLV5』を見ながらそう呟いた。それを聞いた琥珀は、得意そうに手を腰に当てた。

「フフン。驚いたか？これがボクの『騎士道』デッキだ！！正々堂々と相手と戦って勝つ！！そのためには、初ターンから攻撃力の高めのモンスターを展開していかなければならない！！」

「成る程……。だがな、その程度で俺のモンスターと渡り合

えるところにいるのか!？」

光彦は突如そう言ってニヤリと笑い、勢い良くカードを引いた。

「なつ……。何だどつ。お前、ボクの騎士道デッキを馬鹿にする気か？」

「馬鹿にするも何も……。そんな火力じゃ足りないと言っているのさ!手札から、モンスターを1枚墓地に送り、魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動!デッキからレベル1モンスターを特殊召喚する。デッキから『チューニング・サポーター』を特殊召喚!！」

光彦が発動したカードの効果により、デッキから中華なべを逆さまにして被ったような小さなモンスターがフィールドに姿を現した。

『ワン・フォー・ワン』魔法カード

手札からモンスター1体を墓地に送って発動する。手札またはデッキからレベル1モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

『チューニング・サポーター』レベル1 光 1000/300

機械族・効果

このカードをシンクロ召喚に使用する場合、このカードはレベル2のモンスターとして扱う事ができる。このカードがシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され、墓地に送られた場合、自分はデッキからカードを1枚ドローする。

「な……。何だつ。そんな弱小モンスターで、『サイレント・ソードマン』を倒せるわけ無いだろうっ!！」

「へへあ。何勘違いしてやがる。俺はまだ通常召喚していない！
！手札から、『シンクロン・エクスペローラー』召喚！！そして、
そのモンスター効果でさつき墓地に捨てた『ロード・シンクロン』
を特殊召喚！！」

光彦が体の中央に黒い穴が開いている球体状の赤いモンスターを
召喚すると、さらにそのモンスターの中央の穴から、下半身がロー
ドローラーのようになっていたモンスターが姿を現し、光彦のフィ
ールドに一気に合計3体のモンスターが並んだ。

『シンクロン・エクスペローラー』レベル2 地 0/700
機械族・効果

このカードが召喚に成功したとき、墓地に存在する『シンクロン』
と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚することが出来る。
この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

『ロード・シンクロン』レベル4 光 1600/800 機械
族・チューナー/効果

このカードを『ロード・ウォリアー』以外のシンクロ素材とする
場合、このカードのレベルを2つ下げたレベルとして扱う。このカ
ードが攻撃した場合、そのダメージステップ終了時にこのカードの
レベルをエンドフェイズ時まで1つ上げる。

「むう……。成る程。シンクロ召喚か。」

「その通りだ！！行くぜ……。『チューニング・サポーター』
のレベルを2として扱い、同じくレベル2の『シンクロン・エクス
プローラー』にレベル4の『ロード・シンクロン』をチューニング
！！」

光彦の叫びと共に『ロード・シンクロン』はローラーを高速回転させて4つの星になり、残りの2体を包み込む星の輪になった。

「誇り高き王者の魂よ。今正義の鎧を身に纏い、群れ成す愚かな者共に裁きの鉄槌を下せ！！シンクロ召喚！カモン、『ロード・ウオリアー』！！」

光彦の口上が終わるとほぼ同時に、屋上を緑色の光が照らした。そして、その光の中から白と金色を基調とした鎧を全身に纏ったモンスターが姿を現し、主をまもるかのように腕を組んでフィールドに仁王立ちした。

『ロード・ウオリアー』レベル8 光 3000/1500 戦士族・シンクロ/効果

『ロード・シンクロン』+チューナー以外のモンスター2体以上1ターンに1度、自分のデッキからレベル2以下の戦士族または機械族モンスター1体を特殊召喚することができる。

「攻撃力・・・3000だっつ？」

「へへあ。だから言っただろ？そんな火力じゃ足りないとな！！『チューニング・サポーター』がシンクロ素材にされたので、カードを1枚ドロウさせてもらう。そして、『ロード・ウオリアー』の効果発動！！1ターンに1度デッキからレベル2以下の機戦士オア機械族モンスターを1体特殊召喚出来る。俺はデッキから機械族の『ボルト・ヘッジホッグ』を特殊召喚！！」

光彦がデッキからカードを取り出してフィールドに置くと、『ロード・ウオリアー』は背中から何かを射出するためと思われるレー

ルを取り出し、そこから針の変わりにボルトをつけたようなハリネズミのモンスターが姿を現した。

『ボルト・ヘッジホッグ』レベル2 地 800/800 機械
族・効果

自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したこのカードはフィールド上から離れた場合、ゲームから除外される。

「ふむ……。このままバトルフェイズに入るのか。『ロード・ウォリアー』で『サイレント・ソードマンLV5』に攻撃する!!
ライトニング・クロー!!」

フィールドを一通り見渡した光彦は、『サイレント・ソードマン』を指差してそう言った。その言葉に従い、『ロード・ウォリアー』は右腕を眩く光らせ、そのまま猛スピードで『サイレント・ソードマン』の懐に飛び込むと右腕で体を貫いた。

「うぐっ……!!」

琥珀 LP8000 7300

ダメージを受けた琥珀は、顔を歪めて少し後ずさった。その様子を見た光彦は、チョイと眉を吊り上げた。

「成る程。どうやらこのデュエル、修也や陸のときのように現実のダメージが発生するのか。昨日の三下とは訳が違うようだな。」

「むう……。察しが良いな。その通りだ。というかそんなこと

より、さっさとターンを進行したらどうだ？」

「ご丁寧にも。俺はカードを1枚伏せて、ターンを終了しよう。」

「く……。ボクのターン、ドロー！」

光彦の場に鎮座する攻撃力3000のモンスターを見つめながら、琥珀はカードをドローした。そして対する光彦は、ドローするカードを予測しようとその表情をじっくりと見た。

(む……。ドローしたカードを見ても表情を変えないか……。流星と言うべきか。それともそれほど良いカードではなかったのか。)

光彦がそう思案している間に、琥珀は手札の一枚に手を掛けた。

「行くぞ、ボクは『ブレイドナイト』を召喚！」

琥珀が手にしたカードをデュエルディスクに置くと、鉄製の甲冑を身に纏い、騎士らしく剣と盾をその手に携えたモンスターが姿を現した。

『ブレイドナイト』レベル4 光 1600 / 1000 戦士族
効果

自分の手札が1枚以下の場合、フィールド上のこのカードの攻撃力は400ポイントアップする。また、自分のフィールド上モンスターがこのカードしか存在しない時、このカードが戦闘で破壊したリバース効果モンスターの効果は無効化される。

「ほおう。手札を削ることで攻撃力を上げるモンスターか。」

「その通りだ……。行くぞ！！バトルフェイズだ！！『ブレイドナイト』で『ボルト・ヘッジホッグ』を攻撃する！！ブレイドアタック！！」

琥珀が命令すると、『ブレイドナイト』は手にした剣を構えて『ボルト・ヘッジホッグ』に突進した。

「甘いぜ……。リバーストラップ、オープン！！『くず鉄のかかし』！！」

『くず鉄のかかし』罠カード

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手モンスター1体の攻撃を無効にする。発動後このカードは墓地に送らず、そのままセットする。

光彦がリバースカードを発動すると、『ボルト・ヘッジホッグ』の前に鉄素材で組まれた案山子が現れて『ブレイドナイト』の攻撃を『ボルト・ヘッジホッグ』の変わりに受けた。

『くず鉄のかかし』は発動後、墓地に送らずそのままこの場所にセットする。これで、毎ターン1回は攻撃を防げるぜ。」

「む……。厄介だな……。ボクはこれでターンエンドだ。」

「ふむ……。俺のターン、ドロー！！メイン、『ロード・ウオリアー』の効果発動！！デッキから2体目の『チューニング・サポーター』を特殊召喚！！」

光彦がそう言ってデッキからカードを取り出し、デュエルディスクに置くと、『ロード・ウォリアー』は再び背中のレールを構え、そこから『チューニング・サポーター』を射出するように特殊召喚した。

「く……。毎ターンそうやって特殊召喚されたら厄介だな。」

「フ……。低レベルモンスター中心で構築された俺のデッキならではの戦法よ。さて……。」

モンスターを並べた光彦は、冷静にフィールドを観察した。

(さあて……。殴りたいところだが、相手は光属性。『オネスト』が怖いな。しかし、アイツは『騎士道』デッキとか言っていた。戦士族で固めて『一族の結束』を投入している可能性もある。先ほど『サイレント・ソードマン』に攻撃したときは『オネスト』はこなかったし、ここは……。)

光彦はそう思案すると、思い切ってバトルフェイズに入った。

「バトルフェイズに入る!!! 『ロード・ウォリアー』!!! 『ブレイドナイト』を攻撃! ライトニング・クロー!!!」

光彦がそう叫ぶと、『ロード・ウォリアー』は再び右腕を発光させて攻撃の体制に入った。だが、その瞬間に琥珀は微かに笑って手札を1枚手にとって光彦に見せた。

「!?!?!? おいおい、そいつは……。」

「フフン。そうだ。ダメージステップ時に手札の『オネスト』を

捨てて、その効果を発動させてもらおうぞっ。」

『オネスト』レベル4 光 1100/1900 天使族・効果
自分のメインフェイズ時に、フィールド上に表側表示で存在する
このカードを手札に戻す事ができる。また、自分フィールド上に表
側表示で存在する光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ
時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、エンドフェイズ時まで
そのモンスターの攻撃力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の
数値分アップする。

「この効果で『ブレイドナイト』の攻撃力は『ロード・ウォリア
ー』の攻撃力分、3000ポイントアップする！！返り討ちにしろ
っ。『ブレイドナイト』！！」

琥珀がそう叫ぶと同時に『ブレイドナイト』の背に突如虹色の翼
が生え、『ロード・ウォリアー』の攻撃をかわした。そして『ブレ
イドナイト』はそのまま上空から『ロード・ウォリアー』を斬り付
けて破壊してしまった。

「ぐあっ！！くそ……。光属性軸だったか……。」

光彦 LP8000 6400

ライフが削られると同時に、光彦の体に何かで叩かれたような衝
撃が走った。光彦はそれほど動じず、すぐに次の行動に移った。

「メイン2に移行。モンスターを1体セット。そしてターン終了
だ。」

「ボクのターン、ドロー！！バトルだ！！その裏側守備モンスター

ーに攻撃！！」

琥珀はカードを引いてすぐにバトルフェイズに突入し、攻撃を命令した。今回は『くず鉄のかかし』は発動せず、光彦の伏せたモンスターが表になった。

「残念だったな……。俺の伏せモンスターは『ライトロード・ハンター ライコウ』！！リバーズ効果で、フィールド上のカードを1枚指定して破壊することができる。『ブレイドナイト』を破壊！！！」

『ライトロード・ハンター ライコウ』 レベル2 光 200 / 100 獣族・効果

リバーズ：フィールド上のカード1枚を破壊する事ができる。自分のデッキの上からカードを3枚墓地に送る。

光彦はそう叫んだが『ライコウ』の効果は発動せずにそのまま破壊されてしまった。

「あり？何故だ？」

「フフン。お前バカだろっ！！『ブレイドナイト』はボクのフィールド上にこのカード以外のモンスターが存在しないとき、戦闘破壊したりリバーズモンスターの効果を無効にする効果があるんだよっ！！つまりこのカード1枚だけのとき、リバーズモンスターの効果を全て潰せるのさっ！！！」

「く……。失念していた。そんな効果があつたな。墓地肥やしの効果も不発か……。」

光彦はそう言っただけ抱えた。そんな光彦を見て琥珀は心底呆れたような顔をした。

「はぁ……。ボクはカードを2枚伏せてターンエンド。ボクをがっかりさせないでよ？」

琥珀はそう言っただけ魔法・罨ゾーンにカードを2枚残すとターンを終了した。

「そんな事、お前に言われなくたって分かってるぜ！俺のターン、ドロー！！手札から魔法カード、『調律』発動！！デッキから『シンクロン』と名のついたチューナー1体を手札に加える！！そしてその後、デッキトップからカードを1枚墓地に送る。」

光彦はそう説明しながら『ジャンク・シンクロン』のカードを手札に加え、デッキをシャッフルすると一番上のカードを墓地に送った。

『調律』魔法カード

自分のデッキから『シンクロン』と名のついたチューナー1体を手札に加えてデッキをシャッフルする。その後、自分のデッキの上からカードを1枚墓地へ送る。

「ぐ……。『神の宣告』が落ちただと……。まあ、いいや。
『ジャンク・シンクロン』を召喚！！」

光彦が少しテンションを上げてカードをデュエルディスクに置くのと、オレンジ色を基調とし、背中にエンジンを背負った戦士族モンスターが姿を現した。

『ジャンク・シンクロン』レベル3 闇 1300/500 戦士族・チューナー/効果

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

「『ジャンク・シンクロン』の効果発動!! 召喚に成功したとき、墓地のレベル2以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚できる。俺は、『ライトロード・ハンター ライコウ』を特殊召喚!!」

光彦がそう命令すると、『ジャンク・シンクロン』は手を翳して光の空間を作り、そこから『ライコウ』を蘇生した。

「む・・・。シンクロする気が・・・?」

「その通りだぜ!! 行くぞ!! レベル2『ライトロード・ハンター ライコウ』にレベル3の『ジャンク・シンクロン』をチューニング!!」

光彦が叫ぶと、『ジャンク・シンクロン』は背中についているエンジンの紐を引き、エンジンを起動させて3つの星の輪になると『ライコウ』を包み込んだ。

「地に蔓延る愚民の群れよ。今絶対零度の悪魔の前にひれ伏すが良い!! シンクロ召喚!! 凍えよ世界、『氷結のフィッツジェラルド』!!」

光彦が冷たい声でそう叫ぶと、2体の体からあふれた5つの星は光り輝き、その光の中から凄まじい冷気を放つ氷の悪魔が姿を現し

た。

『氷結のフィッツジェラルド』 レベル5 水 2500/250

0 悪魔族・シンクロ/効果

闇属性チユナー+チユナー以外の獣族モンスター1体

このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動する事ができない。このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札を1枚捨てる事でこのカードを墓地から表側守備表示で特殊召喚する。

「なにっ？『ジャンク・ウォリアー』とかじゃないのか？」

「へへあ。先入観に囚われていては駄目だぜ。ああ、それとこいつには攻撃する場合にダメージステップ終了時まで魔法・罠の発動を封じる効果がある。」

光彦がニヤリと笑ってそう説明すると、琥珀はあからさまに不快な顔をした。

「ボクをなめているのか……。ふんっ。ならボクはトラップカード、『光の召集』発動！手札を全て捨てることで、捨てた枚数分だけ光属性モンスターを手札に加える。僕は2枚の手札、『サイレント・ソードマンLV7』と『聖騎士ジャンヌ』を墓地に捨て、墓地から捨てた『聖騎士ジャンヌ』、そして『オネスト』を手札に加える！！」

『光の召集』罠カード

自分の手札を全て墓地へ捨てる。その後、捨てた枚数分だけ自分の墓地に存在する光属性モンスターを手札に加える。

「ほおう。『光の召集』だったか。『奈落の落とし穴』とか警戒してあえてレベル5モンスターを出したんだが……。まあ、良い。俺はこんなもので怯まないぜ！！バトルだ！！『氷結のフィッツジェラルド』で『ブレイドナイト』を攻撃だ！！ブリザード・ストライク！！」

「お前バカだろっ！！ダメージステップ、手札から『オネスト』を捨てて効果発動！！『ブレイドナイト』の攻撃力を、お前の『フィッツジェラルド』の攻撃力分だけ上げる！！返り討ちだ！！オネスティック・ブレイドアタック！！」

琥珀が手札から『オネスト』を墓地に送ると、再び『ブレイドナイト』の背中に虹色の羽が出現した。そして光彦の『フィッツジェラルド』が放った氷柱の嵐を軽々と避け、その体に鋭い一撃を叩き込んだ。

「痛っ……！！！！」

光彦 LP 6400 4800

ダメージと共に再び衝撃を受けた光彦は、思わずそう声を上げて後ずさった。ライフに差が付き若干余裕ができたのか、琥珀は腕組みをして光彦を見るといぶかしげな顔をして光彦の方を見た。

「ふんっ……。自爆特攻なんかして……。ボクを……。そして騎士道精神を侮辱するにも程があるんじゃないか？」

「へへあ……。良く喋るな……。初対面の奴とこんなに話すのは初めてだ。」

「質問に答えるっ!!」

はぐらかそうとする光彦に対して、琥珀は目を吊り上げてそう叫んだ。光彦は頭をかいて口を開いた。

「別に……。侮辱してるわけじゃないさ。俺は、俺なりの思考で戦っているだけ。さっきのは単に回収された『オネスト』を潰したかったんだ。それに、あんたはまともな奴だ。俺が軽蔑し、侮辱するのは時戸空雅やアイツの手下みたいに、力を振りかざしていい気になっている奴だけ。あんたは相手と同じ目線に立って戦うことを意識してるらしいからな……。それには敬意を払うぜ。と、話が逸れたな。俺はカードを1枚伏せる。ターンエンドだ。」

光彦はひとしきり語り終わると、急にデュエル中だということを思い出したのか伏せカードを1枚増やしてターンを終了した。

「そうか……。これがお前の戦術か……。事実なら、騎士として無礼を詫びよう。すまなかった。だが、デュエルは別だ。手加減はしない。僕のターン、ドロー!!行くぞ、『聖騎士ジャンヌ』を召喚!!」

琥珀がそう言ってデュエルディスクにカードを置くと、銀の鎧を纏った女性の戦士族モンスターがフィールドに姿を現した。

『聖騎士ジャンヌ』レベル4 光 1900 / 1300 戦士族・効果

このカードが攻撃する場合、ダメージステップの間このカードの攻撃力は300ポイントダウンする。また、このカードが相手によって破壊され墓地へ送られた場合、手札を1枚墓地へ送って発動す

る事ができる。自分の墓地に存在するレベル4以下の戦士族モンス
ター1体を選択して手札に加える。

「そして、この瞬間ボクの手札は1枚になった。これで『ブレイ
ドナイト』の攻撃力が2000になる。さあ、バトルフェイズだ！
！まずは『聖騎士ジャンヌ』で『ボルト・ヘッジホッグ』を攻撃！
！セイクリッド・ディシジョン！！」

琥珀の命令で『ジャンヌ』は『ボルト・ヘッジホッグ』への攻撃
を敢行した。

「たしか……。『聖騎士ジャンヌ』は攻撃するダメージステッ
プ時に攻撃力が300ポイント下がる……。まあ、どちらにしろ
破壊されるんだがな。『くず鉄のかかし』は発動しない。」

光彦はそう言って、素直に『ボルト・ヘッジホッグ』への攻撃を
通した。『ボルト・ヘッジホッグ』は『ジャンヌ』の攻撃の前に簡
単に破壊されてしまった。

「ふん……。なら、『ブレイドナイト』で『チューニング・サ
ポーター』を攻撃だ！！」

「その攻撃は通さないぜ。『くず鉄のかかし』で無効にする！！」

『ブレイドナイト』の攻撃は再び『くず鉄のかかし』で防がれた。

「ドロー効果を持つ『チューニング・サポーター』を守ったか・
。ボクはこれでターンエンドだ。」

「エンドフェイズ、リバーストラップを発動！！『リビングデッ

ドの呼び声』。このカードの効果で墓地の『ロード・ウォリアー』を蘇生する!!」

光彦が発動したカードで、再び白と金を基調とした鎧を纏う戦士族モンスターが姿を現した。

「そして俺のターンだぜ……。ドロー!! さあ、『グローアップ・バルブ』を召喚!!」

デュエルディスクが置かれると同時に、何かの球根のような植物族モンスターがフィールド上に姿を現した。

『グローアップ・バルブ』レベル1 地 100/100 植物族・チューナー/効果

自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送り、墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。『グローアップ・バルブ』の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

「む……。またチューナーか。」

「ああ。少し、手札を補充させてもらうことにするよ。レベル1の『チューニング・サポーター』に、同じくレベル1の『グローアップ・バルブ』をチューニング!!」

光彦がそう叫ぶのと同時に、『グローアップ・バルブ』は1つの星の輪になって『チューニング・サポーター』を包み込んだ。

「響き合う願いが、今新たな希望の星になる。その力を解き放ち、運命という地平を超える!! シンクロ召喚!! 駆け抜ける、『フォーミュラ・シンクロン』!!」

光彦の口上が終わると同時に緑色の光がフィールドを照らした。そしてその中から、F1カーを基調にしたようなモンスターが姿を現した。

『フォーミュラ・シンクロン』レベル2 光 2000/1500

機械族・シンクロ/チューナー/効果

チューナー+チューナー以外のモンスター1体

このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のデッキからカードを1枚ドロウする事ができる。また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚をする事ができる。

「『フォーミュラ・シンクロン』の効果発動！！シンクロ召喚成功時、デッキからカードを1枚ドロウ！！そして、シンクロ素材になった『チューニング・サポーター』の効果でさらに1枚ドロウ！！」

光彦は2体のモンスターの効果で一気に手札を2枚補充して4枚にした。それから墓地のカードを1枚取り出して琥珀に見せた。

「そして、墓地の『ボルト・ヘッジホッグ』の効果発動。俺のフィールドにチューナーが存在するとき、墓地のこいつを特殊召喚できる。カモン！！『ボルト・ヘッジホッグ』！！」

光彦がそう言いながらカードを置くと、先ほど破壊された『ボルト・ヘッジホッグ』が再び姿を現した。

「うし……。まだ行くぜ！！レベル2、『ボルト・ヘッジホッグ』にレベル2の『フォーミュラ・シンクロン』をチューニング！」

！集いし絆よ。今その力を昇華させ、悪を砕く拳となれ！！シンクロ召喚！カモン、『アームズ・エイド』！！」

光彦は続けて、腕の形をしたシンクロモンスターをフィールドに出した。

『アームズ・エイド』レベル4 光 1800/1200 機械
族・シンクロ/効果

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとしてモンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「むむう……。1ターンに2体もシンクロモンスターを……。ずるいぞお前っ！！」

「何がずるいだ！！陸と戦ってから言うてほしいぜ！！『アームズ・エイド』の効果発動！！このカードを『ロード・ウォリアー』に装備し、攻撃力を1000ポイントアップさせる！！」

光彦がそういうと、『アームズ・エイド』は『ロード・ウォリアー』の右腕に装備された。

「行くぞバトルだ！！『ロード・ウォリアー』で『ブレイドナイト』を攻撃！！パワーライジング・クロー！！」

光彦のその叫びと共に、『ロード・ウォリアー』は『アームズ・

『エイド』を装備した右腕で『ブレイドナイト』の甲冑に鋭い一撃を見舞った。

「うわああああっ！！！！」

琥珀 LP7300 5300

「さらに……。『アームズ・エイド』の効果発動！！装備モンスターが戦闘によって空いてモンスターを破壊した場合、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！！」

光彦がそう説明すると、『ロード・ウォリアー』に装備された『アームズ・エイド』の手の平部分から波動が発せられて琥珀を襲った。

「ううううわああっ！！！！」

琥珀 LP5300 3700

続けてダメージを受けた琥珀は、思わず地面に座り込んでしまった。それを見た光彦は、攻撃したことに多少の罪悪感を感じながら口を開いた。

「なあ……。大丈夫か？」

「う……。うるさい！！心配は無用だ！！さあ……。さっさとターンを進行しろ！！」

「む……。そうか。ならメイン2、『ロード・ウォリアー』の効果発動！！デッキからレベル2以下の戦士族モンスター、『ドツペ

ル・ウオリアー』を特殊召喚！！」

光彦がそう言ってデッキからカードを取り出し、デュエルディスクに置くと軍服のような服を纏った戦士族モンスターが姿を現した。

『ドツペル・ウオリアー』レベル2 地 800/800 戦士

族・効果

自分の墓地に存在するモンスターが特殊召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。このカードがシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、自分フィールド上に『ドツペル・トークン』（戦士族・闇・星1・攻/守400）2体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

「ターン・・・エンドだ。」

光彦はモンスターをさらに出すと、ターンを終了した。

「く・・・。ボクのターン、ドロー！！リバースカード、オープン！！『貪欲な壺』！！墓地の『サイレント・ソードマン』の『LV3』、『LV5』、『LV7』。そして『オネスト』と『ブレイドナイト』をデッキに戻してシャッフルし、デッキからカードを2枚ドローする！！」

『貪欲な壺』魔法カード

自分の墓地からモンスターカードを5枚選択し、デッキに加えてシャッフルする。その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

琥珀は緊迫した表情でデッキからカードを2枚引いた。それから琥珀は慎重に手札を凝視した。

「ボクは『ジャンヌ』を守備表示に。カードを1枚伏せる。そして、モンスターを1体セットしてターンを終了だ。」

「俺のターンか……。ドロー!!!」

光彦がそう言ってデッキからカードをドローした、その瞬間だった。

「トラップ発動!!!『砂塵の大竜巻』!!!お前の『リビングデッド』の呼び声を破壊する!!!これで……。一気に3枚のカードを破壊だ!!!」

「なつ……。しまった!!!『リビングデッド』の呼び声を破壊されたら……。『ロード・ウォリアー』と『アームズ・エイド』も……。!!!」

『砂塵の大竜巻』畏カード

琥珀の放った『砂塵の大竜巻』によって光彦の『リビングデッド』の呼び声』は破壊され、それと同時に『リビングデッド』の効果で蘇生されていた『ロード・ウォリアー』と、装備されていた『アームズ・エイド』はまとめて破壊されてしまった。

「く……。『ドッペル・ウォリアー』を攻撃表示に!!!そして『スピード・ウォリアー』を召喚!!!」

新たに光彦がカードを置くと、フィールドにスピードスケートの様な動きで滑っているモンスターが姿を現した。

『スピード・ウォリアー』レベル2 風 900/400 戦士
族・効果

このカードの召喚に成功したターンのバトルフェイズ時にのみ発動する事ができる。このカードの元々の攻撃力はバトルフェイズ終了時まで倍になる。

「『ロード・ウォリアー』は失ったが……。お前の場にもモンスターは残させない！！バトル！！まずは『スピード・ウォリアー』で『聖騎士ジャンヌ』を攻撃！！ソニック・エッジ！！」

光彦が叫ぶと、『スピード・ウォリアー』は登場時と同じくスピードスケートのように『ジャンヌ』のところまで滑っていき、攻撃の体制に入った。

「バカかつ！！『ジャンヌ』の守備力はお前の『スピード・ウォリアー』より高い！！」

「心配無用！！『スピード・ウォリアー』は召喚したターンのバトルフェイズ時、攻撃力を倍にする事ができる！！行け！！」

光彦がそう言って『ジャンヌ』を指差すと、『スピード・ウォリアー』は攻撃力を2倍の1800まで上昇させて『ジャンヌ』を破壊した。

「く……。『ジャンヌ』は破壊されたときに効果を発動できるが……。今はしない！！」

「そうかよ……。なら、『ドッペル・ウォリアー』で裏守備モンスターに攻撃だ！！」

『ドツベル・ウォリアー』は主の声を聴くと、手にした銃を構えて裏守備モンスターを狙い撃った。だが、『ドツベル・ウォリアー』が攻撃の態勢に入った瞬間に琥珀はニコリと笑みを浮かべた。

「残念だったなっ！！伏せモンスターは『メタモルポット』だっ！！互いのプレイヤーはリバー効果で互いに手札を全て捨てて新たに5枚ドローするっ！！」

「なにっ・・・？」

『メタモルポット』レベル2 地 700/600 岩石族・効果
リバー効果：自分と相手の手札を全て捨てる。その後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを5枚ドローする。

『メタモルポット』の効果で光彦は4枚の、琥珀は2枚の手札を捨てて手札を5枚まで補充した。

「ち……。手札補充のモンスターだったか。通常召喚は行ったか……。ターンエンド！！」

「よし……。ボクのターン、ドロー！！メインフェイズ、ボクは墓地の『聖騎士ジャンヌ』と『聖導騎士イシュザーク』。2体の光属性モンスターを除外して、『神聖なる魂』を特殊召喚！！」

琥珀はドローしてすぐに墓地の2枚のカードを取り除き、半透明の女性型天使族モンスターを特殊召喚した。

『聖導騎士イシュザーク』レベル6 光 2300/1800

戦士族・効果

このカードが戦闘によってモンスターを破壊した時、そのモンス

ターをゲームから除外する。

『神聖なる魂』レベル6 光 2000/1800 天使族・効果
このカードは通常召喚できない。自分の墓地の光属性モンスター
2体をゲームから除外して特殊召喚する。このカードがフィールド
上に存在する限り、相手のバトルフェイズ中のみ全ての相手モンス
ターの攻撃力は300ポイントダウンする。

「ちっ……。『メタモルポット』の効果で墓地に落としていた
か。。。」

「そうだ……。まだ終わらないぞ！！手札から『フルール・シ
ンクロン』を通常召喚！！」

琥珀が続けてカードをディスクに置くと、百合の花をモチーフに
した様なモンスターが『神聖なる魂』の隣に姿を現した。

『フルール・シンクロン』レベル2 光 400/200 機械
族・チューナー/効果

このカードがシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、手
札からレベル2以下のモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

「素材とチューナー……。シンクロ召喚か！！」

「そうだ……。ボクの思いを切り札を見せてやる！！レベル6、
『神聖なる魂』にレベル2、『フルール・シンクロン』をチューニ
ング！！」

光彦の声にそう返した琥珀は強い声でそう叫んだ。すると、その
声に応えるかのように『フルール・シンクロン』は2つの星の輪に
なつて『神聖なる魂』を包み込んだ。

「白き鎧を纏いし騎士よ。秘めたる思いと断固なる意思を胸に抱き、華麗なる刃と共に戦場を舞え！！シンクロ召喚、現れよ！！フルール・ド・シュヴァリエ！！」

琥珀がそう言いきると同時にフィールドに緑色の光が差し、その光の中から全身に白い甲冑を纏い、頭に白百合の飾りをあしらった兜を被った騎士のモンスターが現れて光彦に手にした長剣を向けた。

『フルール・ド・シュヴァリエ』レベル8 風 2700/23

00 戦士族・シンクロ/効果

『フルール・シンクロン』+チューナー以外のモンスター1体以上相手が魔法・罠カードを発動した時に発動する事ができる。その発動を無効にし破壊する。この効果は自分のターンに1度だけ発動する事ができる。

「『フルール・ド・シュヴァリエ』。。。どうやらそれがあんたのエースモンスターみたいだな。」

「そうだ。これこそがボクの切り札であり、誇り！！バトルだ！！『フルール・ド・シュヴァリエ』で『ドッペル・ウォリアー』を攻撃！！フルール・ド・オラージュ！！」

琥珀の命令により、『フルール・ド・シュヴァリエ』は剣から花吹雪のようなものを『ドッペル・ウォリアー』に向けて放出した。

（『くず鉄のかかし』があるのを承知で攻撃してきた。あのモンスターは、罠カードを無効にする効果を持っているのか・・・？）

「トラップ発動！！『くず鉄のかかし』！！」

光彦は『くず鉄のかかし』を捨てる気で発動した。それと同時に『くず鉄のかかし』が『ドツペル・ウォリアー』を守るように出現したが、案の定琥珀は得意げな表情を崩さなかった。

「無駄だつ。『フルール・ド・シユヴァリエ』はボクのターンに発動したお前の魔法、罨カードの効果が無効にする！！」

『くず鉄のかかし』はその言葉と共に突然バリバリと電撃に包まれ、破壊されてしまった。そして花吹雪は『ドツペル・ウォリアー』に直撃し、光彦を超過ダメージが襲った。

「くっ……！！！」

光彦 LP4800 2900

「どうだ！！これでお前の『くず鉄のかかし』を壊した！！これで防御手段はなくなったぞ！！カードを1枚伏せて、ターンエンドだ！！」

琥珀はそう言って光彦を指差すと、ターンを終了した。

「……俺のターンか。ドロー！！」

光彦はそれに反論せずにカードを引き、手札に加えた。それから別の1枚を手札に取ると得意げに腕を組んでいる琥珀の方をじっと見た。

「見せてもらったぜ……。お前の切り札。そして全力を。さて……！！俺も切り札のお披露目と行くぜ！！『デブリ・ドラゴン』」

召喚！！」

光彦がそう言いながらカードをディスクに置くと、小型のドラゴンがフィールドに姿を現した。

『デブリ・ドラゴン』レベル4 風 1000/2000 ドラゴン族・チューナー/効果

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する攻撃力500以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚することができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。このカードをシンクロ素材とする場合、ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。また、他のシンクロ素材モンスターはレベル4以外のモンスターでなければならない。

「『デブリ・ドラゴン』の効果発動！！召喚に成功したとき、墓地から攻撃力500以下のモンスターを1体蘇生する。『ライトロード・ハンター ライコウ』を蘇生！！」

『デブリ・ドラゴン』が召喚されると同時に、その胸にある水晶のような場所から光と共に『ライコウ』を蘇生させた。

「む……。一気にモンスターを2体出した……。！！」

「ああ、行くぞ琥珀！！レベル2の『スピード・ウォリアー』と同じくレベル2の『ライコウ』にレベル4の『デブリ・ドラゴン』をチューニング！！」

光彦がそう叫ぶと共に『デブリ・ドラゴン』は一声吼えて4つの星の輪になり、他の2体を包み込んだ。

「悲しみを抱きし白き翼……。今天衣無縫の風となり、新たな空へと飛翔せよ！！シンクロ召喚、舞い上げれ！！」スターダスト・ドラゴン』！！」

光彦の口上が終わると同時に、白い閃光が辺りを覆った。そして、閃光が晴れると同時に白い翼を持つ竜が白銀の影を残しながらフィールドに姿を現し、大きく吼えながら主の頭上で静止した。

『スターダスト・ドラゴン』レベル8 風 2500/2000

ドラゴン族・シンクロ/効果

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

『フィールド上のカードを破壊する効果』を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「『スターダスト・ドラゴン』……。それがお前の切り札か。でもっ！！攻撃力は2500ボクの『フルール・ド・シユヴァリエ』には一歩及ばない！！」

「そうだな……。だが、お前の『メタモルポッド』の効果のおかげでその問題は解決しそうだ。墓地の『スキル・サクセサー』を除外し、効果発動！！フィールド上のモンスター1体の攻撃力を800ポイント上げる。『スターダスト・ドラゴン』の攻撃力を800ポイントアップ！！」

『スキル・サクセサー』罠カード

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。このターンのエンドフェイズ時まで、選択したモンス

ターの攻撃力は400ポイントアップする。また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで800ポイントアップする。この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動する事ができず、自分のターンのみ発動する事ができる。

光彦が墓地から『スキル・サクセサー』を除外すると、『スターダスト・ドラゴン』は一声吼えると同時に攻撃力を3300まで上昇させた。

「くっ……。」

「これで『フルール・ド・シュヴァリエ』の攻撃力は超えた。バトルだ!! 『スターダスト・ドラゴン』で『フルール・ド・シュヴァリエ』を攻撃!! シューティング・ソニック!!」

光彦が命令すると『スターダスト・ドラゴン』は口に銀色のエネルギーをため、それを音波状にして『フルール・ド・シュヴァリエ』に向けて吐き出した。

「く……破壊はさせないっ!! リバースカードオープン、速攻魔法『ハーフ・シャット』!! 『フルール・ド・シュヴァリエ』の攻撃力を半分にすることで、このターン戦闘では破壊されなくなる!!」

『ハーフ・シャット』速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターはこのターン戦闘では破壊されず、攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで半分になる。

「だが・・・、ダメージは受けてもらうぞ!!」

『フルール・ド・シュヴァリエ』は破壊された無かったものの、銀色のプレスは琥珀をも襲った。

「ううっ・・・!!!」

琥珀 LP3700 1750

琥珀はダメージを受けてのけぞったが、今回は膝をつくことなく耐え切った。

「ふむ・・・。ライフは結構削ったか。カードを1枚伏せて、ターンエンド。」

光彦はフィールドに伏せカードを1枚残してターンを終了した。それと同時に、光彦の『スターダスト・ドラゴン』の攻撃力は元の2500に、『フルール・ド・シュヴァリエ』の攻撃力も2700に戻った。

「く・・・。ボクのターン、ドロー!!」

切り札の攻撃力は勝っているものの、琥珀はどこか追い詰められた表情でカードを引いた。だが良いカードは引けなかったらしく、光彦が観察していても表情が変わる事は無かった。

「うう・・・。ボクの『フルール・ド・シュヴァリエ』の方が攻撃力は上なんだ!!行くぞ、バトルフェイス!!『フルール・ド・シュヴァリエ』で『スターダスト・ドラゴン』を攻撃!!フルール・

ド・オラージユ!!!」

琥珀は攻撃を敢行し、『スターダスト・ドラゴン』を指差してそう叫んだ。命令を受けた『フルール・ド・シュヴァリエ』は再び花吹雪を攻撃対象に向けて吹き付けた。

「・・・その瞬間を待っていたぜ!!!リバースカード、オープン!!!」『聖なるバリア ミラーフォース』!!!このカードの効果で、お前の場の攻撃表示モンスターを全て破壊する!!!」

『聖なるバリア ミラーフォース』 『畏カード』
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「やっぱりお前バカだろっ!!!」『フルール・ド・シュヴァリエ』の効果発動!!!ボクのターンに発動された相手の発動した魔法、畏の効果が無効にして破壊する!!!もうそんな事を忘れたのか!?!」

「いや、分かっているぜ。無効にして・・・『破壊する』!!!だつたな。」

「だつたらどうし・・・あっ!!!」

琥珀は途中まで言うと、急に何かに気付いたように声をあげてしまったという顔をした。その顔を見た光彦は不敵な笑みを浮かべて琥珀を見た。

「そうだ・・・。『スターダスト・ドラゴン』の効果発動!!!」
フィールド上のカードを破壊する『効果を無効にして破壊する!!!』
ヴィクテム・サンクチュアリ!!!」

光彦がそう叫ぶと『スターダスト・ドラゴン』は大きく羽ばたき、銀色の粒子になって『フルール・ド・シュヴァリエ』を包み込んだ。すると攻撃態勢に入っていた『フルール・ド・シュヴァリエ』自身も粒子状になって墓地へと送られてしまった。

「そんな……。ボクの『フルール・ド・シュヴァリエ』が……」

切り札を失った琥珀はそう呟いて思わず地面にペタリと座り込んでしまった。フィールドにモンスターが残っていないのは光彦も同じだが、『スターダスト・ドラゴン』は効果発動のエンドフェイズにフィールドに戻ってくる。琥珀にはそれが分かっていた。

「ボクの手札に通常召喚できるモンスターはいない……。ターンエンドだ……」

「そうか。なら、エンドフェイズに墓地の『スターダスト・ドラゴン』の効果発動！！効果を発動したターンのエンドフェイズ時、墓地から特殊召喚できる！！舞い戻れ！！『スターダスト・ドラゴン』……！！」

光彦がそう叫んで手を上に翳すと、光彦の頭上に銀色の粒子が集まり始めた。そしてそれらは集まってもとの『スターダスト・ドラゴン』の姿を形成した。

「俺のターン、ドロー！！そのままバトルフェイズに入るぜ。『スターダスト・ドラゴン』でプレイヤーにダイレクトアタックだ！！シューティング・ソニック！！」

光彦が命令すると、『スターダスト・ドラゴン』は主の命に従って口から白銀の音波状ブレスを琥珀に向けて吐き出した。

「うわあああああっ！！！！」

琥珀 LP17500

Win 志水光彦

琥珀のライフが0になると同時にソリッドビジョンは消滅し、光彦の場に出ていた『スターダスト・ドラゴン』は半透明になって消えて行った。

「フ……。流石はマイエース。最近あまり活躍していなかったが今日はきつちりと決めてくれたぜ。」

勝利を確認した光彦は『スターダスト・ドラゴン』のカードを手に取り、そう呟いて大事そうにデッキケースに収めた。それから光彦は、ライフが0になった瞬間に倒れこんでしまった琥珀の方を向いた。

「よお。立てんのか？」

「うう……。当たり前だっ！！」

琥珀は即座にそう返すと、意地を張ったのか即座に立ち上がって見せた。その様子だと、どうやら大きなダメージは無いらしい。それを確認できた光彦は少し安心した。

「大丈夫そうだな。それにしても、あんた強いな。『スターダス

ト』を出さなかったら『フルール・ド・シュヴァリエ』に押し切られてた。時戸空雅の配下にいるには勿体無いくらいだぜ。」

光彦はそう賞賛したが、琥珀は対してうれしそうな顔をせず、プイと顔を背けた。

「ふんっ。何を言うか……。誉めても何もでないぞっ。それに、ボクは空雅さんの配下では無い。」

「ほお……。というと……？」

琥珀が発した意味ありげな言葉を聞いて、光彦がそう促すと琥珀は以外にすんなりと口を開いた。

「と言っても、直接的では無いという意味だぞ？ボクの上にも上司にあたる人がいて、その上に空雅さんがいるんだ。と言っても、ボクの上司と空雅さんは」

「久遠寺……。おしゃべりが過ぎますよ。」

琥珀の言葉を、光彦のものではない静かな声が遮った。その声を聞いた琥珀は急に言葉を切り、恐怖の表情を浮かべて光彦の背後を見た。

光彦がその視線を追っていくと、屋上の出入り口に当たる部分に男が立っているのが確認できた。上下純白のスーツを纏い、当然のようにデュエルディスクを着けたその男は全く人気を感じさせずにそこに佇んでいた。

「優輝さん……。何故ここに？」

一瞬の沈黙を破り、琥珀が恐る恐るそう聞くと優輝というらしい純白スーツの男は爽やかな顔にやわらかい笑みを浮かべた。

「どうして……。フフ。愚問ですね……。この愚か者。」

優輝は「愚か者」といった瞬間に顔から笑みを消し、その手に紐部分がバチバチと音を立てている鞭を出現させた。それを見た光彦は、思わず身構えた。

「まで……。ずいぶん物騒な物だすじゃねえか。それでどうする気だ？」

光彦は優輝に対してそうだったが、優輝は琥珀から目を外さなかった。それどころか完全に光彦を無視して口を開いた。

「分かっているのですよ。貴方と岡崎蒼汰が、無断で熊谷を外に連れ出した事。熊谷を外に連れ出してはいけないということを貴方は知っていたはず。貴方はその規律を守ってくれていると思っっているのですが……。失望しましたよ。」

優輝はそういうとゆっくりと歩き出し、光彦の隣を通り抜けて琥珀の方へと近づいていった。

「残念ですが、相応の罰を受けてもらいます。この痛みを知れば、もう二度と規律を破ろうなどと思ったりはしない筈ですからね……。」

「ひっ……。」

それを聞いた琥珀は、おびえた声を上げて一歩後ずさった。

「ちょっと待て……。明らかに連れてたのは岡崎一人。そいつの話も聞いてやったらどうだ？」

光彦は振り返り、優輝の背中に向かってそう声を投げかけたがその声も優輝の耳には届かなかった。

「そうおびえる事はありません……。すぐに済みますよ。最も、痛みは少し残るかもしれませんがね……。」

「優輝さん……。ちょっと待って下さい!!」

琥珀はそう言って両手を前に突き出し、必死に止めようとしたが優輝は構わず『電撃鞭』を振り上げた。

「問答無用です。自らの行いを恥じ、潔く罰を」

「無視すんなやゴルアアアア!!!」

優輝の態度に業を煮やしたのか、光彦が遂に怒声を発した。その声で琥珀は驚いて光彦の方を見つめ、優輝も無視するのを止めてやれやれと首を振った後、振り上げていた『電撃鞭』を下ろして片耳を押さえた。

「やれやれ……。先ほどからキャンキャンと……。五月蠅くて構いませんね……。」

「へへあ。悪かったなあ。あまりにも静か過ぎたから、チヨイと叫びたくなってね。あんた……。琥珀の上司か？」

心底迷惑そうな顔で光彦を見る優輝に対し、光彦もそう皮肉を交えてそう返すと、優輝はやれやれとため息をついて口を開いた。

「はぁ・・・。全く調子が良い。いかにも、私が久遠寺の上司に当たる海原優輝・・・。最も、久遠寺が口を滑らせたのもう推測しているかもしれませんがね。さて、これだけ言えば満足ですか？出来れば、我々の問題に黄色い嘴を突っ込んで欲しくないのですが・・・。」

「満足するわけ無いだろ・・・。常識的に考えて。何故琥珀の上司がわざわざこの場に出てきたのか是非教えていただきたいね。」

光彦がそう返すと、優輝はそんな事も分からないのかという表情をし、右手に持った『電撃鞭』を軽く振って見せた。

「やれやれ・・・。その位推測して欲しいものですが、まあ良いでしょう。私がここに来た理由、それは・・・。粛清です。」

「は・・・？」

優輝の言葉を聞いた光彦は、ぼかんと口をあけて優輝の方を見た。

「そんな間抜け面をして欲しくないものですね・・・。理解できないのですか？久遠寺を粛清しに来たのですよ。熊谷を研究所の外に連れ出した罰としてね。念のために説明しておきますが、熊谷はその容姿故に人前に出ることを禁じられています。そのため、我々トップクラスの命令が無い限り外に出ることが許されないのです。」

「ほぁ・・・。三下が勝手に連れ出しちゃいけないのか。納得だ。」

「ご理解頂けた所で……。この場から消えてはもらえませんか？久遠寺に罰を与えなければいけないので……。」

優輝はそう言い、光彦の答えも聞かずに琥珀の方に向き直った。それを見た光彦はすぐさま声を発した。

「おい……。!!」

「……。まだ何かあるのですか？あるのだしたらどうか手身近にお願いします。」

優輝もすぐに振り返り、迷惑極まりないという顔で光彦を見た。問われた光彦は、数秒の沈黙の後に口を開いた。

「デュエルしろよ。」

「ほお……。何を言い出すかと思えば……。」

そう言ってデュエルディスクを再び起動させた光彦を見て、優輝は目を細めた。

「つつ……。おい!!止せバカっ!!お前、さっきのデュエルで体力を消耗してるんだぞ？二戦もあの衝撃を受けたら……。」

戦う気満々の光彦を見た琥珀は、自分の置かれている状況も忘れてそう叫んだ。その叫びを聞いた優輝も頷いて見せた。

「そうですね……。その上、久遠寺ごときを強いと言っているようでは、到底私には及びません。それに、『六星団』でもない貴

方と戦ったところで、私にメリットは無いのですが。」

「ご忠告どうも……。でもな、あんたが今しがた言った台詞を聞いて、ますますあんたの天狗鼻をへし折りたくなつたぜ……。」

光彦がそう言つてデュエルディスクを構えると、優輝はあからさまに眉をひそめた。

「二度も言わせないで下さい。『六星団』でもない貴方と戦つたところで、私には何の意味も無いのですよ!」

「残念だが俺にはあるんだよ。俺はな……。あんた等が気に入らないんだ。ちよつと常人離れた力を持ったからつて、調子に乗っているあんた等がな。世界から紛争をなくし、新たな秩序を作ると言つても、結局は世界征服したいだけじゃないか。それをさも正しい行為を行うように言いやがつて……。あんた等を見てると……反吐が出る!!」

光彦は空雅と戦つと決めた理由、友人達には隠していた本当の理由を優輝に向けて吐き出した。その言葉は相当の効果があつたらしく、一言発するたびに優輝の表情が硬く、冷たくなっていくのが目に見えた。

(これだけ発破かければ少しはやる気になるか……?)

若干熱くなつたことを後悔しながら光彦がそう思つた瞬間、光彦の右頬を鋭い衝撃が襲い、続けて体中を電流のような衝撃が走つた。光彦は思わず吹っ飛んで倒れ、何事かとあたりを見渡した。

原因はすぐに分かつた。優輝の痲癩が爆発したらしい。優輝はデ

ユエルディスクの代わりに『電撃鞭』を構えてたっていた。

「口の利き方に気をつけなさい……………このドブネズミ。」

優輝は倒れ付した光彦を冷たい目で見つめながらそう言い放った。

「我々が調子に乗っているですって……………？戯言を……………我々は有頂天になったことなど一度も無い。貴方に分かりますか？紛争を憎む空雅の気持ちが……………。精霊の力を発見したときの我々の喜びが……………！貴方は間違っている！！紛争をなくす事の何処が間違った行為なのです！？」

優輝はそれまで被っていた冷静さの仮面を捨て、感情をあらわにして光彦にぶつけた。光彦は反論しようとしたが、先ほどの『電撃鞭』の電流のせいか上手く口が回らず、何も言い返せなかった。

それで光彦が言い負けたと判断したのか、優輝はサッと光彦に背を向けて『電撃鞭』を消し、代わりに『緊急レポート』のカードを取り出した。

「久遠寺……………私は先に研究所に戻ります。貴方への罰則は取りやめです。見苦しい場面をお見せしたのでね……………。貴方も、そのドブネズミに構わずに速く戻りなさい。」

優輝は落ち着きを取り戻してそう言い放ち、自ら生み出した次元の狭間へと姿を消した。

「ち……………言っただけ……………言って……………帰りやがった……………」

光彦はようやく回るようになった口でそう言うと、上半身だけに力を入れて起き上がった。

「ったく……。まだ体がしびれやがる……。ふざけやがって……。お前も速く帰らなきゃ無いのか？」

光彦は未だ痺れている体に若干いらしながら琥珀にそう言った。それを聞いた琥珀は黙って頷き、優輝と同じく『緊急テレポーター』のカードを取り出した。それから光彦の方を向いた。

「何だよ……。何見てんだよ。」

「別に……。一つ聞いてもいいか？」

琥珀はそういうと、体を光彦の方に向けた。

「ボクを庇ったのか……？」

「ん……。？ああ、結果的にそういう形になったな。庇ったつもりは無いけどな。」

光彦はまたいらした口調でそういうと、パイとそっぽを向いた。

「そうか……。」

琥珀はそう呟いてから『緊急テレポーター』を発動し、目の前に次元の歪を作った。それから再び光彦の方を向いた。

「だが……。結果としてボクは罰を受けなくて済んだ。騎士と

して礼を言っておく。あ……ありがとう。」

琥珀はそう言い残して、時限の狭間へと消えていった。一人取り残された光彦は琥珀が消えた後に静かに呟いた。

「琥珀。あんたみたいなまともな奴が時戸に手を貸すなんて勿体ないぜ……。」

第11話 顧問を獲得せよ!!強襲!!『ジャイアント・ボマー・エアレイド』

私生活多忙のため、月一程度の更新になります。申し訳ありません。

「おゝい、春山。」

金曜日の昼休み終了間際、トイレに足を運んだ翔子はその帰り道で呼び止められた。聴きなれた声を聴いた翔子は億劫気に振り返り、すぐさま声の主を発見した。

「いやあ。やっと見つけた。中々つかまらないから今日休んでると思っただぜ。」

「そんなわけ無いでしょ。第一、休みだったら連絡くらい入れるよ。」

翔子はそう言って、近づいてきた光彦を見て腰に手を当てた。

「で？何の用？」

翔子がそう聞くと、光彦は気まずそうに頭をかいた。

「ああ、放課後の事なんだけどさ。俺、ちょっと先生の相手できなくなっただから。そのことで。」

「え？何で？」

「うむ……。悪い。昨日の事は話したろ？」

光彦はそう前置きをすると、ため息をついた。

「うん。聞いた。屋上で時戸さんの刺客と戦ったんだっけ？」

「そ〜。それでその後さ、そのまま屋上で昼寝してたら……。」
その言葉を切ってやれやれと頭を振った光彦を見て、翔子はああ、と納得したように言った。

「風紀委員に見つかったんだ。」

「その通りだぜ……。だもんで今日の放課後あいつ等と遊ぶ羽目になったんだ。」

光彦の言葉を聞いて、翔子はため息をついた。

「はあ……。困ったなあ。私もちよつと用があるから出られな
いし……。」

「修也辺りに頼めば良いんじゃないか？」

光彦がそういうと、翔子は若干眉を潜めた。

「大丈夫……かな？」

「大丈夫だろ。修也なら。なんだかんだ言って強いし。陸が先生
に向かって帰れなんていわなければ……な。」

光彦がそう太鼓判を押すと同時に、2人の背後から叫び声が聞こえてきた。

「み……。見つけたぞ志水光彦！！大人しくしろ！！」

叫び声を聞いた光彦はパツと振り返って真紅の腕章をつけた3人の風紀委員を確認すると、舌打ちしてから翔子の方に向き直った。

「今も追われてるんだ……。」

「おー。おかげで貴重な昼休みは追いかけてっただぜ。じゃあ例の件、修也に伝えておいてくれよ。頼んだぜ。」

光彦はそう言い残すと、翔子を置いて一目散に走り出した。その数メートル後ろを風紀委員が追っていく。翔子は風紀委員が通り過ぎる時に小さな声で呟いた。

「全く……毎日毎日ご苦労様。」

翔子は今回自分は関係ないのを良いことに、その後姿を見送ると静かな足取りで自分の教室に戻っていった。

時戸研究所の主催する大会まで残り僅かとなった今日、科学部室には張り詰めた空気が漂っていた。修也、陸、孝雄の3人が珍しく別々のテーブルに座り、何枚ものカードを広げている。皆が皆、デ

ツキ調整に精を出しているのだ。ホームルームが終わって15分の間この状況が続いている。そんな中、一番初めにカードをまとめ終わった修也がグンと伸びをした。

「こんなところかな・・・？どっちか相手してくれないか？」

修也は陸と孝雄のほうを交互に見てそういったが、2人は顔を上げただけで立ち上がるうとはしなかった。

「悪いな・・・。最後の調整が済んでいないんだ。もうしばらく待ってくれ。」

「俺もだ。どーも上手く回る気がしないんだ・・・。つか。春山も光彦も今日は部活来ないのか？」

修也にそう返しながら孝雄がそういうと、カードを両手に持っていた陸は目を細めた。

「そうらしいな・・・。光彦は自主連とか言っていたが・・・。全く大会も近いというのに・・・。予選落ちしたらどう言い訳する積もりなんだか。」

「まあまあ。予選落ちするって言っても、まだ競技方法も分からないんだぞ？」

陸がイラつきながら言うのを聞いた孝雄は、そう言って陸を宥めた。

「フン・・・。奴の事だ。俺達を試すため、腕の立つデュエリストを呼ぶだろう。おそらく、全員で予選を行ってからの決勝トーナ

メント……。そこに進む実力が無ければ、奴に見向きもされないだろうな。まあ、俺達の中にそんな足手まといになるような奴はいないだろうが……。」

「陸、そんな言い方ないだろ。」

さすがに言い過ぎと悟ったのか、修也はそう言って陸を軽く睨んだ。陸は普段温厚な修也の珍しい怒り顔をみて少し身を引き、すぐに訂正した。

「済まない。言い過ぎた。」

「おいおい……。二人ともカッカするなよ。俺達の敵は時戸なんだ。仲間割れしたってしょうがないだろ。」

孝雄はそうため息をつくと、選び抜いておいたカードを一束にまとめた。

「うし。こんなもんで良いだろ。俺は終わったぜ修也。やるか？」

孝雄の声を聴いた修也は、すぐさま立ち上がった。

「ああ。頼むよ。先生が来る前に、一回位まわしてみたい。」

「先生……？」

修也の言葉に陸が聞き返すと、修也は陸の方を向いて頷いた。

「ああ、科学部の顧問の先生。春山に頼まれてさ、どうも前の顧問の先生が別の学校に行ったみたいで、今は誰もいないんだ。いな

いと風紀委員が五月蠅いんだってさ。」

「なるほど……。顧問が来ると自由にデュエルが出来ないというわけか……。」

陸はそうだったが、修也は首を横に振った。

「違うんだ。変わった先生でさ。デュエルで勝てたら顧問になっても良いって。」

「何じゃそりゃ……。でも、良いじゃないか。練習にもなるし。さあ、そうならさっさと始めようぜ。先生が来る前に一回回したいんだろ？」

孝雄はそう言ってデュエルディスクを構えた。それを見た修也もデュエルディスクを構えたが、その時タイミング悪く科学部室の扉が開かれた。

「失礼します……。ええと、ここが科学部の部室かな？」

穏やかそうな声を聴いて3人が扉の方を見ると、黒のスーツをピシリと着こなした20代前半と見える眼鏡をかけた青年が扉のところに立っているのが確認できた。それを確認した陸は目を細めて呟いた。

「新任の森近先生でしたか……。顧問をしてくれるのは……。」

「ハハハ……。まだ決まったわけじゃないんだけどね。まあ、自己紹介くらいしておこうかな。2年生の数学を担当している森近

連です。よろしく。」

蓮はそう言って僅かに頭を下げた。それにつられ、3人も軽く頭を下げた。

「で・・・デュエルをしてくれるのは誰かな・・・？」

蓮がそう言って3人を順々に見たので、修也は一步前に躍り出た。

「俺です。」

「ん・・・？君か。確か、講演会でデュエルをした・・・。」

「はい。草薙修也です。」

修也のその声を聴くと、蓮はかすかに笑いながらデュエルディスプレイを構えた。

「そうか・・・。君だったか・・・。科学部に所属していたとはね。春山さんといい、志水君といい、この部は強者揃いなのかな・・・？」

「2人をご存知なのですか・・・？」

陸が蓮にそういうと、蓮はにこやかに頷いた。

「うん。2人で僕のところに来たからね。それに、良く風紀委員と戦っているところを見るよ。この前は、それぞれ3人位を相手にしてたかな・・・？それで負けなしなんだから凄いよね。」

蓮の言葉を聞いた孝雄は口をあぐりとあけた。

「あいつ等……。そんな変則デュエルをやっているのかよ。そりゃあ嫌でも強くなるな……。」

「そこに突っ込むのか？むしろ、風紀委員に突っかかっている方に突っ込むべきだと思うけど。」

修也はそう孝雄に行ったが、孝雄は首を傾げただけで修也の言葉を聞き流した。

「修也。余り話を脱線させない方が良く、さっさとはじめたほうが良いんじゃないか？」

陸にそういわれた修也は頷き、黙りこくった孝雄から目を放して蓮の方に体を向けた。

「そうだな……。よっし、先生。よろしくお願いします。」

「ああ。僕は手加減しないから、君も全力できなよ。」

2人はそう前置きして距離をとり、デュエルディスクを胸の高さまで上げた。そして、互いの準備が整ったことを確認すると同時に叫んだ。

「デュエル!!」

『六星団』草薙修也 vs 科学部顧問候補 森近蓮

その叫びが科学室に響くと同時に、デュエルディスクのランプは

蓮の先攻を告げた。それを確認した蓮は初手となるカードを手に取り、ドローフェイズに入った。

「僕のターン、ドロー!!!カードを1枚伏せて、手札から『マジック・リアクター・A I D』を通常召喚!!!ターンエンド!!!」

蓮は伏せカード1枚と、体にミサイルのようなものを装填している機械族モンスターをフィールドに出し、そのままターンを終了した。

『マジック・リアクター・A I D』レベル3 闇 1200/9

00 機械族・効果

相手が魔法カードを発動した時に発動する事ができる。その魔法カードを破壊し、相手ライフに800ポイントダメージを与える。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「よし、俺のターンですね。ドロー!!!」

修也は引いたカードを手札に加えると、ずらりと並んだ6枚のカードをじっくり見据えた。

(悪くない手だ。でも、低攻撃力をわざわざさらしている先生の伏せカードも気になる。ここは慎重に……)

「手札から速攻魔法『手札断札』発動!!!このカードの効果により、互いのプレイヤーは手札2枚を墓地に捨て、デッキからカードを新たに2枚引く!!!」

「おっと、魔法カードを発動したね。『マジック・リアクター・A I D』の効果発動!!!相手が魔法カードを発動した時、そのカ-

ドを破壊し、800のダメージを与える!」

「え？」

『マジック・リアクター』の効果をよく理解していなかった修也は、いきなり800ポイントのダメージを受け、『手札断札』のカードも破壊されてしまった。

修也 LP8000 7200

「くっ……。でも効果は無効にされていない!! 2枚捨て、2枚ドロー!! そして、『XX セイバー エマーズブレイド』を通常召喚!!」

修也がディスクにカードを叩きつけると、昆虫族の『X セイバー』が場に姿を現した。

『XX セイバー エマーズブレイド』レベル3 1300/800 昆虫族・効果

「出たか。修也お得意のリクルーター。本来なら壁として運用するんだろっが……。」

「ああ、今回は攻撃する!! バトルフェイズ!! 『エマーズブレイド』で先生の『マジック・リアクター』を攻撃!!」

修也が命令すると、『エマーズブレイド』は攻撃の体制に入り、素早い動きで『マジック・リアクター』の正面へと躍り出た。

「よし、この攻撃を待っていた。リバーカードオープン!!」

フェイク・エクスポージョン・ペンタ』！！このカードの効果で僕のモンスターはこの戦闘では破壊されず、ダメージ計算後に手札か墓地から『サモン・リアクター・AI』を特殊召喚できる！！」

「ええ？何だよそれ？」

『フェイク・エクスポージョン・ペンタ』罨カード

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。モンスターはその戦闘では破壊されず、ダメージ計算後自分の手札または墓地から『サモン・リアクター・AI』1体を特殊召喚する。

蓮 LP8000 7900

蓮の説明どおり、『エマーズブレイド』の攻撃が直撃する寸前に『フェイク・エクスポージョン・ペンタ』のカードからソリッドビジョンの爆風が巻き起こり、蓮のフィールドを埋め尽くした。それに驚いたのか修也の『エマーズブレイド』は、大きく飛びずさつて修也のフィールドへと戻った。

「フ……。そして、『フェイク・エクスポージョン・ペンタ』の効果で『サモン・リアクター・AI』を墓地から特殊召喚！！」

蓮が少し笑ってカードをディスクに置くと、破壊されなかった『マジック・リアクター』の隣に戦闘機のような風貌をしたモンスターが新たに姿を現した。

『サモン・リアクター・AI』レベル5 闇 2000/140

0 機械族・効果

このカードが自分フィールド上に存在する限り、相手フィールド上にモンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時、相手ライフ

に800ポイントダメージを与える。この効果は1ターンに1度しか使用する事ができない。この効果を使用したターンのバトルフェイズ時、相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。自分フィールド上に表側表示で存在する、このカードと『トラップ・リアクター・RR』、『マジック・リアクター・AID』をそれぞれ1体ずつ墓地へ送る事で、自分の手札・デッキ・墓地から『ジャイアント・ボマー・エアレイド』1体を特殊召喚する。

「く……。カードを1枚伏せて、ターンエンド。」

攻撃したものの、相手の場に2体のモンスターを残してしまった修也はそのままターンを終了した。

「リアクターか……。あいつ等を3体そろえさせたらまずいな。……」

「え？何でだよ。」

ふと陸が漏らした呟きを聞いて、孝雄は素つ頓狂な声でそう聞いた。

「3体のリアクターがそろった時に特殊召喚できる親玉がいるのさ。あいつを召喚されたら、結構厄介なことになるからな。」

「ふん。そうなのか。」

深刻そうに言った陸の言葉に、孝雄は能天気になぞ返してデュエルを観戦する作業に戻った。

「僕のターン、ドロー!!!『終末の騎士』を通常召喚!!!そして

このカードの効果で、デッキから闇属性の『トラップ・リアクター・RR』を墓地に送る！！」

『終末の騎士』レベル4 1400/1200 戦士族・効果

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分のデッキから闇属性モンスター1体を選択して墓地に送る事ができる。

(くっ……。これでリアクターが3種類フィールドと墓地に揃った……。)

蓮の場に新たに現れたマントを纏った戦士族モンスターを見て、修也は僅かに歯噛みした。

「表情が変わったね……。さあ、バトル！！まずは『サモン・リアクター』で『エマーズブレイド』を攻撃だ！！サモン・リアクト……」

蓮が命令すると、『サモン・リアクター』は機関銃掃射で『エマーズブレイド』を攻撃した。『エマーズブレイド』はあっけなく破壊され、超過ダメージが修也を襲った。

修也 LP7200 6500

「くっ……。だけど『エマーズブレイド』の効果発動！！このカードが戦闘破壊されて墓地に送られた時、レベル4以下の『Xセイバー』をデッキから特殊召喚できる！！来い！！『XXセイバー ガルゼム』！！」

修也がデッキからカードを取り出してディスクに置くと、ガゼルをモチーフにした様な『Xセイバー』のモンスターが姿を現した。

『XX セイバー ガルゼム』レベル4 地 1400/400
獣戦士族・効果

「リクルートしたか……。だが、『サモン・リアクター』の効果発動！！相手がモンスターを召喚、反転召喚、特殊召喚したときに800のダメージを与える。そして、この効果はダメージステップ中も有効だ！！」

「なっ……。？」

修也が驚く間もなく、さらに800のダメージが修也のライフを削った。

修也 LP6500 5700

「く……。流石ですね……。先生……。」

ダメージを受けた修也は、ニヤリと笑いながら蓮の方を見ていった。

「フフ……。まあ、これでも結構な実力を持っていると自負しているからね。『ガルゼム』は自身の効果で攻撃力を200上げているから倒せない。僕はこれでターンエンド。」

蓮のターン終了宣告を聞いた修也は、デッキトップに手を掛けた。

（『サモン・リアクター』は召喚時に800のダメージを与える・……。アイツを何とかしないと……。）

「俺のターン、ドロー!!!...よし!!手札から速攻魔法発動!!!『禁じられた聖杯』!!対象は先生の『サモン・リアクター』!!この効果で攻撃力は400ポイント上がる。でも、モンスター効果は無効になる!!!」

「くっ...。バーンと攻撃無効を封じてきたか...。だけど、『マジック・リアクター』の効果ダメージは受けてもらう!!!」

『禁じられた聖杯』速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は400ポイントアップし、効果は無効化される。

修也 LP5700 4900

「ぐ...。でもこれでモンスターを召喚してもダメージは受けない!!!『XX セイバー フラムナイト』を通常召喚!!!」

修也がディスクに勢い良くカードを叩きつけると、赤い鎧を纏ったチューナーモンスターが現れた。

『XX セイバー フラムナイト』レベル3 地 1300/1000 戦士族・チューナー/効果

「行ける!!!俺は、レベル4の『ガルゼム』にレベル3の『フラムナイト』をチューニング!!!」

修也が続けてそう叫ぶと、『フラムナイト』は3つの星の輪になって『ガルゼム』を包み込んだ。

「天をかける白光よ、今戦士の姿をとりて地上に降り立ち正義の拳を振りかざせ！！シンクロ召喚！！轟け、『ライトニング・ウォリアー』！！！」

修也がそう言って右腕を天に翳すと、フィールドに緑色の光があふれ出た。そしてその中から白い鎧を身に纏った戦士族モンスターが姿を現した。

『ライトニング・ウォリアー』 レベル7 光 2400/1200
戦士族・シンクロ/効果

「出たぜ……。修也のシンクロモンスターが！！！」

孝雄は嬉しそうに笑いながらそういつたが、陸が険しそうな表情を変えることは無かった。

「油断は出来ない。攻めどころを見誤れば、あつという間にライフを削られるぞ……。」

陸が心配するのをよそに、修也はそのままバトルフェイズに入っ

た。
「よし、バトルだ！！俺は『ライトニング・ウォリアー』で、先生の『マジック・リアクター』に攻撃！！ライトニング・パニッシュヤー！！！」

修也がそう命令すると、『ライトニング・ウォリアー』は右手を眩く光り輝かせ、猛突進して『マジック・リアクター』を貫いた。

「くっ……。」

蓮 LP8000 6800

「まだ終わりませんよ!!」ライトニング・ウォリアー」の効果
!!相手に戦闘ダメージを与えた時、相手の手札×300のダメージ
ジを与える!!ライトニング・レイ!!」

修也がそう叫ぶと同時に連が持っていた4枚の手札が光り出し、
蓮にダメージを与えた。

「うっ……。」

蓮 LP6800 5600

「これでライフはほぼ互角……。俺はこれでターンエンド!!」

「く……。面白くなってきたね……。僕のターン、ドロー!!」

カードを勢い良くドローした蓮は、引いたカードをみて目を細めた。

「手札から魔法カード、『闇の誘惑』発動!!デッキからカード
を2枚ドローし、その後手札の闇属性モンスター1体をゲームから
除外する。僕は『The big SATURN』を除外!!」

『闇の誘惑』魔法カード

自分のデッキからカードを2枚ドローし、その後手札の闇属性モ
ンスターカード1枚をゲームから除外する。手札に闇属性モンス
ターカードがない場合、手札を全て墓地へ送る。

「そして手札からチューナーモンスター、『ブラック・ボンバー』を召喚！！」

続けて蓮は黒い爆弾をモチーフにしたモンスターを召喚した。

『ブラック・ボンバー』レベル3 闇 1000/1100 機械族・チューナー/効果

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する機械族・闇属性のレベル4モンスター1体を表側守備表示で特殊召喚することができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

「チューナーモンスター。。。」

「フフ。。。そうだよ。まずは『ブラック・ボンバー』の効果！召喚成功時、墓地のレベル4の機械族・闇属性モンスターを守備表示で特殊召喚できる。現れる、『トラップ・リアクター・RR』！！」

蓮がそう叫ぶと『ブラック・ボンバー』は口から4つの小さい爆弾を吐き出し、その爆風の中から3種類目のリアクターを蘇生した。

『トラップ・リアクター・RR』レベル4 闇 800/180

0 機械族・効果

相手が罠カードを発動した時に発動する事ができる。その罠カードを破壊し、相手ライフに800ポイントダメージを与える。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「そして、レベル5の『サモン・リアクター・AI』に、レベル3の『ブラック・ボンバー』をチューニング。」

蓮の声と共に『ブラック・ボンバー』は3つの星の輪になり、『サモン・リアクター』を包み込んだ。

「鋼鉄の鎧を纏いし歴戦の戦士よ、今再び戦いの時！！我が命に従い出撃せよ！！シンクロ召喚！！姿を現せ、『ダーク・フラット・トップ』！！」

蓮の口上が終わると共に科学室の天井付近にソリッドビジョンの黒雲が現れた。そしてその中から巨大な空母のようなモンスターが現れたかとおもつと、蓮のフィールドにゆっくりと鎮座した。

『ダーク・フラット・トップ』レベル8 闇 0 / 3000 機械族・シンクロノ効果

闇属性チューナー+チューナー以外の機械族モンスター1体以上1ターンに1度、自分の墓地に存在する『リアクター』と名のついたモンスターまたは『ジャイアント・ボマー・エアレイド』1体を召喚条件を無視して特殊召喚する事ができる。このカードが破壊され墓地へ送られた場合、手札からレベル5以下の機械族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

「『ダーク・フラット・トップ』……！！まずいぞ……。あれがある限り、リアクターは倒しても復活する！！」

「つまり……。早急に勝負をつけないと先生に切り札の召喚を許すって訳か。」

陸と修也の会話を聞いた蓮は、ニコリと微笑んで見せた。

「そういう事。さ、早速『ダーク・フラット・トップ』の効果を

使うよ。墓地の『マジック・リアクター・A I D』を守備表示で特殊召喚！！そしてさらに、『終末の騎士』を守備表示に変更。カードを1枚伏せて、ターンエンド。」

蓮は一気に守備体勢を整えてターンを終了した。

「く……。俺のターン、ドロー！！とにかく……。リアクターは揃えさせませんよ！！」『ライティング・ウォリアー』で『マジック・リアクター』を攻撃！！ライティング・パニッシャー！！」

修也の攻撃宣言で『ライティング・ウォリアー』は再び『マジック・リアクター』を攻撃。蓮に防ぐ手は無く再び『マジック・リアクター』は破壊されてしまった。

「ターンエンド……。」

「僕のターン、ドロー！！魔法カード、『トレード・イン』発動！！手札のレベル8モンスター、『ダーク・クリエーター』を墓地に送って2枚ドロー！！さらにリバーズカード、『リビングデッドの呼び声』を発動！！対象は……。『サモン・リアクター・A I D』」

「くっ……！！」

『トレード・イン』魔法カード

『リビングデッドの呼び声』永続罠カード

防ぐ術の無い『リビングデッドの呼び声』の発動を、修也は黙ってみているしかなかった。

「チエーンが無いなら、『サモン・リアクター・A I』を特殊召喚する。そして、『ダーク・フラット・トップ』の効果も発動！！蘇れ！！『マジック・リアクター・A I D』！！」

蓮は怒涛のカードの応酬で、一気に3種類のリアクターをフィールドに並べた。

「これ、まずくね？」

「だな……。」

陸と孝雄が心配そうにデュエルの行く末を見守る中、蓮はモンスター効果を発動した。

「さあ、『サモン・リアクター・A I』の効果発動。このカードを含むフィールドの3種類のリアクターを墓地に送ること……。手札・デッキ・墓地から『ジャイアント・ボマー・エアレイド』を特殊召喚する！！」

蓮がそう叫んで3枚を墓地に送ると同時に、蓮のフィールドで凄まじい爆発が起こった。修也がその中で必死に目を凝らすと、爆風の中から科学部室いつぱいまでソリッドビジョンで映し出された巨大な戦闘機型のモンスターが蓮のフィールドにいるのが確認できた。

『ジャイアント・ボマー・エアレイド』レベル8 風 3000
/2500 機械族・効果

このカードは通常召喚できない。『サモン・リアクター・A I』の効果でのみ特殊召喚する事ができる。1ターンに1度、手札1枚を墓地へ送る事で相手フィールド上に存在するカード1枚を破壊す

る。また、相手のターンに1度、次の効果から1つを選択して発動する事ができる。相手がモンスターの召喚・特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。そのモンスターを破壊し、相手ライフに800ポイントダメージを与える。相手がカードをセットした時に発動する事ができる。そのカードを破壊し、相手ライフに800ポイントダメージを与える。

「『ジャイアント・ボマー・エアレイド』……。」

蓮の切り札を間近に見た修也は、その巨大さに思わず生唾をこくりと飲み込んだ。その様子を見た蓮は、にっと笑って掛けている銀縁眼鏡をクイと上げた

「ふう……。やっと出せた。これが僕の切り札の一つかな……。召喚条件が一番難しいけどね。その分効果は派手だよ。さて、じやあ早速効果を発動!!手札を一枚墓地に送り、相手フィールド上のカードを破壊する!!その伏せカードを破壊!!デス・ドロップ!!」

蓮がそう命令すると、『ジャイアント・ボマー・エアレイド』は自らに搭載されていた爆弾を修也の伏せカードの真上に落としたり。その効果により、修也が伏せていた『炸裂装甲』は破壊されてしまった。

「くっ……。」

「これで攻撃を防ぐカードはなくなった……。行くよ!!『終末の騎士』を攻撃表示に変更!!そして、バトルフェイズ!!『ジャイアント・ボマー・エアレイド』で『ライトニング・ウォリアー』を攻撃!!デス・エアレイド!!」

蓮がそう命令すると、『ジャイアント・ボマー・エアレイド』は下部に装填されていたミサイルを3発、『ライトニング・ウォリアー』に向けて打ち出した。

「うっ……。」

修也 LP4900 4300

「まだまだ。『終末の騎士』でダイレクトアタックだ!!」

続けて蓮は叫び、その命令に従って『終末の騎士』が修也を剣で切り裂いた。

「くそっ……。」

修也 LP4300 2900

「僕はこれでターンエンドだ。」

修也のライフを大幅に削った蓮は、そのままターンを終了した。

「く……。俺のターン、ドロー!!」

勢い良くカードをドローした修也は、蓮の場に鎮座している『ジャイアント・ボマー・エアレイド』を厳しい目で見据えた。

（アイツの効果はセットしたカードか召喚・特殊召喚したモンスターを1ターンに1度破壊して800のダメージを与える効果……。今まで以上にカードのセットは慎重に行わないと……。）

「まずはモンスターをセット!!」

「通すよ。」

蓮にそういわれ、修也はさらに手札のカードを手に取った。

「そして……、カードを1枚セットする!!」

修也はなるべく表情を変えないように、カードをデュエルディスプレイに差し込んだ。

「うーん……。じゃあ、それは破壊する!! 『ジャイアント・ボマー・エアレイド』の効果!! シャープ・シューティング!!」

蓮は少し迷ってから破壊命令を出し、その命令に従った『ジャイアント・ボマー・エアレイド』は胸についている機関銃を掃射し、修也が伏せた『団結の力』を破壊して800のダメージを与えた。

修也 LP2900 2100

「あれ？ブラフだったのか……。」

「そういうことです。カードを2枚伏せて、ターン終了!!」

上手くブラフを破壊させたことで修也は得意になり、ニヤリと笑ってターンを終了した。

「じゃあ僕のターン、ドロー!! 『ダーク・フラット・トップ』の効果!! 墓地から『トラップ・リアクター・RR』を守備表示で

特殊召喚！！」

蓮がそう宣言すると、墓地から再び『トラップ・リアクター・R』が姿を現した。

「そして、『ジャイアント・ボマー・エアレイド』の効果発動！手札を1枚墓地に送り、君の伏せカードを1枚破壊する。君から見て左側のカードを破壊！！デス・ドロップ！！」

伏せカードを警戒したのか、蓮は手札を墓地に送って修也の場に伏せられているカードを指差した。選択されたカードを確認した修也は、ニヤリと笑ってデュエルディスクのボタンに手を掛けた。

「どうやら選択を誤ったようですね……。チェインさせます！先生が選んだのは、『和睦の使者』！！このターン、俺のモンスターは戦闘では破壊されず、戦闘ダメージも受けない！！」

「何だって……。？だけど、『トラップ・リアクター』のダメージは受けてもらう！！」

『和睦の使者』畏カード

このカードを発動したターン、相手モンスターから受ける全ての戦闘ダメージを0にする。このターン自分モンスターは戦闘によって破壊されない。

修也はトラップカードの発動に成功したが、その代償としてダメージを受けてしまった。

修也 LP2100 1300

「おいおいまずいぜ……。修也の手札は0枚!!それに、ライフも先生と大差がついてる……。」

修也のライフと蓮のライフを見比べながら孝雄が不安そうにそう呟くのを聞いて、陸はフンと鼻を鳴らした。

「阿呆か貴様は……。知っているだろう。修也はこの絶望的な状況からでも、平気で逆転する……。まあ、仮に負けたとしても俺個人、顧問がない方が楽で良いのだがな……。」

陸は孝雄にそう言い、最後の方は蓮に聞こえないように小声で呟いてデュエルの方に目を戻した。

「僕はこれでターンエンド。さ、君のターンだよ。」

蓮は余裕綽々で行った表情でターンを修也に譲った。

「行きます先生……。ドロー!!よし!!手札から魔法カード、『おろかな埋葬』発動!!この効果により、デッキから『XXセイバー ガルドストライク』を墓地に送る!!」

『おろかな埋葬』魔法カード

「手札から特殊召喚できる『ガルドストライク』をわざわざ墓地に?」

怪訝そうな顔をした蓮がそういうと、修也は得意げにニヤリと笑った。

「ええ。それは、このカードを使うからです!!反転召喚!!」

メタモルポット』！！リバーズ効果で、お互いのプレイヤーは手札を全て捨て、デッキからカードを5枚ドローする！！」

「何だつて・・・？」

『メタモルポット』レベル2 地 700/600 岩石族・効果

『メタモルポット』の効果により、修也と蓮は互いにカードを全て捨てて新たにカードを5枚引いた。

「ふう、手札補充か。でも忘れてないかな・・・。僕に手札を与えたという事は、その分だけ『ジャイアント・ボマー・エアレイド』の弾丸を増やさせたということ。」

「分かってます。だから、このターンで『ジャイアント・ボマー・エアレイド』とそれを呼び出す戦艦、『ダーク・フラット・トップ』を破壊します！！」

「なつ・・・？」

修也が発した一言で蓮が驚いているうちに、修也は新たに手札となったカードの中から1枚を手にとった。

「手札の『素早いビッグハムスター』を墓地に送って魔法発動！！『ワン・フォー・ワン』！！この効果でデッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚できる！！来い、『XXセイバー レイジグラ』！！」

修也がそう叫んでデッキからカードを選び出し、フィールドに置くとカメレオンの様な容姿のモンスターが姿を現した。

『XX セイバー レイジグラ』レベル1 地 200/100
0 獣戦士族・効果

「そして『レイジグラ』の効果発動!! 召喚、または特殊召喚に成功した時、墓地の『X セイバー』1体を手札に加えることが出来る!! 『フラムナイト』を手札に!!」

「チューナーを手札に呼んだか……。『ジャイアント・ボマー・エアレイド』の効果は発動しない!! さあ、続けて。」

「分かりました。なら、『フラムナイト』を通常召喚!!」

修也は頷いて再び赤い鎧の戦士、『XX セイバー フラムナイト』をフィールド上に出した。

「合計レベルが6か……。でも、君がシンクロ召喚に成功した瞬間、僕は『ジャイアント・ボマー・エアレイド』の効果が発動するよ!!」

3体のモンスターを場に並べた修也を見て、蓮はそう叫んだがその言葉を聞いた修也は以外にも余裕の表情を崩さなかった。

「先生……。何か勘違いしていませんか？俺が狙ったのは、シンクロ召喚じゃない!! 手札から魔法発動!! 『セイバー・スラッシュ』!! このカードは、俺のフィールドにいる『X セイバー』と名のついたモンスターの数だけフィールド上の表側カードを破壊できる!! 俺は『ジャイアント・ボマー・エアレイド』と『ダーク・フラット・トップ』を破壊する!!」

「な・・・なんだってー!?!」

『セイバー・スラッシュ』魔法カード

蓮の驚愕の叫びが科学室に木霊すると同時に、修也の手にしたカードから『XX セイバー レイジグラ』と『XX セイバー フラムナイト』の2体分である2本の剣閃が放たれて蓮の2体のモンスターを貫いた。

「く・・・。『ダーク・フラット・トップ』は破壊された時に手札のレベル5以下の機械族モンスターを特殊召喚できるけど・・・。僕の手札に条件を満たすモンスターはいない・・・。」

「そうですか。なら俺は、墓地の『ガルドストライク』と『エマーズブレイド』を指定し、『ガトムズの緊急指令』を発動!!俺の場に『X セイバー』がいる時、選択した2体のモンスターを特殊召喚できる!!」

修也は追い討ちをかけるように、先ほど墓地送りにした『ガルドストライク』と『エマーズブレイド』をフィールドに呼び寄せた。

『XX セイバー ガルドストライク』レベル5 地 2100
/1400 獣戦士族・効果

「見たか・・・? たった1ターンで相手の主力モンスター撲滅と大量展開を遣って退けやがった。」

「おお・・・。やっぱり修也の運は恐ろしいぜ・・・。」

陸と孝雄が顔を見合わせてそう呟くのを尻目に、修也はターン進

行を続行させた。

「行きますよ先生！！俺は、レベル2の『メタモルポット』とレベル3の『エマーズブレイド』に、レベル3の『フラムナイト』をチューニング！！」

修也が叫ぶと、『フラムナイト』は3つの星になって他の2体のモンスターを包み込んだ。

「集いし孤高の魂が、今新たな決意を生み出す！！決意を拳にこめて全てを砕け！！シンクロ召喚！来い、『ギガンテック・ファイター』！！」

修也の口上が終わると同時にフィールドを緑色の光が包み込んだ。そして、その光の中から修也の切り札、巨大な体を持つ『ギガンテック・ファイター』がその姿を現した。

『ギガンテック・ファイター』レベル8 闇 2800/1000
0 戦士族・シンクロ/効果

「ぐ。。。。」

「さあ、バトルフェイズ！！まずは自身の効果で、攻撃力が3000に上昇している『ギガンテック・ファイター』で攻撃表示の『終末の騎士』を攻撃！！ソウルクラッシュ・ナックル！！」

修也がそう命令すると、『ギガンテック・ファイター』は拳を振り上げ、いとも簡単に『終末の騎士』を破壊した。

「くつ。。。。」

蓮 LP5600 4000

「続けて『ガルドストライク』で『トラップ・リアクター・RR』を攻撃！！」

続けざまに出された攻撃命令により、蓮の『トラップ・リアクター・RR』は破壊され、蓮のフィールドに4体居たモンスターは1ターンで全滅してしまった。

「カードを1枚セットします。ターンエンド！！」

圧倒的に有利な場を作り上げた修也は、伏せカードを1枚残してターンを終了した。

「ふう。1ターンで僕のモンスターは全滅か、ドロー！！」

蓮はため息をついてカードを引くと、引いたカードを見て眉を潜めた。

「僕はモンスターを1体セット！！さらにカードを1枚伏せて、ターンエンド！！」

蓮は防御的な姿勢を取って、そのままターンを終了した。

（伏せモンスターは『キラートマト』、伏せカードは『闇次元の開放』……。さて、この2枚でこのターンを生き残れるかどうかの勝負だな……。）

蓮はそう思いながら、今まさにデッキトップに手を掛けた修也に

目をやった。

「俺のターン、ドロー!!先生……。そろそろ決着を着けましょう!魔法発動!!『抹殺の使途』!!相手フィールド上の裏守備モンスター1体をゲームから除外する!!」

『抹殺の使途』魔法カード

フィールド上に裏側表示で存在するモンスター1体を破壊しゲームから除外する。それがリバー効果モンスターだった場合、お互いのデッキを確認し、同名カードを全てゲームから除外する。

(除去カードか……。来るなら来い!!)

蓮は素直に『キラートマト』を除外しながら、修也を強いまなざしで見据えた。

「バトルフェイズ!!」『ギガンテック・ファイター』で、先生にダイレクトアタック!!ソウルクラッシュ・ナックル!!」

「甘い!!永続トラップオープン!!」『闇次元の開放』!!この効果により、ゲームから除外されている闇属性モンスターを1体特殊召喚する!!現れる、『The big SATURN』!!」

カードが発動されるのとはほぼ同時に蓮のフィールドに紫色の歪が浮かび上がり、その中から土星を模したとされる巨大な機械族モンスターが姿を現した。

『The big SATURN』レベル8 闇 2800/2

200 機械族・効果

このカードは手札またはデッキから特殊召喚はできない。手札を

1枚捨てて1000ライフポイントを払う。エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は1000ポイントアップする。この効果は1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに使用する事ができる。相手がコントロールするカードの効果によってこのカードが破壊され墓地へ送られた時、お互いにその攻撃力分のダメージを受ける。

「攻撃力2800……。でも、先生の『終末の騎士』の分も合わせて、攻撃力3100になっている！！攻撃続行だ！！」

「くっ……。」

蓮 LP4000 3700

『ギガンテック・ファイター』の攻撃によって、せっかく召喚された『SATURN』は無残にも粉々に砕け散ってしまった。

「続けて、『ガルドストライク』でダイレクトアタック！！」

「うわあああ！！」

蓮 LP3700 1600

直接攻撃を受けた蓮は反射的に頭を腕で庇い、後ろに後ずさったがライフ計算後に修也の方を向いていった。

「いい攻撃だよ。でも、まだライフは互角……。」

「いや、このターンで終わりです！！永続トラップ発動！！『リビングデッドの呼び声』！！この効果で蘇生するのは、『ライトニング・ウォリアー』！！」

『リビングデッドの呼び声』 永続罨

修也の呼び声に答え、再び雷を纏いし戦士がフィールド上にその姿を現した。

「く……。攻撃力2400……。!!」

「行け!! 『ライトニング・ウォリアー』!! ライトニング・パニッシャー!!」

修也の命令で『ライトニング・ウォリアー』が放った一撃は、蓮のライフを瞬く間に削りきり、ライフカウンターを一気に0にした。

蓮 LP1600 0

Win 草薙修也

決着がつくと同時にソリッドビジョンは自動的に機能を停止し、修也の場に居たモンスターたちは徐々に消え去っていった。

「よっし!! 最近調子がいいぜ!!」

勝者となった修也はそう言ってガッツポーズし、立ったままカードを片している蓮の方を見た。

「ありがとう先生!! おかげで、大会に向けて自身を持つことが出来ました!!」

「ハハハ……。君のためになっただなら嬉しいよ。」

蓮は弱々しくいつてそう微笑み、修也の方を見た。その様子を見ていた孝雄は2人に駆け寄り、嬉しそうに口を挟んだ。

「なあ先生、修也が勝ったって事は、科学部の顧問になってくれるんだよな？」

「ああ、約束だからね。明日辺りに、届出を出そうと思っているよ。」

蓮がそう返すと、孝雄は嬉しそうにデュエルディスクを構えた。

「よっしゃあー!!じゃあさ、先生。俺ともデュエル・・・痛っ!!」

嬉しそうに話す孝雄の頭を、いきなり陸が小突いた。

「デュエルするのは良いが・・・。教師には敬語を使え阿呆が・・・。先生、こいつとのデュエルが済んだら、俺とも戦ってくれませんか？先ほど調整したばかりなので、一回まわしてみたいんです。」

陸の言葉を聞いた蓮は、3人に囲まれて嬉しいような照れているような顔をして孝雄と同じようにデュエルディスクを構えた。

「ハハハハ・・・。良いよ良いよ。さ、そうとなったら早速始めようよ。」

「おお!!・・・じゃなくて、はい先生!!」

孝雄はそう答え、早速デュエルのスペースをとるために何歩か距

離をとった。こうして、今日も科学室は騒がしいまま時間が過ぎていった。

「バトル!!」ブラック・ローズ・ドラゴン』で、攻撃力0、さらに攻撃表示になった『マシユマロン』を攻撃!!ブラック・ローズ・フレア!!」

「ぐわああああ!!」

風紀委員 A LP1800 0

「うん……。まあ、良いか。妥協妥協。『スターダスト・ドラゴン』で『UFOタートル』を攻撃!!シューティング・ソニック!!」

「ひえええええ!!!!」

風紀委員 B LP600 0

修也と蓮がデュエルしていた時と同じ時、翔子と光彦は裏庭で風紀委員の駆逐に当たっていた。そして、ほぼ同時に決着を着けた2

人は向き合つと互いの勝利をたたえるようにデュエルディスクをガチャンと打ち合わせた。

「終わった終わった。悪いな。つき合わせちまって。」

「別に良いよ。急ぎの用じゃないし。今から帰つても十分間に合う。」

翔子の言葉に光彦は頷くと、光彦は敗北して地面にへたり込んでいる風紀委員を見た。

「しっかし懲りないよなあ。いい加減下つ端じゃあ勝てないって学習すれば良いのに。さつさと強いの出せば……。」

「志水君。追い討ちは駄目よ。」

止めないとさらに毒を吐きそうなので、翔子は早めに光彦を止めた。

「分かつてるって……。さ、面倒なことも済んだし、俺は部活に行くかね。春山は帰るんだろ？」

「うん。それじゃあ、またあし……。」

翔子は頷いて手をふりかけたが、何かを感じ取ったのか不意に動作を止めて後ろを振り向いた。

「ねえ、そろそろ出てきたらどう？風紀委員とのデュエルの時からずつと見てたでしょ？」

翔子の声を聴いた光彦もニヤリと笑うと、翔子が見ている繁みに向かって呟いた。

「貴金属をつけてちらちら頭を出していたらバレバレだよ……。その手は通用しないぜ。」

光彦の言葉が終わると、不意に繁みがガサリと揺れた。そして観念したのか、なかに潜んでいた人物はスツクと立ち上がって姿を見せた。赤いサングラスをかけているため人相は良く判断できないが、長い黒髪と、耳につけた金色のピアスが印象的な青年だった。

「ケケケ……驚いたなあ。まさか気付いていたとは……。」

そう言って笑った青年を見て、翔子は眉を潜めた。

「心外ね……。時戸さんの一味？」

翔子はそう言って青年を冷たいまなざしで見ると、青年はニヤリと笑ってポケットに手を突っ込んだ。

「いや……。違うね……。知り合いだが、協力してるわけじゃない……。まあ、君達に害を与える積もりは無いさ。俺の質問に答えてくれればな……。」

「その質問とやらにも、場合によっては答えるわけにはいかないんだけどな……。」

光彦が鋭い声でそういうと、青年はまたニヤニヤ笑いをした。

「そう怖い声を出すな……。俺の質問は唯一つ。墨染陸はもう

大会への出場表明をしたのか、だ。」

「陸が・・・？」

光彦はそう呟き、少し黙りこくった。そしてしばらくの沈黙の後、その程度は教えても問題ないと判断したのか、口を開いた。

「したんじゃないか？あいつ、時戸と戦いたがっていたからな。」

「ふ〜ん。そう。それだけ分ければ十分だ。じゃあな。」

その言葉を聞いた青年は、そう言い残すとあっさりと繁みの中に入り、やがて姿が見えなくなった。

「何なんだろうあの人・・・。」

「さあな・・・。じゃあ、とりあえず俺は部室に顔出すよ。じゃあな。」

「うん、じゃあまた大会の日だね。」

2人はそう言って、先ほどの青年の存在を気にしながらもそれぞれ別の方向へと去っていった。

第12話 兄弟の因縁

自分の事を探っている人物がいる。陸がそれを知ったのは、帰り道での光彦の会話からだった。

「陸の事を探ってるって？」

「あゝ。大会に出るか聞かれたただけだけだな。」

修也が思わずそう聞き返すと、光彦はそう付け足した。

「へえゝ。女だったら分かるけど、男だよな。そいつ。」

驚いている修也とは違い、孝雄はニヤニヤしながらそう言って陸の顔をじっと見つめた。孝雄の言うとおり、陸は容姿端麗のため女子から非常に人気が高いのだ。

「まさか男にもモテるようになったのかよ？」

「止める……。気色悪い。」

冗談めいた孝雄の言葉を聞いた陸は、目を鋭くして孝雄を睨んだ。にらまれた孝雄が肩をすくめて押し黙ると、陸は光彦の方を向いて口を開いた。

「その男、どんな奴だった？」

「あゝ。外見？金髪にだらしない服装にピアス。俺の大嫌いな人種だな。言葉遣いも適当だったし。」

「ふくん……。陸、心当たりは？」

修也は陸に向かってそう聞いたが、陸は呆れたようにため息をついただけで何も答えなかった。

「お前な……。そんなんじゃそこらの不良と変わらないだろ。他に特徴は無いのか？」

陸が呆れたようにそう聞くと、孝雄が笑いながら口を開いた。

「そうそう。ホモっ気があったとかさ。」

「貴様……。いい加減にしろ。」

孝雄がからかうように言ったので、陸はそう言ってもう一度釘を刺した。そのやり取りを見ていた光彦は、あっと思いついたように呟いて言った。

「あいつサングラスかけてたぞ。普通の黒いのじゃなくて、マラソンの選手が使うような鏡みたいになってるやつ。光が反射してるから目は見えなかったな。」

「それ……。ますます誰か分からないよな。」

光彦の言葉を聞いた修也は、そう言って首をひねった。同じく陸も心当たりがないらしく、顎に手を当てて目を潜めた。

「ち……。よほど正体を明かしたくないと見えるな。気色悪い……。と……。ここでお別れだな。」

陸は駅への近道である路地の前で立ち止まると、言葉の最後にそう付け加えた。四人の中で唯一電車で通学している陸はここで道が分かれるのだ。ちなみに修也と孝雄は徒歩、光彦は徒歩とバスで通っていた。

「あ、そうだったな。それじゃあ、また大会の日にな。」

修也は陸を見返して立ち止まると、そう言って手を振った。それを見た孝雄もじゃあなと手を振り、光彦もピツと右手を上げた。

「ああ、互いにデツキ構築を怠らないようにな。」

陸はそう言い残すと、修也達に背を向けて1人で歩き出した。その背中を見送った修也達3人も歩いていた道を歩き出した。

（デツキ構築……。俺も大会までに調整を終えないとな。）

陸は4人で歩いている時よりも若干速いペースで足を進めながら、そう思案した。今日蓮と光彦を相手に回した戦績は8戦6勝2敗。まずまずの結果だが、陸はこれでは満足できなかった。時戸を相手に回す以上、100%の勝率をたたき出さなければ納得がいかないのだ。

（大会は日曜……。わざわざそのためだけに修也や孝雄を呼び出すのは若干気が引けるな……。春山は忙しそうだし、光彦は適当な理由をつけて逃げそうだ……。）

陸がそんな事を思いながら歩いていると、不意にポケットの携帯電話が鳴った。学校を出ると同時にマナーモードは解除しているの

で、デフォルトの着信音が小さく辺りに響いた。陸は立ち止まると、ろくすっぽ画面を確認せずに通話ボタンを押して携帯を耳に当てた。

「もしもし。」

陸がぶっきらぼうにそう言うと、受話器の無効から嬉しそうな声が聞こえてきた。

『もしもし。1コールで出てくれるなんて、もしかして私からの着信を待ちわびていたのかな？かな？』

その声を聴いて、陸は画面を確認しなかったのを酷く後悔した。陸が住んでいるマンションの部屋に居候している女性、夕凧姫香だ。

陸より7つ年上の23歳で、駆け出したばかりのルポライターだ。勤務場所が実家と離れており、部屋を借りるのも面倒だということ。祖父の友人の孫という好で陸と一緒に部屋に住んでいる。さらに、陸の住んでいるマンションは富豪である陸の祖父の持ち物なので、家賃を支払う必要も無く暮らしている。陸にとって姫香は、幼いころから面倒を見てもらっている一応姉のような存在だ。

「違います。たまたま携帯をいじっていただけです。勘違いしないで下さい。」

『ウフフフ……。照れなくて良いんだぞ。可愛いなあ。りつきゅんは。』

「用件は？」

姫香が陸をからかうので、陸はそれを完全無視してそう言った。

すると姫香は、む〜と唸って用件を話し始めた。

『全くつれないなあ……。今日は仕事が早く終わったから迎えにいつてあげようかな〜と思って。』

「む。それはありがたい話です。じゃあ、とりあえず駅まで行きます。電車には乗らずに待っていますからそこまで来て頂けませんか。」

『はいはい。愛しのりっきゅんのために光の速さで行くから待つててね〜!』

その言葉を最後に電話は切れた。陸はすぐに携帯電話をポケットに収めた。

(ふう。仕事終わりだというのに元気だな……。まあ、わざわざ駅からマンションまで歩く手間が省けただけ良いか。)

陸はそう思いながら駅への道を再び歩き出した。もう電車の時間を気にしなくても良かったため、先ほどよりペースはゆつくりだ。なんだかんだ言って、姫香が迎えに来てくれるのはありがたい。姫香と会話するのも悪くは無いし、なにより待ってさえいればマンションまで着くのみだから。陸がそんな事を思いながら人気の無い公園の横を通り過ぎた時だった。

「ククク……。おいおい、わざと無視しているにしてもそろそろ反応してくれたって良いんじゃないのか？」

「!?!?」

不意に背後から聞こえてきた声に驚き、陸は勢い良く体を後ろに向けた。見ると、金髪でサングラスをかけた派手な服装の青年がポケットに手をつっ込み、不適に笑いながら陸を見つめているのが確認できた。光彦の言っていた通り、サングラスはマジックミラーを用いたミラーグラスというもので、青年の目を完全に覆っていた。

（馬鹿な……いつからだ？全く気付くことができなかった……！！）

陸は背後の気配に気付けなかった自身の不甲斐無さに齒噛みしながらも、油断無く青年に向けて口を開いた。

「あんたか……。俺の事を探っているというのは……。」

「まあな……。だが安心しな。お前達に危害を加える気は無い。ただ、俺はお前と戦いたいただけだ。」

青年はそう言い、顔につけているラップアラウンド型のミラーグラスをキラリと輝かせた。

「ほお……。俺と戦いたいか……。それは願ってもない話だ。貴様で、俺の新しいデッキの試し切りもしたいしな……。」

陸はそういうと、方に下げていた鞆から素早くデュエルディスクを取り出して左腕に装着した。それを見た青年は、ニヤリと笑って陸のものより二周りほど小さいデュエルディスクを何処からとも無く取り出して装着した。

「やる気満々か……。嬉しいねえ！！俺も、今のお前の実力を測っておきたかったからな！！」

青年はそういうと、いきなりミラーグラスを取り外した。それと同時に青年の鋭い目があらわになった。その目を見た陸は、僅かに首をかしげた。

(ん?・・・何だこのデジャビュは?こいつとは初対面のはず。それなのに、この目には見覚えが・・・。)

陸がそう思案していると、青年はニツと笑って口を開いた。

「ケケケ・・・。誰だこいつという顔をしてるから教えてやろう・・・。久しぶりだな!!我が弟よ!!」

「なつ・・・!!お前まさか・・・!!」

その青年の言葉を聞いて、陸の中の疑問は全て氷解した。青年が誰かを悟った陸は怒りの形相で叫んだ。

「貴様・・・。光!!」

「ヒャーハハハ!!思い出してくれたな陸!!兄貴の事をよお!!」

陸に睨まれても怯む様子を見せず、陸の3つ上の兄である墨染光は高笑いをした。耳に障る笑い声を聞いた陸は険しい顔で口を開いた。

「何故だ・・・。何故4年前に家を出たはずの貴様がここにいる!?!」

「ああ？知りたいかあ？知りたければ……。俺とデュエルをすることだな！！そして俺の真デッキを打ち破ることが出来たら、教えてやっても良いぜえ！！！」

陸の問いに光はそう答え、即座にデュエルディスクを起動させた。それと同時に、最大限まで大きさを縮小されたと思われる青色のデュエルディスクが勢い良く起動音を立て始めた。

「その性格は相変わらずのようだな……。上等だ！！やってやる！！！」

陸もそう叫び返し、すぐさまデュエルディスクを起動させた。そして一瞬の沈黙の後、2人は律儀にもデュエル開始の叫びを上げた。

「デュエル！！！」

「ヒャーハハハハハ！！デュエルだあ！！！」

科学部最強 墨染陸 vs 謎に包まれた兄 墨染 光

数年の時を経て合間見えた兄弟同士のデュエル。開戦の宣言がされると同時に陸のデュエルディスクが点滅し、先攻を取ったことを告げた。

「先攻は俺のようだな……。ドロー！！手札から魔法カード、『強欲で謙虚な壺』を発動！！こいつのカード効果はデッキトップのカードを3枚めくり、その中から1枚を選択して手札に加える効果だ！！！」

『強欲で謙虚な壺』魔法カード

自分のデッキの上からカードを3枚めくり、その中から1枚を選択して手札に加え、残りのカードをデッキに戻す。『強欲で謙虚な壺』は1ターンに1枚しか発動できず、このカードを発動するターン自分は特殊召喚する事ができない。

陸はこの効果でカードを3枚めくると、光に見えるように前に突き出してから自分でカードを確認した。

（『月の書』、『暁のシロツコ』、『ダーク・アームド・ドラゴン』か……。『ダムド』は召喚にまだかかる……。ここはやはり打点が欲しいところか……。）

「俺は『BF 暁のシロツコ』を手札に加え、残りはデッキに戻す！そして、手札から『BF 蒼炎のシユラ』を通常召喚！」

陸が勢い良くカードを置くと、黒い翼を大きく広げた鳥獣族モンスターが姿を現した。

『BF 蒼炎のシユラ』レベル4 闇 1800/1200 鳥獣族・効果

「カードを1枚伏せる。ターンエンドだ！」

「相変わらず、展開力に長けた『BF』デッキか……。俺のターン、ドローだ！」

光は陸の召喚した『蒼炎のシユラ』をじっくりと見つめながらカードをドローした。

「俺はまず、『未来融合 フューチャー・フュージョン』を発動

「！！『キメラテック・オーバー・ドラゴン』を指定して、デッキから『サイバー・ドラゴン』、『ドリルロイド』、『トラックロイド』、『ステルスロイド』、『サブマリノロイド』、『スチームロイド』、『アーマロイドガイデンゴー』を墓地に送る！！」

『未来融合 フューチャー・フュージョン』 永続魔法

『キメラテック・オーバー・ドラゴン』 レベル9 闇 ?/?

機械族・融合/効果

『サイバー・ドラゴン』 + 機械族モンスター1体以上

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードの融合召喚に成功した時、このカード以外の自分フィールド上のカードを全て墓地へ送る。このカードの元々の攻撃力と守備力は、融合素材にしたモンスターの数×800ポイントの数値になる。このカードは融合素材にしたモンスターの数だけ相手モンスターを攻撃する事ができる。

(一気に7体も墓地に。そのまま放置しておいても『キメラテック・オーバー・ドラゴン』は自身の効果で自滅するだけ。何をする気だ・・・?)

陸が怪訝気な光を見ていると、光は手札からカードを1枚手にとつてデュエルディスクに置いた。

「そして俺は『エクспレスロイド』を通常召喚する！！」

その言葉と共にソリッドビジョンシステムが作動し、光の場に新幹線をモチーフにした様なモンスターが姿を現した。

『エクспレスロイド』 レベル4 地 400/1600 機械

族・効果

このカードの召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する『エクスペレスロイド』以外の『ロイド』と名のついたモンスター2枚を手札に加える事ができる。

「『エクスペレスロイド』が召喚に成功したので、墓地に存在する『トラックロイド』と『ドリルロイド』を手札に加えてもらう……。カードを2枚伏せて、ターンエンドだ!!!」

(攻撃力400のモンスターを攻撃表示だと……。?)

「俺のターン、ドロー!!!」

陸は勢い良くカードをドローし、そのカードを手札に加えると光の伏せカードを見据えた。

(あの2枚の伏せカード……。恐らく1枚くらいは俺の攻撃を防ぐカードか、『エクスペレスロイド』の戦闘破壊かダメージを防ぐカード……。だが、万が一『シユラ』が倒されても追撃はできる。ここは臆さず攻める!!!)

「バトルだ!!!『蒼炎のシユラ』で『エクスペレスロイド』を攻撃!!!」

陸の命令で『シユラ』は飛び上がり、上空から『エクスペレスロイド』に向けて急降下攻撃を仕掛けた。

「ヒヤッハア!!!攻撃してきたな……。リバースカード、オープン!!!『スーパージャージ』!!!俺のフィールドに『ロイド』と名の着いた機械族モンスターのみが存在する場合、相手の攻撃時に

発動することでカードを2枚ドローできる!!」

『スーパーチャージ』罨カード

自分フィールド上に『ロイド』と名のついた機械族モンスターの
みが存在する場合、相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事がで
きる。自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「貴様の目は節穴か・・・？お前の場にはもう1枚の伏せカード
と『フューチャー・フュージョン』も存在しているぞ!!」

「ヒャーハハハ!!残念だったなあ!!今の裁定では、魔法・罨
ゾーンのカードのカードの有無に関わらず発動できるんだよ!!!2
枚ドロー!!!」

陸の叫びに対してそう説明した光はデッキから勢い良くカードを
2枚引いた。だが、『エクスプレスロイド』は守れず、戦闘破壊さ
れてしまった。

光 LP8000 6600

「フン・・・。そこまでして手札を増やしたいか・・・。だが『
シユラ』がモンスターを戦闘破壊したことにより、効果を発動させ
てもらおう!!デッキから攻撃力1500以下の『BF』を特殊召喚
することが出来る。来い!!」BF 大旆のヴァーユ!!」

その言葉と共に陸がデッキからカードを選び出し、デュエルデイ
スクに置くと学ランを纏った鶏のようなモンスターが姿を現した。

『BF 大旆のヴァーユ』レベル1 闇 900/0 鳥獣族・
チューナー/効果

「そして、『ヴァーユ』によるダイレクトアタックだ！！喰らえ！！」

陸がそういうと、『ヴァーユ』は短い翼を羽ばたかせて光に突進攻撃を喰らわせた。

「ケケケ・・・。」

光 LP6600 5700

不気味に笑いながら攻撃を受けた光を見ながら、陸は手札を1枚魔法・畏ゾーンに伏せた。そして、フィールドの状況を観察した。

(『ヴァーユ』は『シユラ』の効果で特殊召喚されているため、普通にシンクロ素材として利用できる。これでエクストラデッキに眠る『A・O・J カタストル』をシンクロ召喚できる・・・。だが、奴のデッキは機械族デッキ。一応『奈落の落とし穴』は伏せてあるが、万が一『サイバー・ドラゴン』の特殊召喚を許してしまう場合、吸収されて『キメラテック・フォートレス・ドラゴン』の召喚を許してしまう。ここは・・・。)

「俺はこのままターンを終了する。」

「おっと、シンクロしないのか？なら、お前のエンドフェイズにリバーカードオープン！！『リミット・リバーズ』！！墓地の攻撃力1000以下のモンスター、『エクスプレスロイド』を蘇生させてもらっぜ

！！」

『リミット・リバーズ』 永続罫

自分の墓地から攻撃力1000以下のモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。そのモンスターが守備表示になった時、そのモンスターとこのカードを破壊する。このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「『エクस्प्रेसロイド』の効果は特殊召喚でも発動する……。墓地の『ロイド』と名のついたモンスター、『ステルスロイド』と『アーマロイドガイデンゴー』を手札に加える！！そして、俺のターンだ。ドロー！！」

光はドローしたカードを一瞥すると、ニヤリと肩頬を歪めて笑った。

「来たか……。俺は手札から魔法カード、『ビークロイド・コネクション・ゾーン』を発動！！こいつは『ビークロイド』と名のついた融合モンスターを融合召喚する時に使用できる専用魔法カード……。俺は手札の『ドリルロイド』、『ステルスロイド』、『トラックロイド』。そして、フィールド上の『エクस्प्रेसロイド』を融合！！」

光がそう言つて4枚のカードを墓地に送ると、次々に『ロイド』のソリッドビジョンが光の浮かび上がっていき、パーツを組み替えて1体のモンスターへと合体していった。

「さあ、来いよ！！『スーパービークロイド ステルス・ユニオン』！！」

光がそう言つてエクストラデッキからカードを選び出してデュエ

ルディスクに置くと、4体合体の巨大なロボットが光のフィールドに姿を現した。

『スーパービークロイド ステルス・ユニオン』レベル9 地
3600/3000 機械族・融合/効果

『トラックロイド』 + 『エクスプレスロイド』 + 『ドリルロイド』
+ 『ステルスロイド』

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時にフィールド上に存在する機械族以外のモンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。この効果によってモンスターを装備している場合、相手フィールド上の全てのモンスターに1回ずつ攻撃をする事ができる。このカードが攻撃をする場合、このカードの元々の攻撃力は半分になる。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

『ビークロイド・コネクション・ゾーン』魔法カード

手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、『ビークロイド』と名のついた融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。このカードによって特殊召喚したモンスターは、魔法・罫・効果モンスターの効果によっては破壊されず、効果を無効化されない（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）。

「大層な合体モンスターを出してきたな……。だが!!その努力は水の泡だ!!トラップ発動!!」奈落の落とし穴「!!召喚、特殊召喚、反転召喚された攻撃力1500以上のモンスターを破壊してゲームから除外する!!」

「ヒャーハハハ!!テキストを読みよバーカ!!」ビークロイド・

コネクション・ゾーン』で融合召喚したモンスターは、魔法・罨・効果モンスターの効果では破壊されない！！つまり、破壊して除外する『奈落の落とし穴』の効果は受けない！！」

「クソツ……。迂闊だった……。」

『奈落の落とし穴』罨カード

『ビークロイド・コネクション・ゾーン』の効果を見落としていたため、せつかく伏せた『奈落の落とし穴』を無駄にしてしまった陸は舌打ちしてカードをそのまま墓地に送った。その様子を見ていた光は、ニヤリと笑って口を開いた。

「ケケケ……。残念だったな。陸。それがお前の弱点なんだよ。強力なカードや使用率の高いカードばかりを気にしすぎて、弱いカードや使用率の低いカードは使えないと決め付けて効果をろくに調べもしない。もっと視野を広げる。お前は昔から高みを目指すだけで、下の方に目を向けようとしなからな。」

「黙れ……。！！家を捨てて逃げた貴様にそんな事を言う資格は無い……！」

諭すように言われたのが気に入らなかつた陸は、思わず大声を出して叫んだ。怒鳴られた光は肩をすくめて見せた。

「へっ。そうかい。じゃあ、デュエルを続けようか。手札から魔法カード、ハリケーン発動！！俺のフィールドに存在する『リミット・リバース』と『未来融合』を手札に戻す。」

『ハリケーン』魔法カード

フィールド上に存在する魔法・罠カードを全て持ち主の手札に戻す。

「フン……。再利用か。」

「ああ、させてもらうさ。だがまずは……。魔法カード『貪欲な壺』発動!! 『ドリルロイド』、『ステルスロイド』、『トラックロイド』、『エクスプレスロイド』、『スチームロイド』をデッキに戻してシャッフルし、2枚ドロー!!」

『貪欲な壺』魔法カード

光は『貪欲な壺』の効果でカードを2枚ドローすると、にわかに目を細めた。

「フン……。まあ良いか。手札から再び『未来融合』を発動! 今回は『極戦機王ヴァルバロイド』を指定して『ドリルロイド』、『ステルスロイド』、『トラックロイド』、『エクスプレスロイド』、『スチームロイド』を再び墓地に送る……。」

『極戦機王ヴァルバロイド』レベル12 地 4000/4000
0 機械族・融合/効果

『ロイド』と名のついた機械族モンスター×5
このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。
このカードが攻撃した相手の効果モンスターの効果をダメージ計算後に無効化する。このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、相手ライフに1000ポイントダメージを与える。このカードは相手プレイヤーに直接攻撃をする事はできない。

「うる覚えだが……。そいつの攻撃力は確か4000……。ま

た化け物みたいな攻撃力を持つモンスターを……。」

「ヒヤッハア!!!まだ終わりじゃないぜえ……。『ステルス・ユニオン』の効果発動!!!1ターンに一度、フィールド上の機械族以外のモンスターを1体を吸収する!!!俺は『蒼炎のシユラ』を頂くぜえ!!!ヒヤーハハハ!!!」

光がそう宣言すると同時に、陸のフィールドにいた『シユラ』は『ステルス・ユニオン』に吸収されてしまった。

「くそ……。」

「しけた顔をしてるんじゃないよ……。!!ああ!?バトルだ!!!『ステルス・ユニオン』で『ヴァーユ』を攻撃!!!ストライク・マグナム!!!」

光がそう命令すると、『ステルス・ユニオン』は右手を激しく回転させ、ロケットパンチのようにして勢い良く飛ばした。

「言い忘れたが、『ステルス・ユニオン』は攻撃時に攻撃力が半減する。つまり、お前には900のダメージを受けてもらうぜ!!!」

攻撃時に『ステルス・ユニオン』の攻撃力は半分の1800になつたが、それでも『ヴァーユ』を戦闘破壊するには十分だったため、陸は900ポイントのダメージを受けた。

陸 LP8000 7100

「く……。」

「ヒャーハハハ！！」ステルス・ユニオン』の装備できるモンスターの数には制限は無い。お前が新しいモンスターを召喚しても、除去しない限り延々とモンスターを吸収してやるぜ！！ターンエンドだあ！！」

光は上機嫌のままターンを終了した。その様子を見ながら、陸は苦虫を噛み潰したような表情のままカードをドローした。

（『ステルス・ユニオン』の攻撃力は3600……。だが、攻撃時は1800に下がる。つまり俺は先ほど手札に加えた『シロツコ』を立てておけば攻撃によって破壊されることは無い。だが、『ステルス・ユニオン』は吸収効果を持っている上、あの妙な融合カードのせいで破壊もできない。）

陸はそう思案しながら自身の手札を見据えた。

（打破できる方法は一応あるが……。この方法が使えるのは一度のみ。次のドローで何とかしなければいけないが、やるしかない！！）

「相手フィールド上のみモンスターが存在することにより、俺は手札から『BF 暁のシロツコ』をリリース無しで通常召喚！！」

陸がそう言ってカードをデュエルディスクに置くと、人型に近い鳥獣族モンスターがフィールドに姿を現した。

『BF 暁のシロツコ』レベル5 闇 2000/900 鳥獣族・効果

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードはリリースなしで通常召喚

する事ができる。1ターンに1度、自分フィールド上に表側表示で存在する『BF』と名のついたモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターの攻撃力は、そのモンスター以外のフィールド上に表側表示で存在する『BF』と名のついたモンスターの攻撃力の合計分アップする。この効果を発動するターン、選択したモンスター以外のモンスターは攻撃する事ができない。

「カードを1枚伏せる・・・くっ、ターンエンド。」

「ほお・・・。『暁のシロツコ』か。その攻撃力なら確かに『ステルス・ユニオン』の攻撃では破壊できない。半分になっちまうかな。だがなあ・・・、ドロー!!効果で吸収しちまえば良いだろお!!メインフェイズ、『ステルス・ユニオン』の効果発動!!俺は効果で『暁のシロツコ』を指定するぜえ!!」

「ふっ・・・。そう来ると思っていた。リバーズカードオープン!!速攻魔法、『スワローズ・ネスト』!!その効果により、俺のフィールドの鳥獣族モンスター1体をリリースすることで、同じレベルの鳥獣族モンスター1体をデッキから特殊召喚できる。俺は、『ステルス・ユニオン』の効果の対象になった『暁のシロツコ』をリリースし、デッキからもう1体の『暁のシロツコ』を特殊召喚する!!」

『スワローズ・ネスト』速攻魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する鳥獣族モンスター1体をリリースして発動する。リリースしたモンスターと同じレベルの鳥獣族モンスター1体を自分のデッキから特殊召喚する。

この効果で効果の対象になった『暁のシロツコ』はフィールドから姿を消し、新たにデッキから『暁のシロツコ』が姿を現した。

「ち……。避わしたか。『ステルス・ユニオン』の効果は1ターンに1度しか発動できない。カードを1枚伏せて、ターンを終了してやるぜ。」

「ほざいてる……。俺のターンだ……。」

光のほうを睨みながら、陸はゆっくりとデッキトップのカードに手を掛けた。

(頼むぞ……。)

「ドロー!!」

陸は力強くカードを引くと、数秒の間を置いてゆっくりとそのカードを確認した。

「フン……。来たか。俺は手札から、『BF 疾風のゲイル』を自身の効果で特殊召喚!!」

陸がそう言っただけでカードをディスクに置くと、新たな鳥獣族モンスターが陸のフィールドに現れた。

『BF 疾風のゲイル』レベル3 闇 1300/400 鳥獣族・チューナー/効果

自分フィールド上に『BF-疾風のゲイル』以外の『BF』と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。1ターンに1度、相手モンスター1体の攻撃力・守備力を半分にすることができる。

「ち……。出てきやがったな。至極厄介なモンスターが……。」

「そんな事はそいつを倒してから言ってもらおう!!! 『ゲイル』の効果発動!!! 1ターンに1度、相手フィールドに表側表示で存在するモンスター1体の攻守を半分にする!!! 行け!!!」

陸がそう命令すると、『ゲイル』は額部分から超音波のようなものを発して『ステルス・ユニオン』にぶつけた。それを受けた『ステルス・ユニオン』の攻守は半分になってしまった。

「けつ……。楽しいかよ。人様が苦労して出したモンスターをこんな風に……。」

「黙れ。デュエルは楽しむものではない。勝つものだ!!! 『BF』の暁のシロツコ』の効果を発動!!! フィールド上の全ての『BF』の攻撃力を1体に集約する!!!」

陸がそう叫ぶと同時に『シロツコ』は『ゲイル』の頭上に飛び、風と共にその力を『ゲイル』に与えた。これにより、『ゲイル』の攻撃力は2体分の攻撃力、3300となった。

「これで貴様のおもちゃモンスターを撃破できる!!! 行け、『疾風のゲイル』!!! ブラック・スクラッチ!!!」

陸の命令と同時に『ゲイル』は飛び上がり、翼から風の刃を『ステルス・ユニオン』めがけて発射した。攻守が半減した『ステルス・ユニオン』はその攻撃に耐え切れずに破壊されてしまった。

「あゝあ……。俺の『ステルス・ユニオン』が……。」

光 LP5700 4200

モンスターを装備していても、特殊な耐性は着かないらしい。光の『ステルス・ユニオン』は装備されている『シユラ』と共にただの鉄くずになってしまった。

「せつかく出したのに……。何すんだよ……。ま、次のターンに『ヴァルバロイド』が出てくるから良いんだけどさ。」

「ち……。ほざいている。貴様のクズモンスターなど、すぐに俺のモンスターで粉碎してやる。」

陸は強気にそういったが、自身の手札に目をやって軽く舌打ちした。

(やつの攻撃力が4000だった事は記憶していたが……。効果は記憶していない。運悪く『ゴッドバード・アタック』が無いから流石に攻撃力4000を迎撃するのは無理だな。シンクロせずに1体残し、次のターンにつなげるのが賢明。ライフにも余裕があるしな。)

「俺はこのまま、ターンエンドだ。それと同時に、『ゲイル』の攻撃力は元に戻る。」

「ヒヤッハア!!!良いのかよ?そのままにして。さては『ヴァルバロイド』の効果を知らないな?俺の、ターン!!!」

光は陸を挑発するようにそう言ってから、勢い良くカードを引いた。

「そしてスタンバイフェイズ、『未来融合 フューチャー・フュージョン』の効果によって『極戦機王ヴァルバロイド』が降臨するぜえ!!!ヒャーハハハ!!!」

その高笑いと共に、『未来融合 フューチャー・フュージョン』のカードが光り輝いた。そしてそのカードから赤い機体の、他の『ロイド』モンスターとは一風変わった機械族モンスターが姿を現した。

「く……。」

「ヒャーハハハ!!!どうだ陸? 『ロイド』の5体合体!!!攻撃力4000のモンスター!!!浪漫があるだろ?その効果を見せ付けてやるぜえ!!!バトル!!!『ヴァルバロイド』で『暁のシロツコ』を攻撃!!!ハイパー・ブラスト・キャノン!!!」

光の叫びと共に、『ヴァルバロイド』は体に備え付けられているキャノン砲からエネルギー弾を打ち出した。『暁のシロツコ』はあつけなく破壊され、ダメージが陸を襲った。

「くそつ……。」

陸 LP7100 5100

「そして『ヴァルバロイド』が戦闘によってモンスターを破壊した時、お前には1000ポイントのダメージを食らってもらっ!!!」

陸 LP5100 4100

たった一度の攻撃で陸のライフは一気に3000ポイントも削ら

れてしまった。だが陸は、余裕の表情で光を見返した。

「フン……。馬鹿が。『シロツコ』を残したところで、次のターン、『ゲイル』の効果によって攻撃力を半減させられるのは目に見えているぞ。」

「ククク……。馬鹿はお前だ陸。『ヴァルバロイド』は、1ターンのバトルフェイズ中に2回の攻撃が可能なんだよ!!」

「なっ……。」

光の言葉を聞いた陸は、驚いて大きく目を見開いた。そんな陸を見てニヤリと笑いながら、光は二度目の攻撃宣言を行った。

「ヒャーハハハ!! 行け!! 『ヴァルバロイド』!! ハイパー・ブラスト・キャノン!! 第二打ア!!」

光が続けて叫ぶと同時に、『ヴァルバロイド』は再びキャノン砲からエネルギー弾を打ち出した。エネルギー弾が直撃した『ゲイル』は反撃する間もなく破壊されてしまった。

「ちっ……。」

陸 LP 4100 1400

「まだまだだあ!! 『ヴァルバロイド』の効果で、10000ポイントのダメージを受けてもらっぜえ!!」

「クソッ……!!」

陸 LP1400 400

光の猛攻によって7100もあつた陸のライフは一気に400ポイントまで削られてしまった。

「ヒャーハハハ！陸！！ライフが風前の灯になつちまつたなあ！！俺はこれでターンエンドだ！！さあ、こいつを攻略してみるよ！！」

光は高笑いしながらターンを終了した。そんな光を見ながら、陸は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「貴様……。いい気になるなよ。そんな攻撃力だけのモンスターを出しただけで、俺を倒せると思うな……。」

陸は光に向かってそう言いながらデッキトップに手を掛けた。強気なことを言ったが、陸の手札に『ヴァルバロイド』を倒せる手は無い。全ては次のドローにかかっていた。

「俺のターン！！」

陸は『ヴァルバロイド』とその後ろにニヤニヤしながら立っている光を見据えながらデッキからカードを1枚ドローした。そしてそのカードを確認した陸は、かすかに笑った。

「フン……。どうやら勝利の女神は俺に微笑んだようだな。俺は『BF 極北のブリザード』を召喚！！こいつは特殊召喚できないが、召喚時に墓地のレベル4以下の『BF』を守備表示で特殊召喚することが出来る。来い！！『蒼炎のシュラ』！！」

そう言つて陸がカードをディスクに置くと、水色の羽毛を持った『BF』の1体が姿を現した。そして『ブリザード』はすぐさま陸のデュエルディスクをコツコツとたたき、墓地に居た『蒼炎のシユラ』を蘇生させた。

『BF 極北のブリザード』レベル2 闇 1300/0 鳥獣
族・チューナー/効果

「ちつ……。これだから『BF』は……。」

「黙れ。その薄汚い口を閉じる。さあ、俺はレベル4の『シユラ』にレベル2の『ブリザード』をチューニング!!」

陸がそう叫ぶと同時に、『ブリザード』は2つの星の輪になつて『シユラ』を包み込んだ。

「失われし結界の中に潜む絶対零度の波動よ、今こそその力を解放し世界を凍てつかせよ!!シンクロ召喚!!我が元に招来せよ、『氷結界の龍ブリューナク』!!」

口上が終わると同時に6つの星はひとときわ強く光り輝き、水晶のような体を持つ龍が冷気を従えて陸のフィールドに姿を現した。

『氷結界の龍 ブリューナク』レベル6 水 2300/140
0 海竜族・シンクロ/効果

「はあ……。出たよ。人の浪漫の結晶を簡単に押し流す害悪が……。」

「黙れといっているんだ貴様!!『ブリューナク』の効果発動!

！手札を任意の枚数墓地に捨てることで、フィールドのカードを捨てた数まで手札に戻す！！俺は1枚墓地に捨て……。」

「はいはい、『ヴァルバロイド』をバウンスだな。」

陸が手札を捨てる前に光は呆れた表情をして先に『ヴァルバロイド』をエクストラデッキゾーンに戻した。その様子を見た陸はイラついた様子ですぐさま叫んだ。

「貴様光……！！バカにするのもいい加減にしろ……！！」

「はっ……。バカにしてないぜえ。さ、とつととターンを進行しろよ。どうせ『ブリュ』で押し勝つだけなんだからよ。」

「下種が……。俺は墓地の『ヴァーユ』の効果を発動！！『ヴァーユ』ともう1体の『BF』、『シロツコ』を除外することでそのレベル合計と等しいレベルを持つ『BF』のシンクロモンスターをエクストラデッキから特殊召喚できる！！来い！！『BF アームズ・ウイング』……！！」

陸は墓地から2体のモンスターを除外することで、さらに銃剣を携えた人型の『BF』のシンクロモンスターを呼び出した。

『BF・アームズ・ウイング』レベル6 闇 2300/100

0 鳥獣族・シンクロ/効果

『BF』と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードは守備表示モンスターに攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が500ポイントアップする。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、そ

の数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「『大旆のヴァーユ』の効果で特殊召喚されたシンクロモンスターの効果は無効化される。」

「そうかよ……。ふあゝあ……。眠くなってきた……。じゃあさっさと止めを刺してくれ。お前が『ブリユ』出した時点で俺は冷めたぜ……。」

陸は親切にもそう説明したが、光はもう既にデュエルを放棄したように体勢を崩して手を頭の後ろで組んで見せた。

「貴様……！くっ、良いだろう望みどおりにしてやる……！2体でダイレクトアタックだ……！『ブリユーナク』、ヘイルストーム……！『アームズ・ウィング』、ブラック・チャージ……！」

既に光に攻撃を防ぐ手段が無いと判断した陸は、2体のモンスターにいつせいに攻撃命令をした。それを受けた『ブリユーナク』と『アームズ・ウィング』は一気に光るを攻撃した。

光 LP42000

そのライフカウンターが0を指すと同時に、ソリッドビジョンによって映し出されていたモンスター達は徐々に消えていった。辺りが元の静寂に包まれると、陸は葉をむき出しにして光をにらみつけた。

「俺の勝ちだな……。クソ野郎……！」

「ん？ああ、そうだな。」

陸の言葉に対して光が素っ気無くそう返すと、陸はさらにイラついた声で言った。

「何を惚けている！！はじめの約束を忘れたわけでは無いだろう！？さあ、答えろ！！家族を捨てたといっておきながら、今さらノコノコと俺の目の前に現れた理由をな！！」

陸が激しい口調でそういうと、驚いたことに光はニヤリとゆがんだ笑いを浮かべた。

「何勘違いしているんだ・・・？」

「何？」

「ククク・・・。陸。俺は確かに約束した。俺の真のデッキを打ち破ることが出来れば、その理由を話すとな。だがな、このデッキは久々にお前と戦うためのただの調整用デッキ。俺の真のデッキは、まだ完成してすらいのないのさ！！」

「何だと・・・この卑怯者！！！！」

それを聞いた陸は光を力づくで取り押さえようと一歩前に踏み出しましたが、光はそれよりも早く懐から一枚のカードを取り出した。そのカードを目にした陸は驚いて動きを止めた。

「なっ・・・！！お前まさか・・・？」

「ヒャーハハハ！！答えが欲しければ明後日の大会を勝ちあがってみるよお！！ヒャーハハハ！！それじゃあ、またな！！陸！！」

光はそう言い残すと、そのカードを発動させて回りに煙幕を発生させた。空雅と同じ精霊石の力だ。それを確認した陸は急いで光のいたところに向かったが既に遅く、光はその場から姿を消していた。

「くそ……。逃げられたか……。」

いないと分かっているながらも、徐々に晴れてきた煙幕の中に光の姿を見つけようとしながら陸は呟いた。

（野郎……。あんなふざけたデッキで俺を試しやがって……。）

光を探すことを諦めた陸は、最も軽蔑している相手に馬鹿にされたことに腹を立てて思い切り拳を握り締めた。光は真のデッキは完成していないと言っていた。恐らく、先ほどの陸とのデュエルを参考にしてデッキを組むのだろう。そう考えると、陸は腸が煮えくり返る思いだった。

「下衆が……。教えてやるよ……。どんなデッキを抱えてこようが、俺のデッキには勝てないということにな……。」

陸は自身の怒りを抑えるためにそう呟き、薄暗くなってきた路地を駅に向かって歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9676k/>

遊戯王 星の戦士達

2011年10月7日02時26分発行